# 西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡

―― 西ノ辻遺跡第6次、第7次、第8次調査
鬼虎川遺跡第18次調査概要報告書 ――

1988

東大阪市教育委員会
財団法人 東大阪市文化財協会

# はしがき

近鉄奈良線の朝夕の混雑解消と、市内北部の人々の足の便の確保などを目的とした近鉄東大阪線の建設が計画され、昭和61年10月に開通いたしましたことは記憶に新しいところであります。昭和55年以降、計画の鉄道敷が、神並遺跡、西ノ辻遺跡、鬼虎川遺跡、水走遺跡など、縄文時代から江戸時代まで断続的に営まれてきた集落遺跡を横断するため、本協会では、各遺跡で数次に及ぶ発掘調査を実施してまいりました。

その結果、西ノ辻遺跡では、縄文時代から中世期にいたる各時期の遺物を多量に含む自然河川や、古墳時代中期末の導水施設などが検出され、全国的に注目を集めています。

今回報告の運びとなりました昭和57・58年度の西ノ辻遺跡の調査では、弥生時代中期の方形周溝墓7基と中世期の集落跡を検出するなど大きな成果を得ました。その内容につきましては本書に記すとおりであります。

本協会といたしましては、全体にわたる調査の成果をできるだけ早い時期に公表すべく、現在、各調査の概要報告書の作成を急いでおるところであります。

本書によりまして、文化財保護の理解を一人でも多くの市民の方々より賜わりますれば、私どもにとって望外の喜びであります。「歴史は未来を映し出す鏡である。」といわれます。遺構・遺物によって先人の歩みを辿ることは、現代社会に生きる私たちにとりまして、どんな金科玉条よりも貴重な言辞を与えてくれるでしょう。

最後になりましたが、調査の進行にあたり、御協力いただいた、大阪府八尾土木事務所、近畿日本鉄道株式会社（調査時・東大阪生駒電鉄株式会社）、大成建設株式会社に厚く御礼申し上げます。

昭和63年3月31日

財団法人　東大阪市文化財協会
理事長　　木寺　宏

# 例　　言

1. 本書は、東大阪生駒電鉄株式会社が建設した東大阪都市高速鉄道東大阪線（現在の近畿日本鉄道東大阪線）計画事業並びに大阪府八尾土木事務所が計画した国道308号線及び都市計画道路築港枚岡線建設計画事業に伴う西ノ辻遺跡第６次、第７次、第８次並びに鬼虎川遺跡第18次発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は、財団法人東大阪市文化財協会が、東大阪生駒電鉄株式会社並びに大阪府八尾土木事務所の委託を受けて実施した。
3. 現地調査の期間は下記のとおりである。また各調査で出土した遺物の整理調査は、昭和62年４月10日より昭和63年3月31日まで実施した。

   西ノ辻遺跡第６次調査……昭和57年８月11日～昭和57年９月３日
   西ノ辻遺跡第７次調査及び鬼虎川遺跡第18次調査…昭和57年10月24日～昭和58年３月22日
   西ノ辻遺跡第８次調査……昭和58年11月１日～昭和58年11月28日
4. 事務局の体制は下記のとおりである。（昭和61年４月１日現在）

   理事長　木寺　宏（東大阪市教育委員会教育長）
   事務局長　寺澤　勝（東大阪市教育委員会社会教育部参事、文化財課課長事務取扱）
   庶務部長　吉田照博（東大阪市教育委員会文化財課課長代理）
   庶務部員　安藤紀子（東大阪市教育委員会文化財課）
   調査部長　原田　修（東大阪市教育委員会文化財課主査）
   調査部員　上野節子（財団法人東大阪市文化財協会）
   調査担当　下村晴文（東大阪市教育委員会文化財課主任）西ノ辻７次・鬼虎川18次担当
   　　上野利明（東大阪市教育委員会文化財課）　西ノ辻８次担当
   　　菅原章太（東大阪市教育委員会文化財課）　西ノ辻６・７次担当
   　　曽我恭子（財団法人東大阪市文化財協会）　遺物整理担当
5. 遺構名称で略号によったものは次の通りである。

   ＳＤ……溝、ＳＥ……井戸、ＳＫ……土坑、ＳＰ……柱穴、ピット、ＳＸ……落ち込み状遺構。なお、掘立柱建物や方形周溝墓及び周溝は略号を用いなかった。遺構番号は検出した順に付けた。現地の土色及び土器の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準拠し、記号表示もそれに従った。
6. 本書の執筆は、調査分担に従い、本文目次に掲げる通りである。編集は菅原が担当した。

   また、第Ⅳ章として、新日本製鐵株式会社　大澤正己氏より鉄鏃の分析結果に関する報文を賜わった。記して厚く御礼申し上げます。
7. 動物遺体の同定について樽野博幸氏（大阪市立自然史博物館）、縄文土器の観察には泉拓良氏（奈良大学）の御指導、御教示を得ることができた。厚く御礼申し上げる次第である。

また石器の整理については松田順一郎の協力を得た。

現地調査実施にあたっては、東大阪生駒電鉄株式会社並びに大阪府八尾土木事務所及び大成建設株式会社の方々に御協力いただいた。記して御礼申し上げます。

最後に、現地調査並びに整理作業にあたり、落合信生、高石俊哉、山口靖弘、山谷充、原進、早野治朗、野村克也、青木茂、小山雅弘、舛井真由美、佐藤あゆみ、藤崎博子、小倉由起子、中曽初枝、曽田和恵、番場志穂、白沢千秋、田川史世、西川淑子、西川美枝子、大棒邦子、田所和佳、吉田一郎、松吉智子、宮本雅美、松根嘉美、渡木康文、坂越一守、山木万里、西田豊、原孝弘、長澤克憲、妹尾嘉紀、沖原朗、荻田昌代、田中直美、高須明美、本田けい子、渡辺政子、中切孝彦、の尽力があった。

# 凡　　例

1. 出土遺物実測図中、断面にスクリーントーンを貼ってあるものは、以下の区分を示す。

生駒西麓産の胎土

磁器

瓦器

須恵器

2. 第１表及び第16表の出土遺物の略号は次のとおりである。

弥……弥生土器、師……土師器、須……須恵器、瓦……瓦器、㊐……瓦、木……木・木器、石……石器・サヌカイト、磁……磁器、陶……陶器、錘……土錘。

# 本 文 目 次

はしがき
例言
1．調査に至る経過……（下村）…… 1
II．位置と環境……（菅原）…… 2
III．調査の概要…… 4
1）調査地点と地区割……（上野）…… 4
2）西ノ辻遺跡第6次発掘調査…… 7
(1) 層位と検出した遺構……（菅原）…… 7
(2) 出土遺物……（曽我）…… 9
3）西ノ辻遺跡第7次発掘調査…… 10
(1) 中世の遺構……（下村・菅原）…… 10
(2) 古墳時代の遺構……（菅原）…… 11
(3) 弥生時代の遺構……（下村・菅原）…… 12
(4) 出土遺物……（曽我）…… 23
4）西ノ辻遺跡第8次発掘調査…… 145
(1) 中世の遺構……（上野）…… 146
(2) 弥生時代の遺構……（〃）…… 149
(3) 出土遺物……（曽我）…… 151
5）鬼虎川遺跡第18次発掘調査…… 163
(1) はじめに……（下村）…… 163
(2) 中世の遺構……（〃）…… 163
(3) 弥生時代の遺構……（〃）…… 169
(4) 縄文時代の海岸線……（〃）…… 170
(5) 出土遺物……（曽我）…… 173
IV．西ノ辻遺跡第7次調査出土鉄鏃の金属学的調査……（大澤）…… 195
V．まとめ……（菅原）…… 205

# 挿　図　目　次


第１図　現地説明会風景……1
第２図　遺跡周辺図……3
第３図　地区割模式図……5
第４図　地区割全体図……5
第５図　調査地点位置図……6
第６図　西ノ辻遺跡第６次調査土層断面図……7
第７図　ＳＥ１断面図……7
第８図　西ノ辻遺跡第６次調査遺構平面図……8
第９図　ＳＥ１内出土遺物実測図・拓影図……9
第10図　建物１実測図……11
第11図　建物２実測図……11
第12図　西ノ辻遺跡第７次調査中世遺構配置図……13～14
第13図　西ノ辻遺跡第７次調査方形周溝墓配置図……13～14
第14図　１号周溝墓実測図……15
第15図　No.１—W内土器出土状況実測図……15
第16図　No.１—W周溝内土層図……15
第17図　No.１—E内土器出土状況実測図……16
第18図　２号周溝墓実測図……16
第19図　No.１～No.３コーナー土層断面図……16
第20図　３号周溝墓実測図……17
第21図　No.３－N内土器出土状況実測図……17
第22図　４号周溝墓実測図……18
第23図　１号甕棺実測図……18
第24図　４号周溝墓南西コーナー土器出土状況実測図……18
第25図　５号周溝墓実測図……19
第26図　No.５—W内土器出土状況実測図……19
第27図　No.５—N内土器出土状況実測図……20
第28図　７号周溝墓実測図……21
第29図　No.７—S周溝内土層図……21
第30図　No.７—S・E・W内土器出土状況実測図……21
第31図　ＳＫ52内土器出土状況実測図……22
第32図　No.１—N周溝内土層図……22

第33図　No. 2—N～No. 5—N周溝内土層図 …… 22
第34図　SP218・319内出土土器実測図 …… 29
第35図　中世遺溝内出土土器実測図 …… 31
第36図　SD42内出土土器実測図 …… 32
第37図　包含層内出土土器実測図 …… 33
第38図　土錘実測図 …… 34
第39図　銭貨拓影図 …… 36
第40図　No. 1—N内出土土器実測図 …… 42
第41図　No. 1—E 1層内出土土器（129～145）実測図 …… 43
第42図　No. 1—E 1層内出土土器（146～170）実測図 …… 44
第43図　No. 1—E 2層内出土土器実測図 …… 45
第44図　No. 1—W 1層内出土土器実測図 …… 46
第45図　No. 1—W 1・2層内出土土器実測図 …… 47
第46図　No. 1—W 2層内出土土器実測図 …… 48
第47図　No. 1—N 1層内出土土器実測図 …… 49
第48図　No. 1—N 2層内出土土器実測図 …… 50
第49図　No. 2—N内出土鉄鏃実測図 …… 52
第50図　No. 3—N 2層内出土土器実測図 …… 55
第51図　4号方形周溝墓出土合口甕棺（1号甕棺）実測図 …… 56
第52図　No. 5—W 1層内出土土器実測図 …… 60
第53図　No. 2—N 1層、No. 3—E・N 1層内出土土器実測図 …… 61
第54図　No. 3—N 2・3層内出土土器実測図 …… 62
第55図　No. 3—N 2層、No. 4—E 1層内出土土器実測図 …… 63
第56図　No. 4—S 1層内出土土器実測図 …… 64
第57図　No. 4—S 1・2層内出土土器実測図 …… 65
第58図　No. 4—W 1層内出土土器実測図 …… 66
第59図　No. 4—N 1層、No. 5—N・W 1層内出土土器実測図 …… 67
第60図　No. 5—W 1層内出土土器実測図 …… 68
第61図　No. 7—S 3層内出土土器実測図 …… 74
第62図　No. 7—E 1層内出土土器（433～446）実測図 …… 75
第63図　No. 7—E 1層内出土土器（447～458）実測図 …… 76
第64図　No. 7—E 1層内出土土器（459～472）実測図 …… 77
第65図　No. 7—S 1層内出土土器（473～492）実測図 …… 78
第66図　No. 7—S・W 1層、No. 8—N 1層内出土土器実測図 …… 79
第67図　No. 7—S 1層内出土土器（523～535）実測図 …… 80

第68図　No.7—S・W1層、No.8—N1層内出土土器実測図 …… 81
第69図　No.7—S1・2層内出土土器実測図 …… 82
第70図　No.7—S2層内出土土器（569～584）実測図 …… 83
第71図　No.7—S2層内出土土器（585～614）実測図 …… 84
第72図　No.7—S2層内出土土器（615～635）実測図 …… 85
第73図　No.7—S2層内出土土器（636～653）実測図 …… 86
第74図　No.10—S1・2層内出土土器実測図 …… 89
第75図　No.10—S2層内出土土器（677～706）実測図 …… 90
第76図　No.10—S2層内出土土器（707～744）実測図 …… 91
第77図　No.10—S2層内出土土器（745～762）実測図 …… 92
第78図　SK52内出土土器（763～764）実測図 …… 93
第79図　SK52内出土土器（765～772）実測図 …… 95
第80図　SK52内出土土器（773～779）実測図 …… 96
第81図　SK52内出土土器（780～800）実測図 …… 97
第82図　包含層内出土土器実測図 …… 98
第83図　方形周溝墓・周溝・土坑出土の完形及び穿孔をうけた土器集成図 …… 113～114
第84図　方形周溝墓・周溝内出土土製品実測図 …… 118
第85図　1号周溝墓・SK52内出土石器実測図 …… 133
第86図　2号・3号周溝墓内出土石器実測図 …… 134
第87図　3号・4号周溝墓内出土石器実測図 …… 135
第88図　7号周溝墓内出土石器（880～885・891～894）実測図 …… 136
第89図　7号周溝墓内出土石器（886～890・895・896）実測図 …… 137
第90図　10号周溝・1号周溝墓内出土石器実測図 …… 138
第91図　中世遺構・包含層内出土石器実測図 …… 139
第92図　中世遺構内出土石器実測図 …… 140
第93図　包含層内出土石器（937・947～970）実測図 …… 141
第94図　包含層内出土石器（934～936・971～982）実測図 …… 142
第95図　包含層内出土石器（983～991）実測図 …… 143
第96図　西ノ辻遺跡第8次調査土層断面図 …… 145
第97図　SE1断面図 …… 146
第98図　西ノ辻遺跡第8次調査中世遺構平面図 …… 147～148
第99図　SK1断面図 …… 149
第100図　SP29断面図 …… 149
第101図　SD28・29平面図 …… 150
第102図　中世遺構内出土土器（1～31）実測図 …… 153

第103図 中世遺構内出土土器（32～51）実測図…… 154
第104図 中世遺構内出土土器（52～84）実測図…… 155
第105図 中世遺構内出土土器（85～117）実測図 …… 156
第106図 ＳＤ28・29・30内出土土器実測図…… 157
第107図 土錘実測図…… 158
第108図 中世遺構・包含層内出土石器実測図…… 161
第109図 ＳＥ１実測図…… 163
第110図 ＳＥ３実測図…… 163
第111図 ＳＥ２実測図…… 164
第112図 ＳＫ５実測図…… 164
第113図 ＳＫ６実測図…… 165
第114図 ＳＫ35平面図…… 166
第115図 ＳＫ35断面図…… 166
第116図 鬼虎川遺跡第18次調査中世遺構配置図 …… 167～168
第117図 縄文時代海岸線断面図 …… 167～168
第118図 ＳＫ53実測図…… 169
第119図 ＳＤ53断面図…… 170
第120図 ＳＫ５内出土土器実測図…… 175
第121図 銭貨拓影図…… 179
第122図 中世遺構内出土遺物実測図－１…… 185
第123図 ＳＫ５内出土土器実測図－１…… 186
第124図 ＳＫ５内出土遺物実測図－２…… 187
第125図 中世遺構内出土遺物実測図－２…… 188
第126図 中世遺構内出土土器実測図－３…… 189
第127図 ＳＫ35内出土土器実測図…… 190
第128図 ＳＫ53内出土土器実測図…… 191
第129図 ＳＫ56内出土土器実測図…… 192
第130図 包含層内出土土器実測図－１…… 193
第131図 包含層内出土土器実測図－２…… 194
第132図 土錘・瓦製円板実測図…… 195
第133図 中世遺構・包含層内出土石器実測図－１…… 196
第134図 中世遺構・包含層内出土石器実測図－２…… 197
第135図 包含層内出土石器実測図…… 198
第136図 西ノ辻遺跡出土鉄鏃（R—881 ①）のコンピューター・プログラムによる
高速定性分析結果…… 200

第137図 西ノ辻遺跡出土鉄鏃（R—881 ②）のコンピューター・プログラムによる
高速定性分析結果…… 202

# 表 目 次

第1表 西ノ辻遺跡第7次調査遺構一覧表…… 23～27
第2表 遺構・包含層内出土土錘一覧表…… 35
第3表 遺構・包含層内出土動物遺体一覧表…… 36
第4表 方形周溝墓・周溝・土坑内出土遺物一覧表…… 99～102
第5表 「主な土器」法量表 …… 105～112
第6表 方形周溝墓・周溝・土坑内出土土製品一覧表…… 117
第7表 方形周溝墓・周溝・土坑内出土石器一覧表 …… 123～125
第8表 方形周溝墓・周溝・土坑内出土サヌカイト一覧表…… 126
第9表 古墳時代以降の遺構・包含層内出土石器一覧表 …… 127～130
第10表 古墳時代以降の遺構・包含層内出土サヌカイト一覧表 …… 131～132
第11表 方形周溝墓・周溝内出土動物遺体一覧表…… 144
第12表 土錘一覧表…… 158
第13表 中世遺構・包含層内出土石器一覧表…… 159
第14表 中世遺構・包含層内出土サヌカイト一覧表…… 160
第15表 中世遺構・包含層内出土動物遺体一覧表…… 162
第16表 鬼虎川遺跡第18次調査遺構一覧表 …… 171～172
第17表 中世遺構・包含層内出土土錘一覧表…… 181
第18表 中世遺構・包含層内出土石器一覧表…… 182
第19表 中世遺構・包含層内出土サヌカイト一覧表…… 183
第20表 焼土出土地区及び遺構一覧表…… 184
第21表 中世遺構・包含層内出土動物遺体一覧表…… 184
第22表 鉄鏃の化学組成…… 203
第23表 弥生時代・古墳時代前期の鉄器中非金属介在物からみた製鉄原料…… 204

# 図 版 目 次


| | | |
|---|---|---|
| 図版一 | 調査地航空写真・方形周溝墓全景 | 1. 調査地航空写真 |
| | | 2. 方形周溝墓全景 |
| 図版二 | 西ノ辻遺跡第６次調査　遺構 | 1. 遺構検出状況全景（北より） |
| | | 2. ＳＥ１掘削後の状況（北より） |
| 図版三 | 西ノ辻遺跡第６次調査　遺物 | 1. ＳＥ１　２～４層内出土土器 |
| | | 2. ＳＥ１　１層内出土土器 |
| 図版四 | 西ノ辻遺跡第７次調査　遺構 | 1. 建物１検出状況（西より） |
| | | 2. 建物２検出状況（東より） |
| 図版五 | 西ノ辻遺跡第７次調査　遺構 | 1. ＳＤ42内土器出土状況（東より） |
| | | 2. ＳＤ126検出状況（北より） |
| 図版六 | 西ノ辻遺跡第７次調査　遺構 | 1. １号方形周溝墓全景（東より） |
| | | 2. ２号方形周溝墓全景（南より） |
| 図版七 | 西ノ辻遺跡第７次調査　遺構 | 1. No.１—Ｅ内土器出土状況 |
| | | 2. No.１—Ｗ　２層内土器出土状況 |
| 図版八 | 西ノ辻遺跡第７次調査　遺構 | 1. No.１—Ｗ内土器出土状況 |
| | | 2. No.１—Ｗ内土器出土状況（近景） |
| 図版九 | 西ノ辻遺跡第７次調査　遺構 | 1. No.１—Ｎ内土器出土状況 |
| | | 2. No.１—Ｗ内土器出土状況 |
| 図版一〇 | 西ノ辻遺跡第７次調査　遺構 | 1. No.１—Ｎ～No.２—Ｗ　土層断面 |
| | | 2. No.１—Ｗ　土層断面 |
| 図版一一 | 西ノ辻遺跡第７次調査　遺構 | 1. No.３—Ｎ内土器出土状況 |
| | | 2. No.３—Ｎ内土器出土状況（近景） |
| 図版一二 | 西ノ辻遺跡第７次調査　遺構 | 1. No.３—Ｎ内土器出土状況 |
| | | 2. No.３—Ｅ内土器出土状況 |
| 図版一三 | 西ノ辻遺跡第７次調査　遺構 | 1. No.３—Ｎ内土器出土状況 |
| | | 2. No.３—Ｎ内土器出土状況（近景） |
| 図版一四 | 西ノ辻遺跡第７次調査　遺構 | 1. No.３—Ｎ　下層内土器出土状況 |
| | | 2. No.３—Ｎ　下層内土器出土状況 |
| 図版一五 | 西ノ辻遺跡第７次調査　遺構 | 1. ４号方形周溝墓全景（東南より） |
| | | 2. ５号方形周溝墓全景（北より） |
| 図版一六 | 西ノ辻遺跡第７次調査　遺構 | 1. １号甕棺検出状況 |
| | | 2. １号甕棺検出状況全景 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | | 3．　1号甕棺墓壙掘削後の状況 |
| 図版一七 | 西ノ辻遺跡第7次調査 | 遺構 | 1．　No．4—N内土器出土状況 |
| | | | 2．　No．4—N内土器出土状況（近景） |
| 図版一八 | 西ノ辻遺跡第7次調査 | 遺構 | 1．　No．4—E・S内土器出土状況 |
| | | | 2．　No．4—W・S内土器出土状況 |
| | | | 3．　No．4—S内土器出土状況 |
| 図版一九 | 西ノ辻遺跡第7次調査 | 遺構 | 1．　6号方形周溝墓全景（南より） |
| | | | 2．　No．5—N内土器出土状況 |
| 図版二〇 | 西ノ辻遺跡第7次調査 | 遺構 | 1．　SK52内土器出土状況 |
| | | | 2．　SK52掘削後の状況 |
| 図版二一 | 西ノ辻遺跡第7次調査 | 遺構 | 1．　SK52内土器出土状況 |
| | | | 2．　SK52内土器出土状況 |
| 図版二二 | 西ノ辻遺跡第7次調査 | 遺構 | 1．　10号周溝内柱状片刃石斧出土状況 |
| | | | 2．　10号周溝内太型蛤刃石斧出土状況 |
| 図版二三 | 西ノ辻遺跡第7次調査 | 遺構 | 1．　7号方形周溝墓掘削前の状況全景（東より） |
| | | | 2．　7号方形周溝墓検出状況全景（東より） |
| 図版二四 | 西ノ辻遺跡第7次調査 | 遺構 | 1．　No．7—E　上層内土器出土状況（東より） |
| | | | 2．　8号周溝内土器出土状況（東より） |
| 図版二五 | 西ノ辻遺跡第7次調査 | 遺構 | 1．　No．7—S　下層内土器出土状況（北より） |
| | | | 2．　No．7—S　掘削後の状況（東より） |
| 図版二六 | 西ノ辻遺跡第7次調査 | 遺物 | 1．　中世遺構・包含層内出土銭貨・土製品 |
| | | | 2．　SE3内出土土器 |
| | | | 3．　SK34・35内出土土器 |
| 図版二七 | 西ノ辻遺跡第7次調査 | 遺物 | 1．　SD16・SK37内出土土器 |
| | | | 2．　SD37・SP241内出土土器 |
| | | | 3．　SD16・41・42・88・103・104内出土土器 |
| 図版二八 | 西ノ辻遺跡第7次調査 | 遺物 | 1．　SD42内出土土器 |
| 図版二九 | 西ノ辻遺跡第7次調査 | 遺物 | 1．　中世遺構・包含層内出土土錘 |
| 図版三〇 | 西ノ辻遺跡第7次調査 | 遺物 | 1．　中世遺構・包含層内出土輸入磁器 |
| | | | 2．　動物遺体 |
| 図版三一 | 西ノ辻遺跡第7次調査 | 遺物 | 1．　No．1—E　1層内出土土器 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 図版三二 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. No.１—E　２層内出土土器 |
| | | | 2. No.1—E　１層内出土土器 |
| 図版三三 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. No.1—W　１・２層内出土土器 |
| 図版三四 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. No.１—W　１層内出土土器 |
| 図版三五 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. No.１—W　１・２層内出土土器 |
| 図版三六 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. No.１—N　１・２層内出土土器 |
| 図版三七 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. No.２—N～W　２層、No.２—N |
| | | | 2. No.３—N層内出土土器 |
| 図版三八 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. No.３—N　１・２層内出土土器 |
| 図版三九 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. No.２—N　１層、No.３—E内出土土器 |
| | | | 2. No.３—E　２層内出土土器 |
| | | | 3. No.１—N　１層内土器とNo.３—E２層内土器の接合資料 |
| 図版四〇 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. No.３—N　１・２層内出土土器 |
| | | | 2. No.４—E　２層内出土土器 |
| 図版四一 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. １号甕棺　No.４—S　１層内出土土器 |
| 図版四二 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. No.４—S　１・２層、No.４—W　１層内出土土器 |
| 図版四三 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. No.４—W　１層内出土土器 |
| 図版四四 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. No.４—N　１層、No.５—N・W　１層内出土土器 |
| 図版四五 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. No.５—W層内出土土器 |
| 図版四六 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. No.５—W　１層内出土土器 |
| | | | 2. No.５—W　１層内出土土器 |
| 図版四七 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. No.７—E　１層、No.７—S　２層内出土土器 |
| 図版四八 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. No.７—E　１層内出土土器 |
| | | | 2. No.７—E　１層内出土土器 |
| 図版四九 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. No.７—E　１層内出土土器 |
| | | | 2. No.７—S・E　１・２層内出土土器 |
| 図版五〇 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. No.７—E　１層内出土土器 |
| | | | 2. No.７—E　１層内出土土器 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 図版五一 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. No.７—E　１層内出土土器 |
| | | | 2. No.７—S・E　１層内出土土器 |
| 図版五二 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. No.７—S　１層内出土土器 |
| | | | 2. No.７—S　１層内出土土器 |
| 図版五三 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. No.７—S　２層内出土土器 |
| | | | 2. No.７—S　１・２層内出土土器 |
| 図版五四 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. No.７—S　１・２層内出土土器 |
| 図版五五 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. No.７—E　１層、No.７—S　２層内出土土器 |
| | | | 2. No.７—S　２層内出土土器 |
| 図版五六 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1, No.７—S　２層内出土土器 |
| 図版五七 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. No.７—S・W　１層内出土土器 |
| 図版五八 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. No.７—S　２層内出土土器 |
| | | | 2. No.８—N　１層内出土土器 |
| 図版五九 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. No.10—S　２層内出土土器 |
| 図版六〇 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. No.10—S　２層内出土土器 |
| | | | 2. No.10—S　１・２層内出土土器 |
| 図版六一 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. No.10—S　２層内出土土器 |
| | | | 2. No.10—S　１層内出土土器 |
| | | | 3. No.10—S　２層内出土土器 |
| 図版六二 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. No.10—S　１・２層内出土土器 |
| | | | 2. ＳＫ52内出土土器 |
| 図版六三 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. ＳＫ52内出土土器 |
| 図版六四 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. 穿孔土器 |
| | | | 2. 木葉痕のある土器 |
| 図版六五 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. 二次使用の土器、鉄鏃、管玉、耳環他 |
| 図版六六 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. 弥生時代遺構内出土土製品 |
| 図版六七 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. 弥生時代遺構、中世遺構、包含層内出土石器 |
| 図版六八 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. 弥生時代遺構内出土磨製石器 |
| 図版六九 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. 弥生時代遺構、中世遺構内出土石庖丁 |
| 図版七〇 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. 弥生時代遺構、中世遺構内出土 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | | | | 打製石器 |
| 図版七一 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. | 弥生時代遺構内出土打製石器 |
| 図版七二 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. | 弥生時代遺構内出土打製石器 |
| 図版七三 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. | 弥生時代遺構、中世遺構内出土打製石器 |
| 図版七四 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. | 中世遺構、包含層内出土打製石器 |
| 図版七五 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. | 包含層内出土打製石器 |
| 図版七六 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. | 包含層内出土打製石器 |
| | | | 2. | 中世遺構、包含層内出土石器 |
| 図版七七 | 西ノ辻遺跡第７次調査 | 遺物 | 1. | 弥生時代遺構内出土縄文土器 |
| 図版七八 | 西ノ辻遺跡第８次調査 | 遺構 | 1. | 中世遺構検出状況全景（東より） |
| | | | 2. | ＳＤ15、ＳＥ１、ＳＫ１検出状況（東より） |
| 図版七九 | 西ノ辻遺跡第８次調査 | 遺構 | 1. | 弥生時代遺構検出状況全景（東より） |
| | | | 2. | ＳＤ29掘削後の状況（東より） |
| 図版八〇 | 西ノ辻遺跡第８次調査 | 遺構・遺物 | 1. | ＳＤ30検出状況（南より） |
| | | | 2. | ＳＤ15、ＳＥ１　３層内出土遺物 |
| | | | 3. | ＳＥ１　２～３層内出土土器 |
| 図版八一 | 西ノ辻遺跡第８次調査 | 遺物 | 1. | ＳＤ15　３層内出土土器 |
| | | | 2. | ＳＤ15　３層内出土土器 |
| 図版八二 | 西ノ辻遺跡第８次調査 | 遺物 | 1. | ＳＤ15内出土土器 |
| | | | 2. | ＳＸ２内出土土器 |
| 図版八三 | 西ノ辻遺跡第８次調査 | 遺物 | 1. | ＳＸ２内出土土器 |
| | | | 2. | 中世遺構、包含層内出土土錘 |
| 図版八四 | 西ノ辻遺跡第８次調査 | 遺物 | 1. | 中世遺構、包含層内出土磁器 |
| | | | 2. | 中世遺構、包含層内出土動物遺体 |
| 図版八五 | 西ノ辻遺跡第８次調査 | 遺物 | 1. | 中世遺構、包含層内出土打製石器 |
| | | | 2. | 中世遺構、包含層内出土石器 |
| 図版八六 | 鬼虎川遺跡第18次調査 | 遺構 | 1. | 中世遺構掘削前の状況全景（東より） |
| | | | 2. | 中世遺構検出状況（西より） |
| 図版八七 | 鬼虎川遺跡第18次調査 | 遺構 | 1. | 中世遺構検出状況（北より） |
| | | | 2. | ＳＫ６完掘状況（西より） |
| 図版八八 | 鬼虎川遺跡第18次調査 | 遺構 | 1. | ＳＫ35完掘状況（西より） |
| | | | 2. | 中世遺構検出状況全景（北より） |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 図版八九 | 鬼虎川遺跡第18次調査 | 遺構 | 1. ＳＫ５内礫の集積状況（北より） |
| | | | 2. ＳＫ５完掘状況（北より） |
| 図版九〇 | 鬼虎川遺跡第18次調査 | 遺構 | 1. ＳＥ１掘削後の状況（北より） |
| | | | 2. ＳＥ３掘削後の状況（北より） |
| | | | 3. ＳＥ２掘削後の状況（西より） |
| 図版九一 | 鬼虎川遺跡第18次調査 | 遺構 | 1. ＳＰ１内根石検出状況 |
| | | | 2. ＳＰ２内根石検出状況 |
| | | | 3. ＳＰ41内根石検出状況 |
| 図版九二 | 鬼虎川遺跡第18次調査 | 遺構 | 1. ＳＰ158内根石検出状況 |
| | | | 2. ＳＰ190内根石検出状況 |
| | | | 3. ＳＫ56内土器出土状況 |
| 図版九三 | 鬼虎川遺跡第18次調査 | 遺構 | 1. 古墳～弥生時代の遺構検出状況（西より） |
| | | | 2. ＳＫ53内土器出土状況 |
| 図版九四 | 鬼虎川遺跡第18次調査 | 遺構 | 1. ＳＫ53内土器出土状況 |
| | | | 2. ＳＫ53内土器出土状況 |
| | | | 3. ＳＫ53内土器出土状況 |
| 図版九五 | 鬼虎川遺跡第18次調査 | 遺構 | 1. 弥生時代の大溝（ＳＤ53）検出状況（東より） |
| | | | 2. 弥生時代の大溝（ＳＤ53）掘削後の状況（東より） |
| 図版九六 | 鬼虎川遺跡第18次調査 | 遺構 | 1. ⅩⅧＦ７ｅ～ｆ区西側断面（東より） |
| | | | 2. 10ライン付近北側断面（南より） |
| 図版九七 | 鬼虎川遺跡第18次調査 | 遺物 | 1. ＳＥ２、ＳＫ５内出土遺物 |
| | | | 2. ＳＥ３内出土土器 |
| | | | 3. 中世遺構、包含層内出土輸入磁器 |
| 図版九八 | 鬼虎川遺跡第18次調査 | 遺物 | 1. ＳＫ５内出土遺物 |
| | | | 2. ＳＫ５内出土甕 |
| 図版九九 | 鬼虎川遺跡第18次調査 | 遺物 | 1. ＳＫ５・６内出土遺物 |
| | | | 2. ＳＫ５内出土瓦 |
| 図版一〇〇 | 鬼虎川遺跡第18次調査 | 遺物 | 1. ＳＫ５・６・18内出土土器 |
| | | | 2. ＳＫ18内出土土器・陶器 |
| 図版一〇一 | 鬼虎川遺跡第18次調査 | 遺物 | 1. ＳＫ35内出土羽釜 |
| | | | 2. ＳＫ35内出土土器 |
| 図版一〇二 | 鬼虎川遺跡第18号調査 | 遺物 | 1. ＳＫ５・35・37内出土遺物 |

図版一〇三　鬼虎川遺跡第18次調査　遺物　1．ＳＤ36・40内出土土器、陶磁器
図版一〇四　鬼虎川遺跡第18次調査　遺物　1．ＳＫ１・６・14・18内出土土器
2．ＳＤ14・40・51・60内出土土器
図版一〇五　鬼虎川遺跡第18次調査　遺物　1．ＳＫ53内出土土器
図版一〇六　鬼虎川遺跡第18次調査　遺物　1．ＳＫ53・56内出土土器
図版一〇七　鬼虎川遺跡第18次調査　遺物　1．包含層内出土土器
図版一〇八　鬼虎川遺跡第18次調査　遺物　1．包含層内出土須恵器
2．中世遺構、包含層内出土須恵器
図版一〇九　鬼虎川遺跡第18次調査　遺物　1．包含層内出土弥生（前期）土器
図版一一〇　鬼虎川遺跡第18次調査　遺物　1．包含層内出土縄文土器
2．包含層内出土縄文土器
図版一一一　鬼虎川遺跡第18次調査　遺物　1．中世遺構・包含層内出土土錘
図版一一二　鬼虎川遺跡第18次調査　遺物　1．中世遺構・包含層内出土銭貨
2．中世遺構・包含層内出土動物遺体
図版一一三　鬼虎川遺跡第18次調査　遺物　1．包含層内出土埴輪
2．鉄器、双孔円板、紡錘車、骨製品他
図版一一四　鬼虎川遺跡第18次調査　遺物　1．中世遺構・包含層内出土打製石器
2．中世遺構、包含層内出土打製石器
図版一一五　鬼虎川遺跡第18次調査　遺物　1．中世遺構、包含層内出土石器
図版一一六　西ノ辻遺跡第７次調査出土鉄鏃の顕微鏡組織
図版一一七　西ノ辻遺跡第７次調査出土鉄鏃（Ｒ―881 ①）の特性Ｘ線像
図版一一八　西ノ辻遺跡第７次調査出土鉄鏃（Ｒ―881 ②）の特性Ｘ線像

# Ⅰ．調査に至る経過

昭和46年の都市交通審議会において鉄道新路線の答申が打ち出されて以来、国道308号線の拡張工事及び東大阪都市高速鉄道東大阪線の建設並びに阪神高速道路東大阪線の延長計画を含めた都市交通網の整備計画が推し進められていくことになった。しかしながら、計画路線内には水走遺跡・鬼虎川遺跡・西ノ辻遺跡・神並遺跡が存在することから、発掘調査が必要となり昭和55年以来継続して続けられることになった。

昭和57年度の調査は、東大阪市教育委員会と昭和57年３月に発足した財団法人東大阪市文化財協会の主体で、昭和56年度に引き続いて実施することになった。

昭和56年度に計画路線内全域を対象として試掘調査が実施され、路線内のほぼ全域の発掘調査が必要であるとの結論が出ていたため、今年度は工事計画の上でどうしても緊急を要する地域を優先的に調査を実施することになった。そこでまず、昭和56年度の調査で発見された縄文時代の遺構及び周辺部を神並遺跡第２次調査として実施する一方、西ノ辻遺跡で工事が先行する箇所を第６次調査として、併行して実施した。その後、10月24日より、国道308号線の付替道路建設部分を西ノ辻遺跡第７次調査として実施する予定であった。しかしながら、第７次調査の対象地内に未買収地が残されているため、この部分を調査対象から除外し、未買収地を挟んで東側を西ノ辻第７次調査、西側を鬼虎川第18次調査として昭和58年３月31日まで発掘調査を実施した。その後、未買収地の買収も完了したため、昭和58年11月１日より11月28日まで発掘調査を実施した。この調査を西ノ辻遺跡第８次調査とした。

このように昭和57年度の調査は、神並遺跡から西ノ辻・鬼虎川遺跡まで広範囲にわたるため、同一報告書で処理するよりは、分けて報告する方が整理上都合が良いため、同年度の調査ではあるが、神並遺跡と西ノ辻・鬼虎川遺跡の２冊の報告書にまとめることにした。神並遺跡第２次調査の報告は、「神並遺跡Ⅱ」としてすでに刊行している[注①]。今回の報告は、西ノ辻遺跡第６・７・８次調査及び鬼虎川遺跡第18次調査の報告である。

整理調査は、全調査の整理作業を昭和61年度から５年計画に実施し、年度毎に報告書を刊行している。今回の報告書は、昭和62年度の整理報告として刊行したものである。

注① 下村晴文・菅原章太・橋本正幸『神並遺跡Ⅱ』（財）東大阪市文化財協会、1987年。

第１図　現地説明会風景

## II. 位置と環境

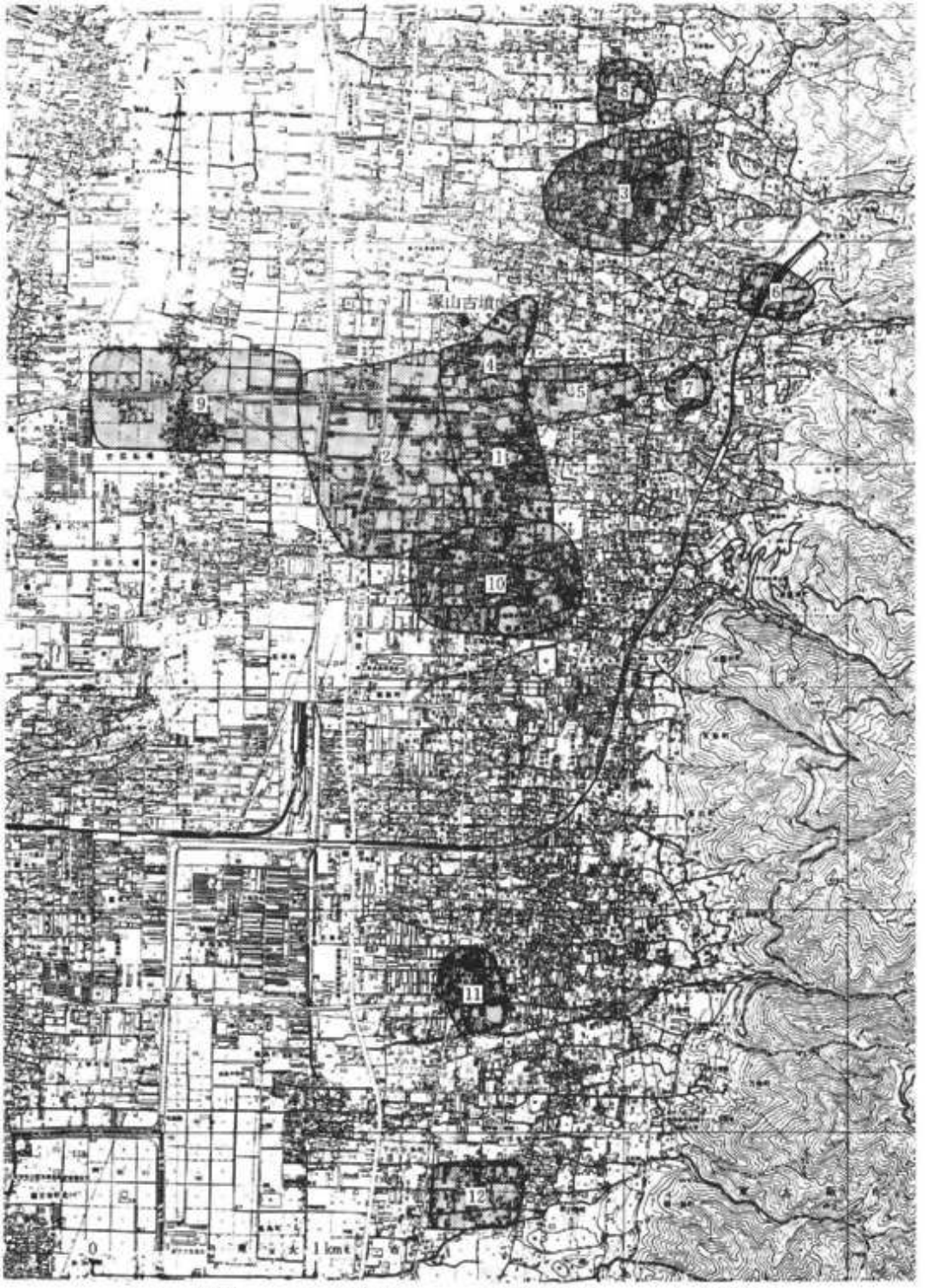
※鬼虎川遺跡については『鬼虎川遺跡第12次調査報告』を参照のこと。

西ノ辻遺跡は、東大阪市東山町、弥生町、西石切町３丁目にかけて所在する、縄文時代から室町時代にいたる複合遺跡である。

大阪府と奈良県の境界にそびえ立つ生駒山地は、横圧力に依る褶曲運動の結果生成したものといわれている。そのため大阪府側では背斜部が形成され、山地を分水嶺とする小河川は山あいを鋭く刻みこむ急流性となっている。従って小河川による急速な土砂の堆積作用は長期間に及ぶ扇状地の発達を促している。西ノ辻遺跡は、山地に沿って南北に伸びる低位段丘上に立地するが、遺跡のベースとなる段丘は、小河川の堆積作用のため極めて扇状地の性質を強くもつものとなっている。遺跡は現地表面で標高７～20mを測る。

遺跡発見の端緒になったのは、昭和16年２月、当時の八尾中学校（現在の八尾高等学校）生徒が、東高野街道脇で弥生土器片を採集したことによる。その後、昭和16年から17年にわたって、京都大学小林行雄氏による調査が行われた。その結果、調査地点（Ａ～Ｎ地点）ごとに様式の異なる弥生時代中期から後期の土器が出土し、調査地点名をもとに、編年を組まれた。そのうちとくに、西ノ辻遺跡Ｉ地点式は第Ｖ様式初頭に位置付けられ、弥生時代後期の標式遺跡として学史上著名になったところである。その後、しばらくの間はとくに目立った調査は行われず、東大阪市東部にあって比較的田園風景が良く残っていたが、本調査をはじめとする国道308号線及び新鉄道建設工事に先立つ発掘調査が18次にわたって本協会と大阪府教育委員会により実施され、大きな成果を得るところとなった。即ち本遺跡の北端部に幅60mの発掘トレンチを設けた格好になり、そこで、縄文時代から室町時代までやや蛇行しながらも存続した自然河川が検出されたのである。河川の堆積層内からコンテナにして約3,000箱分の膨大な遺物が出土したのをはじめ、河川の流水力を利用した古墳時代中期の貯水施設が発見されたことは耳目に新しいところである。また中世期の集落遺構や木棺墓など中世考古学の分野においても貴重な資料を提供している。

西ノ辻遺跡の周辺には数多くの遺跡が所在している。まず旧石器時代には、本遺跡の東方に千手寺山遺跡、正興寺山遺跡があり、ナイフ型石器が採集されている。縄文時代に属する遺跡には、北から日下、芝ヶ丘、神並、縄手、馬場川遺跡が点在している。これらの遺跡は河内湾と生駒山の豊かな自然を背景として集落が営まれたものと考えられる。弥生時代には、前期後半頃より平野部への進出が顕著である。本遺跡の西に隣接する鬼虎川遺跡をはじめ、瓜生堂、山賀遺跡など拠点的集落が出現している。鬼虎川遺跡については、その集落の発展と解体の過程において、西ノ辻遺跡との関わりが問題とされている。古墳時代以降では、採集された円筒埴輪片の型式から５世紀前半頃の築造と考えられている塚山古墳や、５世紀後半の竪穴式住居が検出された植附遺跡などが周辺に位置しており、先の貯水施設の発見と考え合わせれば、集落―河川―古墳の立地、相関関係が今後の調査の課題となるであろう。




1．西ノ辻遺跡　2．鬼虎川遺跡　3．芝ケ丘遺跡　4．植附遺跡
5．神並遺跡　6．千手寺山遺跡　7．正興寺山遺跡　8．日下遺跡
9．水走遺跡　10．鬼塚遺跡　11．縄手遺跡　12．馬場川遺跡

第2図　遺跡周辺図

# Ⅲ. 調査の概要

## 1）調査地点と地区割

### 地区割

鉄道建設及び国道308号線関係に伴なう調査にあたっては、水走遺跡、鬼虎川遺跡、西ノ辻遺跡、神並遺跡の4遺跡をすべて覆う地区割を設定した。地区割は、建設省告示（昭和43年）による第Ⅵ座標系を利用した。原点を東大阪市川中（X＝－146.200、Y＝－34.600）に設定し、100m方画を大地区とし、さらに、大地区を5m方画に分割し、小地区とした。地区名称は、各々の地区ラインに名称を与え、直交する2方向のラインの名称を組み合わせて地区名称とした。大地区のラインの名称は、南北ラインが原点より東にむかってⅠ（Y＝－34.500）、Ⅱ（Y＝－34.400）、Ⅲ（Y＝－34.300）……、東西ラインが南にむかってA（X＝－146.300）、B（X＝－146.400）、C（X＝－146.500）……である。小地区の名称は、大地区ラインと同様に、1、2、3……、及び、a、b、c……とした。したがって、各地区の名称は、南東隅交点のライン名称となり、原点を含む小地区名は「IA1a」と表わされる。（第3図参照）

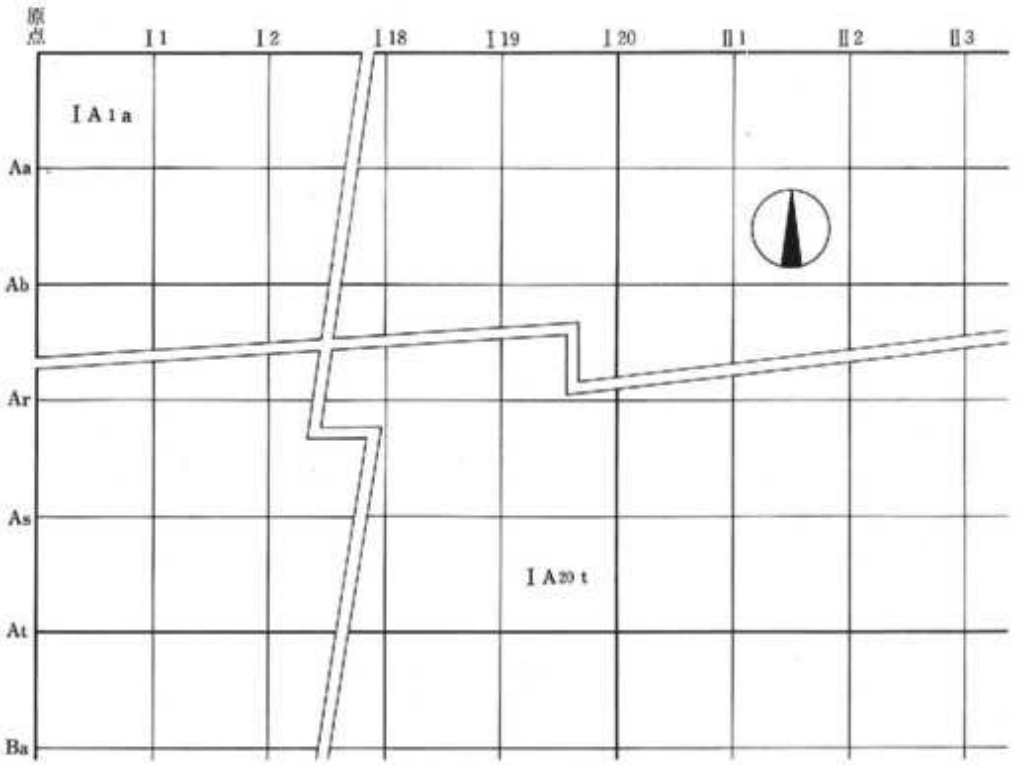
今回の調査地点を地区名称で表わすと、以下のとおりである。

| | | |
|---|---|---|
| 西ノ辻遺跡第6次調査 | XXIIF2～4 h～i | |
| 〃　第7次調査 | XIXF11～20 e～h | XXF1～5 e |
| | XXF1～14 g | |
| | XXF1～10 e | |
| | XXF1～16 h | |
| 〃　第8次調査 | XIXF9～11 e～g | |
| 鬼虎川遺跡第18次調査 | XVIIIF8～20 d | XVIIIF6～20 e～g |
| | XIXF1～7 d | XIXF1～9 e～h |

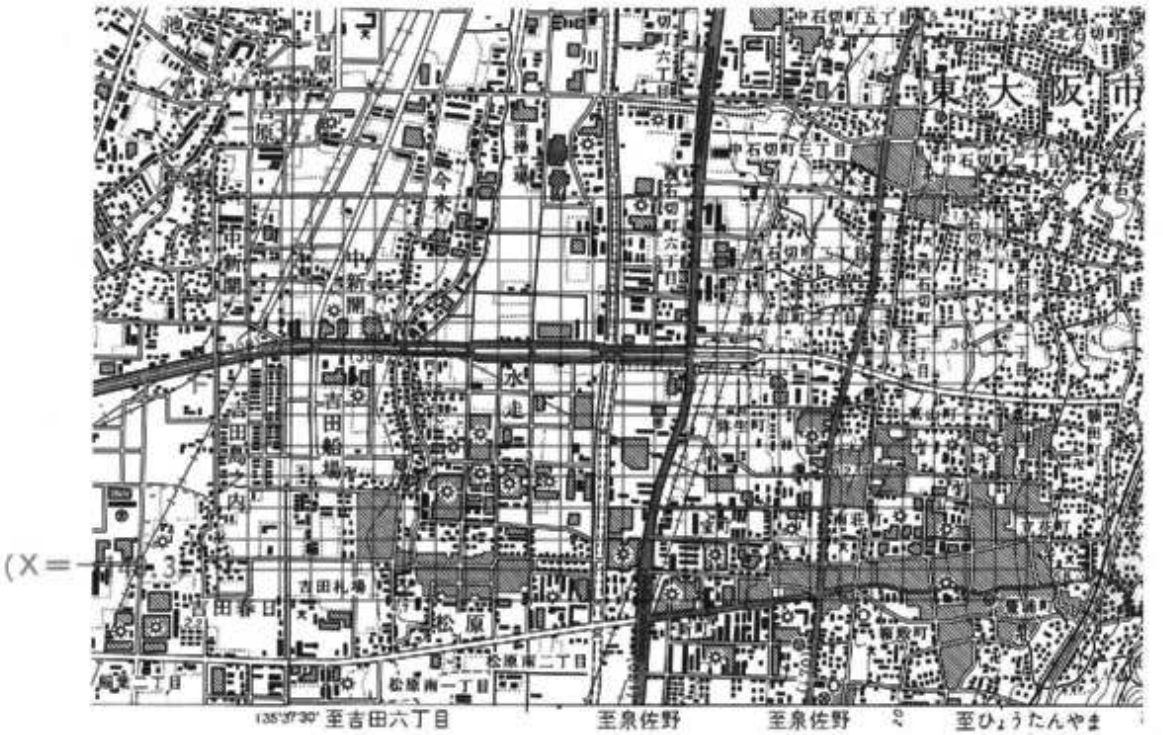
### 調査地点

各調査地点の地番、及び、調査面積は以下のとおりである。

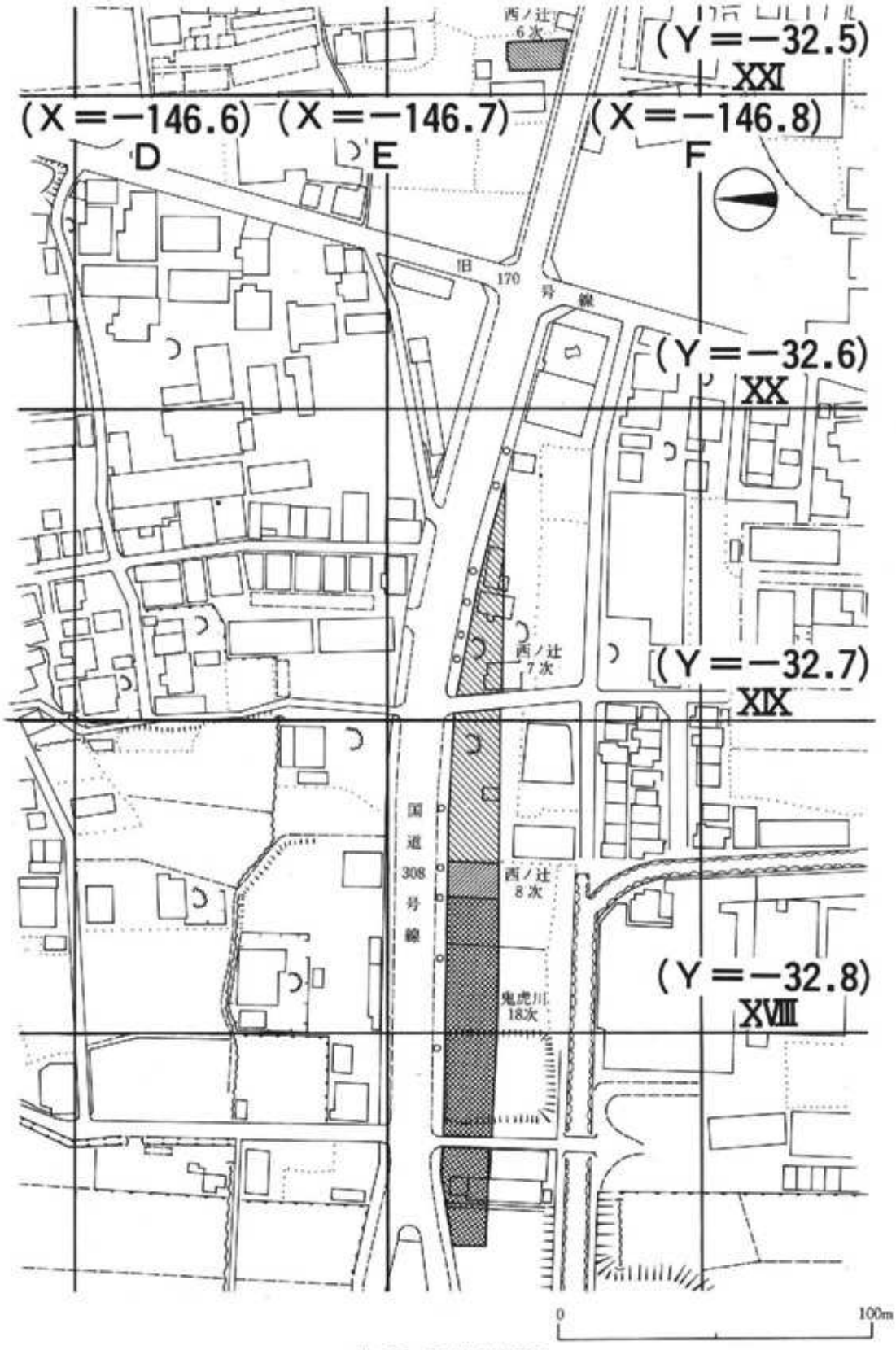
| | | |
|---|---|---|
| 西ノ辻遺跡第6次調査 | 東大阪市西石切町1丁目11 | 約　170㎡ |
| 西ノ辻遺跡第7次調査 | 東大阪市弥生町4・5 | 約2,600㎡ |
| 西ノ辻遺跡第8次調査 | 東大阪市弥生町 | 約　200㎡ |
| 鬼虎川遺跡第18次調査 | 東大阪市弥生町6 | 約　400㎡ |




第3図　地区割模式図




第4図　地区割模式図


西ノ辻
6次
(Y＝−32.5)
XXI
(X＝−146.6)
(X＝−146.7)
(X＝−146.8)
D
E
F
旧
170
号
線
(Y＝−32.6)
XX
西ノ辻
7次
(Y＝−32.7)
XIX
国
道
308
号
線
西ノ辻
8次
(Y＝−32.8)
XVIII
鬼虎川
18次
0
100m

第5図　調査地点位置図

## 2）西ノ辻遺跡第６次発掘調査

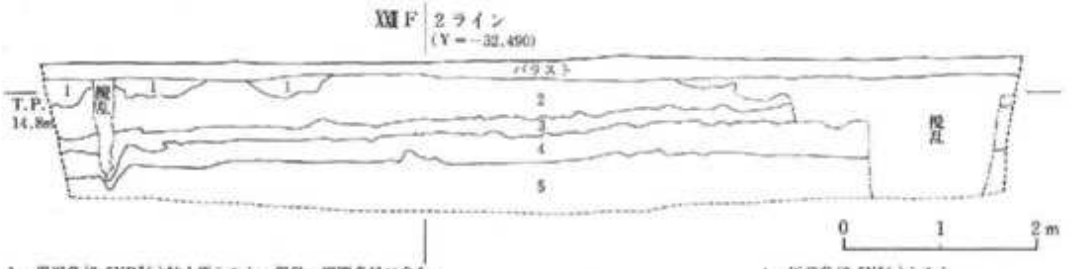
### （1）層位と検出した遺構

**層位**　調査地は、着手直前まで病院の駐車場として利用されていたところから、まず、バラストを機械で除去したのち、遺構面精査、遺構掘り下げを人力で行うことにした。また、駐車場など周辺の造成工事が大規模に行われた結果、本来の遺構面は大部分が削平されていた。

第１層　黒褐色粘質シルト、細礫を多く含む。中世の遺物包含層だが、大部分は近年の工事により欠失。地山面のやや凹んだところに残存しているのみである。層厚20～30㎝。

第２層　明黄褐色粘質シルト、黒褐色細砂を斑状に含む。中世の遺構面をなす。地山層。

第３層以下は深掘り時に確認したもので、全て洪積層と思われる。




1．黒褐色(7.5YR3/2)粘土質シルト。粗砂～細礫多量に含む。
2．明黄褐色(2.5Y6/6)粘土質シルト。中央部は黒褐色(5YR2/2)細砂。下部は明黄褐色(2.5Y6/6)細砂
3．黒褐色(5YR3/1)粘土。
4．灰黄色(2.5Y6/2)シルト
5．黒褐色(10YR2/3)シルト
オリーブ黄色(5Y6/3)シルト　の互層

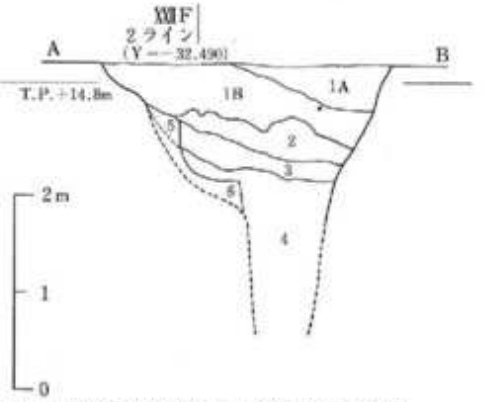
**第６図　西ノ辻遺跡第６次調査土層断面図**

**検出した遺構**　第２層上面で、ピット、不定形土坑、井戸を検出したが、井戸以外は、後世の削平をまともに受けて、遺存状態はよいものではない。数値は全て検出面からの実長である。

ピット　調査地北側と南側で径10～40㎝のピットを確認したが、深さは４～10㎝ほどしか遺存しておらず、建物の平面プラン復元は困難である。

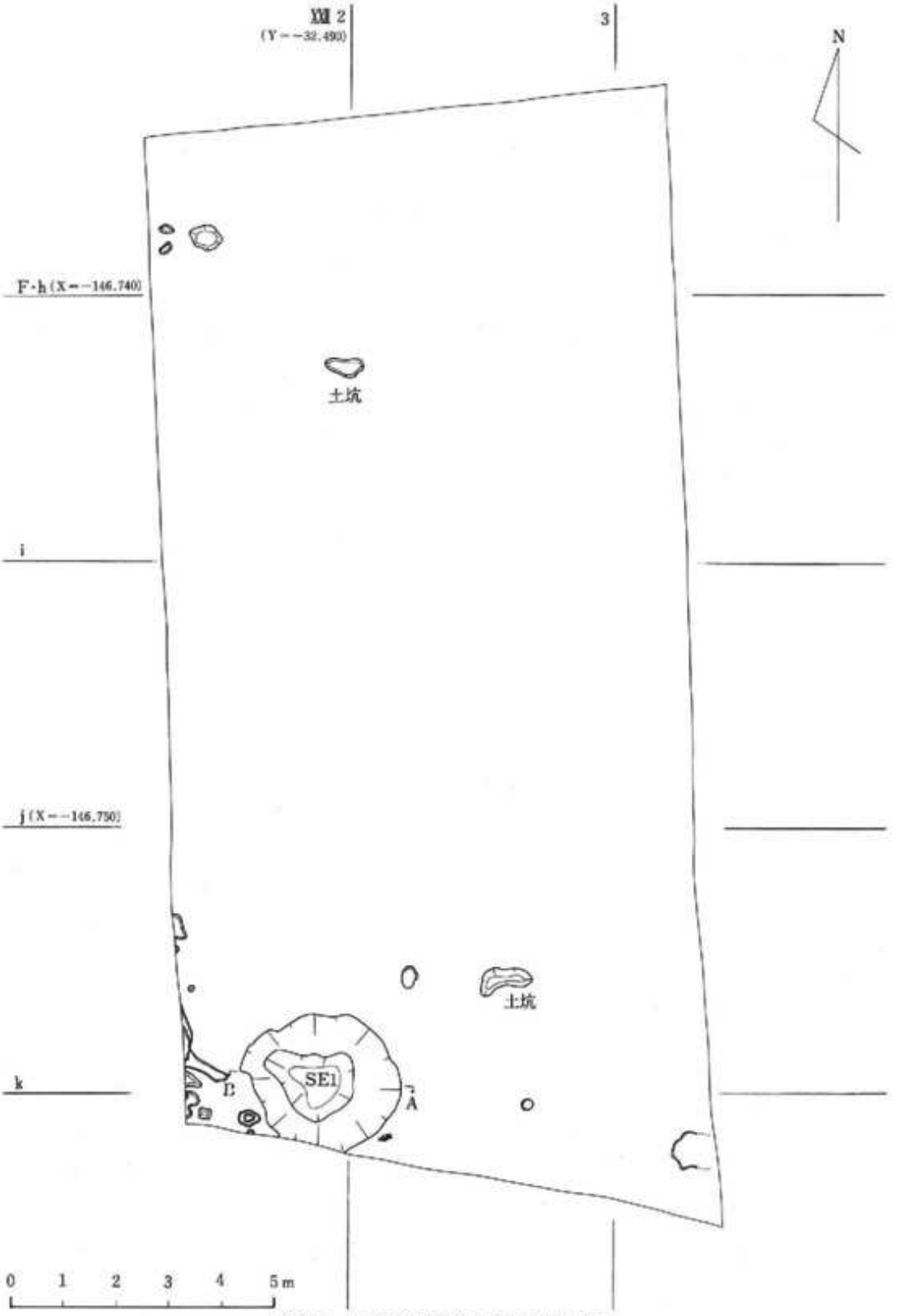
土坑　長辺70㎝、短辺30㎝の繭形を呈する土坑を２基検出したが、性格は不明。深さは10㎝。

井戸（ＳＥ１）　東西３ｍ、南北2.6ｍ以上、深さ1.7ｍを測り、楕円形を呈する。地表下1.5ｍで二段掘りの形状を示し、下部では径１ｍほどにすぼまっている。以上の状況から上部には何らかの井筒が設けられた可能性が指摘できる。井戸内土層は１～４層に分層でき、１～３層が井戸廃絶後の埋土、４層が機能時の堆積土と見られる。出土遺物は１～４層を通じて僅少で、土師器皿、瓦器椀の細片のほかは、開元通寶（641年初鋳）が１点出土。




1A．黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルトに第２層および灰白色(10YR7/2)シルトがブロック状に混入。
1B．黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。中砂～細礫多量に含む。
2．黒褐色(10YR3/2)粘質シルトと灰色(5Y5/1)粘質シルトの混合土。
3．灰色(10Y5/1)極細砂に第２層および黒褐色(5YR3/2)粘質シルトがブロック状に混入。
4．灰色(5Y5/1)粘質シルトと緑灰色(5G5/1)シルトの混合土。
5・6．地山層の崩壊土。井戸廃絶後直ちに堆積した層。

**第７図　ＳＥ１断面図**




第8図　西ノ辻遺跡第6次調査遺構平面図

（2）出土遺物

6次調査で出土した遺物はコンテナに約1箱ぐらいである。その中でもＳＥ１の出土遺物がほとんどである。但し細片ばかりで図化できるものは限られてしまった。

ＳＥ　1（XXII２ｋ～ｌ、３ｈ～ｌ区－１層～４層）（第９図　図版三）

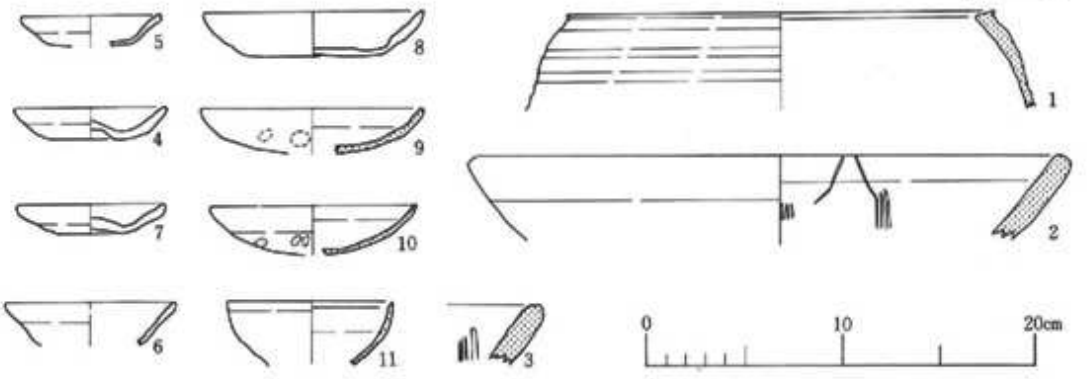
土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、瓦などの細片と焼土が各層から出土。１層からは銭貨が出土している。

〈１層〉　XXIIＦ２ｋ区から銭貨（12）が出土した。「開元通宝」（641年初年鋳造）、外径は2.45㎝、郭丸は0.7㎝、重量は2.8ｇである。瓦質羽釜（１）・摺鉢（２・３）、土師器皿（４）、須恵器鉢（13）、磁器（14）などがみられる。羽釜（１）は内傾する口縁部をもち、外面に凸線文を巡らす。菅原氏の分類・編年[注1]によれば「和泉Ｄ型」の14世紀頃のものにあたる。摺鉢（２）は口縁端部に面をもち、（３）は口縁端部を尖らせている。体部内面におろし目をもつ。毛利光氏の分類・編年[注2]によれば大和国の15世紀代のものに相当する。土師小皿（４）はいわゆる「ヘソ皿」といわれているもの。口径は7.4㎝、器高は1.5㎝。色調は淡橙褐色を呈す。

〈２層〉　土師小皿（５）は底部から体部がやや外湾して立ち上る。口径は11.2㎝、器高は2.3㎝、色調は、淡黄褐色を呈す。

〈３層・４層〉　３層からは土師皿（６）が出土。４層からは土師小皿（７）、中皿（８）、瓦器椀（９・10・11）が出土。小皿（７）は「ヘソ皿」である。中皿（８）は底部から一度立ち上がった後、外上方にひらく。口径は11.2㎝、器高2.4㎝、色調は淡乳灰色を呈す。瓦器椀（９・10）はいずれも浅い椀形で高台をもたない。（９）の口径は11.4㎝。器高は2.4㎝。（10）の口径は10.4㎝、器高は2.6㎝である。内面の暗文も施されないもので、尾上氏の分類・編年によれば和泉型の「Ⅳ－５期」に相当する。瓦器椀の終末期のもの。（11）は小型の大和型である。口径は8.5㎝、現存器高3.2㎝。

注１　毛利光用子、金原正明『布留遺跡、布留（西小路）地区　中世の遺構と出土瓦器』1976．９～1977．３調査　（『考古学調査研究中間報告』６　埋蔵文化財天理教調査団　1982年）
２　菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」（『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集　1982．12
３　尾上　実「南河内の瓦器椀」（『古文化論叢』藤沢一夫先生古稀記念論集）1983年




第９図　ＳＥ１内出土土器実測図、銭貨拓影図（1/1）

### 3）西ノ辻遺跡第７次発掘調査

各時期の遺構の説明を行う前に層位について若干触れておきたい。

層位は基本的に、上から盛土層、耕土層、床土層、地山層の順である。地区により部分的に地山層上面に中世期の遺物包含層（オリーブ黒色シルト）が堆積している箇所が見られたが、広範囲に分布するものではない。中世期以降の整地、削平工事が大規模に行われたものと考えられる。

（１）中世の遺構

建物１

今回の調査で、中世期に属する柱穴は、300箇所以上を検出しているが建物を復元できるものはほとんどない。建物１は、溝で周囲を区画された内部に90箇所以上の大小の柱穴が検出されているため、少なくともここに掘立柱建物が存在していたと考えた。建物１の範囲は、ＳＤ91とＳＤ74の南西コーナーで約２ｍの間を除いて他は、周囲を溝で区画されており、規模は東西約10ｍ、南北16ｍを測る。溝の各コーナーは、他の遺構と重複しているため、各々の溝が同時期に造られたものか、時期差があるものか明確に出来なかった。それぞれの溝の規模を記すと、ＳＤ91は、南から北へ向かう溝で幅60～70㎝、深さ20～30㎝を測る。ＳＤ74とＳＤ42は、ＳＤ91を越えてさらに西へ延びている。柱穴は、重複しながら多数認められ、同時期の柱穴を決定することは出来なかった。少なくとも３間×５間以上の建物であったと考えておきたい。

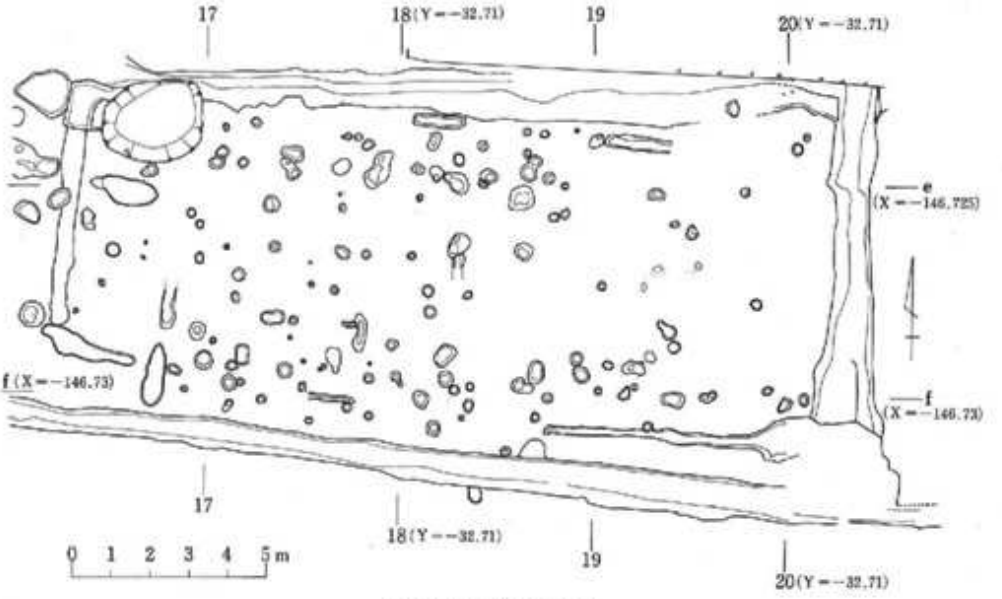
建物２

ＸＸＦ４ｇ区で検出。建物１の東方約20ｍの地点にあたる。ＳＰ302、304、305、310の４個の柱穴で構成される掘立柱建物である。ＳＰ302～304間3.28ｍ、同302～310間2.86ｍを測り、柱穴の規模は径25～40㎝の円形を呈し、深さは検出面から11.0～25.8㎝であった。以上のデータからすれば、検出し得た柱穴は４個にとどまるものの、２間×２間の建物の復元が想定できるように思われる。

出土遺物は僅少で、しかも全て弥生土器片のみを確認したにすぎない。そのため、建物の営築の時期については厳密には決定できない。しかるに、同一遺構面で検出したその他の柱穴内より、鎌倉時代（13世紀代）の土師器小皿や瓦器椀の破片が見つかっていることから、大概当該期を上らない時期に建てられたものと推測される。

ＳＫ35

ＳＫ35は、ＳＤ16とＳＤ74が東南で交差するコーナーにあり、両方の溝の埋没後につくられた。規模は、東側が道路の擁壁工事によって破壊されているため、全形はわからない。少なくとも径２ｍ以上で、深さ20～30㎝の皿状に凹む土坑であったと推測される。内部から瓦器椀、土師器小皿、常滑焼甕等が出土している。出土遺物から14世紀に属すると考えられる。中央部に10～15㎝大の礫とともに人骨が認められるところから、土壙墓の可能性が考えられる。



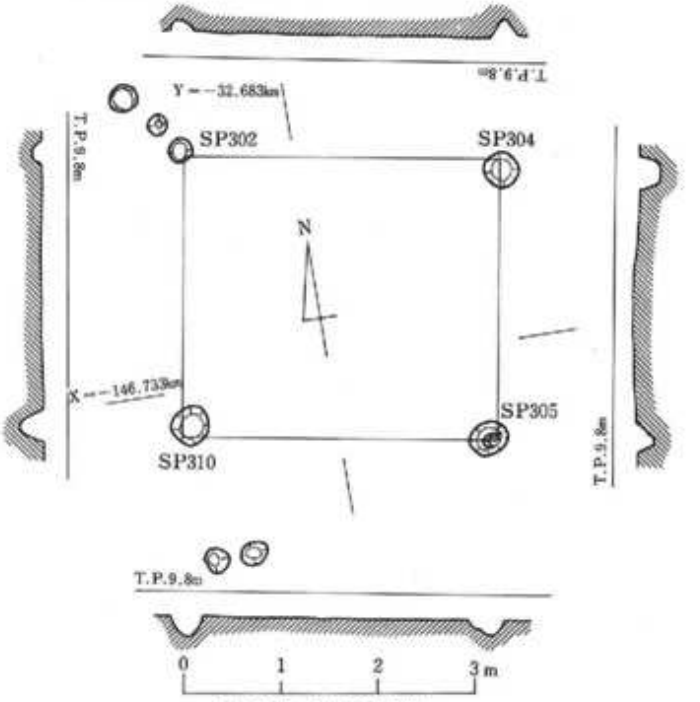

第10図　建物１実測図

ＳＫ36

15ｅ～15ｆ区で検出した。短径125㎝、長径160㎝の楕円形を呈し、深さ50㎝で床面は平坦になっている。内部からほとんど遺物は出土していない。

ＳＤ103～106

12ｅ・12ｆ～13ｅ・13ｆ区で検出した。２～３条の溝が重複して認められた。南側は、後世の攪乱によって破壊されているが、南から北へ向かう溝が12ｅ区中央で直角に東へ折れ曲がり、徐々に浅くなって終わっている。最大幅190㎝、深さ30～40㎝を測る。




第11図　建物２実測図

ＳＤ125

ＸＸＦ３ｆ～６ｆ区で検出。溝底部の比高差から東から西へ流れていたものと考えられる。幅0.7m～1.0m、深さ10㎝を測る。出土遺物としては、弥生土器片が目立つほか、鎌倉時代の土師器小皿、瓦器椀が出土。

（2）古墳時代の遺構

ＳＤ126（ＸＸ３ｆ区）

弥生時代の遺構検出作業の際確認。ＳＤ126は７号周溝墓の西溝と南溝のコーナーを切っていることから、周溝墓埋没後に掘られたものであることは、層位的に確認されていた。

規模は、幅1.15～1.4m、深さ30cmを測る。溝断面は皿状を呈する。溝の堆積状況は、オリーブ黒色シルトと黒褐色砂礫の互層で、水が絶えず流れていたことがわかる。溝の北側は、中世期のＳＤ125に切られていた。そのため、北流・南流のいずれか不明。溝最低部のレベルも北と南で差がない。

出土遺物は、ＳＤ126が周溝墓内を攪乱しているため、弥生土器片が比較的多い。その他、須恵器、土師器などの破片があるが、いずれも極小片で、図化しうるものではない。

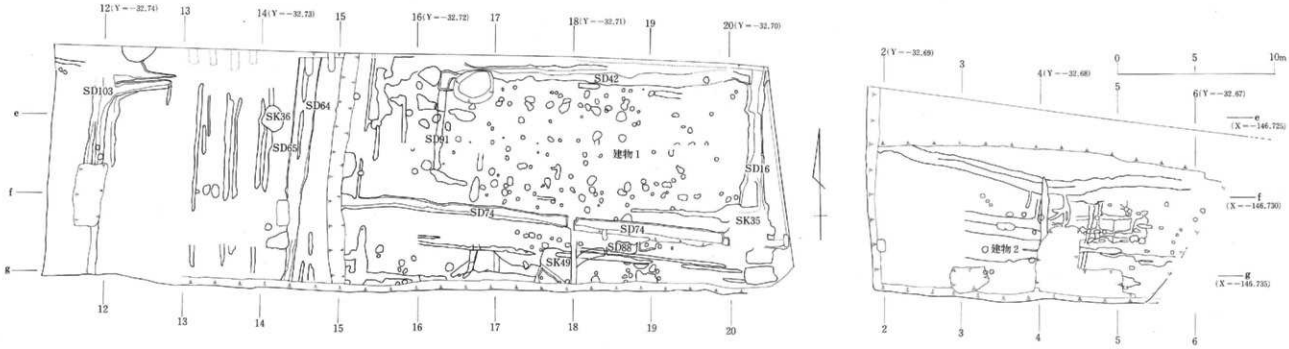
７次調査区で確認した古墳時代の遺構はＳＤ126のみである。今回、床土層直下で中世期と弥生時代の遺構が重複して認められることなどを考え合わせると、古墳時代の遺構は中世期以降の削平により失われた可能性が考えられる。

（3）弥生時代の遺構

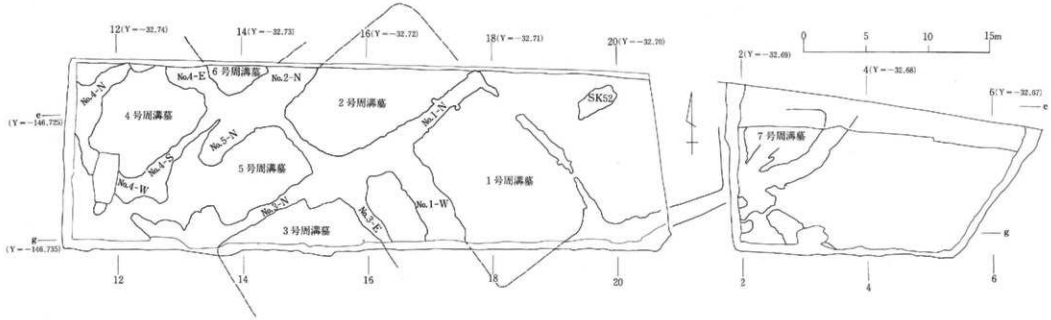
今回の調査地では、弥生時代以降各時期の遺構が重複して検出されている。特に中世以降かなり大規模な整地・削平が行われたと思われ、弥生時代の遺構は、方形に区画された溝と土坑を検出したが、すべて上部が削りとられた状態で検出した。４号周溝墓で小児用の甕棺を検出した他は、主体部は全く検出出来なかった。このため、厳密に言えば墓であると決定はできないが、ここでは溝によって方形に区画されたものを方形周溝墓と呼ぶことにし、検出した順に１号、２号、３号と名付けた。今回の調査地域では、計７基の方形周溝墓を確認したことになる。

１号方形周溝墓

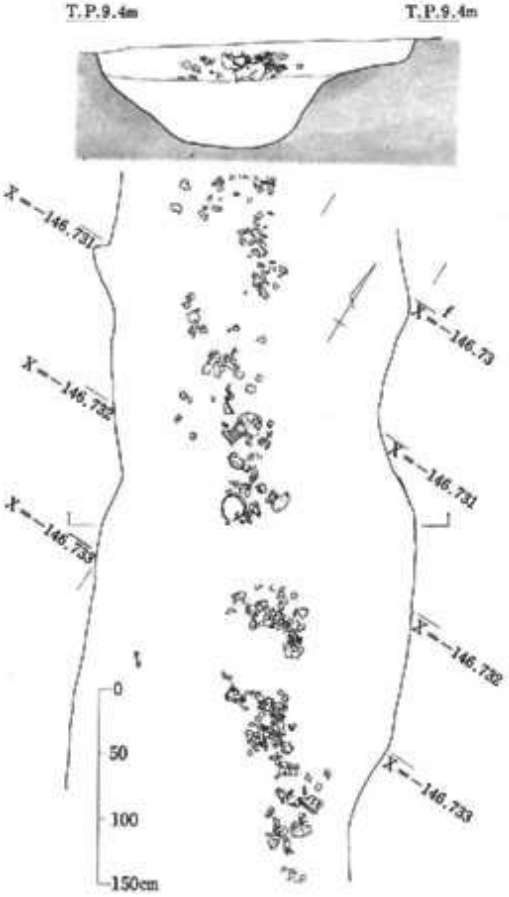
18ｆ・18ｇ～19ｆ・19ｇ区にまたがって検出した。溝中央から溝中央までの距離で、短辺10.1m、長辺15.5mを測り長方形状を呈す。西側の周溝（No.１—W）は幅2.5m、深さ0.5～0.6mを測るが、東側周溝（No.１—E）は幅0.6m～0.7m、深さ0.2mと極端に小さくなる。東側周溝の２箇所で溝が途切れるが、この部分が陸橋部になると思われる。No.１—Eの上層からは、弥生土器広口壺・細頸壺・甕・高杯などが一括出土した。下層でも少量の土器が出土している。西側周溝（No.１—W）では、幅2.5mの溝中央で大量の土器を検出した。中でも中央部付近では、胴部下半に穿孔のある壺（201）も出土している。17～18区の溝内土層断面を観察すると堆積層は３層に分けられる（第16図）。第１層は、暗灰黄色細粒砂と黄褐色細粒砂が混じり、細礫～中礫、炭化物を含む土層であり、埋土（客土）と考えられる。出土土器の大半が１層より出土している。第２層は、黒褐色細粒砂に褐色細粒砂が混じり、細～中礫、炭化物を少量含む土層である。埋土（客土）と考えられ、少量の弥生土器が出土している。第３層は、黒褐色シルト層に黄褐色粘土層（地山）がブロック状に混じっている。３層は、周溝が溝として機能していた時の堆積層であり、ブロック状に混じる地山の土は溝内の浚渫、ないし



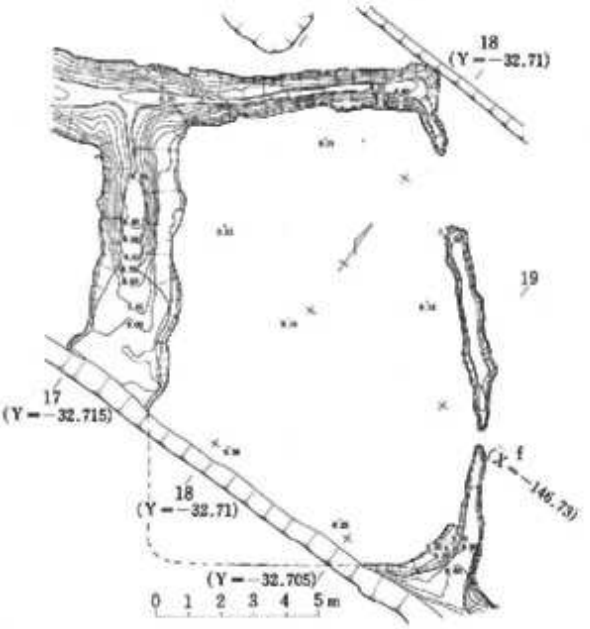

第12図　西ノ辻遺跡第７次調査中世遺構配置図



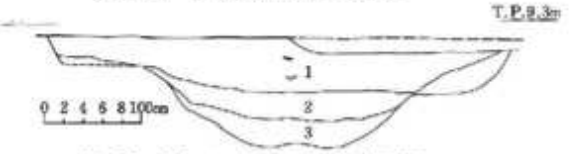

第13図　西ノ辻遺跡第７・８次調査方形周溝墓配置図




第15図　No.1—W内土器出土状況実測図




第14図　1号方形周溝墓実測図




第16図　No.1—W内周溝内土層図

巻き上げによるものと考えられる。3層中からは、遺物は出土しなかった。出土状態から考えると溝がほぼ埋没する時期に祭祀のため、土器を並べたように見える。北側の溝（No.1—N）は、第2号方形周溝墓と重複している。1号と2号との先後関係は確認出来なかった。

2号方形周溝墓

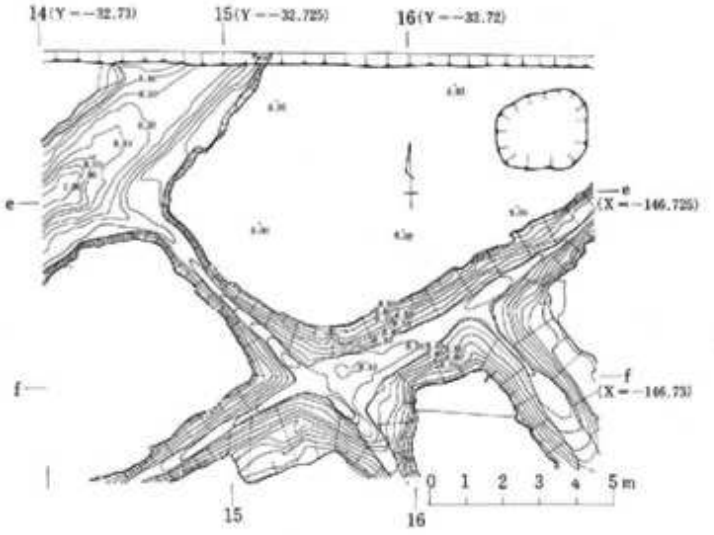
2号方形周溝墓は、北側コーナー付近が調査地外へ広がるため全形は不明であるが、推定復元で長辺13m、短辺8mの長方形状を呈していると思われる。周溝は、東側で1号周溝（No.1—N）と共有し、西で5号周溝と共有している。特に南コーナー付近では、2、3、5号周溝墓と接し、溝はそれぞれつながっているので、ここで溝内の堆積層を紹介しておきたい。

第19図は、コーナーの南北方向の堆積層である。

1層　灰色細砂に細礫が多く全体に広がる。弥生土器を含む。

2層　黄灰色細粒砂に細礫を多く含む。弥生土器を含む。

3層　黒褐色（10YR3/1.5）細粒砂～シルト、細～中礫を含む。弥生土器を多く含む。




第18図　2号方形周溝墓実測図

4層　黒褐色（10YR3/1.3）粘土、細礫少量混じる。北から南へ傾斜する。弥生土器少量含む。

5層　黒褐色（10YR2/1.7）細粒砂、細礫少量含む。地山の土がブロック状に混じる。遺物は含まない。南から北へ傾斜する。

6層　黒褐色（10YR3/1.4）細粒砂。地山の土がブロック状に混じる。

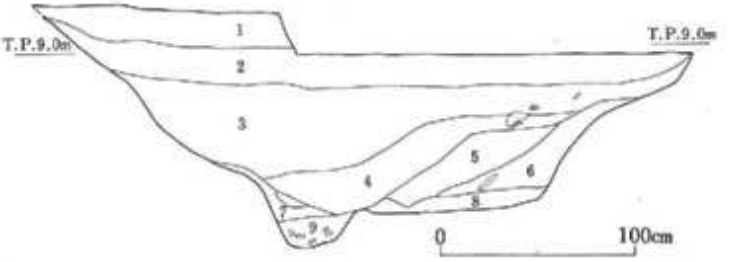
7層　黒褐色細粒砂（10YR3/2.2）。細礫少量含む。遺物は含まない。

8層　黒褐色（10YR2/1.5）細粒砂。地山の土がブロック状に混じる。遺物は含まない。

9層　黒褐色（10YR2/1.5）シルト。中粒砂少量含む。地山の土がブロック状に混じる。遺物は含まない。

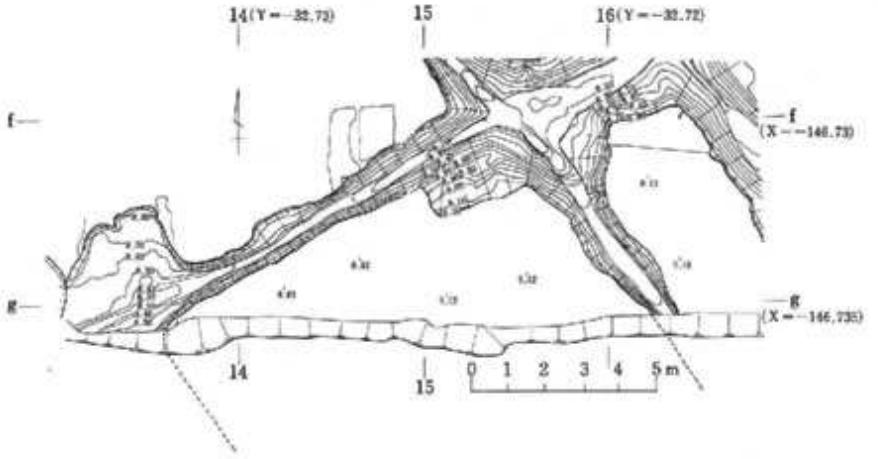
第17図　No.1—E内
土器出土状況実測図

1～3層は埋土であり、特に3層上面で遺物が大量に認められた。4～7層は、溝が機能していた時の周溝墓盛土からの流れ込みによる堆積土である。4～6層は、北から南への傾斜が




第19図　No.1～NO.3コーナー土層断面図

認められ、北側の2号方形周溝墓盛土からの流れ込みによるものと思われる。7層は、南から北への傾斜が認められ、3号方形周溝墓盛土からの流れ込みによる堆積である。7層の上に4層が覆うところから、3号周溝墓が造られたのち、2号周溝墓が造られたものと思われる。8～9層は、溝が機能していた時の堆積土である。



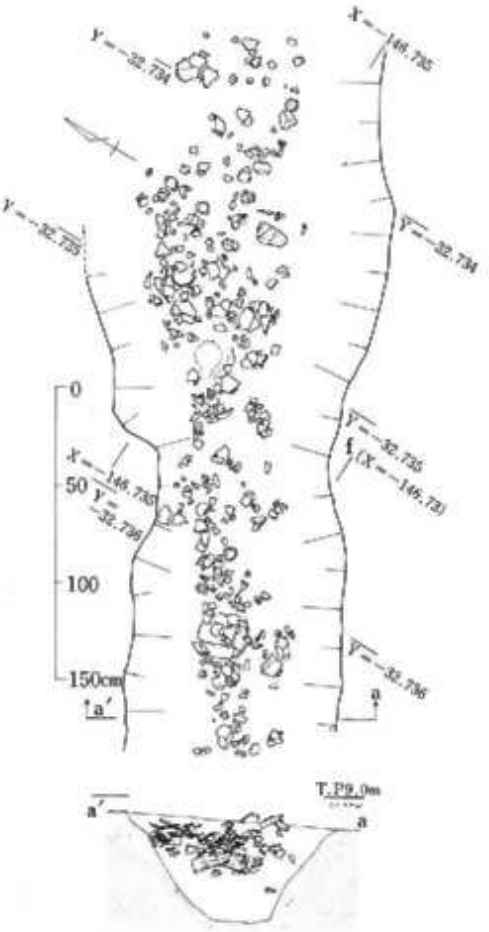

第20図　3号方形周溝墓実測図

3号方形周溝墓

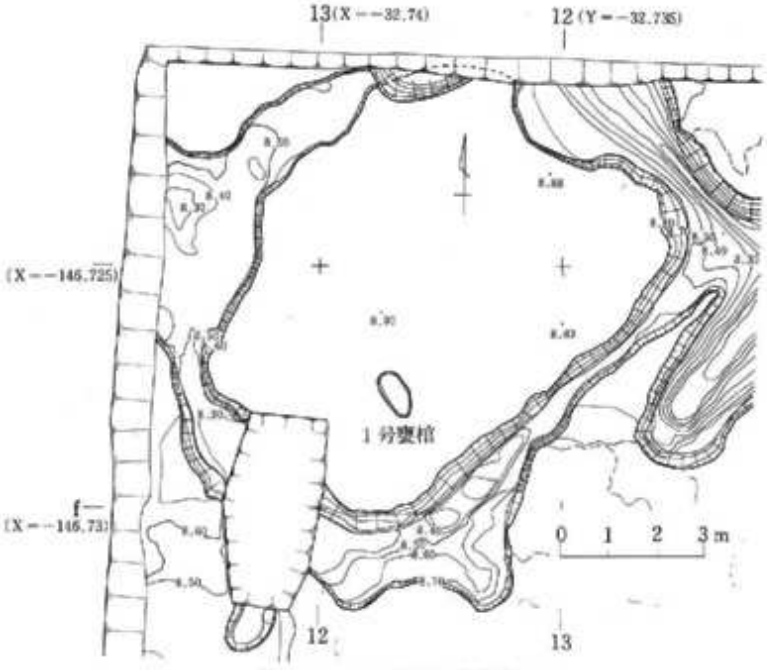
3号方形周溝墓は、北側のコーナーを検出しているが、南側の半分以上はトレンチ外へ広がっている。西側コーナー付近まで検出しているので、かろうじて一辺の長さが推測される。長辺12m、短辺7m以上の長方形状のプランが復元できる。北側で5号周溝墓と溝を共有している。北溝は、残存で幅1.1m～0.8m、深さ50～60cmを測る。溝内の堆積層は、大きく上層と下層に分けられるが、下層上面から上層にかけて、溝中央部分に帯状に並んだ状態で土器を検出した。壺、無頸壺、高杯の完形土器を中心にして出土している。

4号方形周溝墓

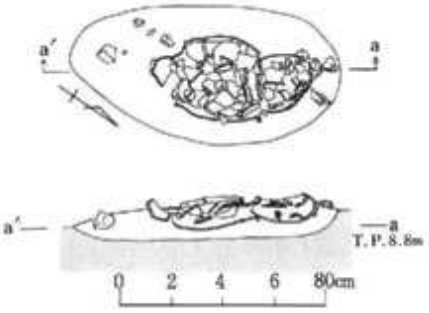
13e～13f区で検出した。一部中世の遺構で攪乱をうけているが、ほぼ全形のわかる資料である。短辺8.0m、長辺10.6m（溝中央から溝中央までの距離）を測り、長方形状を呈する。溝幅は、0.7～1.0m、深さ0.15m～0.8mを測る。南コーナー付近で、溝は南東方向へ斜めに突出する。突出した部分には細かく破壊された土器が出土している。マウンドの中心から少し南へ下がった位置に小児用甕棺1基を検出した。甕棺の墓壙は、長径1.05m、




第21図　NO.3—N内
土器出土状況実測図




第22図　4号方形周溝墓実測図

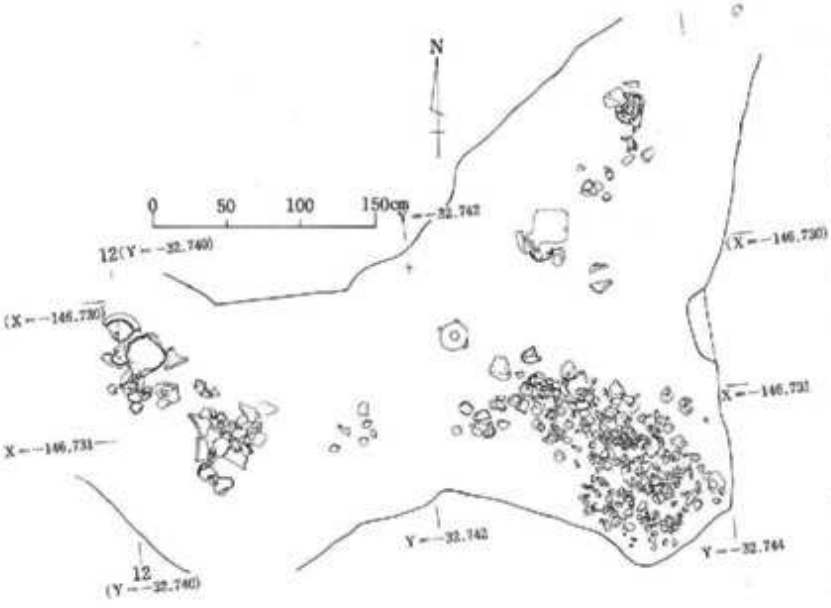



第23図　1号甕棺実測図

短径0.53mの長楕円状を呈し、残存の深さ0.1mを測る。大型の甕と中型の甕を合口にして、ほぼ水平に据えられていた。

5号方形周溝墓

14f～15f・14g～14f区にまたがって検出した。全形のわかる周溝墓である。長辺9.0m、短辺6.8mを測り、長方形状を呈するやや小規模な周溝墓である。周溝は、東で2号周溝墓と共有し、南で3号周溝墓と共有している。西側では、幅約3mにわたって途切れており、陸橋部を造りだしている。北では、溝を共有することなく、4号周溝と別に北側周溝を掘削している。No.5—N出土遺物は、一応5号方形周溝墓に伴うものと思われる。




第24図　4号方形周溝墓南西コーナー内土器出土状況実測図

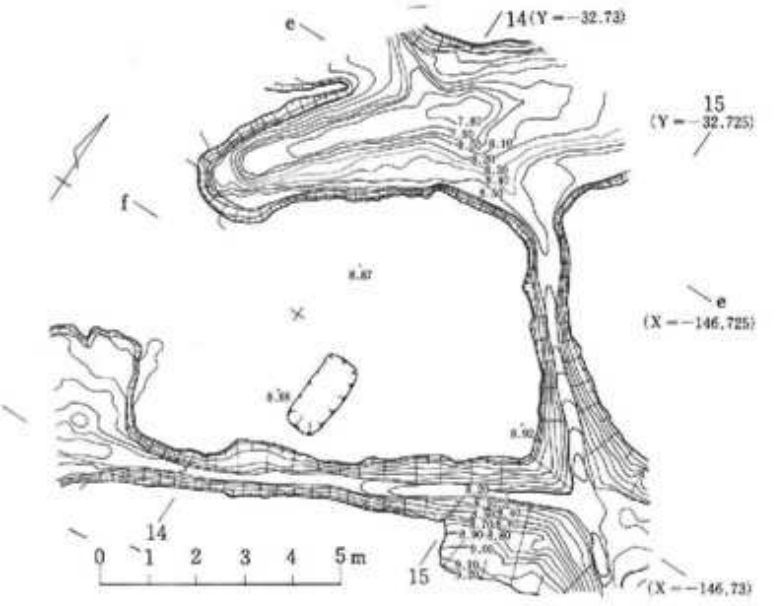
6号方形周溝墓

14e区で検出した。南側コーナーの一部のみを検出し、大部分は調査地外へ広がっている。現状で一辺3m以上の規模の周溝であると考えられる。

7号方形周溝墓

XXF3f・3g～4f区で検出した。北側が大きく攪乱されているため全体の形状は不明。不定な四辺形になるものと推定される。

溝中央と溝中央の距離で西側周溝（No.7—W）と東側周溝（No.7—S）の間隔は6.5mを測る。東側周溝と南側周溝（No.7—S）のコーナーは鈍角状で不明瞭であるが、大概3ラインで屈曲しているため、3ライン以東をNo.7—E、以西をNo.7—Sとして遺物の取り上げなどの作業を行っている。




第25図　5号方形周溝墓実測図

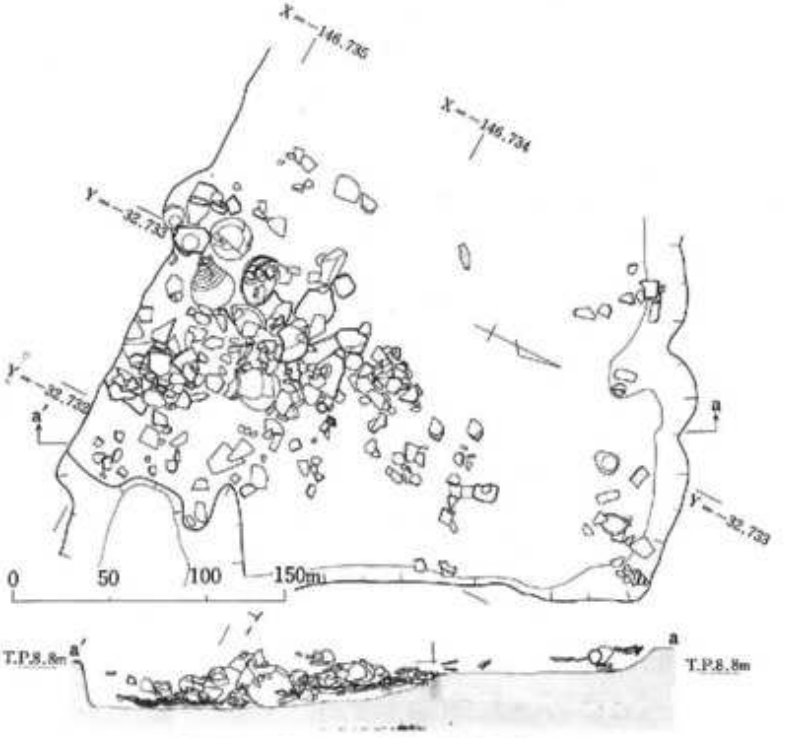
No.7—E、W、Sの各溝の上層（1層）では、古墳時代の溝SD126により攪乱された部分を除き、約5～10cm角に細かく破砕された弥生土器片が、一面に間断なく敷き詰まれた状況が認められた。これは、人為的に打ち砕いたのち、廃棄したものと考えられる。

No.7—E及びNo.7—Sは幅1.5～1.6m、深さ75cmを測るV字溝である。溝内の堆積層は大きく3層に区分できる（第29図　参照）。

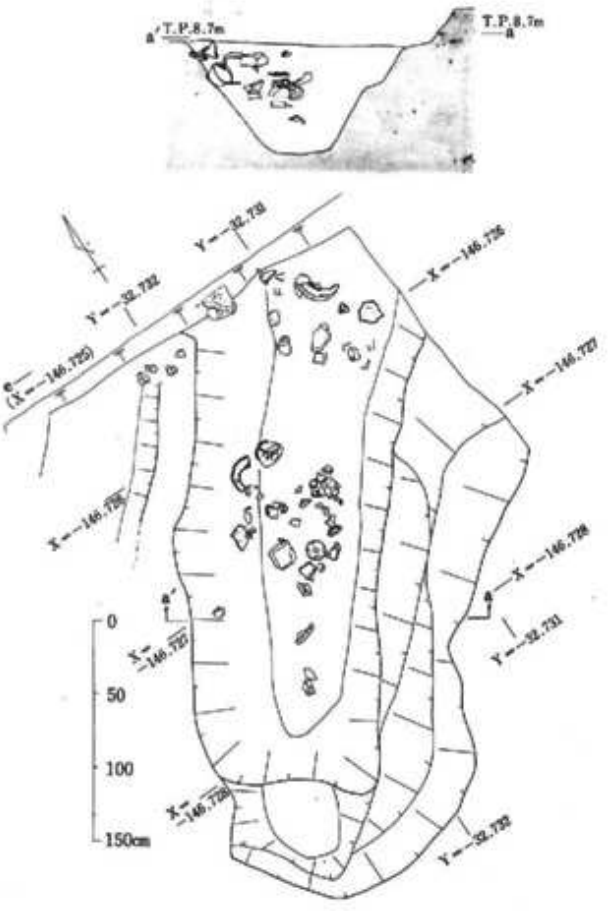
1層　黒褐色（10YR2.5/2）細礫混シルト。

2層　オリーブ黒色（7.5Y2.5/2）粘質シルト。

3層　灰色（5Y5/




第26図　NO.5—W内土器出土状況実測図




第27図　NO.5—N内土器出土状況実測図

1）シルトに地山層の褐色（7.5YR4/3.5）シルトがブロック状に混じる。

前述したように、1層の上～下面においては、土器が細かく破砕された状態で出土したのに対し、2層上面では、完形に近い土器がまとまって出土している。穿孔をうけた土器は1層内からの出土が顕著であった。胴部下半に穿孔のある壺（475）はその典型例と思われる。また、頸部のみ残存している壺（585～589）がNo.7—Sの2層内より出土している。No.7—Sの3層内からはほぼ直立した状態で大型の甕（432）が出土。甕の内部には何も遺存していなかった。

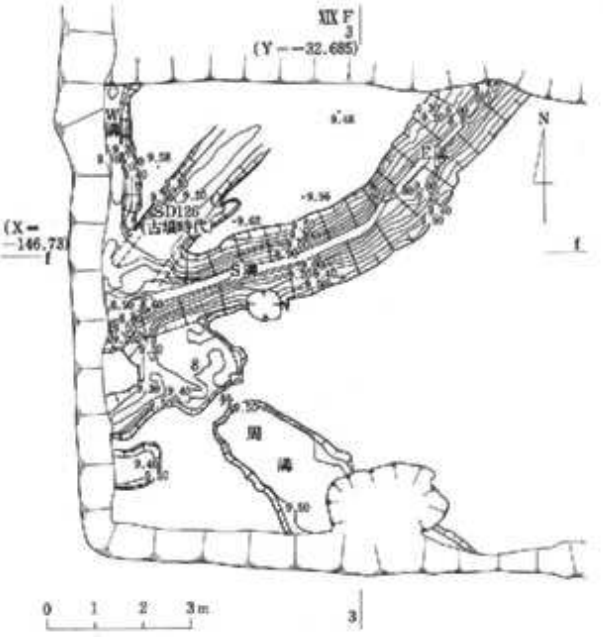
次に溝内畦断面の観察により下記の所見が得られた。

①南岸の3層下部でオリーブ黒色（5Y3/1）の粘質シルトが認められた。この層及び3層は溝機能時の堆積土と考えられる。3層下面でとくに地山層のブロック土が顕著に認められるところから、周溝墓盛土の流れ込みによる堆積と考えておきたい。②3層堆積後、即ち溝の堆積過程において、2層の堆積がある。2層中央部では、幅34cm、深さ32cm、のピット状の掘込みを確認している。この掘込み直上で、完形ないし完形に近い土器が出土しているので、この掘込みは溝内埋葬の墓壙の痕跡を示すものと思われる。③1層は人為的な埋土と考えられる。

なお、7号周溝のすぐ南側で、7号墓に連続した落ち込み状遺構を検出した。幅1.7～2.0m、深さ10cmの規模である。現場ではこれを周溝の一部と捉え、別個の周溝墓を想定したが、7号墓の周溝と比べ遺存状態が極めて悪いために、現状では8号周溝と仮称しておきたい。落ち込み上面には7号周溝墓と同様、破砕された土器片が覆っていた。従って、土器破砕祭祀に伴う土坑の可能性が考えられる。

8号周溝以外に、現地調査の所見では9～10号方形周溝墓を設定し、遺物の取り上げを行ったが、図面の検討から、それらは周溝墓として認定できないことが判明した。そこで遺物の記述にあたっては、それぞれ、9号周溝、10号周溝と呼ぶことをことわっておきたい。

第29図　NO.7—S周溝内土層図



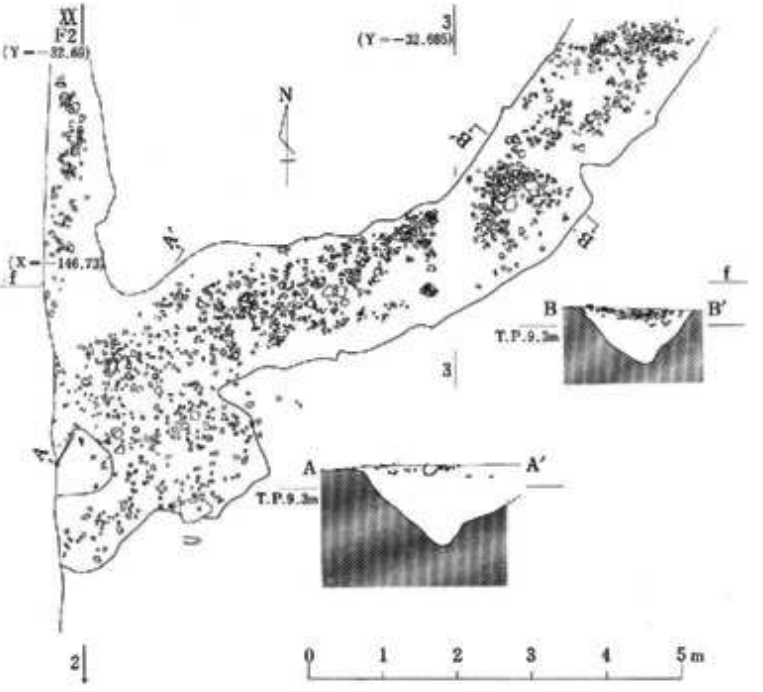

第28図　7号方形周溝墓実測図

## SK52

20e区で検出した。1号方形周溝墓から約3m西へ離れた位置にある。長辺3.6—3.1m、短辺1.6mを測り、西隅が少し突出するが、ほぼ長方形状を呈する土坑である。深さ10cm—30cmを測り、東側で一段深くなる。内部から多量の弥生土器が出土している。壺（776）は、東肩に正立した状態で検出ており、他の土器も土壙上面で検出した。出土土器は、壺を主体とし、少量の高杯・甕が出土している。壺の中でも流線文を施すものも含まれている。

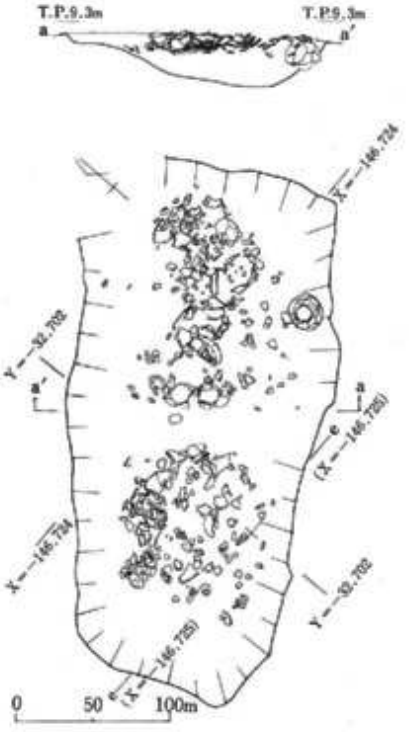
溝内埋葬について

方形周溝墓の溝内堆積土を掘下げるについて、溝内埋葬の可能性も考えられるため慎重に掘下げを行ったが、明らかな施設は検出できなかった。しかしながら、第32・33図を見るとその可能性も考えられる。第32図では、溝中央で幅50cm、深さ15cmで落ち込む部分が観察される。第33図では、同じく溝中央で幅1m、深さ




第30図　NO.7—S・E・W内土器出土状況実測図

0.55mで落ち込む部分がある。溝内の堆積土とは明らかに異なり、むしろ溝内堆積土を切り込んだ状況を示している。これらのことから、溝内掘削時では検出出来なかったけれども、溝内埋葬が行われた可能性は高いと思われる。




第31図　ＳＫ52内土器出土状況実測図

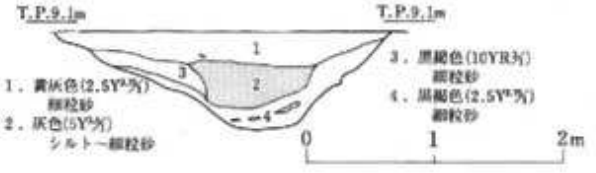
**小結―西ノ辻遺跡第７次調査の遺構総括**

これまで、第７次調査で検出した主要な遺構についてその概要を述べてきた。検出した全遺構のデータについては次の第１表に揚げているので参照されたい。ここでは、中世期と弥生時代の遺構に関して簡潔な総括を行っておきたい。

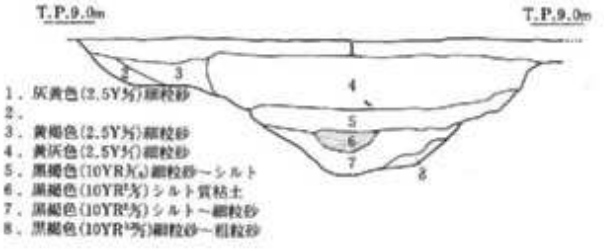
（１）中世期の遺構

第１表の遺構のうち、古墳時代の溝ＳＤ126と弥生時代の土坑ＳＫ52を除く外は、大概中世期に属するものと考えられる。（但し、出土遺物のない遺構など、所属時期が不明なものが若干存する。）

しかしながら、建物１の説明にあるように、柱穴は300個以上検出しているにもかかわらず建物跡を復元しうる資料は少ないと言わざるを得ない。これは、中世以降の水田耕作に伴う土木工事により、本来の遺構面が失われた結果と推測される。遺物の出土量の点からも、ＳＤ42以外は僅少で、図化に耐えない資料がほとんどである。従って、本調査区における中世期集落の様相は不明であり、今後の周辺地域の調査の進展が期待されるところである。




第32図　NO.１―Ｎ周溝内土層図




第33図　NO.２―Ｎ～NO.５―Ｎ周溝内土層図

（２）弥生時代の遺構について

先の各説で触れたように、今回検出した方形周溝墓は、全て中世期以降の開発工事のため、マウンドを欠失している。従って、築造時の規模は知り得ない状況となっている。そこで、各説で記した辺長はあくまで検出面での内法実長であることをこ

とわっておきたい。その意味では例えば4号周溝墓でNo.4－WとNo.4－Sの溝幅がかなり異なっており、周溝の形状がいびつである点など首肯されるところである。

次に、周溝墓の築造期の変遷の問題を取り上げてみたい。現場での調査では各周溝の切り合い関係については明確にすることができなかった。もちろん築造期の吟味・検討にあたっては、出土遺物の点を加味して総合的に判断しなければならないことは言うまでもない。各周溝内の出土遺物については本書37ページ以降を参照していただくことにし、ここでは、現場での所見を中心に考えていきたい。第19図の説明（16～17ページ）にもあるように、周溝コーナー部での土層観察の結果、2号周溝墓と3号周溝墓の先後関係を摑めた意義は大きいものがある。それらの結果から大概周溝墓は北東部から順次築造され南西部に至ったとする見通しをもつことができた。即ち、1号・2号周溝墓がまず築造され、それらの共有の周溝（No.1－N）を南西方向に拡張する形で3号・5号周溝墓が造られたと考えることができる。今回検出した周溝墓は周溝の共有部分と独立部分（No.3－E、No.5－Nなど）に分かれているのが特長となっている。独立部分の存在は周溝墓の先後関係を考える際、大きな手がかりとなる。以上の周溝墓の時期の変遷は、出土遺物の様式差とも矛盾しないことが明らかになっている。

**第1表　西ノ辻遺跡第7次調査遺構一覧表**

SE

| SE番号 | | 規模 長辺×短辺×深さ（m） | 出土遺物 |
|---|---|---|---|
| XXF　15f | 2 | 1.3×1.6×5.4 | |

SK

| SK番号 | | 規模 長辺×短辺×深さ（cm） | 出土遺物 |
|---|---|---|---|
| XXF　9h | 3 | 55　×48　× 6.0 | 師 |
| XXF　9g | 4 | 60　×49　×13.1 | 弥 |
| 〃 | 5 | 70　×65　×19.7 | 師、陶、木 |
| XXF　8g | 6 | 69　×39～× 9.5 | |
| 〃 | 7 | 59～×53　×49 | |
| XXF　8f | 8 | 66　×56　× 7.4 | |
| 〃 | 9 | 60　×49　× 6.5 | |
| XXF　7f | 10 | 55　×50　×10.2 | |
| XXF　9f | 11 | 41～×37　×23.3 | |
| XXF　8f | 12 | 59　×40～×12 | 師 |
| XXF　10g | 13 | 58　×46　× 3.6 | 師 |
| XXF　7g | 14 | 83　×74　×51.3 | 弥、師、瓦 |
| 〃 | 15 | 91　×87　×52.3 | 師、瓦、石 |
| XXF　9h | 16 | 86　×59～×23.9 | 弥、師 |
| XIX　19f | 17 | 64　×62　×18.8 | 弥、師、瓦 |
| XIX　19g | 18 | 70　×49　× 4.3 | |
| XIX19e～f | 19 | 48　×53　×19.7 | 師、瓦 |
| XIX　19f | 20 | 52　×88　×7 | 師、瓦 |
| XIX　18e | 21 | 60　×62　×31.4 | 師、瓦 |
| XIX　18f | 22 | 29　×98　×15.6 | 師、瓦 |
| XIX17e～f | 23 | 143　×66　× 1.4 | 師、瓦 |
| XIX　17e | 24 | 98　×125　×17.6 | 師、瓦 |
| XIX　17e | 25 | 136　×123　×14.3 | 師、瓦 |
| XIX　16e | 26 | 138　×143　× 5.4 | |
| XIX　17e | 27 | 68　×96　×33 | 師、瓦 |
| XIX　16f | 29 | 99　×152　×13.5 | 師、瓦 |
| XIX　15g | 30 | 141　×126　×36.4 | |
| XIX　14f | 31 | 44　×56　× 5.3 | |
| 〃 | 32 | 49　×80　× 9.0 | 師、瓦 |
| XXF　9h | 33 | 96　×30　×20.1 | 師、瓦 |
| XIX19～20g | 34 | 134　×69　× 7.3 | 師、瓦、磁 |
| XIX17～18g | 35 | 196　×157　×21.4 | 弥、須、師、瓦、磁<br>炭、骨滓、石 |
| XIX　17f | 39 | 52　×47　×17 | 師、須 |
| XIX　16e | 40 | 98　×69　× 2.6 | |
| XXF　7g | 41 | 81　×70　×13.7 | 師、瓦 |
| XIX　17f | 48 | 63　×65　×32.4 | 弥、師、瓦 |
| XXF　3f | 54 | 235～×94　×15.6 | 弥、師、瓦 |
| XXF　4g | 55 | 114　×50　× 8.8 | 弥、師、瓦 |
| XXF　3g | 57 | 69　×63　×41.0 | 師、瓦 |
| 〃 | 58 | 96～×81　×14.0 | 弥、炭、焼土 |

SD

| SD番号 | | 規模 幅×深さ（cm） | 出土遺物 |
|---|---|---|---|
| XXF7～8f | 2 | 88　～　× 5.4 | 師、瓦 |
| XXF7～9g | 3 | 40　× 8.5 | 須、師、石 |
| 〃 | 4 | 52　× 7.7 | 師、木 |
| 〃 | 5 | 45　× 8.5 | 師、陶磁 |

| SD番号 | | 規模 幅×深さ（cm） | 出土遺物 |
|---|---|---|---|
| XXF7～9g | 6 | 61 ×9.4 | 師、瓦、陶磁 |
| 〃 | 7 | 70 ×9.8 | 師、瓦、陶、鉄 |
| 〃 | 8 | 31 ×4.8 | 師、貝、焼土 |
| XXF9～11g | 10 | 44 ×4.6 | 弥、須、師 |
| 〃 | 11 | 46 ×4.6 | |
| 〃 | 12 | 41 ×8.7 | 須、師 |
| 〃 | 13 | 44 ×3.7 | 師、瓦 |
| XXF9～11h | 14 | 45 ×2.0 | 弥、須、師、石 |
| XXF1e～h | 16 | 115 ×10.3 | 弥、師、瓦、磁、Ⓚ<br>石、獣骨 |
| XIX16～20e<br>XXF 1e | 42 | 104 ×28.8 | 弥、須、師、瓦、Ⓚ<br>焼土、獣骨、石、釘 |
| XXF9～11h | 43 | 59 ×7.9 | 弥、須、師 |
| XXF9～10h | 44 | 41 ×9.0 | 須、師、瓦 |
| 〃 | 45 | 65 ×15.1 | 弥、須、師、瓦、石 |
| XIX 20e | 46 | 40 ×4.2 | 師、瓦 |
| XIX 20g | 47 | 31 ×9.5 | |
| XIX 20e | 48 | 33 ×1.8 | 師 |
| XIX 18g | 49 | 18 ×6.3 | |
| XIX 17f | 50 | 34 ×1.7 | 師、瓦 |
| XIX17f～g | 51 | 46 ×3.6 | 弥、瓦 |
| XIX 17f | 52 | 44 ×3 | 弥、師 |
| XIX16e～f | 53 | 26 ×2.8 | 師 |
| 〃 | 54 | 30 ×5.1 | 弥、師、瓦、磁 |
| 〃 | 55 | 20 ×3.7 | 師 |
| XIX19～20g | 56 | 20 ×4.7 | 弥、師、瓦、陶磁 |
| 〃 | 57 | 20 ×4.6 | 弥、師 |
| XIX 1～20h | 58 | 21 ×3.6 | 弥、師 |
| XIX17～19g | 59 | 37 ×3 | 師、瓦 |
| 〃 | 60 | 17 ×0.6 | 弥 |
| 〃 | 61 | 24 ×3.7 | |
| 〃 | 62 | 35 ×4.4 | |
| 〃 | 63 | 19 ×3.6 | |
| XIX15e～f | 64 | 64 ×7.1 | 師、瓦、Ⓚ、石 |
| 〃 | 65 | 49 ×4.4 | 弥、師、瓦、Ⓚ |
| XIX14～15f | 66 | 29 ×2.8 | 師、瓦 |
| XIX14e～f | 67 | 20 ×2.7 | 師、瓦 |
| 〃 | 68 | 42 ×3.2 | 師、瓦 |
| XIX14e～f | 69 | 8 ×1.1 | |
| XIX 14f | 70 | 20 ×1.9 | |
| XIX14e～f | 71 | 26 ×3.1 | |
| XIX 13e | 72 | 18 ×0.4 | |
| XIX 12e | 73 | 66 ×25.1 | |
| XIX16～19g | 74 | 82 ×8.2 | 弥、須、師、瓦、陶 |
| XIX16g～h | 75 | 74 ×8.7 | 須、師、瓦 |
| 〃 | 76 | 54 ×9.5 | |
| XIX16～17h | 77 | 44 ×10.2 | 弥、須、師、炭、 |
| XIX 17g | 78 | 35 ×7.5 | 師、瓦 |
| 〃 | 87 | 57 ×8.8 | 師、瓦 |
| XIX 19g | 88 | 86 ×26.1 | 弥、須、師、瓦 |

| SD番号 | | 規模 幅×深さ（cm） | 出土遺物 |
|---|---|---|---|
| XXF 19g | 89 | 20 ×18.2 | 師、瓦 |
| 〃 | 90 | 130 ×27.8 | 弥、須、師、瓦 |
| XXF17e～f | 91 | 43 ×12.1 | 須、師、瓦 |
| XXF 6g | 92 | 25 × | 弥、師 |
| XXF5g～f | 93 | ×16.8～ | 弥、須、師、瓦 |
| XXF5～6f | 94 | 11～66 ×15.6 | 弥、師、瓦 |
| XXF5～6g | 95 | 41 ×11.5 | 弥、師、瓦 |
| XXF4g～h | 96 | 76～179×9.7 | 弥、須、師、瓦 |
| XXF 4h | 97 | 21～95 ×4.6 | 弥、師 |
| XXF3～4g | 98 | 18～55 ×9.9 | 弥、師、瓦 |
| XXF 3g | 99 | 16～30 ×9.7 | 弥、師、瓦 |
| 〃 | 100 | 28 ×7.7 | 弥、須、師、瓦 |
| XXF2～3f | 101 | ×11.3～ | 弥、須、師、瓦 |
| XXF 13e | 104 | 52 ×8.8 | 師、瓦、Ⓚ、磁 |
| 〃 | 105 | 66 ×26.9 | 師、瓦、Ⓚ、磁 |
| XXF 12e | 106 | 26 ×7.4 | 師 |
| XXF 6g | 107 | 29 ×5.1 | |
| XXF5～6g | 108 | 25 ×4.8 | 弥、師、瓦 |
| XXF5～6g | 109 | 20 ×5.9 | 弥、石 |
| 〃 | 110 | 21 ×8.5 | 弥、師 |
| XXF 6g | 111 | 26 ×4.1 | 弥、須、師、瓦 |
| XXF 5g | 112 | 10～×9.4 | 弥 |
| 〃 | 113 | 17 ×10.5 | 弥、師、瓦 |
| 〃 | 114 | 28 ×6.8 | 弥、須、師、石 |
| 〃 | 115 | 17 ×6.8 | |
| 〃 | 116 | 15 ×1.3 | 弥、師、瓦 |
| 〃 | 117 | 15 ×3.0 | 弥 |
| 〃 | 118 | 24 ×3.2 | |
| 〃 | 119 | 11 ×2.3 | |
| XXF5f～g | 120 | 43 ×13.3 | 弥、師、瓦 |
| XXF 4g | 121 | 20 ×9.6 | 須、師、瓦、石 |
| 〃 | 122 | 60 ×13.7 | 弥、師、瓦、石 |
| 〃 | 123 | 156×6.6 | 弥、師、瓦、石、鉄 |
| XXF4f～g | 124 | 17 ×12.6 | |
| XXF3～6f | 125 | 66～104×26.8 | 弥、須、師、瓦、石 |
| XXF 3f | 126 | 115～140×30 | 弥、須、師、石 |

SP

| SP番号 | | 規模 長径×短径×深さ（cm） | 出土遺物 |
|---|---|---|---|
| XXF 10g | 15 | 17 ×17 × 3.0 | 師 |
| 〃 | 16 | 24 ×19 ×55.9 | 師 |
| 〃 | 17 | 25 ×23 ×14.9 | |
| 〃 | 18 | 15 ×12 ×14.0 | |
| 〃 | 19 | 24 ×21～×10.9 | |
| 〃 | 20 | 37 ×35 ×11.2 | 弥、師 |
| 〃 | 21 | 20 ×15 ×12.3 | |
| 〃 | 22 | 31 ×25 ×20.0 | 瓦、陶 |
| 〃 | 23 | 20 ×18 ×24.1 | 弥、師、石 |
| 〃 | 24 | 34 ×34 ×25.9 | 弥、師 |

| SP番号 | | 規模 長径×短径×深さ（cm） | 出土遺物 |
|---|---|---|---|
| XXF 10h | 25 | 26 ×25 ×25.8 | 弥 |
| 〃 | 26 | 19 ×16 ×14.8 | |
| XXF 9 g | 27 | 15 ×14 × 0.9 | 弥、師 |
| 〃 | 28 | 40 ×32 × | |
| 〃 | 29 | 18 ×15 × 5.2 | |
| XXF 9 h | 30 | 33 ×1.8 × 4.0 | 弥 |
| XXF 9 g | 31 | 44 ×36 × 6.4 | |
| 〃 | 32 | 18 ×16 × 6.4 | |
| 〃 | 33 | 16 ×15 ×30.8 | |
| 〃 | 34 | 31 ×26 ×22.1 | 弥 |
| 〃 | 35 | 29 ×19 ×11.8 | 石 |
| XXF 10g | 36 | 18 ×18 ×24.5 | 須 |
| XXF 9 g | 37 | 24 ×15 ×12.6 | 師 |
| XXF 10g | 38 | 16 ×13 ×14.1 | 弥、師 |
| XXF 10h | 39 | 16 ×14 ×10.0 | |
| XXF 9 h | 40 | 26 ×9 ×21.8 | |
| 〃 | 41 | 14 ×13 × 4.6 | |
| 〃 | 42 | 16 ×15 × 1.4 | |
| XXF 10g | 43 | 19 ×19 × 4.0 | 弥、師 |
| XXF 10h | 44 | 31 ×30 ×14.3 | |
| 〃 | 45 | 46 ×34 × 6.5 | |
| XXF 10g | 46 | 23 ×19 ×33.4 | |
| 〃 | 47 | 18 ×16 ×24.4 | |
| XXF 9 h | 48 | 30 ×21 × 0.8 | 師 |
| XXF 10h | 49 | 57～×42 × 6.4 | 弥 |
| 〃 | 50 | 17 ×17 ×11.7 | |
| XIX 20g | 51 | 32 ×31 × 1.3 | |
| XIX 20f | 52 | 24 ×23 × 5.2 | |
| 〃 | 53 | 43 ×25 ×19.4 | |
| XIX 20g | 54 | 60 ×38 ×17.4 | |
| XIX 20f | 55 | 37 ×37 ×18.7 | 須、瓦、石 |
| 〃 | 56 | 27 ×25 ×13 | |
| 〃 | 57 | 60 ×33 ×12.4 | 弥、須、師 |
| 〃 | 58 | 15 ×15 ×4 | 師 |
| XIX20f～ g | 59 | 30 ×28 ×10.9 | 師 |
| XIX 19f | 60 | 40 ×40 ×18.9 | 須、師、瓦 |
| 〃 | 61 | 33 ×33 ×12.7 | |
| 〃 | 62 | 40 ×57 ×25.2 | 師、瓦 |
| XIX19f～ g | 63 | 27 ×24 ×14.6 | 師、瓦 |
| XIX 19f | 64 | 38 ×40 ×18.6 | 師、瓦 |
| 〃 | 65 | 52 ×52 ×12.9 | 師、瓦 |
| 〃 | 66 | 25 ×25 ×10.4 | 師 |
| 〃 | 67 | 39 ×38 ×37 | 師 |
| XIX 19g | 68 | 34 ×36 ×16.9 | |
| XIX19g～ f | 69 | 40 ×44 ×24.4 | 師 |
| XIX18～19f | 70 | 24 ×25 ×12.8 | |
| XIX 18f | 71 | 24 ×24 ×27.5 | |
| XIX 18g | 72 | 25 ×23 ×15.5 | |
| XIX 18f | 73 | 13 ×13 × 0.3 | |
| 〃 | 74 | 37 ×39 ×29.3 | 師、瓦 |

| SP番号 | | 規模 長径×短径×深さ（cm） | 出土遺物 |
|---|---|---|---|
| XIX 18f | 75 | 29 ×24 ×13.6 | |
| XXF 11f | 76 | 14 ×14 × 2.5 | |
| XXF 10g | 77 | 52 ×40 ×12.9 | 弥、師 |
| XXF 9 h | 78 | 60 ×56 ×36.5 | 弥 |
| 〃 | 79 | 43 ×21～×12.4 | 弥 |
| 〃 | 80 | 34～×30 × 5.6 | 弥、師 |
| 〃 | 81 | 54 ×54 ×43.1 | 弥、師 |
| XXF 10g | 82 | 17 ×29 × 7.2 | 瓦、石 |
| XXF 1 e | 83 | 18 ×19 × 8.3 | |
| XXF 1 1 | 84 | 25 ×29 ×12.2 | 師 |
| XIX 20e | 85 | 32 ×42 ×10.9 | 弥、須、師 |
| XIX 20f | 86 | 24 ×25 ×10.4 | |
| XIX 20f | 87 | 20 ×23 ×11.6 | 師 |
| 〃 | 88 | 28 ×26 ×14 | 師 |
| XXF 1f～ g | 89 | 25 ×31 ×11.8 | |
| XIX 20f | 90 | 29 ×37 ×10.8 | 師、瓦 |
| 〃 | 91 | 35 ×22 ×20.9 | 師、瓦 |
| 〃 | 92 | 40 ×14 × 4.6 | |
| 〃 | 93 | 25 ×16 ×10 | |
| 〃 | 94 | 47 ×28 ×6 | 師 |
| XIX19～20e | 95 | 35 ×28 ×4 | 師 |
| XIX 20f | 96 | 31 ×40 ×19 | 師 |
| 〃 | 97 | 31 ×29 × 1.5 | 師 |
| 〃 | 98 | 21 ×22 × 1.7 | 師、瓦 |
| 〃 | 99 | 28 ×21 ×16.5 | 師 |
| 〃 | 100 | 18 ×19 × 7.5 | 師 |
| XIX 19e | 101 | 10 ×9 × 3.8 | |
| 〃 | 102 | 22 ×17 × 1.5 | |
| 〃 | 103 | 22 ×19 × 2.4 | 瓦 |
| 〃 | 104 | 20 ×22 × 1.6 | 師、瓦 |
| XIX19e～ f | 105 | 42 ×62 ×35.2 | |
| XIX 19f | 106 | 29 ×28 ×22.1 | |
| 〃 | 107 | 18 ×16 ×10.7 | 師 |
| 〃 | 108 | 23 ×25 ×17.9 | 瓦 |
| 〃 | 109 | 26 ×23 × 1.4 | |
| 〃 | 110 | 47 ×46 ×16.8 | 弥 |
| XIX 19g | 111 | 22 ×23 × 7.4 | 弥 |
| XIX 19e | 112 | 36 ×25 ×12.3 | 師 |
| 〃 | 113 | 45 ×38 × 4.3 | 師 |
| 〃 | 114 | 27 ×31 ×34.1 | 師、瓦 |
| 〃 | 115 | 29 ×44 × 1.8 | 瓦 |
| 〃 | 116 | 35 ×25 × 5.7 | |
| 〃 | 117 | 38 ×41 ×16.4 | |
| XIX 19f | 119 | 14 ×16 ×13.4 | |
| 〃 | 120 | 22 ×19 × 9.6 | |
| 〃 | 121 | 19 ×21 ×10.5 | |
| XIX 19g | 122 | 25 ×33 ×14.1 | |
| 〃 | 123 | 12 ×12 ×10.8 | |
| XIX 19f | 124 | 22 ×19 ×10.1 | |
| 〃 | 125 | 31 ×30 ×16.7 | 師、瓦 |

| SP番号 | | 規模 長径×短径×深さ（cm） | 出土遺物 |
|---|---|---|---|
| XIX 19f | 126 | 31 ×29 ×15 | 弥 |
| XIX 18f | 128 | 29 ×27 ×15.7 | |
| XIX18～19f | 129 | 16 ×15 × 6.4 | |
| XIX 18e | 130 | 47 ×30 × 0.2 | 弥、須、師、瓦 |
| 〃 | 131 | 32 ×27 ×10 | 師、石 |
| 〃 | 132 | 20 ×19 ×19 | 師、瓦 |
| 〃 | 133 | 26 ×19 ×12.1 | 弥 |
| XIX 18f | 134 | 8 × 7 × 5.1 | |
| XIX 18f | 135 | 17 ×23 ×23 | |
| 〃 | 136 | 20 ×21 ×25.6 | 須、師、瓦 |
| 〃 | 137 | 35 ×31 × | |
| 〃 | 138 | 7× 7 × 7.7 | |
| 〃 | 139 | 20 ×21 ×19 | |
| 〃 | 140 | 14 ×12 × 7.7 | |
| 〃 | 141 | 9 ×9 × 5.4 | |
| XIX 18g | 142 | 21 ×20 × 8.7 | 師 |
| XIX 18f | 143 | 9 ×10 ×11.8 | |
| 〃 | 144 | 17 ×24 ×32.6 | |
| XIX 18g | 145 | 18 ×16 ×17.5 | |
| XIX 18e | 147 | 56 ×40 ×30.4 | 師、瓦 |
| 〃 | 148 | 35 ×33 ×17.3 | |
| 〃 | 149 | 36 ×31 ×10.8 | |
| XIX 18f | 150 | 41 ×42 ×20.9 | |
| 〃 | 151 | 27 ×25 ×25.7 | 師 |
| 〃 | 152 | 21 ×21 ×26.6 | 瓦 |
| 〃 | 153 | 59 ×34 ×31.1 | 師、獣骨 |
| 〃 | 154 | 10 × 8 × 8.9 | |
| XIX 18g | 155 | 23 ×21 ×29.7 | |
| XIX 18e | 156 | 28 ×26 ×17.6 | 弥 |
| 〃 | 157 | 26 ×26 ×27.9 | 須、師 |
| 〃 | 158 | 15 ×21 ×10.4 | 師、瓦 |
| 〃 | 159 | 34 ×29 ×31 | 師、瓦 |
| 〃 | 160 | 40 ×32 ×12.2 | 師、瓦 |
| XIX 18f | 161 | 12 ×12 ×5 | |
| 〃 | 162 | 31 ×32 × | 師、瓦 |
| 〃 | 163 | 21 ×26 ×22.1 | 師、瓦 |
| 〃 | 164 | 32 ×51 ×17.4 | 弥 |
| 〃 | 165 | 38 ×40 ×33.1 | 須、師 |
| 〃 | 166 | 21 ×20 ×14.2 | 師 |
| XIX 18g | 167 | 19 ×27 ×28.1 | 師、瓦 |
| XIX 17e | 168 | 42 ×37 ×45.7 | 須、師、瓦 |
| XIX 17f | 169 | 42 ×44 ×25.9 | 師、瓦 |
| XIX 18f | 170 | 15 ×14 ×25 | |
| XIX17～18f | 171 | 45 ×46 ×42.9 | 須、師 |
| XIX 17f | 172 | 16 ×15 ×13 | 瓦 |
| 〃 | 173 | 32 ×22 × 9.8 | 弥、小石 |
| XIX 18f | 174 | 10 ×9 ×11.9 | |
| XIX 17f | 175 | 13 ×11 ×7 | |
| 〃 | 176 | 8 ×7 × 2.3 | |
| 〃 | 177 | 5 ×9 ×11.2 | |

| SP番号 | | 規模 長径×短径×深さ（cm） | 出土遺物 |
|---|---|---|---|
| XIX 17f | 178 | 9 ×7 × 4.8 | |
| 〃 | 179 | 15 ×18 × 6.9 | |
| XIX 18f | 180 | 37 ×34 ×28.1 | 弥、師、瓦 |
| 〃 | 181 | 39 ×48 ×14.1 | |
| XIX16e～ f | 182 | 42 ×40 × 7.0 | 瓦 |
| XIX 16f | 183 | 25 ×41 ×18.5 | |
| 〃 | 184 | 26 ×25 × 7.8 | |
| XIX 16e | 185 | 41 ×39 × 3.2 | |
| XIX 18f | 187 | 42 ×43 ×12 | |
| XIX 14g | 188 | 15 ×16 ×18.2 | 弥 |
| XIX 14f | 189 | 23 ×22 × 2.9 | |
| XIX 20g | 190 | 39 ×47 × 5.5 | 師、瓦 |
| 〃 | 191 | 22 ×35 ×12.9 | |
| XIX 20h | 192 | 22 ×21 × 1.2 | 須 |
| XIX 19g | 193 | 39 ×12 × 4.4 | 瓦 |
| 〃 | 194 | 24 ×21 ×17.6 | 弥、師、瓦 |
| XIX19g～ h | 195 | 26 ×27 ×18 | 師 |
| 〃 | 196 | 31 ×19 × 3.6 | 師、瓦 |
| XIX 19h | 197 | 25 ×14 × 0.2 | 師 |
| XIX 19g | 198 | 21 ×21 × 3.8 | |
| XIX 19h | 199 | 51 ×41 ×31.6 | |
| XIX 19g | 200 | 29 ×30 ×19.7 | 師、瓦 |
| XIX 18g | 201 | 34 ×30 × 2.9 | |
| XIX 18h | 202 | 26 ×25 ×15 | 師、瓦 |
| XIX 18g | 203 | 31 ×28 ×20.1 | 弥 |
| 〃 | 204 | 19 ×19 ×12.2 | 師 |
| 〃 | 205 | 39 ×40 ×22.6 | 師、瓦 |
| 〃 | 207 | 16 ×19 × 4.5 | |
| 〃 | 208 | 27 ×31 ×18.7 | |
| 〃 | 209 | 39 ×33 ×20.5 | 須、師 |
| 〃 | 210 | 20 ×22 × 8.1 | |
| 〃 | 211 | 33 ×24 ×21.7 | 師、瓦 |
| 〃 | 212 | 15 ×15 ×14.9 | |
| 〃 | 213 | 27 ×38 ×28.3 | 弥、瓦 |
| 〃 | 214 | 26 ×26 ×12 | |
| XXF 7 g | 215 | 24 ×11～× 8.5 | |
| 〃 | 216 | 42 ×22 × 7.1 | |
| XXF 7 f | 217 | 65～×30～×0.6～ | |
| XIX 18f | 218 | 26 ×22 ×14.2 | 師、瓦 |
| XIX 18g | 219 | 14 ×12 × 7.6 | 弥 |
| XIX17g～ h | 220 | 16 ×15 × 9.5 | 師 |
| XIX 17g | 221 | 51 ×52 ×13.8 | 弥、師、瓦 |
| XIX 16g | 222 | 30 ×31 ×10.5 | 師、瓦 |
| 〃 | 223 | 23 ×29 ×7 | 弥 |
| 〃 | 224 | 37 ×37 ×13.7 | |
| 〃 | 225 | 19 ×19 ×20.2 | 弥、須 |
| 〃 | 226 | 48 ×42 × | 弥、須、師、瓦 |
| 〃 | 227 | 21 ×18 × 8.2 | |
| XIX 16h | 228 | 34 ×29 × 1.9 | 師 |
| 〃 | 229 | 26 ×17 ×31.2 | 師 |

| SP番号 | | 規模 長径×短径×深さ（cm） | 出土遺物 |
|---|---|---|---|
| XIX 16f | 241 | 38 ×27 ×15.4 | 師、瓦 |
| 〃 | 242 | 20 ×19 ×30.2 | 師 |
| XIX 17f | 244 | 62 ×51 ×25.5 | 師、瓦 |
| 〃 | 246 | 29 ×52 ×16.6 | 師、瓦 |
| 〃 | 247 | 21 ×24 ×11.8 | 弥、瓦 |
| 〃 | 248 | 18 ×21 ×11.6 | 弥、師、瓦 |
| 〃 | 249 | 20 ×26 ×12 | 師、瓦 |
| XIX 18g | 251 | 17 ×15 × 7.7 | |
| XIX 20g | 252 | 22 ×25 × 9.4 | 師 |
| 〃 | 253 | 14 ×18 × 8.6 | 師 |
| XIX 17f | 254 | 12 ×11 ×10.1 | |
| 〃 | 255 | 8 × 8 × 7.9 | |
| 〃 | 256 | 13 ×12 × 9 | |
| XIX 19g | 257 | 34 ×65 × 9.9 | 師、瓦 |
| XIX 18h | 258 | 18 ×21 × 8.4 | |
| XIX 17f | 259 | 34 ×34 ×22.8 | 師、瓦 |
| XIX 7 g | 265 | 28 ×31 ×13.1 | 弥、師 |
| XIX 6 g | 266 | 25 ×24 ×10.7 | 弥、師、瓦 |
| 〃 | 267 | 13 ×15 × 5.3 | |
| 〃 | 268 | 16 ×16 × 5.9 | |
| 〃 | 269 | 20 ×18 × 6.3 | 瓦 |
| 〃 | 270 | 26 ×21 × 5.0 | 弥、師 |
| 〃 | 271 | 18 ×36 ×10.9 | 師 |
| 〃 | 272 | 32 ×26 × 9.1 | 弥 |
| 〃 | 273 | 33 ×19 ×11.4 | 師、瓦 |
| 〃 | 274 | 41 ×38 ×10.9 | 師、瓦 |
| 〃 | 275 | 54 ×40 ×14.4 | 弥、師 |
| XXF 6 h | 276 | 16 ×29 × 6.0 | |
| XXF 6 g | 277 | 43 ×26 × 6.5 | 須、師 |
| 〃 | 278 | 25 ×19 × 6.0 | |
| 〃 | 279 | 29 ×29 × 6.3 | 弥、師、瓦 |
| XXF 5 g | 280 | 21 ×14 × 9.0 | 師、瓦 |
| 〃 | 281 | 28 × ×11.6 | |

| SP番号 | | 規模 長径×短径×深さ（cm） | 出土遺物 |
|---|---|---|---|
| 〃 | 282 | 28 ×26 ×14.3 | 弥、師 |
| 〃 | 283 | 28 ×24 ×10.1 | |
| 〃 | 284 | 39 ×19 × 9.0 | 師、瓦 |
| 〃 | 285 | 36 ×26 ×15.3 | 弥、瓦 |
| 〃 | 286 | 30 ×26 × 9.0 | 師 |
| XXF 12e | 288 | 21 ×26 ×15.2 | |
| 〃 | 289 | 25 ×23 × 6.3 | |
| XXF 12f | 292 | 25 ×30 ×15.6 | |
| 〃 | 293 | 35 ×37 ×15.1 | |
| XXF 6 g | 294 | 33 ×25 ×13.0 | 師、瓦 |
| XXF 4 g | 295 | 26 ×26 ×26.5 | 弥、輝 |
| XXF 6 g | 296 | 26 ×13 × | |
| XXF 5 g | 297 | 54～×24 × 5.9 | |
| 〃 | 298 | 20 ×12～× 8.8 | |
| XXF 4 g | 299 | 26 ×25 × 7.4 | 師 |
| 〃 | 300 | 28 ×28 × 8.7 | 師、瓦 |
| 〃 | 301 | 46 ×28 × 9.0 | 師、瓦 |
| 〃 | 302 | 25 ×25 ×11.0 | |
| XXF 3 g | 303 | 19 ×19 ×16.0 | 弥、師、瓦 |
| XXF 5 g | 304 | 36 ×36 ×22.7 | 弥 |
| XXF 4 g | 305 | 37 ×35 ×17.5 | 弥、石 |
| 〃 | 309 | 27 ×24 ×12.4 | 弥 |
| 〃 | 310 | 41 ×39 ×25.8 | 弥、炭 |
| 〃 | 311 | 21 ×21 × 7.3 | |
| XXF 4 f | 312 | 29 ×29 ×15.8 | 弥 |
| 〃 | 313 | 11 ×11 ×30.0 | |
| 〃 | 314 | 52 ×47 ×18.0 | 師、瓦 |
| XIX 19e | 316 | 17 ×17 ×25.7 | 須、師 |
| XIX 18e | 317 | 46 ×40 ×27.6 | 師、瓦、礎 |
| XIX 18f | 318 | 36 ×50 ×22.3 | 師、瓦 |
| 〃 | 319 | 14 ×11 ×6 | 須、師、瓦 |
| XIX 16e | 320 | 51 ×50 ×24.4 | 師、瓦 |
| 〃 | 321 | 28 ×28 ×13.4 | 師、瓦 |

（4）出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・瓦・土製品・石器・鉄製品・銭貨・動物遺体・炭化物など縄文時代から中世に至る。

遺物は弥生時代・古墳時代・中世の遺構に伴うものと、包含層から出土したものである。縄文時代の遺物は遺構が確認されないものの、他の時代の遺構や包含層にみられたものである。大半の遺物は弥生時代中期の方形周溝墓・周溝などから出土しており、記述も弥生時代が中心になる。

中世遺構出土遺物

土器・陶磁器

中世の遺構は井戸（ＳＥ１～３）、土坑（ＳＫ１～58）、溝（ＳＤ１～126）、柱穴（ＳＰ１～321）を検出している。これらの遺構の規模・出土遺物などは別表１に掲げた。出土遺物は少なくまた細片であるため図化できないものが多い。図化できた遺物について簡単に記述する。出土遺物に関しては『神並遺跡１』1986年[注1]、菅原正明氏の「畿内における土釜の製作と流通」「畿内における中世土器の生産と流通[注2]」などの論文を参考にして整理を試みた。

〈１〉ＳＥ３（XIXF13g区）（第35図、図版二六）

土師器・瓦器・瓦などが出土している。ほとんど細片であるが瓦質の羽釜（20～22）がみられる。(20)は口縁部上端に面をもち、(21)は口縁部上端が内傾する。(22)は口縁端部を丸くおさめる。菅原氏の分類・編年によると「河内Ｊ型」あるいは「和泉Ｄ型」になり、16世紀前後のものになる。

〈２〉ＳＫ14（ＸＸＦ７ｇ区）（第35図）

弥生土器・土師器・瓦器の細片が出土。土師小皿(26)は口径7.6㎝　器高1.3㎝で神並遺跡の土師器小皿の「ｂ」タイプにあたる。

〈３〉ＳＫ29（ＸＸＦ16ｆ区）（第35図）

土師器・瓦器などの細片が出土。瓦器椀(4)は浅い椀形。丸底で高台をもたない和泉型である。内面の暗文がほとんどみられない。口径11.8㎝、器高2.3㎝である。尾上氏の分類・編年[注3]によれば「Ⅳ―３」期に相当する。神並遺跡の「$B_a$型式」よりやや新しくなる。

〈４〉ＳＫ34（ＸＸＦ19～20ｇ区）（第35図、図版二六）

土師器・瓦器・陶磁器の細片が出土。瓦器椀(3)は高台の機能を失う時期のものである。内面に３条の平行線の暗文を施す。口径は12.9㎝、器高3.3㎝である。尾上氏の分類・編年によれば「Ⅳ―２期」に相当する。

〈５〉ＳＫ35（XIXF17ｇ～18ｇ区）（第35図、図版二六）

弥生土器・須恵器・土師器・瓦器・磁器・陶器などの細片と石器・炭などが出土している。瓦器椀は大和型（17・18）と和泉型（５～７）がみられる。大和型（17・18）は高台が断面三角形を呈し、内面にほぼ密なミガキ、見込みには連結輪状文の暗文を施す。神並遺跡の「$A_a$

型式」で13世紀中頃以降のもの。和泉型（５～７）は浅い椀形。高台をもたない。(5)は口径11.6cm、器高2.3cm。(6)は内面のミガキが認められない。口径10.8cm、器高2.6cm。(7)は口径9.9cm、器高1.9cmとかなり小形化したもの。尾上氏の分類・編年によれば(5)は「Ⅳ—３期」、(6)は「Ⅳ—４期」、(7)は「Ⅳ—５期」の時期に相当する。土師器小皿(27)は神並遺跡の「ｂ」タイプで、口径8.3cm、器高1.2cm。常滑焼甕(25)は口縁部が上下にのびる。口縁下端部は頸部との間にすきまがみられる。赤羽氏分類・編年[n.4]の「Ⅳ—Ⅰ期」のものと考えられる。磁器には白磁碗、青磁碗の小片がみられる。横田・森田氏の分類・編年[n.5]によると白磁碗（1012）は「Ⅲ類」の11世紀代、青磁碗（1013）は龍泉窯系の「Ⅰ—５—ａ類」の13世紀末頃のものになる。

〈６〉ＳＫ37（ＸＸＦ１ｇ～３ｆ区）（第35図、図版二六）

弥生土器・須恵器・土師器・瓦器・陶磁器などの細片と瓦・石器・杭などが出土している。

瓦器椀は大和型（15・16）、和泉型（９～12）がある。大和型（15・16）は体部内面にやや粗いヘラミガキを施す。(15)は口径が14.7cm (16)は口径が13.8cm、器高4.85cm。神並遺跡の「３」タイプに近い。13世紀後半以降になる。和泉型(10)は見込みに平行線の暗文、体部内面に幅の広いミガキ調整がみられる。口径は13.2cm、器高は4.35cm。和泉型(12)は見込みにジグザグ線風の暗文、体部内面にはやや幅の広いミガキ調整を行う。口径は14.6cm、器高は4.1cm。和泉型(9)は(10)に似る。口径は14.3cmのもの。和泉型(11)は浅い椀形になり、体部内面のミガキ調整は上部では切れ切れになる。口径は14.8cm、器高は3.5cm。土師質羽釜(23)は口縁端部が玉縁状になるもので肩部に鍔を水平につける。菅原氏の分類・編年によれば「河内Ｂ型」で14世紀代のものに相当する。

〈７〉ＳＫ56（ＸＸＦ６ｇ区）（第35図）

弥生土器・須恵器・土師器・瓦器などの細片と石器が出土。

土師質羽釜(24)は「く」の字形に外反する口縁部に端部を内側に折り返すもの。菅原氏の分類・編年によれば「大和Ｂ型」の14世紀代の時期に相当する。

〈８〉ＳＫ５７（ＸＸＦ３ｇ区）（第35図）

土師器・瓦器などの細片が出土。

瓦器椀(13)は内外面共磨滅しているが大和型で、(14)は同一個体と考えられる。外向きの断面三角形の高台をもつ。器壁は厚い。口径は15.3cm、底径5.8cm。

〈９〉ＳＰ67（XIXF19ｆ区）（第35図）

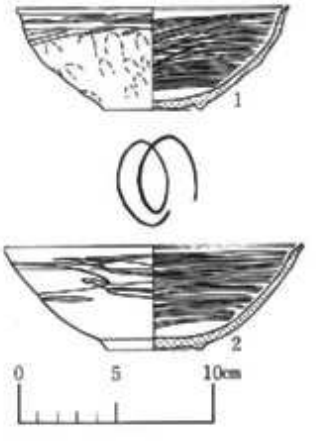
土師皿(31)がある。神並遺跡の「ｂ」タイプになる。

〈10〉ＳＰ159（XIXF18ｅ区）（第35図）

土師器・瓦器などの細片が出土。土師器の深手の小皿(34)がある。器壁が厚い。口径7.3cm。色調は淡橙褐色。

〈11〉ＳＰ218（XIXF18ｆ区）（第34・35図）

土師器・瓦器などの細片が出土。土師器皿(32)は底部が上げ




第34図　ＳＰ218・319内出土土器実測図

底風であるが、神並遺跡の「b」タイプになる。口径は8.9cm　器高は1.2cm、色調は淡橙褐色を呈す。瓦器椀(1)は丸味をもった椀形の体部に口縁部が少し外湾して立つ。神並遺跡の「$A_2$型式」になる。高台は丸底の先端面とほぼ同じ位に地につく。見込みの暗文は同心円文状である。口径13.8cm、器高5.2cm。13世紀後半のものである。

〈12〉SP241（XIXF16f区）（第35図）

土師器・瓦器などの細片が出土。瓦器椀(8)は和泉型で高台をもたない。丸底の器壁が厚いもの。口径は10.8cm、器高は2.9cm。内面には粗いミガキ調整がみられる。丁寧な作り。尾上氏の分類・編年の「Ⅳ―4期」に相当する。

〈13〉SP319（XIXF18F区）（第34・35図）

土師器・瓦器・須恵器の細片が出土。瓦器椀の底部(19)は高台のしっかりした大和型である。底径は4.8cm、瓦器椀(2)は底部からそのまま外上方にひらく体部をもつ。神並遺跡の「$A_2$型式」になる。見込みの暗文は同心円文である。口径14.2cm、器高は5.4cm。他に白磁碗で森田・横田氏の分類・編年の「Ⅴ類」になる破片がみられる。

〈14〉SD16（XXF1e～h区）（第35図、図版二七）

弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・磁器・瓦などの細片と石器・動物遺体が出土している。

土師器小皿(33)は「b」タイプのもの。口径9.1cm、器高1.2cm。色調は淡橙褐色を呈する。他に森田・横田氏の分類・編年の白磁碗「Ⅳ類」(1014)が出土している。須恵器蓋(36)は宝珠つまみ部の頂部を欠くがほぼ完形品である。6世紀後半のもので混入物。

〈15〉SD37（XIXF17f区）（第35図、図版二七）

須恵器・土師器・瓦器・石器などが出土。

土師器皿(35・36)は平底から口縁部が外上方に高く内湾気味に立ち上るもの（14世紀前後）。

〈16〉SD42（XIXF16g、17e～20e区）（第36図、図版二八）

弥生土器・須恵器・土師器・瓦器・磁器・焼土・動物遺体・石器などが出土している。

土師器皿は『神並遺跡Ⅰ』で分類したものより更に新しい時期のものがあり、次のように分類できる。

$皿_1$平底及び丸底から口縁部が短かく立ち上がる。（『神並遺跡Ⅰ』の「$b_1$～$b_4$」に相当する。）

$皿_2$平底から口縁部がなだらかに外上方に立ち上がる。$皿_1$より丈高になる。（同書の「$C_1$」）

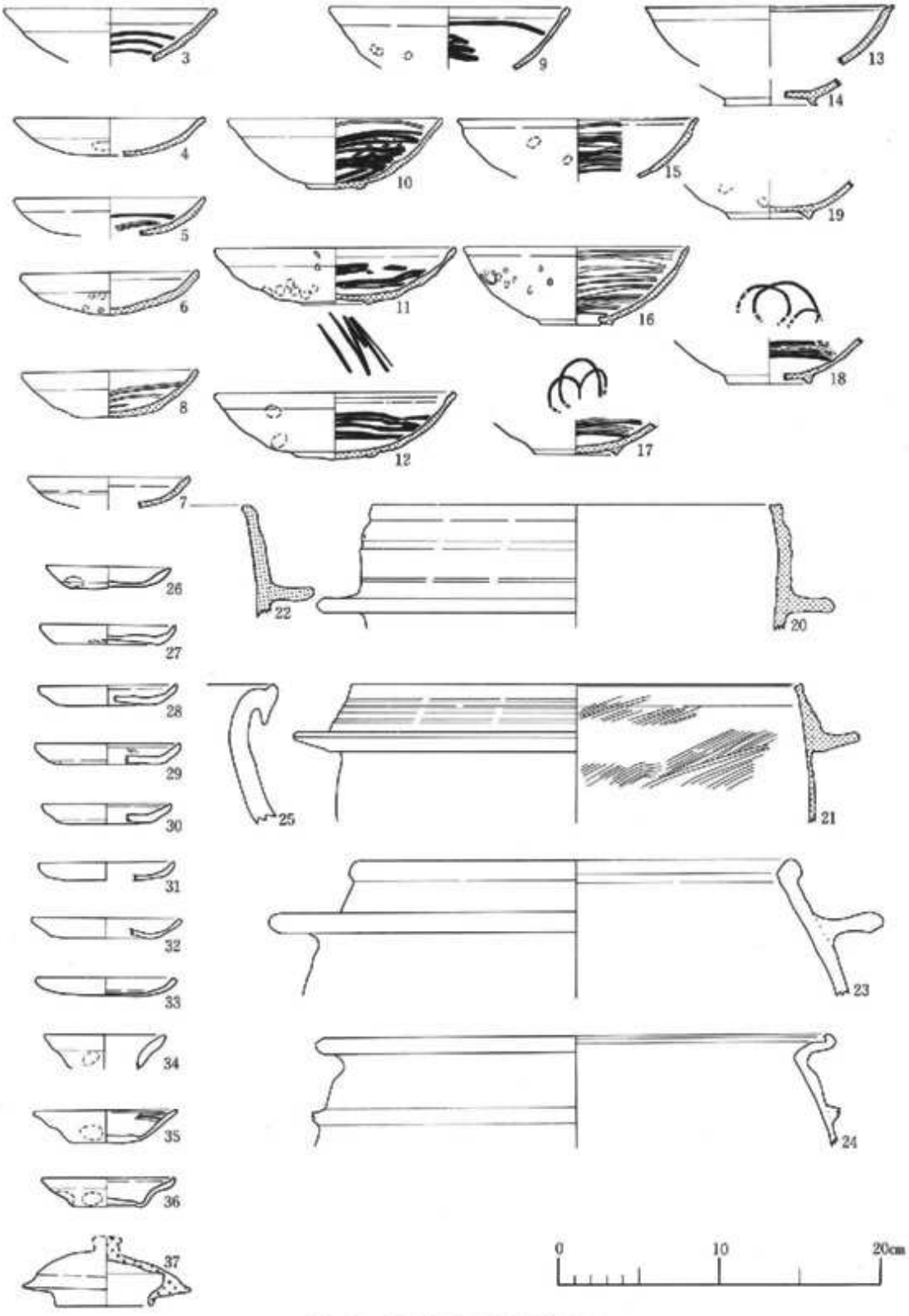
$皿_3$底部の中央が盛りあがるあげ底から口縁部が外上方に高く立ち上がる「ヘソ皿」。

$皿_4$厚い平底から体部が屈曲し、そのまま口縁部がひらく。

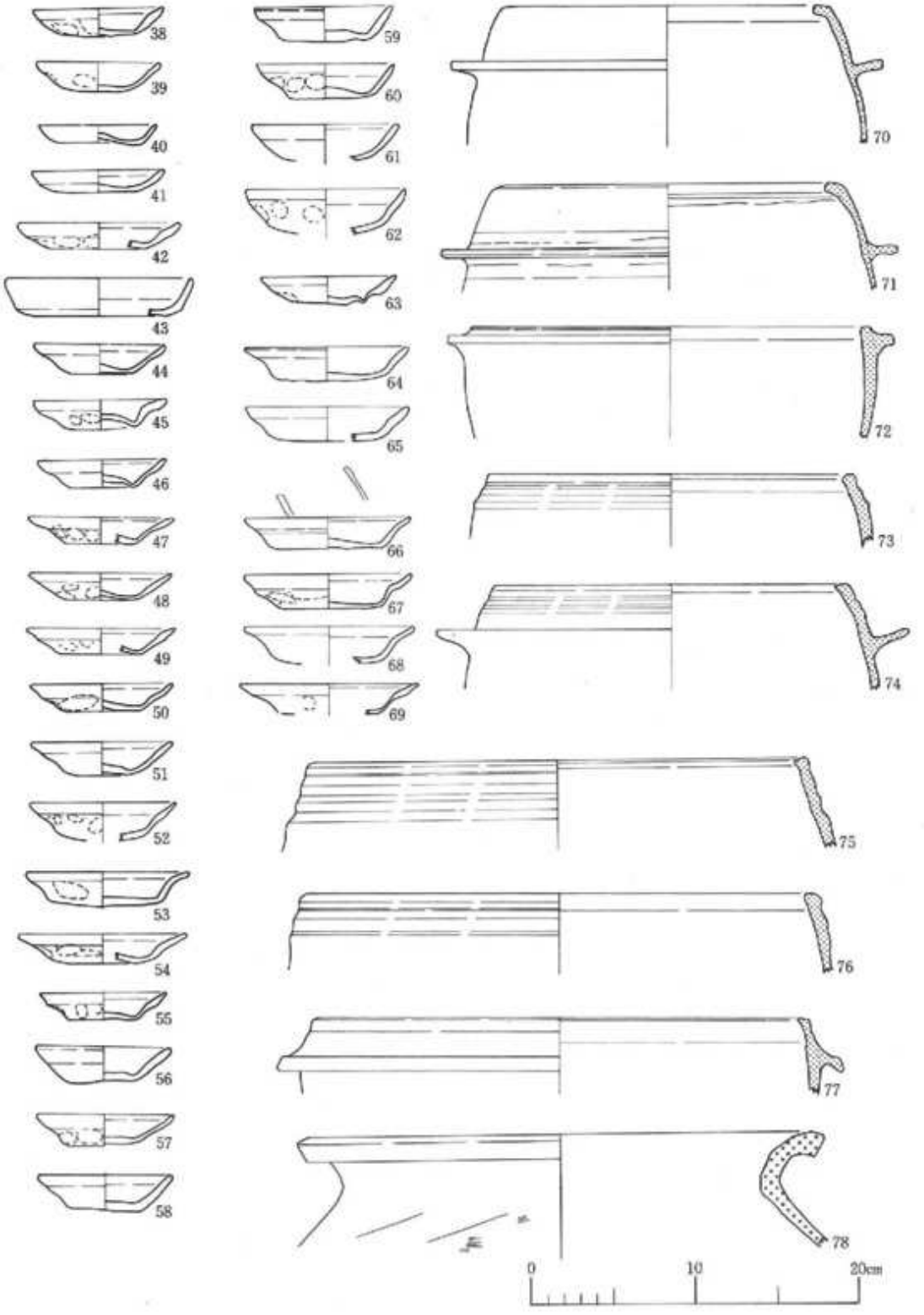
$皿_5$底部は丸底風になり、なだらかに湾曲して口縁部がやや高く立ち上がる。

$皿_6$平底から体部が屈曲し、外湾しながら口縁部がひらく。

$皿_1$は小皿(41・42)、中皿(43)、大皿(44)がある。(41)は口径7.25cm、器高1.1cm。「神並遺跡Ⅰ」の$b_1$になる。(42)は口径8.0cm、器高1.3cm。(43)は口径は11.3cm、器高は1.3cm。同$b_2$になる。(44)は口径11.4cm。同$b_4$になる。$皿_2$になるものは見当らない。$皿_3$は小皿（45～47）、




第35図　中世遺構内出土土器実測図



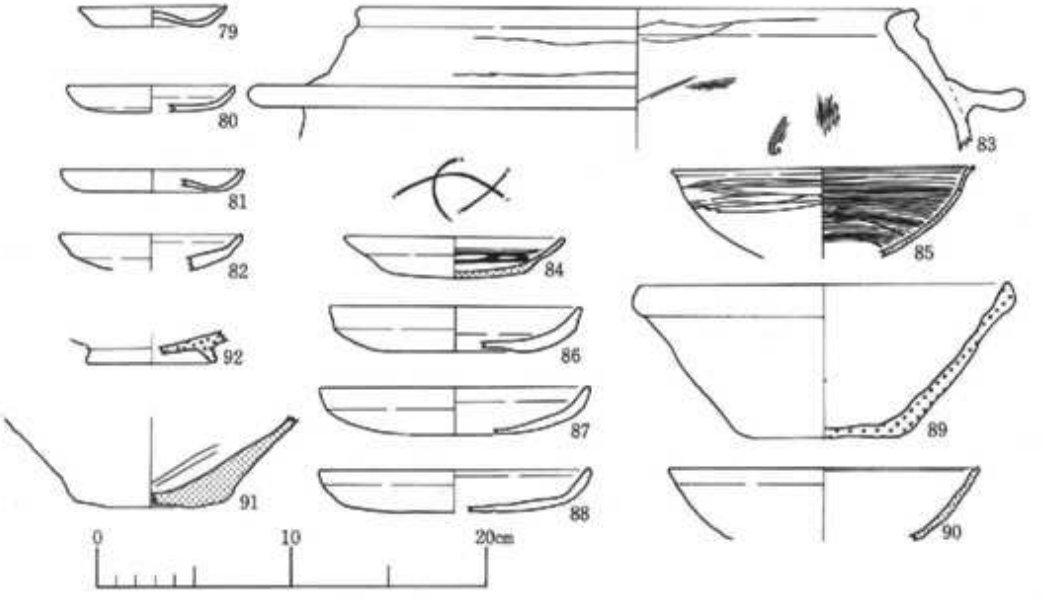

第36図　ＳＤ42内出土土器実測図

中皿（48～52、55）がある。小皿の口径は８㎝内外、器高は1.65㎝～1.8㎝。中皿の口径は9.0～10.4㎝。器高は1.6～2.1㎝。皿$_4$は小皿（57～60）である。口径は8.4～8.6㎝。器高は２～2.2㎝である。底部が非常に厚い。皿$_5$は小皿（39・40）、中皿（61・62）がある。小皿の口径は7.9㎝、7.3㎝。器高は1.7㎝、1.8㎝である。中皿はそれぞれ９㎝、9.8㎝、器高が2.4㎝、2.7㎝を測る。皿$_6$は小皿（54・55・63）、中皿（51・52・64・69）である。小皿の口径は7.8～8.2㎝、器高は1.6～1.8㎝。中皿の口径は９～10.4㎝、器高は２～2.4㎝を測る。以上の土師器皿の色調は概ね浅黄橙色からにぶい黄橙色を呈す。『神並遺跡Ⅰ』では皿$_1$を13世紀、皿$_2$を14世紀に相当するものと考えた。皿$_3$～皿$_6$は14世紀以降のものと考えている。

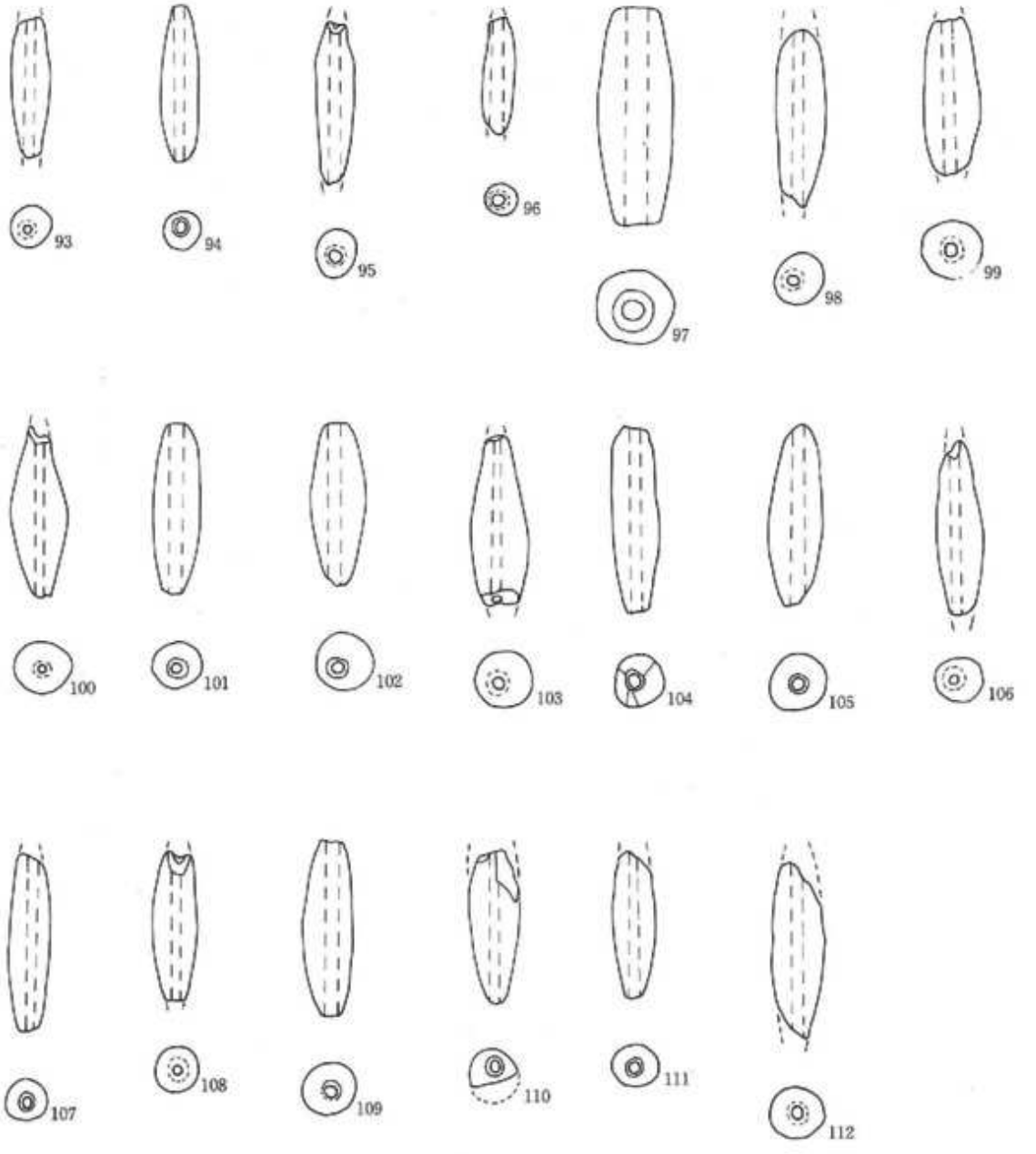
土師器羽釜（70・71）は口縁部が内湾し、端部を内側に折り曲げておさめている。肩部に幅の狭い鍔を巡らす。菅原氏の分類・編年によると「大和H$_2$型」の14世紀頃のものに相当する。瓦質羽釜(72)は短かく直立する口縁部のすぐ下に鍔をめぐらす。同氏の分類・編年によると「大和K型」の14世紀後半のものに相当する。羽釜（73・76）は内傾しながら立ち上がる口縁部に凹線文を巡らせる。口縁端部は丸味をもつものと、内傾するものがある。同氏分類・編年によると14世紀～15世紀のもので「河内D型式」に相当する。羽釜(77)は直立する口縁部に幅の狭い鍔をめぐらす同氏の「摂津F$_2$型」で14世紀頃のものに相当する。須恵質甕(78)は東播系の甕と思われる13世紀頃のもの。白磁碗(1011)は森田・横田氏の分類・編年によると「Ⅴ類―３」の12世紀のものである。

〈17〉その他の遺構

ＳＤ41から青磁碗「Ⅰ―５―ｂ」(1024)－13世紀末、ＳＰ369、中世落ち込みから白磁碗「Ⅴ類」(1018)－12世紀のものなどがみられる。（森田・横田氏の分類・編年による）




第37図　包含層内出土土器実測図


93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
0
5
10cm

第38図　土錘実測図

第2表　遺構・包含層内出土土錘一覧表

| 番号 | 遺構・包含層 | 出土地区 | 縦(cm) | 横(cm) | 孔径(cm) | 重量(g) | 残存状況 | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 93 | 4－N上層 | XIXF13e | 3.0 | 0.85 | 2.1 | 1.9 | 両端が欠損 | 砂粒を含む（生） |
| 94 | SD153層 | XXF10h | 3.4 | 0.8 | 2.4 | 1.9 | 完　形 | 精　良 |
| 95 | SD41 | XIXF18f、g | 3.5 | 0.85 | 3.0 | 2.4 | 両端が欠損 | 精　良 |
| 96 | SD123 | XXF4g | 2.5 | 0.7 | 2.5 | 1.0 | 両端が欠損 | 砂粒を含む（生） |
| 97 | 中世落ち込み | XXF4f | 4.65 | 1.65 | 4.5 | 11.9 | 完　形 | 精　良 |
| 98 | 中世落ち込み | XXF5f | 3.8 | 1.1 | 2.5 | 3.9 | 両端が欠損 | 砂粒を含む |
| 99 | 中世落ち込み | XXF5f | 3.3 | 1.25 | 2.9 | 4.7 | 両端が欠損 | 砂粒を含む |
| 100 | 中世落ち込み | XXF3f | 3.7 | 1.25 | 1.5 | 3.7 | 片端が欠損 | 精　良 |
| 101 | 中世落ち込み | XXF6f | 3.65 | 1.05 | 2.5 | 3.7 | 完　形 | 砂粒を含む（生） |
| 102 | SK56 | XXF6g | 3.5 | 1.25 | 3.0 | 4.0 | 完　形 | 精　良 |
| 103 | 3層 | XXF4g | 3.6 | 1.3 | 2.0 | 5.4 | 両端が欠損 | 砂粒を含む（生） |
| 104 | 4層 | XXF6g | 4.0 | 1.05 | 2.3 | 3.9 | 完　形 | 砂粒を含む（生） |
| 105 | 4層 | XXF6g | 3.8 | 1.15 | 3.0 | 4.7 | 完　形 | 砂粒を含む（生） |
| 106 | 4層 | XXF7g | 3.7 | 1.0 | 1.8 | 2.9 | 両端が欠損 | 精　良 |
| 107 | 4層 | XIXF13g | 3.8 | 0.9 | 2.0 | 3.0 | 片端が欠損 | 砂粒を含む（生） |
| 108 | 4層 | XXF3f | 3.2 | 0.95 | 2.0 | 2.7 | 両端が欠損 | 砂粒を含む（生） |
| 109 | 4層 | XXF7g | 3.8 | 1.15 | 2.7 | 4.0 | 完　形 | 砂粒を含む（生） |
| 110 | 4層 | XXF7g | 3.3 | 1.1 | 2.0 | 2.0 | 片端が欠損 | 精　良 |
| 111 | 5層 | XXF3g | 3.2 | 0.95 | 2.8 | 2.2 | 片端が欠損 | 精　良（生） |
| 112 | | Z | 3.5 | 1.1 | 2.5 | 3.9 | 両端が欠損 | 砂粒を含む（生） |

※胎土の欄の（生）は生駒西麓の胎土を表わす

第3表　遺構・包含層内出土動物遺体一覧表

| 番号 | 遺構or包含層 | 出土地区 | 種類 | 部位 |
|---|---|---|---|---|
| 113 | SD16 | XXF1g | イヌ | 頬骨と上切歯、大小臼歯 |
| 114 | SD16 | XXF1g、h | 不明 | |
| 115 | SD42 | XIXF18e | 不明 | |
| 116 | SD42 | XIXF19e | トリ | |
| 117 | SD88 | XIXF19g | 不明 | |
| 118 | SK56 | XXF6g | ウマ | 臼歯破片 |
| 119 | SP65 | XIXF19f | 不明 | |
| 120 | 炭塊内 | XIXF13g | 不明 | |
| 121 | 炭塊内 | XIXF13g | 不明 | |
| 122 | 1層 | | 不明 | |
| 123 | 2層 | XXF3、4f | ネズミ | (ドブネズミかクマネズミ)、全部同一個体 |
| 124 | 5層 | XXF6f | ウマ | 上顎臼歯(左、右) |
| 125 | SD08 | | | |

〈18〉包含層内出土土器（第37図）

土師器皿（79～82・86～88）、羽釜（83）、須恵器（89）、瓦器椀（84・85・90）、瓦質鉢（91）、磁器（92）などがみられる。

土錘（第38図、図版二九）

各中世遺構、包含層から土錘が出土している。両端、片端を欠くものが多いが、重量別にみると3.5g以下の小型土錘、3.6～5.4gの中型土錘、11.9gの大型土錘がある。一番軽量の土錘は(94)が1.9gである。形態的には中央部が筒状で両端がすぼまり、筒部の径は1cm未満のもの…(a)、中央部に最大径をもち、両端に向って除々にすぼまり、最大径は1cm以上を測るもの…(b)の2つに分類できる。概ね、小型土錘は(a)形態、中・大型土錘は(b)形態のものが多い。小・中型の孔径は1.5mm、大型の孔径は4.5mmを測る。胎土は土師質の精良なもの8点、砂粒を含むものが12点ある。後者のなかでは生駒西麓の胎土のものがほとんどで10点を数える。

その他の出土遺物（図版二六・三〇・六五）

土製品　伏見人形が2点出土している。素焼きで焼成は良好である。色調は乳橙色を呈する。

耳環　第3層から耳環（1008）が出土している。錆がひどい。

古銭　包含層から古銭が2点出土している。（126）は1層出土の「寛永通宝」（寛永3年、1626年鋳造）、外径は2.5cm、内径は0.65cm、重さ3.4gである。（127）は3層出土の「開元通宝」－（641年初鋳造）、外径は2.35cm、内径は0.65cm、重さ2.2gである。

第39図　銭貨拓影図

動物遺体　遺構・包含層内から動物遺体の出土がみられた。イヌ・トリ・ウマ・ネズミなどの種がみられる。他の種は遺存状態が悪く判別できない。

**弥生土器の概略**

弥生時代の中期の土器は従来の第Ⅲ様式といわれるものを中心に第Ⅱ様式と第Ⅳ様式のものも共伴する。従って最初に凹線文の有無で説明する。

凹線文を施さない土器（第Ⅱ様式の土器も含む）

壺A　形態は胴部中位、あるいは下位で張り出す体部に漏斗状にひらく口縁部。口縁端部はそのまま終るものよりも下方に拡張するものが多い。施文は櫛描文を多用する。他地方の土器は口縁部が上下に肥厚する。施文は櫛描文とヘラ圧痕文を併用するものが多い。又、頸部には断面三角形の貼り付け凸帯文をもつ。施文は他の器種にも共通する。

壺A′　形態は球形にちかい胴部に長い頸部をもち、口縁部は大きくひらく。

壺B　壺Aを小型化したもので、口頸下部が強く締まる。

壺C　丈高の器体が肩部でいったんすぼまってから、はっきりした頸部をつくらずそのまま外反する口頸部をもつ。施文はあまりしない。他地方産が比較的多い。

壺D　丈高の器体に直立する短かい頸部から水平近く外反する口縁部。無文で他地方産のものが多い。

受口壺　壺Aの形態に口縁部を上方に拡張する。従って壺Aの口縁端部がそのまま終るものは上方のみに拡張された形態を呈す。拡張された口縁部端面に櫛描文、ヘラ刻み目文、刺突文などを組み合わすものと全く無文のものがある。

細頸壺　胴径の半分以下の口頸部で、口頸部はやや斜めにひらくか、内湾するもの。口縁端部はそのまま終るか内方に肥厚する。施文は櫛描文のなかでも口縁部には列点文に円形浮文を加飾するものが多い。

直口壺　（短頸壺）やや丈高の器体に斜めにひらく短い円筒形の口頸部をもつ。口縁部はそのまま終るか上端面をもつ。

水差し　そろばん玉形の器体に短い筒状の口頸部をつけ、把手側に抉りを入れる。

無頸壺A　胴部中位あるいは下位で張り出す器体に口縁端部はそのまま終る。施文は櫛描文を施す。2孔1対を2組もつ。この器種は少ない。

無頸壺B　無頸壺Aと同じ器体に短く外反する口縁部か段状口縁部をつける。施文は櫛描文を施す。

鉢A　椀形をなす体部に口縁部がそのまま終るもの。上端面をつくるものが多い。無文のものが多い。

鉢B　椀形の体部に外反する口縁部をもつもの[1]、底部から丸味をもって立ち上がる体部に、水平近くあるいは下方に折れ曲がる口縁部をもつもの[2]、腰に稜をもつ体部に段状口縁部をもつものなどがある[3]。B[1]は無文、B[2]は口縁端面にヘラ圧痕文、B[3]はヘラ圧痕文のものと櫛描文を施すものがあり、体部は櫛描文を施す。

台付鉢A　鉢Aに脚部をつける。把手をつけるものもある。体部にはヘラ圧痕文や櫛描文を施す。脚部にも竹管文を施す。（脚部[※]については他の器種も含めて別に説明する。）

台付鉢B　鉢Bに脚部をつける。多くの場合体部と脚部は別々に出土するため、台付鉢Bとして確認できるものは少ない。

高杯A　椀形の体部のものA[1]と、腰に稜をもつ体部のものA[2]がある。A[1]は体部をヘラ磨きするもの、A[2]は列点文を施すものなどが多い。

高杯B　水平にひろげた口縁部に端部は下方に垂下する。内端に1条の凸帯を巡らす。他地方産に口縁部が短かく垂下するものがある。

甕a　倒鐘形の器体に口縁部は頸が締まらずになだらかに外反するもので、口径が胴径よりも大きいものと同じもの、また口縁部が「く」の字形か水平近く外反するもので、口径よりも胴径がうわまわるものなどがある。生駒西麓産の甕aの外面はヘラ磨き、ハケ目とヘラ磨きを併用するもの、内面は肩部を横方向にヘラ磨き、胴部をヘラ磨きあるいはハケ目、内面全面をハケ目をするものなどが多い。また胴下半部～底部をヘラ削りするものもみられる[1]。小型の甕で口縁部が短く外反するもの[2]、大型の甕で口縁部が外反後、下方に肥厚するもの[3]がある。

甕b　いわゆる大和型といわれる倒鐘形の体部に頸部がしまらずに口縁部がゆるやかに外反し口縁部は下方に巻き込み風に作るもの[1]、口縁端部は外反後そのまま終るもの[2]、上下に肥厚するものがある。ハケ目調整を主体とするもので、外面は縦方向に内面は口縁部を横方向、胴部以下を縦方向に施す。ハケ目の原体も細かいものと粗いものがみられ、粗いハケ目はミガキ調整を兼ねている。口縁端面に刻み目文を施すことが多い。他地方の胎土のものが多いが生駒西麓産の甕にもこの技法をとり入れたものがみられる。

壺蓋　笠形をした蓋で、口縁部は水平近くひろがり端部に面をもつ。紐孔を2孔1対2組穿つ。小皿を逆さにした形のものも1例ある。

甕蓋　傘形をした蓋で、口縁部は水平近くひろがり端部を丸く納めるものと面をもつものがある。天井部は平面をなすものと凹みをもつものがある。

脚部　筒状の柱状部に裾部がひろがるもの[1]、脚部の上端部から外湾しながら裾部までひろがるもの[2]、短い柱状部から「ハ」の字形に裾部がひらくもの[3]、柱状部をもたずに幅広の「ハ」の字形に裾部がひらくもの[4]、などがある。脚部[3]の出土例は多いが体部を欠くため全形を窺うことができない。

凹線文を施す土器

量的には非常に少なく、各器種にわたってみられない。ほとんどが他地方の胎土である。図化できた凹線文を施す土器をとりあげてみると、壺A（203・290）、受口壺（777）、水差（516）、無頸壺（730）、鉢A（148・149・349）、円窓付脚付鉢A（218・788）、円窓付脚部（219・730）、高杯A（369・522・784）、脚部（217・220）、器台（671）などである。

この中でも生駒西麓産のものは壺A（203・290）、受口壺（777）、水差（516）、鉢A（148）、高杯A（369・784）、脚部（220）である。無頸壺（730）は円窓付脚部をもつものと推測されるが、この器種と器台は他地方からの搬入品にたよったものと考えられる。

以上、土器の概略を述べたが、今回の調査で検出した弥生時代の遺構から出土した遺物はそれぞれ形式学的に時期差が窺えるが、上・下層共に同じような出土状況のため編年は困難である。最近の調査成果では従来、第Ⅲ様式の特徴をそなえた盛期のものとされていた土器は第Ⅲ様式(新)～Ⅳ様式のものと考えられている。従って、次に弥生時代の各遺構から出土する遺物は、第Ⅱ様式の特徴をもつ土器と、第Ⅱ様式の技法を受けつぐ第Ⅲ様式の土器を「第Ⅱ～Ⅲ様式」、他遺跡で凹線文の土器を共伴する出土例のみられる土器を「第Ⅲ～Ⅳ様式」と2つの時期に分けて記述をすすめる。概ね「第Ⅱ～Ⅲ様式」を中期前半、「第Ⅲ～Ⅳ様式」を中期後半位に考えている。

弥生時代遺構出土遺物

弥生時代の遺構は、№1～№7の方形周溝墓、№8～№10の方形周溝、土坑52などで、出土遺物はコンテナに約100箱分である。方形周溝墓は先にも記したように盛土が中世の遺構で削平されているため、若干、中世の土器の小片が混在する。次に弥生時代の遺構から出土した遺物について説明する。なお、例えば1号方形周溝墓東側の周溝は№1—Eと略して記述をすすめていく。

先述した弥生土器の概略については「畿内」『弥生式土器集成』[注6]にもとづくが、若干呼称を変えたものもある。例えば、壺Aに関しては頸部が非常に長いものを壺A′、受口状口縁をもつ壺を受口状壺とし、近年研究発表された森井氏の壺Aの編年[注7]を参考にする。また甕は河内地方に通常にみられるものを甕a、いわゆる「大和型」と呼ばれるものを甕bと呼ぶ。

方形周溝墓の盛土は、中世の遺構で削平されているが、周溝から出土した土器のなかに完形品、及びそれに近い土器、また穿孔をもつ土器と石器、土製品などは葬送儀礼に関連あるものとして主な遺物としてとりあげ、後に観察表にその法量などを示す。

**1号方形周溝墓**

№1—E（XIXF19～20f区—1層、20g～h区—1・2層、20g・h区—2層、XXF1h区—1層）1号方形周溝墓の北東～東南に走る細い溝で、10号方形周溝に続くため、両溝から出土した土器片が接合する例が多い（大きい破片が出土した溝に掲載する。以下、他の周溝でも同じ扱いをする。）。1層からコンテナに6箱分、そのうち7割はXIXF20g区から出土。2層からは1.5箱分出土した。

〈1層〉　弥生土器（129～170）（第41・42図、図版三一・三二）

・主な土器　XIXF20f区から壺A（135）が横位で出土。下側にあたる口縁～体部まで約1/3が残存。上側の部分は欠失。

・第Ⅱ～Ⅲ様式　壺A（129～132）、直口壺（133）、甕などがある。壺A（129）は口縁端部がわずかに肥厚する。壺A（130・131）は頸部に指頭圧痕を残す。壺A（132）は口縁下端部に刻み目文を施す。壺（129・132・133）は他地方の胎土である。他に壺Aで、口縁端面が無文のもの、刻み目文、波状文を施すものがみられる。甕では大和型のbタイプのものもある。底部は上げ底風のもの（164・166）、底面が厚いもの（166）をはじめ厚さが3cmになるもの、木

葉痕をもつものなどがある。

・第Ⅲ～Ⅳ様式　壺A（134～136・142）、受口状壺（137～141）、細頸壺（143・144）、水差、無頸壺（146）、鉢A（147～151）、鉢B（152～154）、高杯A（155）、脚部（156）、甕a（160～163）、甕（157～159）、底部（165・167～170）などがある。壺Aに関しては、森井氏がこの時期のものを伴出する土器との共存関係から「A・B・C・D」タイプに別け、それぞれをA—第Ⅲ様式（古）、B—第Ⅲ様式（新）、C—第Ⅲ（新）～Ⅳ様式、D—第Ⅳ様式と位置づけられている[注2]。これに従うと、壺（135）は「B」、壺（134）は「C」にあたるだろう。他に頸胴部（142）など櫛描文を施したもの、頸部に貼り付け凸帯文を施したものなどでやや大きい破片がみられる。受口壺は上方にのみ肥厚するもの（137・138）と、下方にも肥厚するもの（139～141）がある。（137）は頸部にヘラ圧痕文、直線文を施す。他地方の胎土。受口壺（140）は森井氏編年の「B」に、受口壺（139・141）は同じく「C」の壺Aに受口状口縁をつけたものといえよう。細頸壺（143・144）は列点文に円形浮文を加える。他に列点文を施す水差がある。無文の無頸壺B（146）は口縁部が「く」の字形に外反する。鉢A（148・149）は口縁部に凹線文を施す。（149）は他地方の胎土。凹線文を施す土器には高杯Bの口縁部の垂下部に2条施すものがある。鉢B（153）は大型で破片は多い。甕は「く」の字形に外反するものが多い。甕（160）は口縁部の断面に竹管文を施す。底部の下位に錐状のもので穿孔したものが2個体ある。

石器（840～843）（第85・90・91　図版六五・六八・七〇・七一）　XIXF20g区から太型蛤刃石斧の一部（843）、サヌカイト製の削器（841）、管玉（842）、XXF1h区から石鏃（840）がそれぞれ1点ずつ、サヌカイト片11点出土している。石斧は砂岩製で全体の1/6位の残存である。削器は下辺部を細部調整したもの。管玉はシルト岩製。石鏃は下端部を欠く。

土製品（818）（第84図、図版六六）　XIXF20g区から土製円板が出土。壺の胴部分を打ち欠き、周縁の一部を磨いたもの。微粒の角閃石を含む。

動物遺体（図版三〇）XIXF20h区からシカの角が出土。一部に焼けこげ痕が認められる。

〈2層〉　弥生土器（171～199）（第43図、図版三二）

・第Ⅱ～Ⅲ様式　壺A（172・173）、壺C（181）、直口壺（182）、鉢A、甕b（192）、底部（197）などをはじめ口縁部小片がみられる。壺A（172)は口縁端面に刻み目文、内面に稚拙な波状文を施す。壺A（173）の口縁端面は無文。壺C（181）は器壁が非常に厚い。甕b（192）は口縁部がゆるやかに外反し、内面を横方向にハケ目調整する。（173・181・192）は他地方の胎土。

・第Ⅲ～Ⅳ様式　壺A（171・174～178）、壺C（179・180）、細頸壺（183・184）、直口壺（185）、無頸壺B（186）、鉢A（190）、鉢B（187・188）、脚部（191）、円窓付脚部（189）、甕（193～196）、底部（198・199）などがある。壺Aは長頸になるものを壺A′と呼ぶことにするが、これに相当するものは壺（174）のように口縁端部に刻み目文を施す例が多い。壺A（175～177）は森井氏編年の「B」タイプ、（178)は「C」になると思われる。壺C（179・180）は口

縁端部があまり発達していないもので、第Ⅲ様式でも古い時期のものかもしれない。橙色を呈す。直口壺（185）は口縁端部を丸く納め、凹線文を3条施す。口縁部に1ヵ所浅い抉りがみられ、片口状をなす。無頸壺B（186）は体部に簾状文、直線文、波状文を施す。鉢Bは（187・188）の口縁部のように外方にひらき、端部が下方を向くものと、段状に貼り付けた端部が矩形をなすものがある。甕a（196）は口縁部の内面に刺突文を施す。円窓付脚部（189）は凹線文を3条施す。（179・180・185・189）は他地方の胎土。

動物遺体　XIXF20g区から種不明の動物遺体が出土している。

№1—W（XIXF16g区1層、16f・g—2層、17f・g区—1層、17f～g区—1・2層、18e・g区—1層）1号方形周溝墓の北溝から南へ走る溝（幅2.5m、深さ0.5～0.6m）。1層から6箱、2層から2箱分それぞれ出土。

〈1層〉　弥生土器（200～235）（第45図、図版三四・三五）

・主な土器　XIXF17g区からほぼ完形のまま壺A（201）が出土。口縁部の約1/3を打欠き、胴部の張り出す部位に0.7×0.7㎝の小孔、底部には4×2㎝の孔をそれぞれ外面から穿つ。2孔穿つ類例は№5の細頸壺（421）にもみられる。

・第Ⅱ～Ⅲ様式　他地方の胎土で口縁部の小片に刻み目文を施す壺A、木葉痕をもつ底部などがある。また鉢A（211）は第Ⅱ様式のものと考えられる。

・第Ⅲ～Ⅳ様式　壺A（200・201・203）、受口壺（202）、壺C（204・208）、壺D（205・206）、水差（207）、無頸壺B（209・210）、鉢B（212～216）、円窓付脚付鉢（219）、同脚部（218）、脚部（217・220）、蓋（221）、甕a（224～228）、甕b（229・230）、甕底部（231～235）などがみられる。XIXF17g区から出土した壺A（201）は森井氏の編年によると「B」タイプにあたる。受口壺（202）は頸部に縦位の直線文を施す。壺C（204）は頸部が締まり外面をハケ目調整する。壺A（203）は口縁端部が上方に肥厚し、端面に凹線文をつける。頸部に波状文と直線文を施す。壺D（205）はやや斜め方向に開く頸部から口縁部が水平に外反する。壺D（206）は短く立つ頸部からやや長めに外反する口縁部をもつ。水差（207）は硬く焼き締まり、内面は黒色を呈す。無頸壺B（209）、鉢B（212・213）は口縁端部が矩形、鉢B（214・215・216）の口縁部は外反し端部が下方を向く。無頸壺B（210）は段状口縁部上端に刻み目文、体部に波状文、直線文を施す。第Ⅲ様式でも古い時期のものといえる。円窓付脚付鉢（219）は口縁部と体部に凹線文を施す。脚部（218）は内面をハケ目調整するもので色調は白色系、鉢（219）は橙色系である。脚部（217・220）は円孔と凹線文をもつ。（208・217～219）は他地方の胎土。甕a（224～228）の頸部外面は丸味をもたせて外反する。甕（225）は肩部から大きく張り出す。甕b（229・230）は小型で、口縁端面に刻み目文を施す。甕b（229）の内面は黒色を呈する。甕b（230）は体部中位に列点文を2段施す。甕b（228）は口縁端部が上方に肥厚。甕a（226）はXIXF18g区から破砕して出土。口縁～体部まで全体の約1/8位が接合できたもの。口縁端部が上下に肥厚する。胴部下半はヘラミガキを加える。底部（232・235）は生駒西麓の胎土。

石器　（第85図、図版七〇・七一）　XIXF17・18g区から石鏃（844）、XIXF18g・h区から石鏃（845）、XIXF17f区から削器（846）が出土。石鏃（844・845）は凸基有茎式で基端部を欠く。削器（846）は一縁辺を細部調整する。他にサヌカイト片9点が出土。

その他　XIXF17g区から種が不明の動物遺体と、若干の炭化物が出土。

〈2層〉　弥生土器（222・223・234・236～250）（第45・46図、図版三三～三五）

・主な土器　XIXF17g区から壺D（236）が横位で出土。胴部の上側になっていた部分が大きく破損している。XIXF17f区から甕b（249）が出土。口縁～体部の一部分を欠く。胴底部には一面に煤が付着。

・第II～III様式　鉢A・B（239）、脚部、甕b（246）などいずれも小片の土器がみられる。鉢B（239）は口縁部が外反し、体部を横方向にヘラ磨きする。甕b（246）は口縁端部の下を指押えし、内面は板状の原体でハケ目調整する。底部（233）は木葉痕をもつ。鉢B（239）、甕b（246）以外の土器は他地方の胎土である。

・第III～IV様式　壺A（237）、壺D（236）、水差（238）、鉢A（240）、鉢B（241～243）、脚部（244・245）、甕a（222・223・247～250）などがある。壺A（237）は簾状文の施文方向が通例のものと違い左廻りである。森井氏の編年の「B」タイプにあたる。壺D（236）は体部中位を横方向にヘラ削りする。水差（238）は大きなえぐりをもつ。鉢B（241～243）はそれぞれ口縁端部の形態が異る。鉢B（242）は厚手で上端部に刻み目文を施す。3例の中では古い時期のものといえる。大型の甕a（250）は大型の鉢B（243）とXIXF17g区から出土。共に底部を欠失するが口縁～体部まで全体の1/4位が残存する。甕a（222・223）、底部（234）は1層からも破片が出土。内外面に煤が付着。

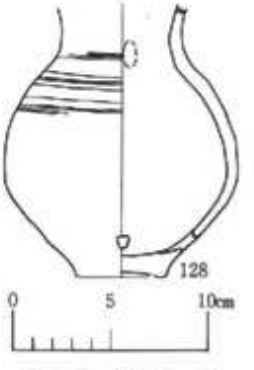
石器　（第85図、図版七〇）　XIXF17g区から出土した壺D（236）の出土地のすぐ近くの地点から大型の石鏃（847）が出土。凸基有茎式で長軸は6.8cmを測る。

No.1—N（XIXF18e区—1・2層、18f区—1層、17f—1～4層、16f～g区—1・2層）1号方形周溝墓の北西から西南の方向に通ずる溝。2号方形周溝墓の東南側の溝と共有する。1層からコンテナに約6箱、2層から3箱、3層から0.5箱、4層から0.5箱分それぞれ出土。

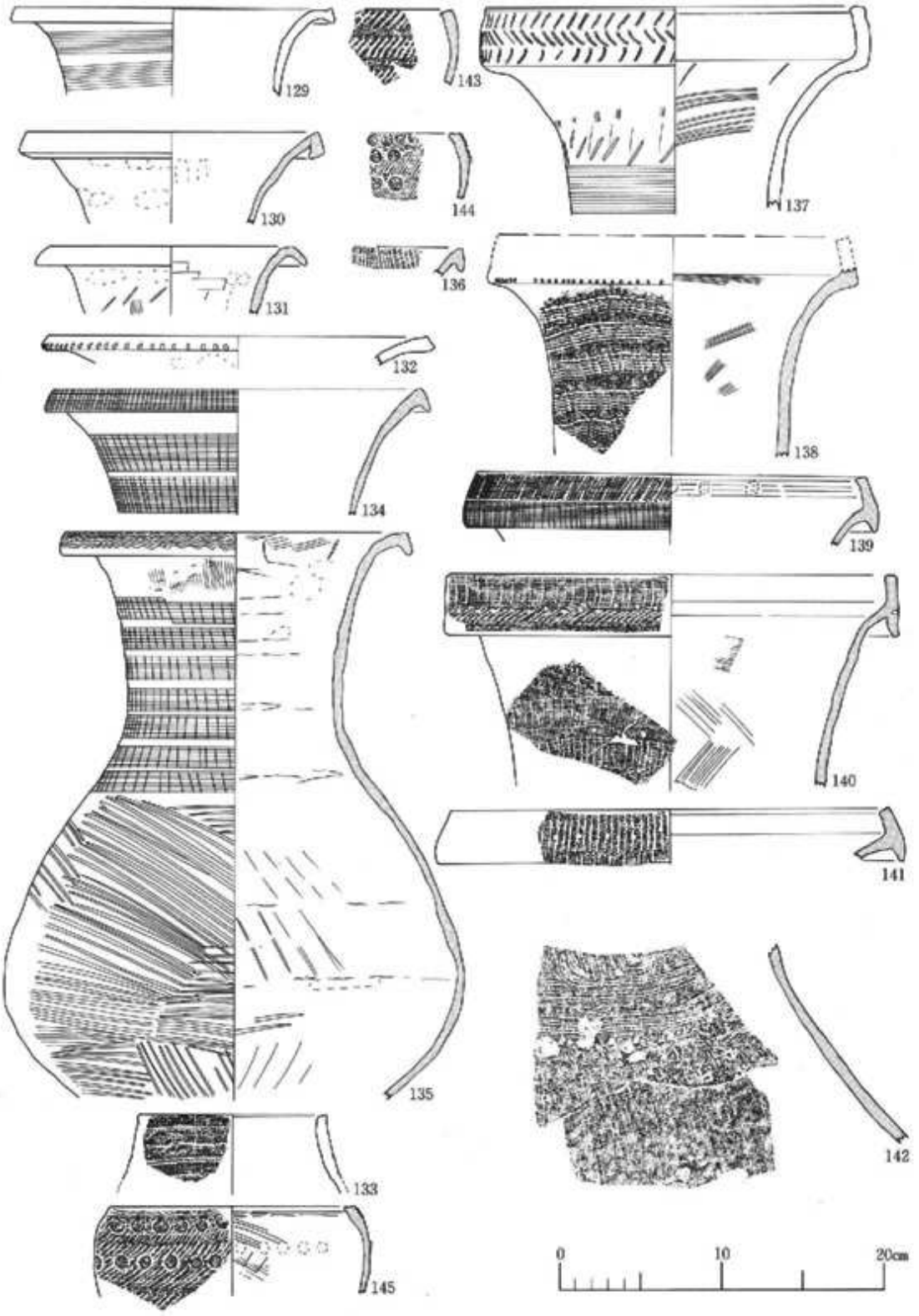
〈1層〉　弥生土器（251～285）（第47図、図版三六）

・主な土器　XIXF17f区から完形のまま無頸壺（264）が出土。XXF1e区から出土した細頸壺（128）はSD42の中世遺構で同一個体の穿孔を受けた破片を検出。おそらく中世の削平された時に掘り返されたものと考えられる。

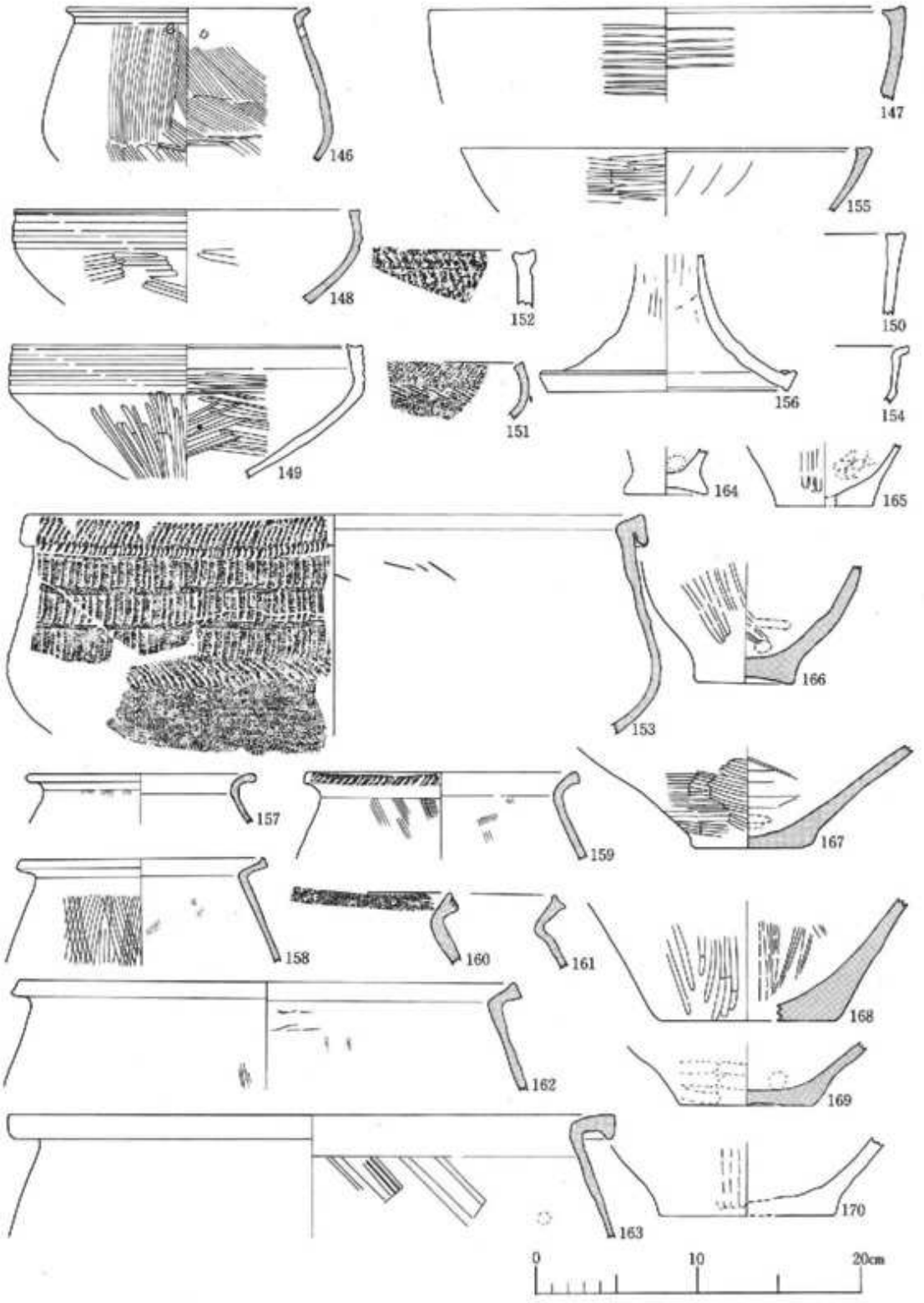
・第II～III様式　壺A（254）、壺D（251・261）、細頸壺（262）、底部（283）などがある。壺A（254）は無文。壺D（251）は口縁端部が丸味をもち、刻み目文を施す。壺D（261）は頸部に指押え痕を残す。これらは他地方の胎土。細頸壺（262）は口縁上端部に



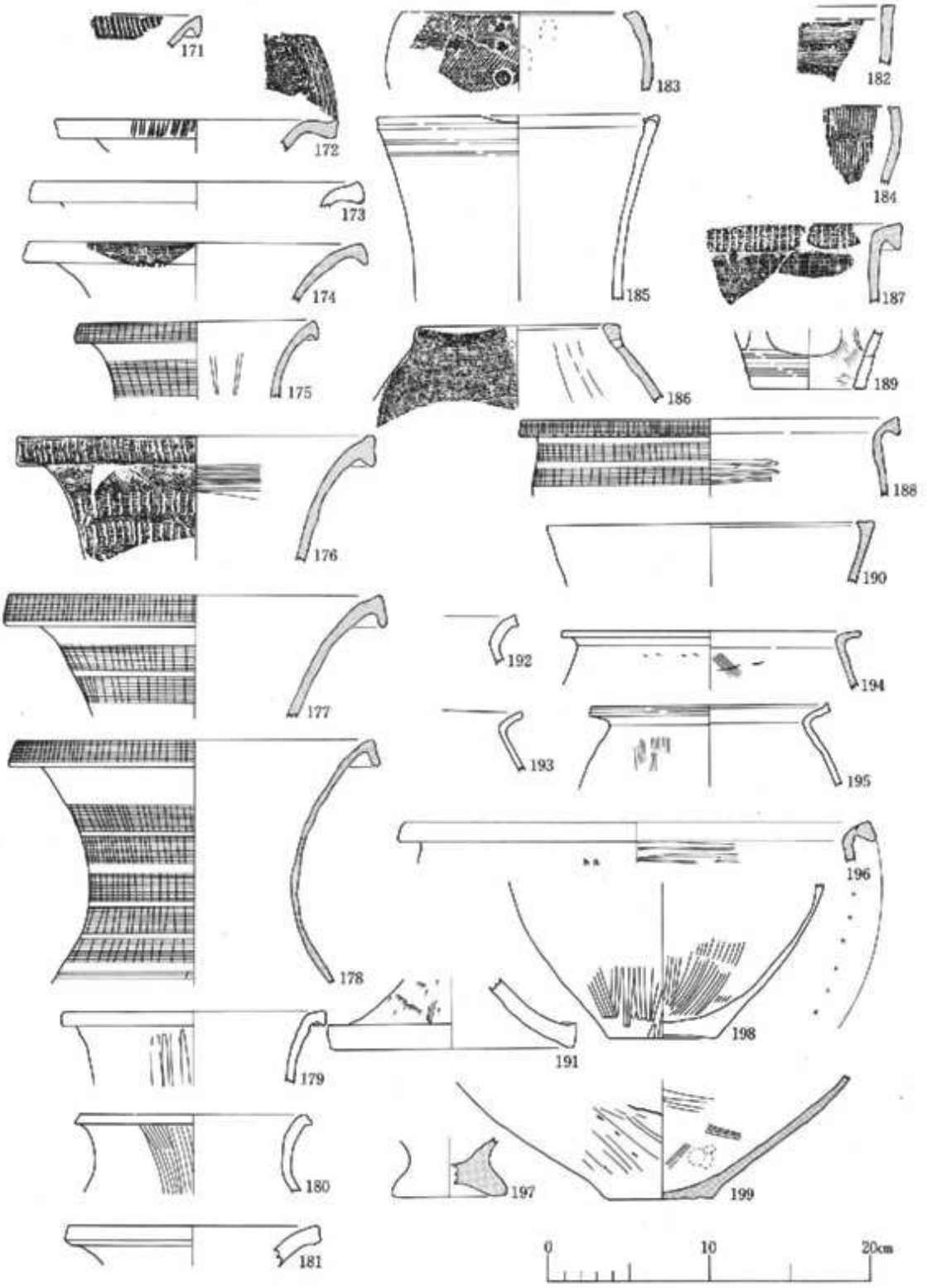
第40図　NO.1—N内出土土器実測図



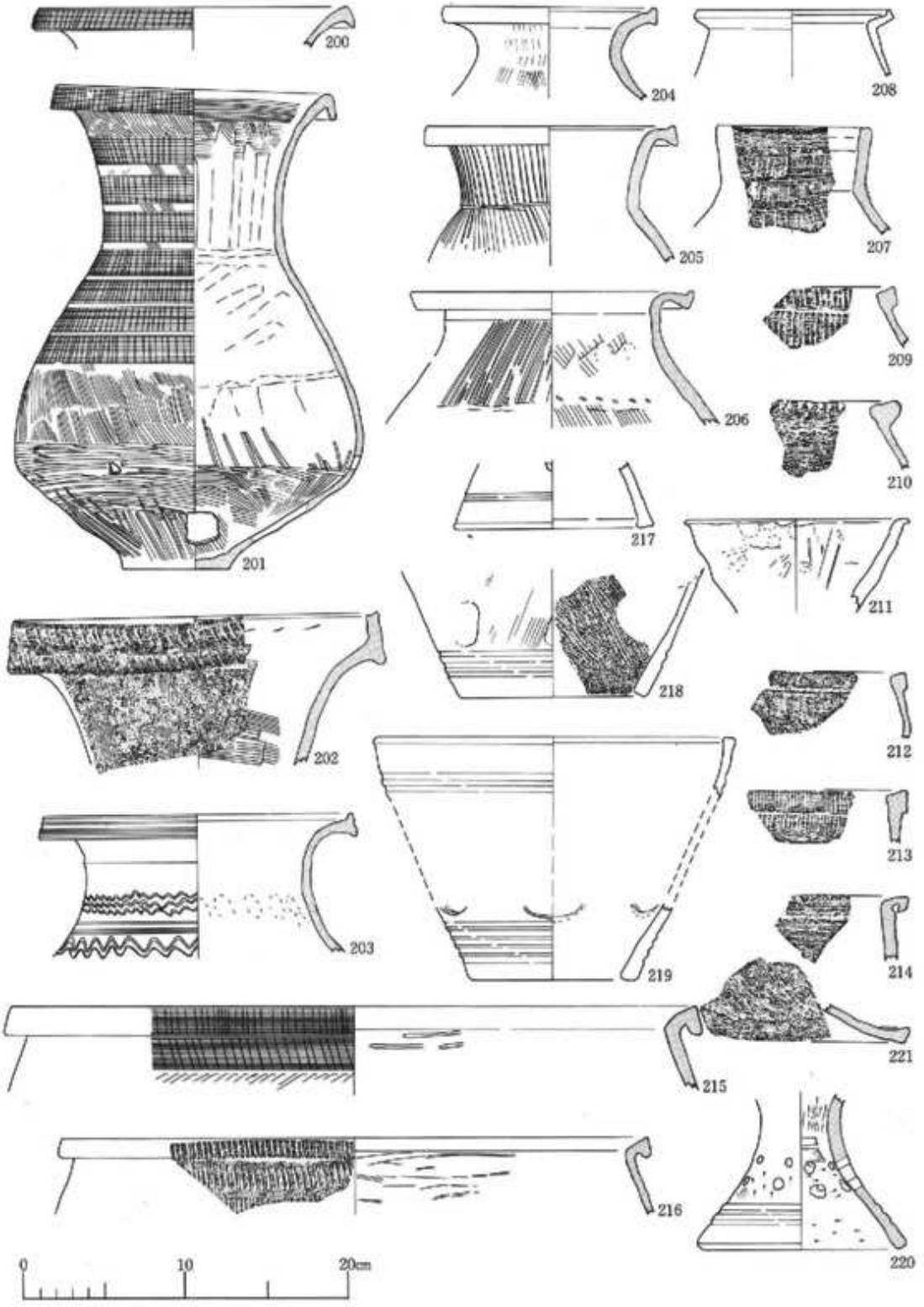

第41図　NO. 1—E　1層内出土土器（129～145）実測図



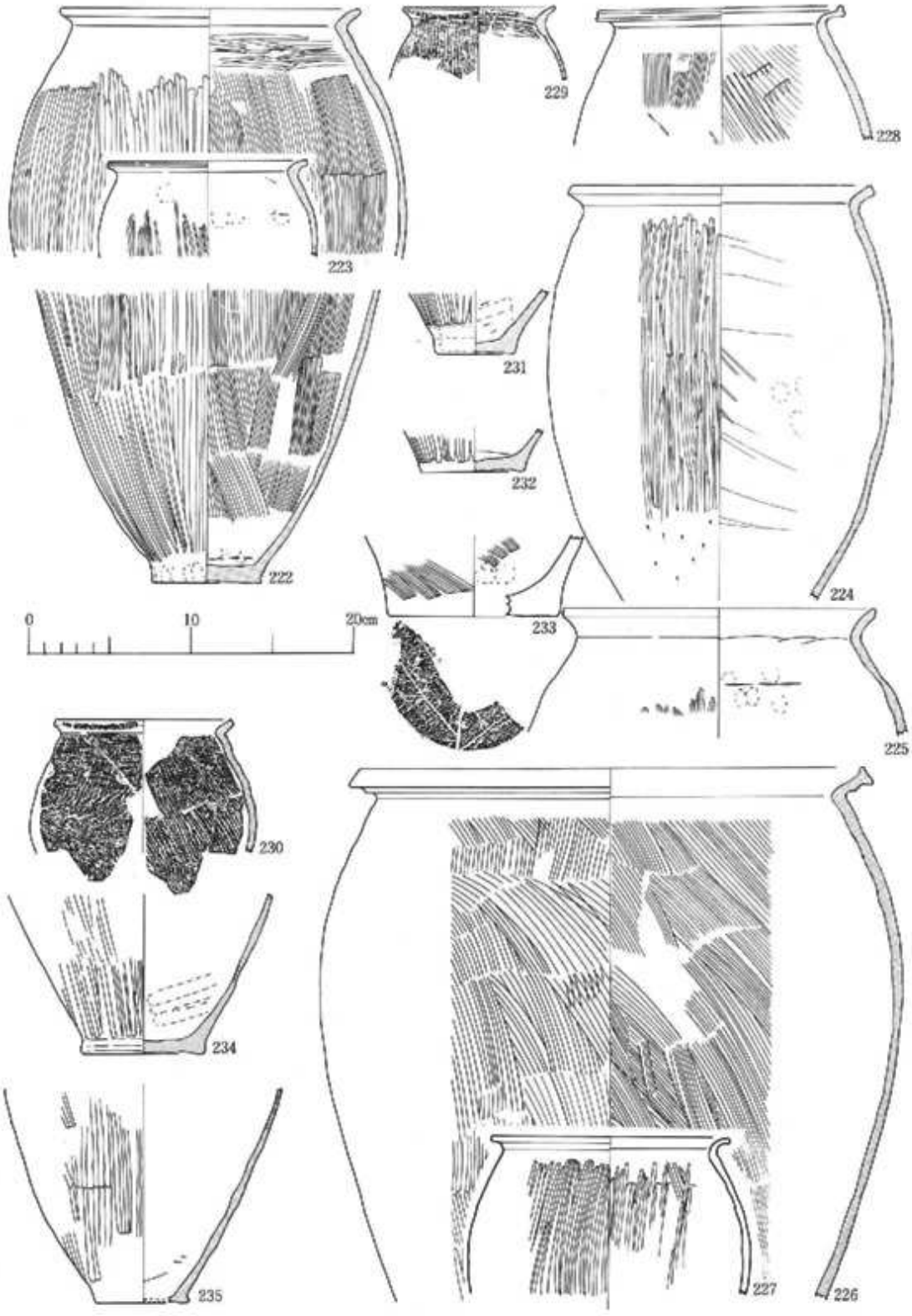

第42図　NO. 1—E　1層内出土土器（146～170）実測図



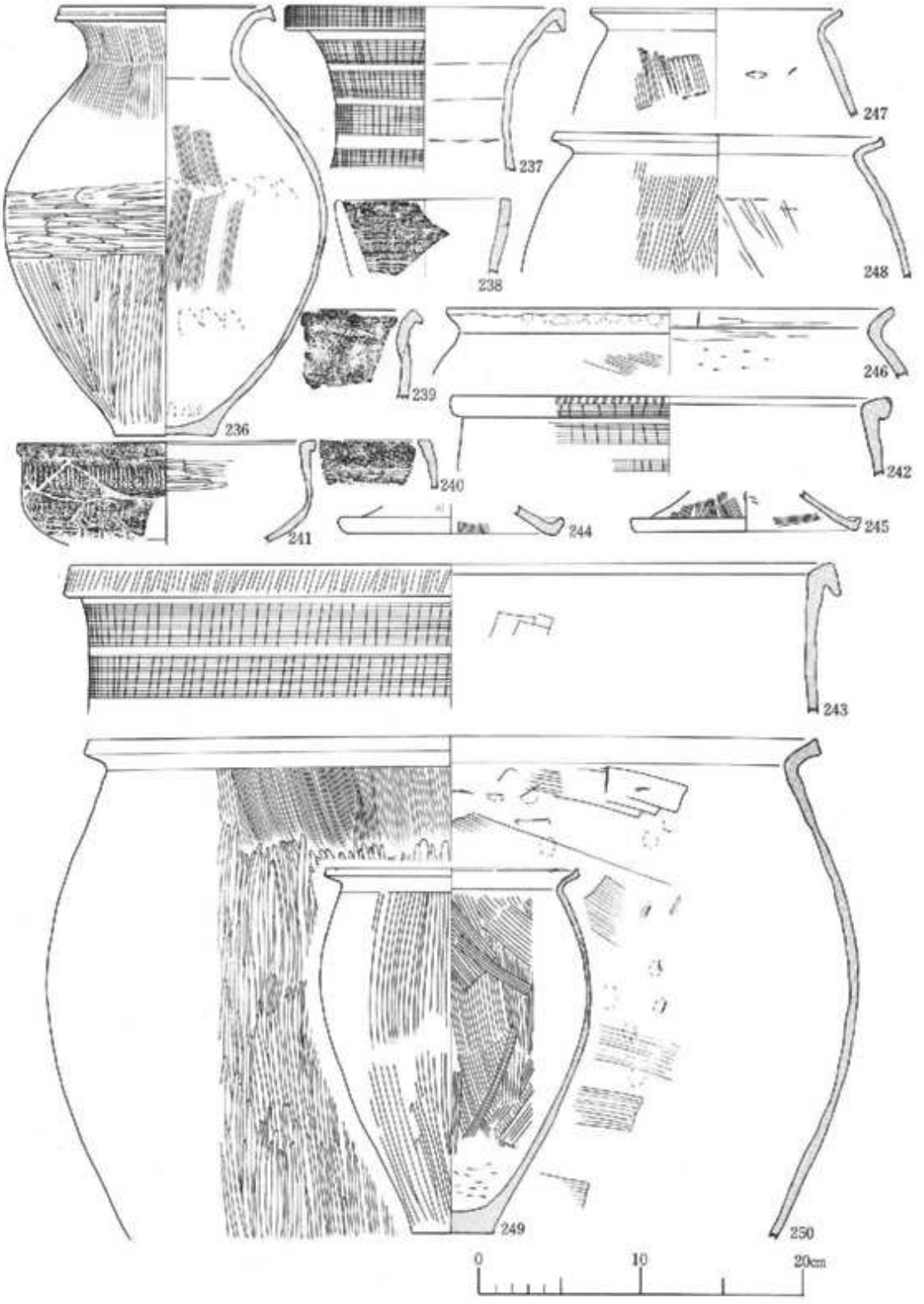

第43図　NO. 1—E　2層内出土土器実測図



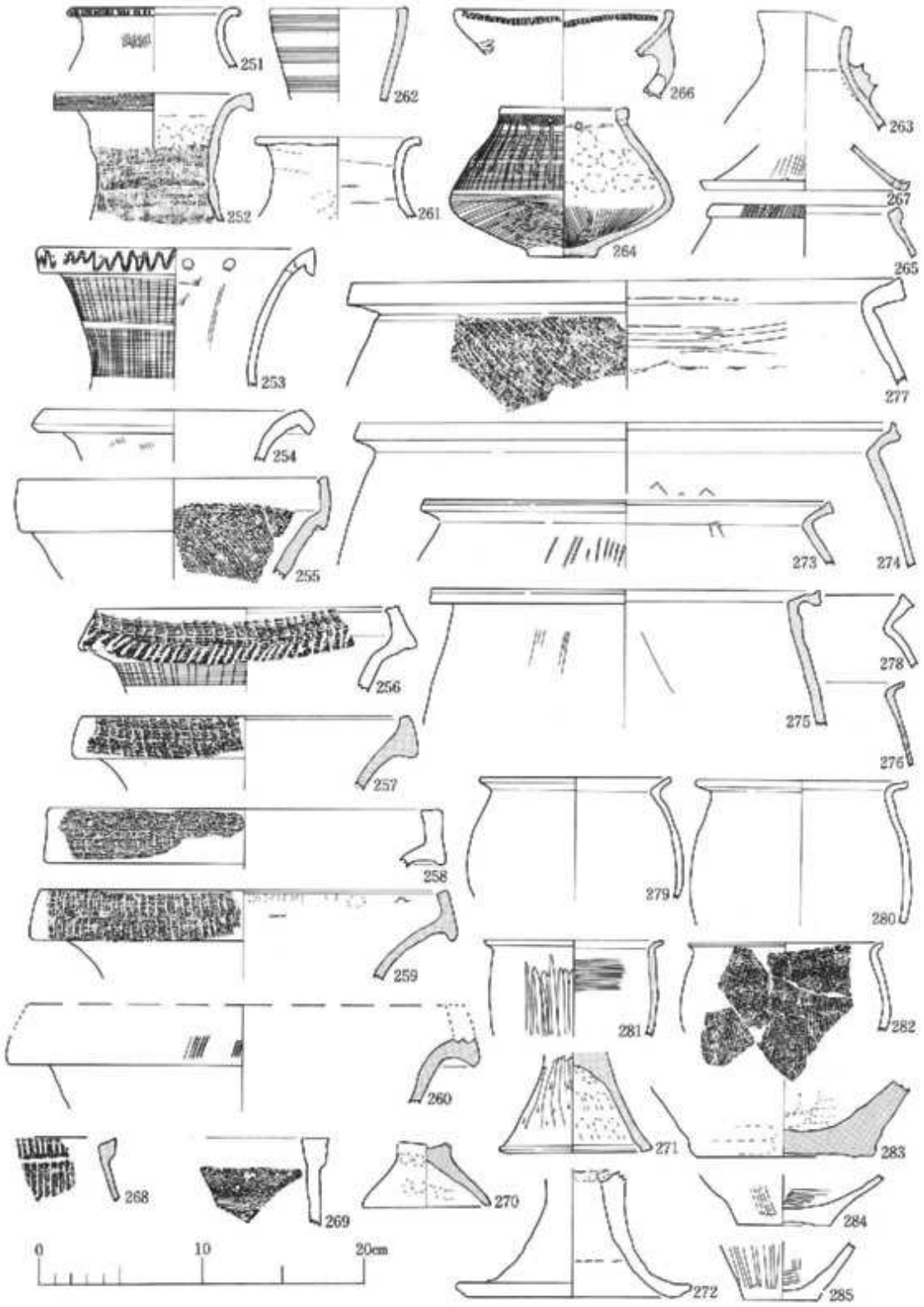

第44図　NO. 1—W 1層内出土土器実測図



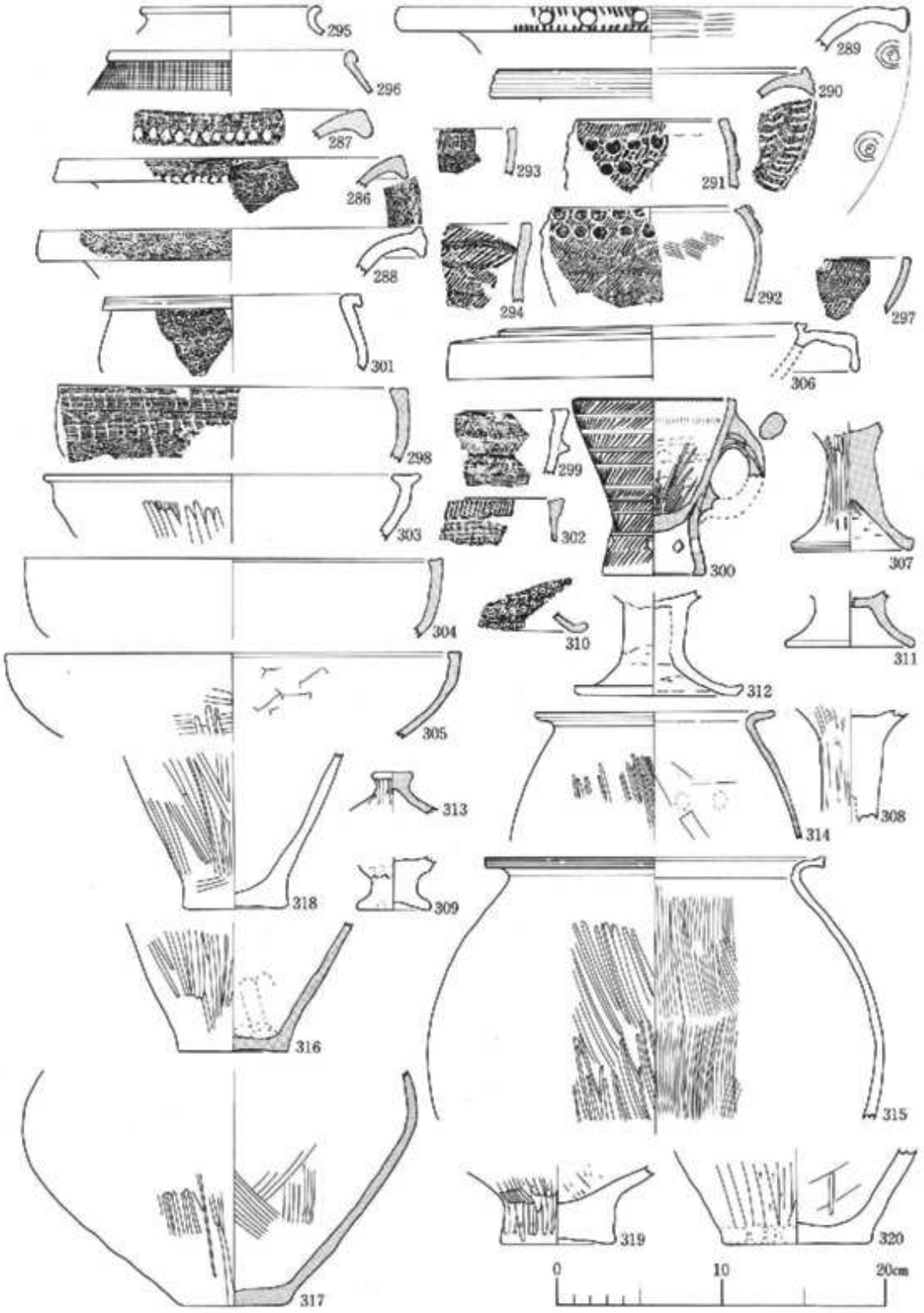

第45図　NO.1—W 1・2層内出土土器実測図




第46図　NO. 1—W 2層内出土土器実測図




第47図　NO. 1—N　1層内出土土器実測図




第48図　NO. 1—N　2層内出土土器実測図

面をもつ。底面の厚い底部（283）の他に底部でドーナツ状になるものもある。

・第Ⅲ～Ⅳ様式　壺A（253）、壺B（252）、受口壺（255～260）、水差（263）、蓋（267）、無頸壺B（264・265）、把手付鉢A（266）、鉢B（268・269）、脚部（270～272）、甕a（273～276・281）、甕b（277～280・282）、底部（284・285）がある。壺A（253）は口縁部端面に波状文、頸部に長い原体による簾状文を施し、口縁部のすぐ下に焼成後に紐孔を2孔1対ずつ相対する位置に錐状のもので内外面から穿つ。他地方の胎土であるが森井氏の河内の壺Aの編年に照合すると「C」タイプと考えられる。受口壺（255）は無文。（256～258）は口縁部のつくりが一定でなく（259）に比べるとやや古いものと考えられる。壺（259）は森井氏の壺Aの編年に照らすと「C」タイプになると思われる。壺B（252）は口縁部端面に波状文、頸部に直線文を止めてできる擬簾状文ともいうべき施文方法をする「B」タイプになる。内面に指押え痕が残る。水差（263）は小型で無文。鉢Aは把手付で口縁部内外面に刻み目文をつける。鉢B（268）の体部の簾状文の原体は長い。鉢B（269）の口縁部端面には凹線文を施す。脚部（270・271）は短脚である。脚部（272）は他地方の胎土。甕はほとんど外面が摩滅気味で整形が不鮮明である。甕a（275）は口縁部端面に擬凹線文を施す。甕a（281）は外面のヘラ磨きがヘラ削り状を呈す。内面は横方向へヘラ磨きをする。

石器　（848～853）（第85・90図、図版六八・七〇・七一）

XIXF16f区から石鏃（848）、楔形石器（850）、XIXF17f区から石鏃（849）、楔形石器（851）、横形削器（852）、投弾（853）が出土。他にサヌカイト8点が出土。石鏃（848・849）はいずれも凸基有茎式である。投弾（853）は細粒砂岩製で、四面をつくり出しているが縁は丸味をもつ。

その他　XIXF17f区から炭化物が出土している。

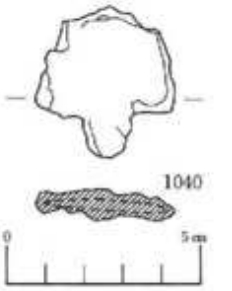
〈2層〉　弥生土器（286～320）（第48図、図版三六）

・第Ⅱ～Ⅲ様式　壺A（286）、脚部（307～309）、底部（319）などがある。壺A（286）は口縁内面を横方向にハケ目で調整する。他に他地方の胎土で口縁部端面に刻み目文を施すものがある。脚部（307～309）は中実。脚部（307）は裾部に「‖」の記号文を入れる。底部（319）の厚さは3㎝を測る。脚部（308・309）は他地方の胎土。

・第Ⅲ～Ⅳ様式　壺A（287～290）、細頸壺（291・292）、水差（294）、無頸壺B（295・296）、鉢A（298・299・304）、台付鉢A（300）、鉢B（301～303）、高杯A（305）、高杯B（306）、脚部（310～312）、蓋（313）、甕a（314・315）、底部（316～318・320）などがある。壺A（288）は口縁部外面、内面に波状文を施す。壺A（287）は長頸になると思われる。壺（289）は口縁部上、下端部に刻み目文、端面に円形浮文、口縁部内面に同心円文を施す。壺A（290）は口縁部端面に凹線文、内面に列点文を2段施す。壺A（288・289）は他地方の胎土。細頸壺（291・292）は列点文と円形浮文を施す。水差（294）は列点文を施す。無頸壺B（295）は無文で器壁が薄い。鉢A（300）は短い脚部に直口する体部をつけ、口縁端部に刻み目文、口縁～脚部まで10段の列点文を施し、文様間をヘラ磨きする。施文は水差（294）に似る。脚部下

位には円孔を穿つ。鉢A（298）は簾状文を施し、鉢A（304）は無文。鉢B（301）は口縁端部が外方に肥厚し、体部に波状文、簾状文を施す。鉢B（303）は口縁端部が内・外方に肥厚し、体部外面をヘラ磨きする。鉢A（299）は体部に断面三角形の凸帯を貼り付ける。鉢（299・301・303）、高杯（306）は他地方の胎土。脚部（310）は裾部に竹管文、裾端部に刻み目文を施す。脚部（311）は短脚。脚部（312）は他地方の胎土。甕a（314）の口縁部は水平近く外反する。甕（315）は胴部が丸く張り出すもので外面をヘラ磨き、内面をハケ目調整する。他地方の胎土。底部（317）は外面胴部を横方向、底部を縦方向にミガキ調整。内面はハケ目調整で黒色を呈す。

土製品（第84図、図版六六）　XIXF18e区から土製品円板（822）、同16f区から土製方板（823）が出土。円板（822）は周囲を打ち欠くやや楕円形を呈するもの。方板（823）は表面の中央に未貫孔がみられる。共に生駒西麓の胎土。



第49図　NO.2—N内出土鉄鏃実測図

石器　（854～857）（第85・90図、図版七〇・七一）　XIXF18e区から石庖丁（854）、削器（856）、同16～17F区から石鏃（855）、削器（857）が出土。石庖丁（854）は1/2を欠失する。削器（856）は先端部が尖る。石鏃（855）は凸基有茎式で下端部を欠く。削器（857）は両面共大きな剥離面を残す。

〈3層〉　XIXF16f区から弥生土器の出土量は少いが、鉢A（293・297）などが出土。

石器　サヌカイト片1点。XIXF17f区から出土。

2号方形周溝墓

№2—N（XIXF14～15e区—1・2層、15f区—2層、XIXF15e・f区1～4層）2号方形周溝墓の北～北西に走る溝で6号方形周溝墓と共有し、4・5号方形周溝墓の溝に続く。遺物の出土量は他の周溝に比べると少ない。1層からコンテナに1箱強、2層から1.5箱、3・4層から少量出土。

〈1層〉　弥生土器（325～328）（第53図、図版三七）

・第II～III様式　壺A、壺D、鉢A、甕aなどの小片がみられる。

・第III～IV様式　壺A（325）、壺B（326）、受口壺（327）、鉢A、鉢B、甕a（328）、底部などがある。壺A（325）、受口壺（327）は2・4・5号墓周溝の共有する地点で破砕して出土。壺A（325）は施文の原体は櫛目が非常に細い。森井氏編年の「B」タイプにあたる。受口壺（327）も同じ時期にあたると思われる。壺B（326）は頸部が締まる。口縁部端面に稚拙な簾状文、頸部に直線文、肩部に列点文を3段施し、胴部をヘラ磨きする。口縁端部もあまり発達しないもので森井氏編年の「A」タイプにあたるだろう。鉢Aに凹線文を施すものがある。甕a（328）は小型で内面の肩部を横方向にヘラ磨きの後、縦方向にヘラ磨きする。

石器　（860～863）（第86図、図版七〇・七一）　XIXF15e区から石鏃（860）、凸刃削器（861）、細部調整のある剥片（862）、使用痕のある剥片（863）、サヌカイト片6点出土。石鏃

(860) は凸基有茎式。やや大型で長軸は5.35㎝を測る。

鉄器　(第49図、図版六五)　鉄鏃 (1040) は先端部を欠き、全面が赤錆に被われている。(別稿P.199の大澤氏の論文を参照されたい。)

〈2層〉　弥生土器 (329・330) (第53図、図版三七)

・主な土器　XIXF15e区の北西の角から小型の壺C (329) が口縁部を一部欠くだけでほぼ完形のまま出土した。

・第II～III様式　壺C (329) は外面に削り痕を残す。粗い造りのもの。口縁端部も丁寧な整形でない。他に壺A、鉢Aなどの小破片で他地方の胎土の土器がみられる。

・第III～IV様式　蓋 (330) の外に鉢A・B、高杯B、脚部などがある。鉢Bは口縁部が段状の矩形をなすもので、体部に直線文、波状文を施す。器形が非常に薄く白色系の他地方の胎土。鉢A、脚部なども他地方の胎土。

石器　(864・865) (第86図、図版六九・七〇)　XIXF15e区から石庖丁 (864)、石鏃 (865) が出土。石庖丁はかなり摩滅したもので全体の約1/4が残存。石鏃 (865) は両面中央に大剥離面を残す。茎部はやや片側に寄る。

№2—W (XIXF15e～f区1～2層、16f区1～3層、16g区2層) 2号方形周溝墓の西～南に走る溝。5号方形周溝墓の北東側の溝と共有する。1層からコンテナに1箱、2層から1.5箱、3層から0.5箱分それぞれ出土。小破片ばかりである。

〈1層〉　弥生土器 (327) (第43図　図版三七)

・第III様式　№2－N内の受口壺 (327) の破片が出土している。

石器　XIXF18g区から削器 (858)、XIXF16f・g区からサヌカイト片が出土。削器は断面が厚く二縁辺を調整加工したもの。

〈2層〉　弥生土器　出土量はごく少量である。

石器　XIXF16f区から出土した砂岩 (859) は、一面に砥石に使ったと考えられる擦過痕がある。サヌカイト片1点も出土。

**3号方形周溝墓**

№3—E (XIXF17g区—1・2層、XIXF17f区—2層、XIXF16f区1層、XIXF16g区—1・2層) 3号方形周溝墓の北～南に走る溝。1層からコンテナに2.5箱、2層から1.5箱分出土。

〈1層〉　弥生土器 (331～334) (第53図　図版三九)

・第II～III様式　壺A、甕bの口縁部破片がみられる。口縁部端面に刻み目文をもつものなどである。他地方の胎土のものが多いが、壺Aに生駒西麓産のものもある。

・第III～IV様式　XIXF16g区から壺A、受口壺、細頸壺 (332)、鉢B、蓋、脚部、甕b (334) などがある。XIXF17f区からは無頸壺B (333) が出土。壺Aは口縁端面に短線文を施す。甕b (334) は口縁部が「く」の字形に外反し、端部が上方に肥厚する。無頸壺B (333) は外面の施文の上に縦位にヘラミガキを加える。内面は黒色を呈する。

石器　XIXF16g区から石鏃 (866)、楔形石器 (867)、サヌカイト片4点が出土。石鏃 (866)

は凸基有茎式のもので先端を欠く。楔形石器（867）は二縁辺を調整する。

〈2層〉　弥生土器（331・335・336）（第53図、図版三九）

・第II～III様式　鉢A、脚部など他地方の胎土のものが少量みられる。

第III様式　壺A（331・335）、受口壺（336）、鉢A・B、甕bなどがある。壺A（335）は口縁端面にヘラによる刻み目を斜格子状に施す。他地方の胎土。受口壺（336）は厚手で口縁部の下端に面をもつ。

石器（第86図、図版六九）　XIXF16g区から石庖丁（868）、サヌカイト片1点が出土。

№3—N（XIXF16g区—1～層、15g区—1・2層、14g区—1層、14g・h区—2層）3号方形周溝墓の北側、東～西南に走る溝。1層からコンテナに2.5箱、2層から2箱強、3層・4層からは少量ずつ出土。

〈1層〉　弥生土器（338～341・1056）（第53図　図版三七・三八）

・主な土器　XIXF15g区から鉢A（349）がほぼ完形のまま出土。鉢B（341）は胴部の一部分欠失のため穿孔をうけたかどうかは不明。甕（1056）は全体の4割位の破片を欠失する。

・第II様式　XIXF15g区から他地方の胎土の壺A、鉢A、高杯B、甕bなどが出土。壺Aは口縁部下端に刻み目文を施す。甕bは体部からゆるやかに外反し、外面口縁部下から胴部にかけてハケ目調整するもの。

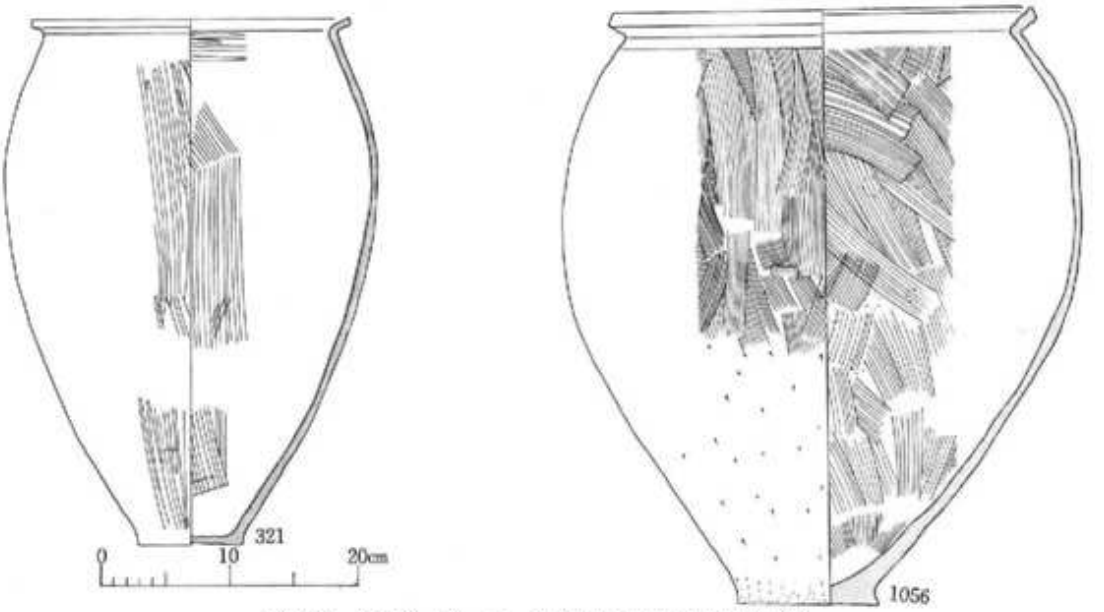
・第III～IV様式　XIXF15g区から出土した壺D（340）、細頸壺（338）、鉢A（349）、鉢B（339・341）、高杯B、脚部（337）、甕a（1056）、底部（343～348）などがある。壺D（340）は口縁端部を下方に肥厚する。他地方の胎土。細頸壺（338）は口縁部が内方を向く。幅の狭い列点文、直線文を施す。鉢A（349）は口縁部に凹線文3条施す。橙色系の他地方の胎土。鉢B（341）は大型のもので、口縁端部が外反して下方に肥厚するのに対し、鉢B（339）は矩形の段状口縁部である。（339）の体部の簾状文の原体は長い。底部は生駒西麓のものが多い。高杯Bは口縁端部が下方に垂下しない白色系の他地方の胎土。甕（1056）は1・2層出土の甕a（321）と共に甕棺の可能性も考えられる。底部（347）は植物繊維の圧痕をもつ。

石器（869・870）（第87図、図版六七・六九）　XIXF16g区から磨製石剣（869）、石庖丁（870）が出土。磨製石剣は粘板岩製で、先端部のみを残す。断面は菱形をなしやや厚手のもの。斜め方向に研磨されている。

〈2層〉　弥生土器（321・350～363）（第54・55図、図版三七・三八・四〇）

・主な土器　3号方形周溝墓の北西角にあたるXIXF14g・h区から、穿孔を受けた土器や完形に近い土器などがかたまって出土。壺A（350）、壺D（352）は底部に穿孔。壺D（351）は底裏面から穿孔をうける。後者の穿孔の例は4号方形周溝墓の西南角から出土した壺A（405）にもみられる。高杯B（356）は杯部の下位に穿孔をうけ、口縁部の垂下部の一部を打ち欠く。甕a（321）は1～2層にわたって出土。

・第II～III様式　XIXF14g・h、15・16g区から他地方の胎土で壺A、無頸壺A、甕bの口縁部の小片が多くみられる。




第50図　NO.3—N　1、2層内出土土器実測図（1/6）

・第Ⅲ～Ⅳ様式　壺A（350）、壺D（351～353）、鉢A（354・355）、高杯B（356・357）、脚部（358）、甕a（360・362・363）、甕b（361）、底部（364～366）がある。壺A（350）は無文で、西ノ辻N式に相当するもの。壺D（351）は小型である。口縁部は下方に肥厚する。壺D（352）は淡橙色で口縁部は上方に肥厚する。他地方の胎土。壺D（353）の口縁部は頸部からそのまま外反するもの。全体の1/3位の破片がバラバラになって出土したもの。器壁が非常に薄く全体をハケ目で仕上げる。鉢A（354・355）は口縁上端部に面をもつ。高杯Bは口縁部上端面に斜格子文、杯部内面はハケ目の上から放射状にヘラミガキを施す。脚部（358）は裾部に円孔を2ヵ所に穿つ。裾部内面は横方向にヘラ削り。甕a（321）は甕（1056）と共に、底部、胴部の一部破片が5号方形周溝墓に近い溝（№5—W）から出土。№5—Wからも大甕b（324）が出土しているが先にもふれたようにこれらが甕棺に使われたものかどうかは不明。甕a（360）は口縁部が「く」の字形に外反する。胴部下を横方向に削り、底部をヘラ磨きする技法は壺D（351）や№1—Wの壺C（236）に似る。甕（361～363）は内外面が剥離。甕a（362）の頸部の内面は横方向にヘラ磨きをする。甕b（361）は口縁部端面に刻み目文を施す。

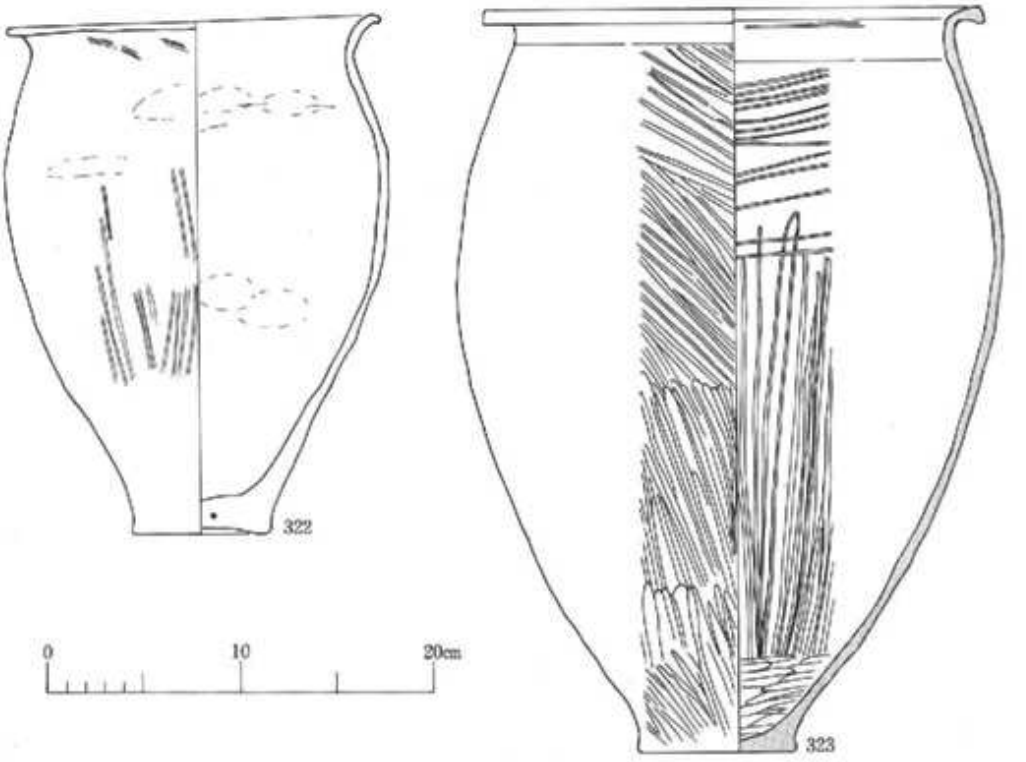
土製品（第84図、図版六六）　XIXF14g・h区の壺A（350）などの土器と共に円板（824）が出土。壺の胴部片を打ち欠いたもので、表面にヘラミガキが残る。生駒西麓産。

石器　サヌカイト片7点が出土。

〈3層〉　XIXF16g区から壺D（359）、底部（366）が出土。壺D（359）は口縁部が上方に肥厚する。他地方の胎土である。

**4号方形周溝墓**

〈主体部〉方形周溝墓域内のXIXF13f区から合わせ口甕棺が横位の状態で出土。北側の甕b（322）は第Ⅱ様式の時期のもので大和型の他地方の胎土。南側の甕a（323）は第Ⅲ様式でも




第51図　4号方形周溝墓出土合口甕棺（1号甕棺）実測図

古い時期の河内に多い特徴をもつもの。

№4—E（XIXF14e・f区—1～3層、XIXF13e・f区1層）

6号方形周溝墓と共有する溝。北～東に通じる溝で2号墓、5号墓の周溝に続く。1層からコンテナに0.5箱、2層から1箱、3層から少量出土。

〈1層〉　弥生土器

・第Ⅲ様式　1層からの出土量は少ない。XIXXF14e区から甕bが出土。口縁部端面に1本の沈線を引きその上に刻み目文を施す。他に2層の土器に接合できる破片がみられる。

〈2層〉　弥生土器（367～373）（第55図、図版四〇）

・第Ⅱ～Ⅲ様式　XIXF14e区から出土。壺（368）は頸部をハケ目調整する。他地方の胎土。

・第Ⅲ～Ⅳ様式　壺A（367）、高杯A（369）、脚部（370）、甕（371～373）がある。壺A（367）は口縁端部が厚い。簾状文を施す。高杯A（369）は口縁端部が内方を向く。体部に凹線文を有する。赤茶色を呈す生駒西麓の胎土。甕a（371）はあまり張り出さない胴部から口縁部が「く」の字形に外反する。口縁端部はわずかにのびる。内外面をハケ目調整。更に外面胴底部をヘラ磨きする。底面の器壁はやや厚めである。甕b（373）は口縁部が水平近く屈曲後、端部が上方に肥厚する。他地方の胎土。

石器（第87図、図版七四）　XIXF14e区から削器（871）が出土。原礫面を残す。サヌカイト片1点も出土。

その他　木片が出土。

№4－S（XIXF14f区－1・2層、XIXF13g区－1・2層、XIXF13f区－1・2層）

4号方形周溝墓の東～南に走る溝。5号墓の北側の溝と共有する。1層からコンテナに3.5箱分出土。特にXIXF13g区からかたまって出土。2層からはコンテナに1.5箱出土。XIXF13f区に多い。

〈1層〉　弥生土器（374～390）（第56図、図版四一・四二）

・主な土器　底部に穿孔をうけた壺A（378）、鉢A（380）がそれぞれXIXF13f、13g区から完形のまま出土。更に13g区からは台付鉢B（382）、蓋（383）、14f区から底部に穿孔を受けた甕（389）が出土。

・第II～III様式　XIXF13f・g区から出土している。壺A（374・375）、壺C（376）、細頸壺（377）、鉢A（380）、甕b（385～388）、脚部（384）、底部（1034）などがある。壺A（374）は長い頸部から大きくひらく口縁部で、肥厚した下端部に刻み目文、頸部に直線文を施す。壺A（375）、壺C（376）は頸部から外反した口縁部は面をもって終る。細頸壺（377）は二次口縁をつくる。従って頸胴部の直線文＋扇形文は二次口縁部までみられる。これらの他に壺Aなどの口縁部の小片があるがいずれも他地方の胎土である。鉢A（380）は体部外面を横方向に削るが、かなり厚手のもので、底面の厚みは2.7cmを測る。甕b（387・385）はいずれも大和型甕の典型的なもので（387）は浅黄橙色、（385）は白黄色を呈す。甕b（386）は胴部が大きく張り出す。色調は浅橙色。脚部（384）は小型品で鉢の脚部と考えられる。甕b（388）は口縁端部に面をもつ。色調は橙色。他に体部（390）、木葉痕をもつ底部（1034）などがある。これらはいずれも他地方の胎土。

・第III～IV様式　XIXF13f区から出土した壺A（378）、壺B（379）、受口壺、蓋（383）、鉢A（387）、13g区から出土した台付鉢B、甕b（389）などがある。壺A（378）は丈高の胴部に短い頸部をもち、口縁端部が下方に長く拡張されたもの。壺B（379）は頸部内面にしぼり目を残す。森井氏編年に照合すると「B」タイプの時期と考えられる。蓋（383）はほぼ完形のまま出土。台付鉢B（382）は全体に厚っぽい作りであるが、特に脚部は非常に厚い。柱状部の器厚は1.6cmを測る。体部外面は櫛描文の上に3条ずつ暗文を加飾する。甕（389）は底部をヘラ削りする。

土製品（第84図、図版六六）　XIXF13f区から紡錘車（825）が出土。最初から紡錘車として製作したもの径は5cm、厚みは1.5cm、孔径0.6cmを測る。他の土製円板に比べると重く47.1gある。生駒西麓産の胎土。

〈2層〉　弥生土器（391～399）（第57図、図版四一～四三）

・主な土器　XIXF13f・g区にわたって破片が出土した壺A（395）は底部に大きな穿孔をうけ、口縁部も一部分打ち割られている。

・第II～III様式　XIXF13g区から壺A（392）、壺D（391）、無頸壺A、鉢A（396）、甕b、底部などが出土。壺A（392）は口縁下端部に刻み目文をつける。鉢A（396）は小型品で口縁端部は内方を向く。木葉痕をもつ底部がある。

・第Ⅲ様式　壺A（393～395）、甕b（397～399）などが出土。壺A（395）は森井氏編年の「B」タイプ、壺A（394）は頸部上位に直線文2条を切れ切れに施す。壺A（393）の口縁端部は厚っぽい作り。（393・394）は同氏編年では「A」タイプに近いものといえよう。甕b（397～399）は口縁部が「く」の字形に外反するものでいずれも他地方の胎土。

石器　（第87図、図版七四）　XIXF13g区から石核（872）、XIXF14f区から削器の破片（873）、サヌカイト片の数点が出土。

№4—W（XIXF13区—1層、XIXF12f区—1層）

4号方形周溝墓の西側にあたる。西～南へ走る溝。1層からコンテナに2箱分出土。

〈1層〉　弥生土器（400～409）（第57・58図、図版四二・四三）

・主な土器　XIXF12f区から底部下位に穿孔を受けた壺A（400）、甕a（404）、XIXF13g区の4号墓の南西角から壺A（406）が横位で、そのすぐ下から底裏面に穿孔を受けた壺B（405）、壺A（406）のすぐ近くから杯部と脚部に穿孔をうけた高杯B（407）、杯部の一部を欠失する高杯A（408）が出土。高杯A（408）の欠失する箇所に穿孔を受けた痕跡がうかがえるがはっきりしない。

・第Ⅱ～Ⅲ様式　壺A（400・401）、壺B（405）と他地方の胎土の壺Aの口縁部の破片がみられる。壺A（400）は全体に器壁が厚く頸部外面には指押えを残す。胴底部内面は黒色を呈す。壺A（401）は口縁端部が上・下にわずかに肥厚する。端面にヘラ磨きを施す。頸部から胴部にはやや稚拙な簾状文・直線文を施す。壺B（405）は口縁端部が、水平近くに折れ曲がり、端面に波状文を施す。頸胴部の波状文・簾状文は稚拙で底部はヘラ削りする。また、底面に穿孔をうける例は先に見た№3—Nの壺Dにみられる。

第Ⅲ～Ⅳ様式　壺A（402・406）、高杯A（408）、高杯B（407）、甕a（404・409）、脚部（403）がある。XIXF13f区で出土した壺A（406）は横位で出土しており、胴部中位を欠失している。器壁は非常に薄く均正のとれた形を呈し、口縁部から胴部まで丁寧な櫛描文を施し、更に円形浮文を加飾したもの。森井氏編年の「D」タイプに相当する。壺胴底部（402）は「C」タイプになるだろう。内面は黒色を呈す。高杯B（407）は杯部に1孔、脚部の相対する位置に穿孔を2孔有する。高杯A（408）は外面全面をヘラ磨き。脚部内部はどちらも全面をヘラ削りする。脚部（403）は柱状部のみをヘラ削りし、裾部はナデ調整。甕a（404・409）は口縁部が「く」の字形に外反する。（409）は口縁部があまり拡張しない。

土製品（第84図、図版六六）　XIXF12fから円板（827）が出土。甕の胴部片を打ち欠いて周縁を磨いたもの。生駒西麓の胎土。

№4—N（XIXF13e区—1・2層、12e～f区1・2層）

4号方形周溝墓の北側で北から西に走る溝。1層からコンテナに3箱分、2層からは少量出土している。

〈1層〉　弥生土器（411～413）（第59図、図版四四）

・主な土器　XIXF12e区の4号墓の北西角から壺A（413）、壺D（411）、鉢A（412）が出土。

壺A（413）は胴部の破片を一部欠失しているため穿孔を受けたかどうかは不明。壺D（411）は胴部中位に穿孔を受ける。

・第II～III様式　壺D（411）、鉢A（412）、鉢B、脚部、底部などがある。壺D（411）は肩部が強く張り出す。口縁部の拡張がみられない。鉢A（412）は口縁上端部に内傾する面をもつ。橙色を呈す。壺D（411）、鉢A（412）は他地方の胎土である。

・第III様式　壺A（413）は頸部に断面三角形を貼り付ける。色調は白灰色で摂津地方の胎土。

土製品　（第84図、図版六六）　XIXF12e区から円板（826）が出土。土器破片の周縁を磨いたもの。他地方の胎土である。

石器　（874～877）（第87図　図版七四）　XIXF12f区から磨製石剣（874）、12e区から楔形石器（876）、13区から尖頭器（875）、楔形石器（877）が出土。他にサヌカイト片6点が出土。磨製石剣（874）は粘板岩製で刃部の先端部を欠く。断面は菱形である。柄部は6.1㎝。身幅は3.2㎝、厚さは0.65㎝である。

〈2層〉　弥生土器（410）（第59図）

・第II様式　XIXF12e区から壺A（410）が出土。頸部から口縁部は水平に外反し、端部は肥厚気味。頸部～胴部中位まで直線文を施す。文様間をヘラ磨きする。他地方の胎土である。

**5号方形周溝墓**

№5－N（XIXF15f区―1層、XIXF14f区―1・2層）

5号墓の東～西に走る溝。4号墓の南側の溝と共有する。1層・2層共出土量は少ない。

〈1・2層〉　弥生土器（414～416）（第59図、図版四四）

・主な土器　XIXF14f区2層から無頸壺B（415）、その近くから蓋（414）、1層から台付鉢（416）が出土している。無頸壺B（415）は底部下位に、台付鉢A（416）は体部下位にそれぞれ穿孔を受ける。

・第II～III様式　他地方の胎土で甕bの口縁部、器壁の厚い底部片などがみられる。

・第III～IV様式　受口壺、無頸壺B（415）、台付鉢A（416）がある。受口壺は口縁端面に縦位の直線文を施すもの。無頸壺B（415）は口縁部が「く」の字形に外反して終るもの。台付鉢A（416）は口縁部に細かく刻み目文、脚部の裾部に円孔と竹管文を施す。

土製品（第84図、図版六六）　XIXF14f区から円板（830）が出土。周縁を磨いた生駒西麓産の胎土。

石器（第87図、図版六八）　XIXF14f区1層から太型蛤刃石斧（878）の刃部が出土している。

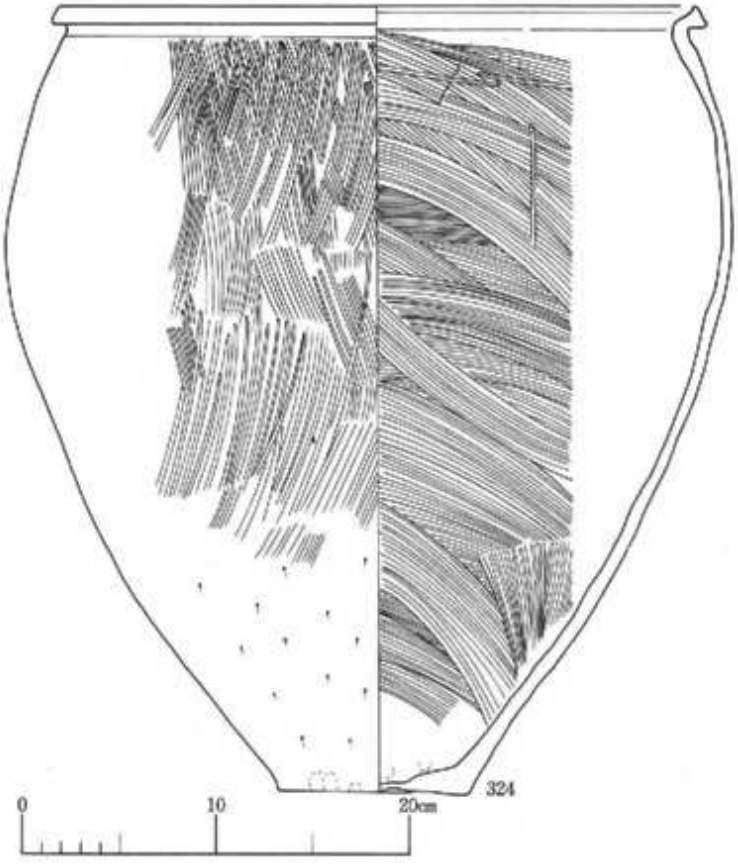
№5―W　（XIXF13～14g区、14h区―1層、14g・hライン―1・2層）

5号墓の西北～西南に走る溝で3号墓の北側の溝と結ばれている。1層からコンテナに1箱分と2層からごく少量出土した。

〈1層〉　弥生土器（417～431）（第60図、図版四四～四六）

・主な土器　XIXF14g区から壺D（422・423）、細頸壺（421）、甕（324）、14g・h区から壺

A（420）、無頸壺B（424）、台付甕（425）、鉢A（427）などがかたまって出土した。壺D（423）は底面に近いところ、壺D（422）は底部に穿孔を受けている。細頸壺（421）は胴部中位と底部に穿孔を受ける。底部の孔は0.7×0.7cmと小さい。大小の2孔を有する例はNo.1—Wの壺A（201）がある。小孔を穿つ例は台付甕（425）の体部下位にもみられる。壺A（420）、鉢A（427）は底面に近い部位に穿孔を受ける。壺D（422・423）は他地方の胎土である。



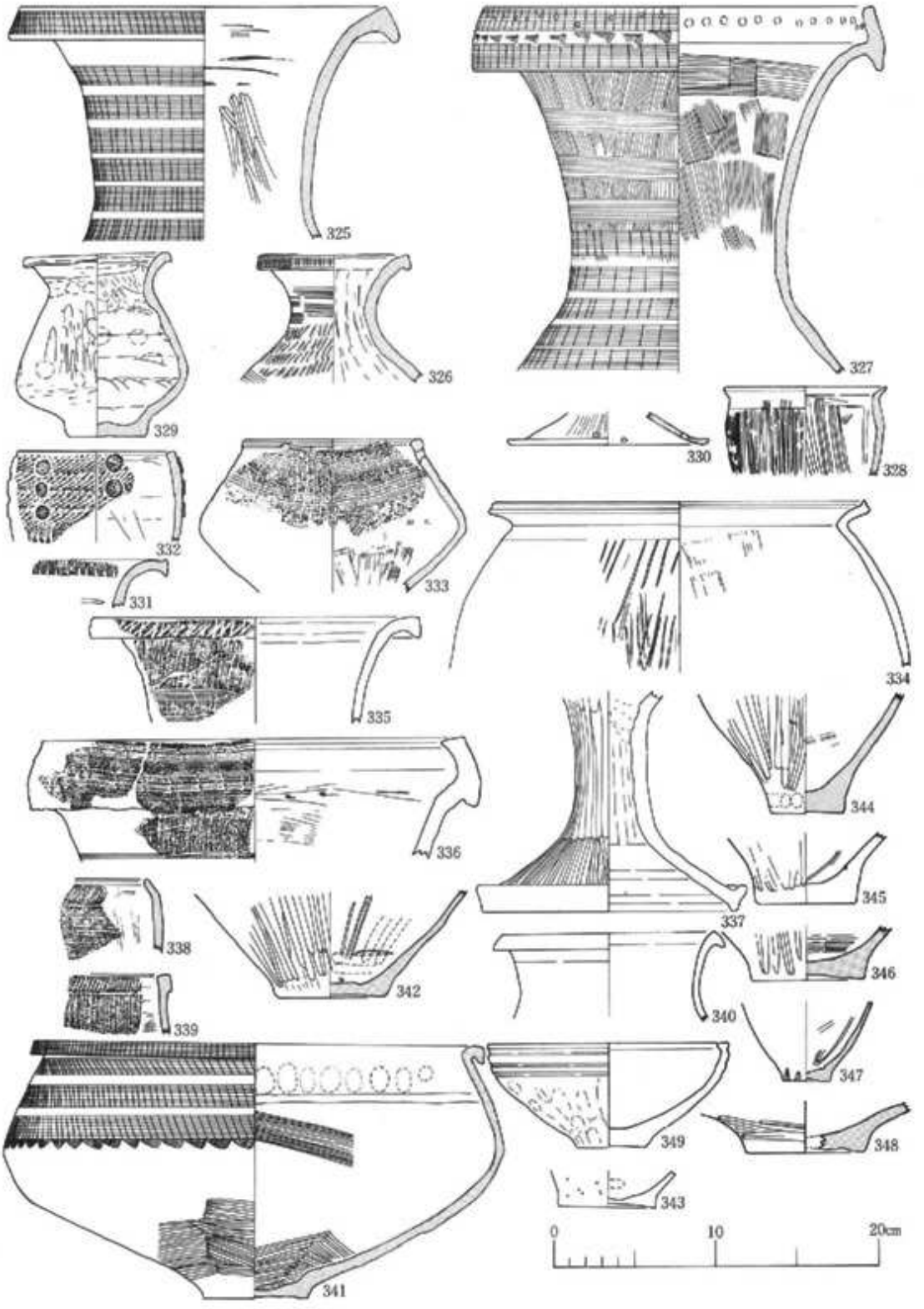

第52図　NO.5—W　1層内出土土器実測図

・第II～III様式　壺A（418・419）、壺胴部片、甕b（429・430）がある。壺Aは（418）は口縁外端面に刻み目文、内面に竹管文を施す。壺A（419）は口縁端面に波状文、内面は横方向の粗いハケ目を施す。他地方の胎土。甕b（430）は典型的な大和型の甕だが（429）は胴部が大きく張り出す他地方の胎土である。

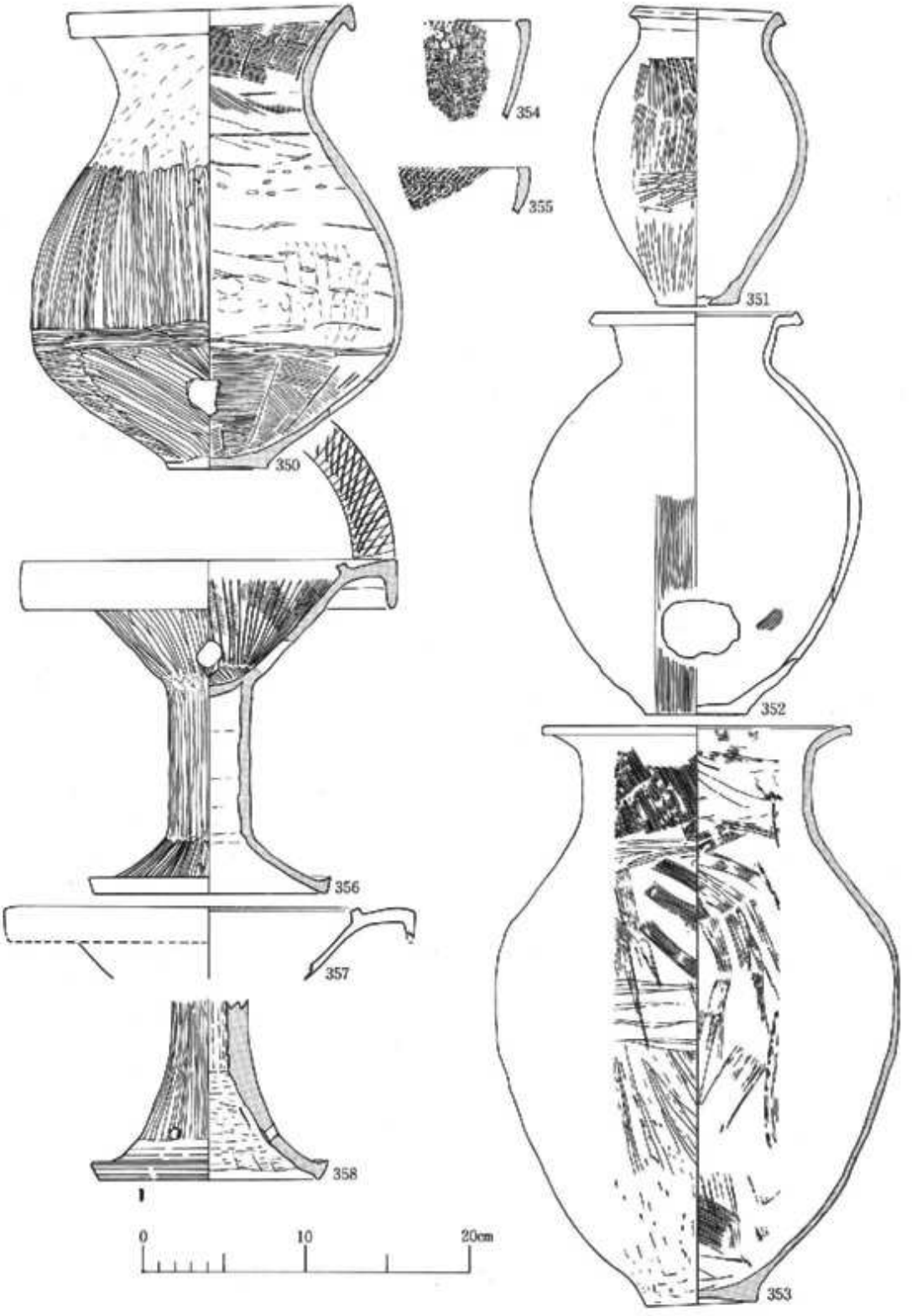
・第III～IV様式　主な土器の項で示した土器以外に細頸壺（417）、鉢B（428）、甕a（431）などがある。XIXF14g区から出土した壺D（422・423）は形態・技法共によく似る。壺A（420）は全体に厚っぽい作りで形も一定したものではない。細頸壺（421）は簾状文を胴部上位まで飾り、最下段に列点文を施す。口縁端部には刻み目文を施す。森井氏編年を参考にすると壺Aは「B」タイプの時期のものだろう。細頸壺（417）は口縁端部が内方に拡張されるもの。無頸壺B（424）は完形のまま出土。無文である。鉢A（427）は小型品である。鉢B（428）の口縁端部は矩形をなす。台付甕（425）は内外面をヘラミガキする。台付鉢A（426）は把手付で体部は列点文を施し、短い脚部をつける。大型甕b（324）は共有するNo.3—Nの溝出土の大甕2個体と共に甕棺として使われたものかもしれない。

石器（第87図、図版七〇）　XIXF14g区から石鏃（879）が出土。

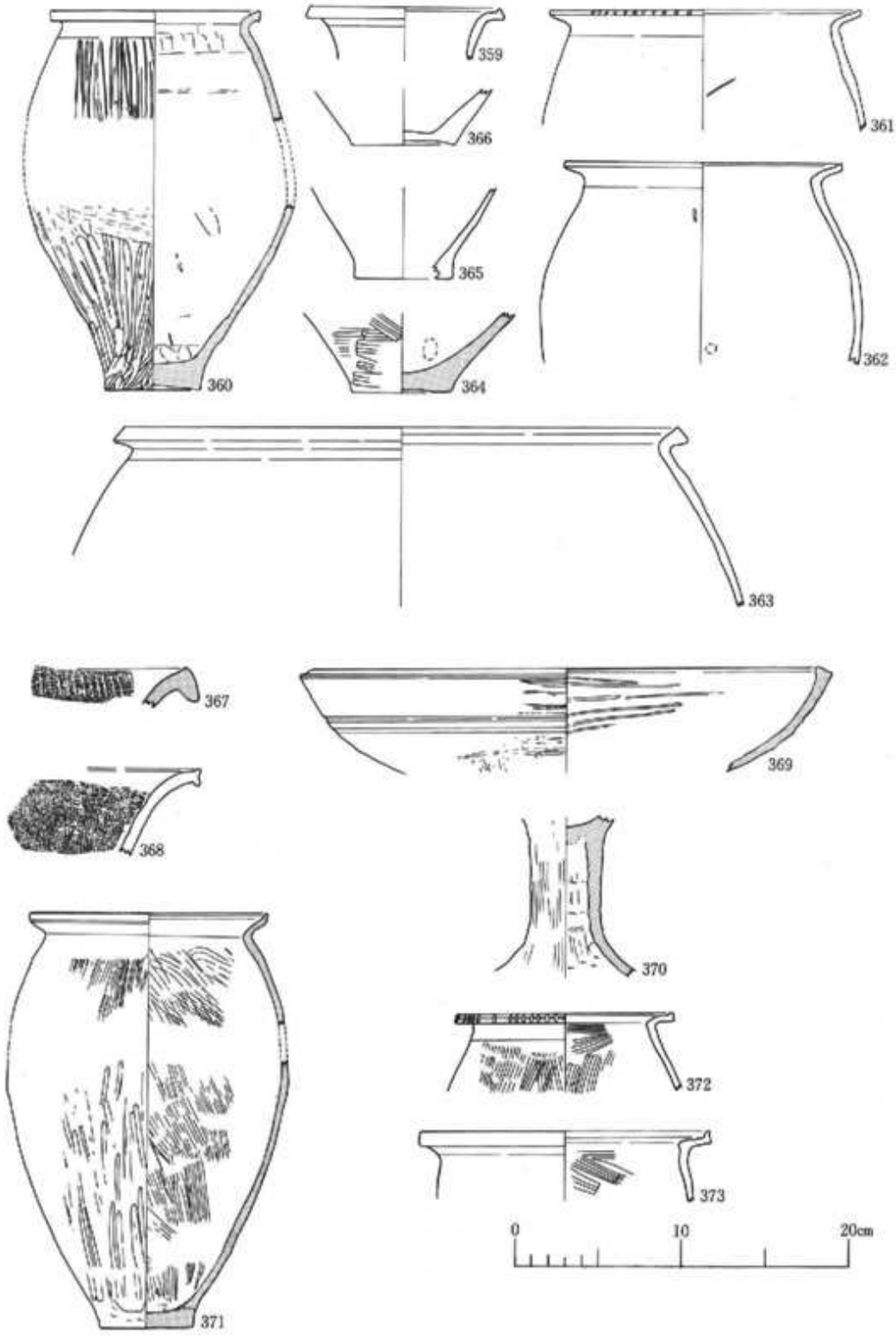
土製品　（828・829）（第84図、図版六六）　XIXF14h区から円板（828・829）が出土。円




第53図　NO. 2—N 1・2層、2—W、NO. 3—E・N 1層出土土器実測図

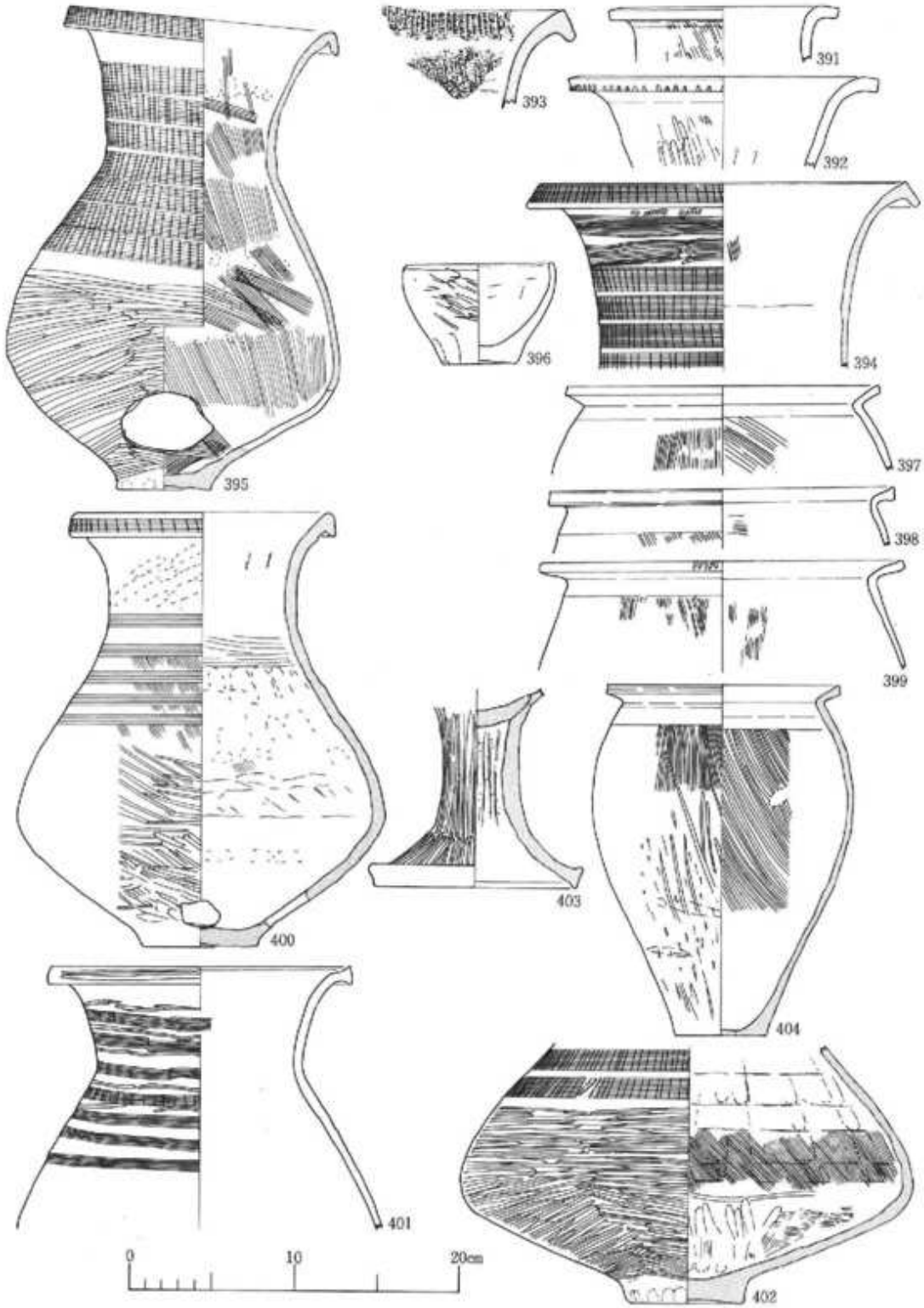



第54図　NO. 3—N 2・3層内出土土器実測図

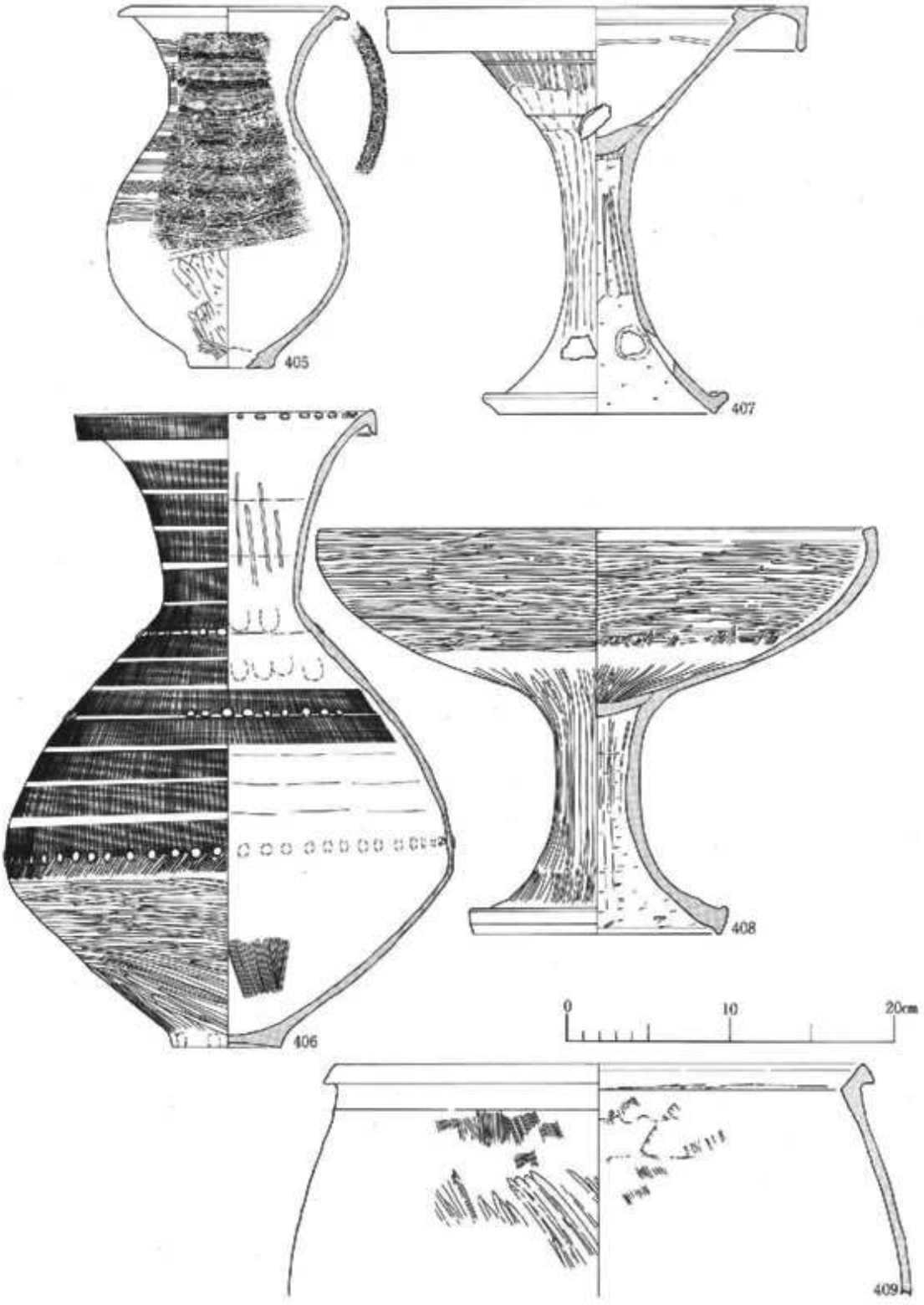



第55図　NO. 3—N 2層、NO. 4—E 1層内出土土器実測図

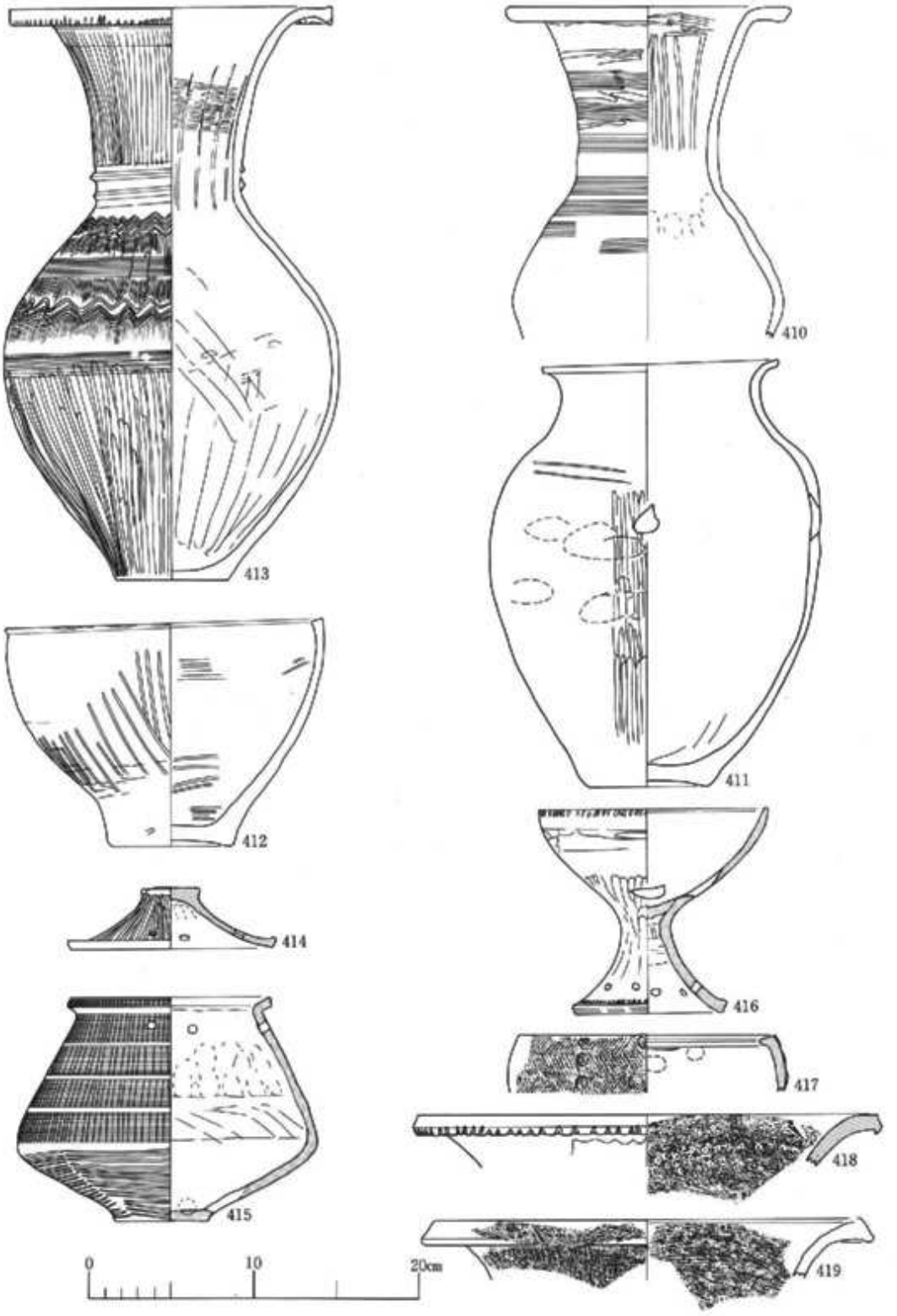
第56図　NO.4－S　1層内出土土器実測図



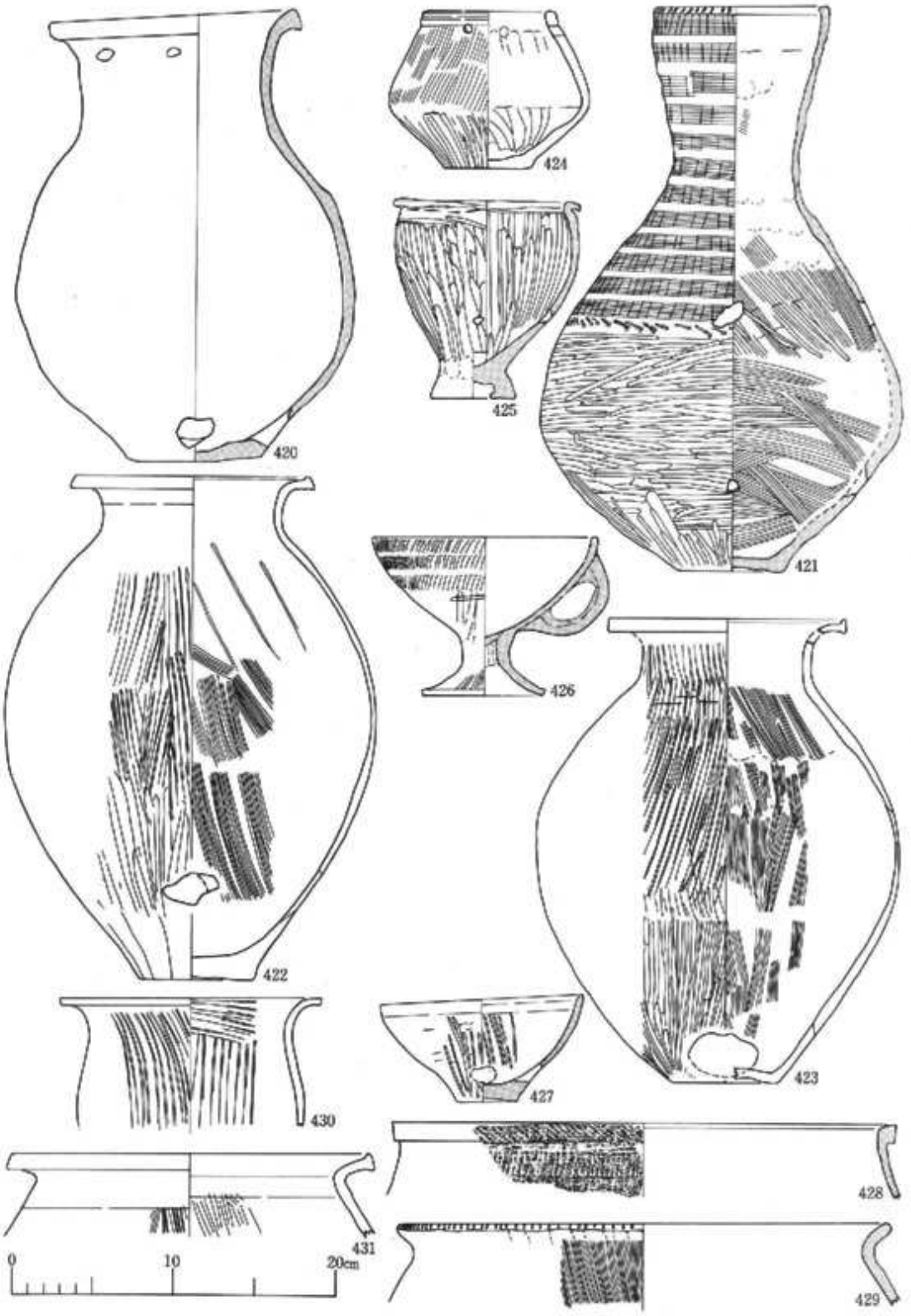

第57図　NO.4—S 1・2層内出土土器実測図




第58図　NO.4—W 1層内出土土器実測図




第59図　NO.4—N 1層　NO.5—N・W 1層内出土土器実測図




第60図　NO.5—W 1層内出土土器実測図

板（828）は部分的に磨いた箇所がみられる。生駒西麓の胎土。円板（829）は甕の肩部の一部を打ち欠いたもので、叩き目を残す。他地方の胎土。

〈2層〉　弥生土器　他地方の胎土の甕bの口縁部片がある。

**6号方形周溝墓**

№6—S

2号墓の北溝（2—N）、4号墓の東溝（4—E）と共有する溝であるが、6号墓に伴う出土遺物はない。

**7号方形周溝墓**

№7—E（XXF4 f区—1・2層）

7号墓の北～南へ走る溝。1層からコンテナに6箱分出土。2層からはごく少量出土。

〈1層〉　弥生土器　（441～472）（第62～64図、図版四七～五一）

・主な土器　XXF4 f区から直口壺（441）、水差（444）が出土。

・第II～III様式　壺A（433・434）、受口壺（435・436）、直口壺（440）、鉢A（471）、甕（459～469）、底部などがある。壺A（433）は口縁端面に波状文、頸部に直線文を施す。施文は稚拙で頸部の直線文は何回か継ぎ足している。壺A（434）は頸部から口縁部が水平に外反し端部を下方に拡張する。端面に刻み目文を施す。他地方の胎土。受口壺（435・436）は頸部から口縁部がひらき上方に長く拡張するもの。（435）は拡張した口縁端面の上段は稚拙な波状文が途中簾状文に変るもの、下段は幅の狭い簾状文を何回か継ぎ足す。（436）は大型（口径41.6cm）の壺で上方に拡張した口縁部の器壁は非常に厚い。直口壺（440）は口縁端部に不規則な刻み目文、頸部はハケ目の上に波状に上下する直線文を施す。焼成は非常に悪くもろい。黒色を呈す。（435・436・440）は他地方の胎土。甕b（460）は胴部が張り出さない。口縁部は「く」の字形に外反する。底部はヘラ削りする。甕b（467）は張り出した胴部から口縁部が直立気味にひらくもの。（459・460）の口縁部外面に指押えを残す。甕b（461）は胴部からゆるやかに口縁部が外反する大和型の典型的なもの。甕b（462～469）は胴部から「く」の字形に外反しハケ目調整するもの。甕b（464）は胴部外面を横方向にミガキ調整する。蓋（470）は口縁部が大きくひらく。蓋（470）、甕b（459・460・462・464・467）は他地方の胎土。鉢A（471）は器壁が非常に厚い。壺の底部を二次口縁に転用したものか。甕b（461・468・469）は口縁端面に刻み目を施す。生駒西麓の胎土。

・第III様式　壺A（437・438）、直口壺（441）、受口壺（439）、細頸壺（443）、水差（444）、無頸壺B（446）、鉢A、鉢B（445）、甕（447～458）などがある。壺A（437）は口縁部が上下に肥厚し、頸部が長くなるもの。口縁端面に波状文、頸部はハケ目の上に直線文を施す。壺（442）は口縁内面に同心円文のスタンプを押す。下図は№10—Sから出土した壺で同一個体である。壺（437・442）は他地方の胎土。直口壺（441）は口縁部を欠失する。器表面の剝離が著しいが無文である。細頸壺（443）は直線文と流水文を組み合わせたものと考えられる。内外面共黒色を呈す。水差（444）は口縁部と胴部の一部を欠失する。無頸壺B（446）は体部

外面に波状文と直線文を施す。内面は粗いハケ目の凹凸がはっきり残る。橙色を呈す。他地方の胎土。鉢B（445）は胴部が丸く張り出し口縁部が短く外反する。口縁端面、体部に列点文を施す。甕には口縁部が内外面共「く」の字形に外反するもの（454～456・458）がある。甕b（455・456）は口縁部内面にハケ目を施す。甕b（456）の体部内面は横方向のハケ目がみられる。甕（447・448・452～456・458）は他地方の胎土。甕（449・450）は赤灰色を呈す。甕は煤が付着し器表面の剥離したものが多い。

土製品（831～833）（第84図、図版六六）　ＸＸＦ４ｆ区から紡錘車（831）、円板（832・833）が出土。いずれも周縁を打ち欠いたままである。紡錘車（831）は表・裏から錐状の道具で穿孔。円板（822）は表面から錐状の道具で穿孔するが貫通しないままである。円板は器壁の薄い甕の胴部を転用したもの。

石器　（880～885）（第89図、図版七二）

ＸＸＦ４ｇ・ｆ区から削器（880～882）、細部調整のある破片（883～885）が出土。削器（880・882）は外湾する刃部を作る。（880）は一端を尖頭器状に尖らせる。（881）は翼状形を呈す。

その他の遺物　種不明の動物遺体がみられる。

〈下層〉　弥生土器　出土量は非常に少なく、図化不能なものばかりである。

・第Ⅱ～Ⅲ様式　壺頸部（588）、頸胴部、甕ｂ、鉢Ａ、蓋のつまみ部などが出土。壺（588）はNo.７―Ｓの２層から出土した破片と同一個体で口縁端部を欠失する。口縁部内面に横方向のハケ目、頸部外面に縦方向のハケ目を施す。白色を呈す。甕ｂの口縁部も何点かみられる。蓋のつまみ部は非常に厚い。外面はヘラ削りする。以上は他地方の胎土。壺頸胴部は頸部に直線文、下端に扇形文を施し文様間、胴部をヘラ磨きする。鉢Ａは体部から口縁部まで内湾し、口縁端部は丸く納めるもの。無文。

第Ⅲ様式　水差、甕ｂの口縁部がある。水差は小型品で抉りをもつ。簾状文と直線文の原体は管状のもの。内面は黒色を呈す。甕ｂは口縁上端部が拡張する。他地方の胎土。

No.７―Ｓ（ＸＸＦ４ｆ区―２・３層、３ｆ～ｇ・２ｇ区―１・２層）

７号墓の南側を東から西に走る溝。１層からコンテナに14箱、２層から２箱、３・４層から少量出土している。１層には多量の土器片が出土しているが完形になるものは少ない。

〈１層〉　弥生土器（473～513・523～540・542～546・548～555）（第65～68図、図版四七～五二）

・主な土器　ＸＸＦ３ｇ区から壺Ａ（475）、ＸＸＦ３ｆ区から無頸壺（484）、蓋（513）、甕ｂ（532）などが出土。壺Ａ（475）、甕（532）は胴部に穿孔をうける。無頸壺（484）は壺の肩部に二次口縁をつくりその下に２孔一対ずつ２ヵ所穿孔する。蓋（513）は甕蓋である。

・第Ⅱ～Ⅲ様式　壺Ａ（473～475）、壺Ａ′（476）、壺Ｂ（479）、受口状壺（478）、細頸壺（482）、無頸壺Ａ（484）、無頸壺Ｂ（483）、鉢Ａ（493～499）、鉢Ｂ（503）、甕（523～533・536・539・540・542～544）、底部（555）などがある。壺Ａ（473）は口縁端部に刻み目文を施す。

壺A（474）は胴部があまり締らないまま直立気味の頸部につづき、口縁端部が外反する。口縁下端部は少し肥厚する。口縁端面に櫛状の原体による刻み目文、頸部に細かい目のハケ目の上から同じ原体と思われるもので直線文を施す。胴部は無文である。壺A（475）は長胴部から口頸部がなだらかにひらくもので、口縁端面にはヘラ圧痕文を施す。頸部には直線文の間に波状文を施す。第II様式の土器である。壺B（479）は強く張り出す胴部から頸部下は締まり口頸部が広がる。口縁端面に細かい波状文、頸部に上下に揺れる直線文を施す。受口状壺（478）は短く外湾する頸部から口縁部が上方に長く拡張される。焼成は悪く器壁はボロボロ剥離する。外面は黒色、断面は茶色を呈す。口縁部・肩部に稚拙な施文がみられる。細頸壺（482）は口縁外端部に刻み目文、頸部に直線文を何回かに分けて一周させたもの。無頸壺A（484）は先にも記したように壺を転用したもの。第II様式のものと考えられる。無頸壺B（483）は体部から口縁部が外反し、下端部がわずかに拡張する。体部内面は頸部を締めるためしぼり目が残る。鉢A（493）は逆「ハ」の字形にひらく口縁部。鉢A（494）は半円球の形態で、口縁部を丸くおさめる。鉢A（493・494）は内外面共ハケ目調整。鉢A（495・496）は内湾する体部から口縁端部は内方に少し肥厚し、上端面をつくる。鉢A（497）は口縁部に幅の狭い簾状文を施す。鉢A（499）は口縁上端面に列点文風の刻み目を施す。鉢A（495）は口縁部に刻み目を施す。鉢B（503）は体部から口縁部が水平近く外反する。口縁端面に刻み目文を施す。脚部（1052）は柱状部の器壁が非常に厚く、柱状部の下は裾部で閉じる。裾径は7.3㎝、甕b（523・526～528）は胴部からなだらかに口縁部が外反し、口縁端面に刻み目文を施す。甕b（526）は口縁端部が少し肥厚する。甕b（524・525・530～532）の口縁部の外反は先の例よりやや「く」の字形に近くなるが、胴部は口縁部より張り出さない。甕b（524・531）の器表面は煤が付着し剥離する。穿孔を受けた甕b（532）は内面胴部下位に焼きこげを残す。甕b（529・533）は口縁部が短く外反するもの。（528・529）は口縁下端部に刻み目文を施す。甕（536・540・543～545）はいずれも胴部はあまり張り出さない。甕a（536）は口縁端面に刻み目文を施す。甕（544）の胴部は丸味をもつ。甕（540）は胴部に指押えの痕跡がみられる。底部（488）のように底面が非常に厚いものや（555）のように木葉痕をもつものがある。壺A（474）、A′（476）、受口壺（478）、細頸壺（482）、鉢A（493～495）、無頸壺A（484）、無頸壺B（483）、甕b（523・526）、底部（486・487）は他地方の胎土。甕b（529・533）は角閃石微少量含むが他地方の胎土かもしれない。

・第III～IV様式　壺A（477）、直口壺（480・481）、無頸壺（506）、鉢A（500～502）、鉢B（504・507～509）、脚部（511・512）、蓋（510・513）、甕（534・535・537・538・545・546）、底部（549～554）などがある。壺A（477）は口縁端面に刺突文をもつ。森井氏編年の「D」タイプになる。頸胴部で頸部下に貼り付け凸帯文をもつものもある。内外面ハケ目調整。直口壺（480）は波状文と直線文を施す。（481）は無文である。（480・481）は共に口縁上端に面をもつ。無頸壺B（506）は段上口縁部をもつ。鉢A（500）は無文で内外面をヘラミガキする。脚部がつくかもしれない。鉢A（501・502）、鉢B（507～509）の口縁端部は短く拡張する。

脚部（511・512）は裾端部までなだらかにひらき、端面をつくり出すもの。脚部（514）は裾端部を上方に少し拡張する。甕蓋（513）は内外面をハケ目調整する。甕a（537）は内面の口縁部下位を横方向にハケ目、体部は斜め方向のハケ目の上にヘラミガキする。甕a（538・546）は（545）と共に内面は肩部を横方向をヘラミがキするもの。甕bはいずれも「く」の字形に口縁部が外反し、胴部は口縁部より大きく張り出す。煤が付着したものが多い。底部（554）は側面に円孔を穿つ。鉢B（504）、蓋（513）、底部（550～553）は他地方の胎土。

土製品（第84図、図版六六）　ＸＸＦ３・４ｆ区から円板（834）が出土。甕を打ち割ったもので他地方の胎土。一部欠失する。

石器（886～890）（第88図、図版六七・七〇・七二）　ＸＸＦ３ｆ区から打製石剣（886）、石小刀（887）、ＸＸＦ３ｇ区から叩き石（889）、ＸＸＦ３～４ｆ区から尖頭器の一部（888）、凝灰質頁岩製の砥石（890）が出土。打製石剣（886）は基端部を欠失するが、両面中央部に大剥離面を残す。断面は四辺形を呈す。基部に着装痕がみられる。石小刀（887）は一面の中央部に大剥離面、他面には自然面を残す。周縁部は細部調整で仕上げる。砥石（890）はかなり破損している。

〈２層〉　弥生土器（第69～73図、図版四七・四九・五四～五八）

主な土器　ＸＸＦ３ｇ区から口縁部を一部分欠く壺C（569）、甕蓋（566）がほぼ完形のまま、甕（651）が割れて出土。ＸＸ３ｆ区から甕b（643）、ＸＸＦ３ｆ・ｇ区から甕a（617）が出土。

第Ⅱ～Ⅲ様式　壺A（559～561・569～574）、壺B（577～579）、壺C（580）、壺頸部（582）、（585～589）、無頸壺（590）、脚部付把手付鉢A（562）、鉢B（592）・（593）、脚部（565・603～607）、甕蓋（566）、甕（567・568・615～621・625・636～642・648・651・652）、底部（630）などがある。甕（559～561）、鉢（562）は１層にわたって出土。

壺A（559）は口縁端面に波状文を施す。頸部には直線文を施す。森井氏編年の「A」タイプ、壺A（560）は頸部にハケ目調整、肩胴部に直線文を施す。白色系の色調を呈す。壺A（561）は口縁端面に波状文、頸部はハケ目調整のみ。壺A（569）は長胴にやや長い胴部から口縁部が大きくひらく。口縁端面には波状文、頸胴部はハケ目調整の上に直線文を施す。脚部付把手付鉢A（562）は短い脚部に三角形ないしは短形のいびつな透しを入れ、直口する体部に把手をつける。口縁端部に刻み目文、体部～脚部にハケ目調整をし、口縁部の下に直線文を施すもの。壺（571）・（573）は頸部から口縁部がなだらかにひらくが壺（569）と同じように長頸になると思われる。壺（571）は口縁下端部に刻み目文を施す。白黄褐色を呈す。壺（573）は口縁端面に波状文、頸部はハケ目の上に直線文を施す。壺A′（572）は長い頸部から口縁部が大きくひらく。口縁端部は上下に肥厚する。頸部はハケ目調整の上に下位の方に直線文を施す。内面は口縁部付近に横方向のハケ目。頸部は縦方向のハケ目調整。壺A（574）は球形に近い体部から頸部につづく。短い頸部は斜めにひらき口縁部が水平に外反する。口縁端面に列点文を施し、頸胴部は直線文を施し最下段に簾状文を付加する。壺A（570）は生駒西麓の胎

土に近いが、他の壺Aは白色～橙色系をした他地方の胎土。壺B（577～579）は短い頸部から口縁部がなだらかにひらく。壺B（578・579）は口縁端面に列点文を施し、頸部はハケ目調整する。壺C（576）は器壁が非常に厚く口頸部はやや薄くなる。球形に近い胴部から短い頸部をもち口縁部がひらく。口縁部上端面に刻み目文をつける。口縁部下から胴底部までハケ目調整をする。他地方の胎土で第II様式のもの。壺頸部はいずれも口縁部を欠き、大きな破片のまま出土。頸部（582）・（585～587）はハケ目調整に、直線文を施す。頸部（588）はNo.7－Eから同一個体の破片が出土。いずれも他地方の胎土。頸部（589）は外面をハケ目、内面をヘラミガキするもの。無頸壺（590）は体部から口縁部が「そのまま上方を向く。口縁端部に刻み目文を施す。体部には間隔の狭い簾状文を施す。鉢B（592）は体部が球形をなし、口縁部が丸味をもって外反する。体部外面はハケ目調整の下位を横方向にヘラミガキ。内面は指押え。鉢B（593）は半球形の体部から口縁部がひらく。外面はヘラミガキ。鉢B（592）は他地方の胎土。脚部（603）は裾端部が急にひらく。脚部（604～606）は柱状部を欠く。裾部はなだらかにひらく。脚部（565）は1層と2層から出土した破片はそれぞれ色調が全く違っていた。脚部（607）は杯部を欠失後、蓋に転用されたためか、裾部内面の周縁に煤が付く。脚部（607）以外のものは裾端部はあまり発達しないでそのままで終る。底部（608・609）は底面が非常に厚い。底部（608）は長い筒状の形態をなし、内外面共黒色を呈す。甕にはいろいろなタイプがみられる。甕a（617・652）、甕b（568・636～642・648・651）、その他の甕（567・615・618～621）などがある。甕（567・568・615～617・625）は1層からも破片の出土がみられた。甕（567）は器壁が厚く、頸部を指押えで強く押えつける。胴部下半をヘラ削り。甕（568）は大和型の口縁部に球形の胴部をもつ。外面胴部はハケ目の上にヘラミガキを施す。2例は生駒西麓の胎土。甕a（617・652）は口縁部がゆるやかに外反し、外面はハケ目調整の上をヘラミガキする。甕bタイプは非常に多くみられる。甕b（636・637・642）は口縁部がやや上向きに短く外反するものだが、甕b（638・644～646）はやや長くなる。甕b（640・647・648）は口縁部が外湾しながらひらく。甕（639）は「く」の字形に外反するなど、口縁部の形態が少しずつ異る。甕（615・618～621）は（567）と同じように胴部があまり張り出さない。外面の調整はヘラ削りがみられる。甕（619・623・625）は甕（617）と同じく器壁が非常に厚い。蓋（566）は頂部の中央が凹み、外湾しながら口縁部までひろがる。端部はそのままおさめる。蓋（606）は口縁部が水平に長く延びる。他地方の胎土のものが多いが、甕bなどに生駒西麓の胎土のものもみられる。

・第III様式　1層にわたって破片が出土したものに、壺（558）、受口壺（575）、脚部付鉢B（563）、鉢B（564）、甕（623・624・626・627）、底部（629）などがある。2層から出土したものは、細頸壺（581）、鉢B（594～598）、壺蓋（599・600・601）、甕（622～624・626・643・649・650・653）、底部（629～635・641）などがある。壺（558）は丈高の胴部から頸部が強く締まり、口縁部は逆「U」字形に拡張される。口縁内面に円形浮文、頸部にはハケ目調整後、断面三角形の貼り付け突帯、胴部に波状文をそれぞれ施す。外面は朱色を呈す。受口壺（575）

は全体に厚っぽい作りで、口縁端部上下に面をもつ。細頸部（581）は直線文が一周後に重なりあう箇所や、擬簾状文風になる箇所がみられる。頸部下に簾状文を施す。同一個体と考えられる胴部破片で直線文の間に扇形文を加配するものがある。鉢B（563）は脚部の中位以下を欠失す。口縁端部が下方に折れ曲る。端面に刻み目文、体部には直線文を施す。外面の体部下位、内面は横方向のヘラミガキ後、縦方向に中心に向って放射状ヘラミガキする。鉢B（564）は無文であるが細い幅のヘラミガキを内外面に施し光沢をもつ。鉢（594～596）は（564）の形態や施文に似る。鉢B（597）は段状口縁部であるが体部との間にすき間をもつ。鉢B（598）は矩形の段状口縁部。いずれも口縁部に刻み目文、体部には鉢（597）は簾状文、鉢（598）は擬簾状文と直線文を施す。壺蓋（599・601）は小型と大型であるが形はどちらも口縁端部が上方に拡張される。蓋（600）は小皿を逆さにした形。２孔１対を相対する位置にもつ。甕a（622・624・626・627）は口縁部がゆるやかに外反するもの。甕b（643・649・650・653）はやや丸く張り出した胴部から口縁部が「く」の字形に外反し、口縁端部が少し上方に肥厚する。甕（643）は口縁端部の一部分に刻み目文を、胴部上位に列点文を施す。底部は焼成後の穿孔をうける。底部（628～635）はいずれもヘラミガキを施す。底部（628）は側壁に、錐状の原体で内外面から穿孔する。他地方の胎土をもつ土器が非常に多い。

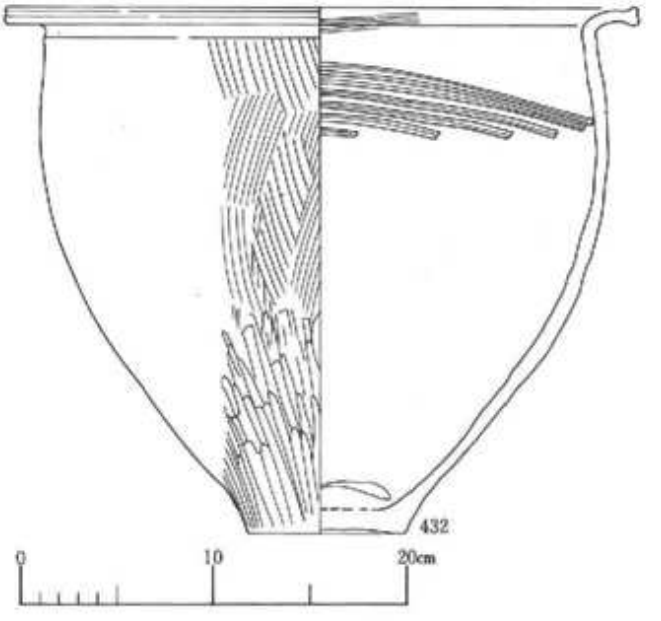
土製品（835～837）（第84図、図版六六）　ＸＸＦ３ｇ、３ｆ、３～４ｆ区からそれぞれ円板（835）、方板（836）、円板（837）が出土。円板（835）は周縁を研磨したもので大型品。表面にヘラ磨きを残す。方板（836）は周縁を研磨。白褐色で他地方の胎土。円板（837）は周囲を打ち欠いたもので、器壁の薄い甕を転用したもの。

石器（891～895）（第88・89図、図版六八・六九・七二）　ＸＸＦ３ｆ区から石庖丁（891）、ＸＸＦ３ｇ区から石庖丁（892）、石鏃の未製品（894）、投弾（895）

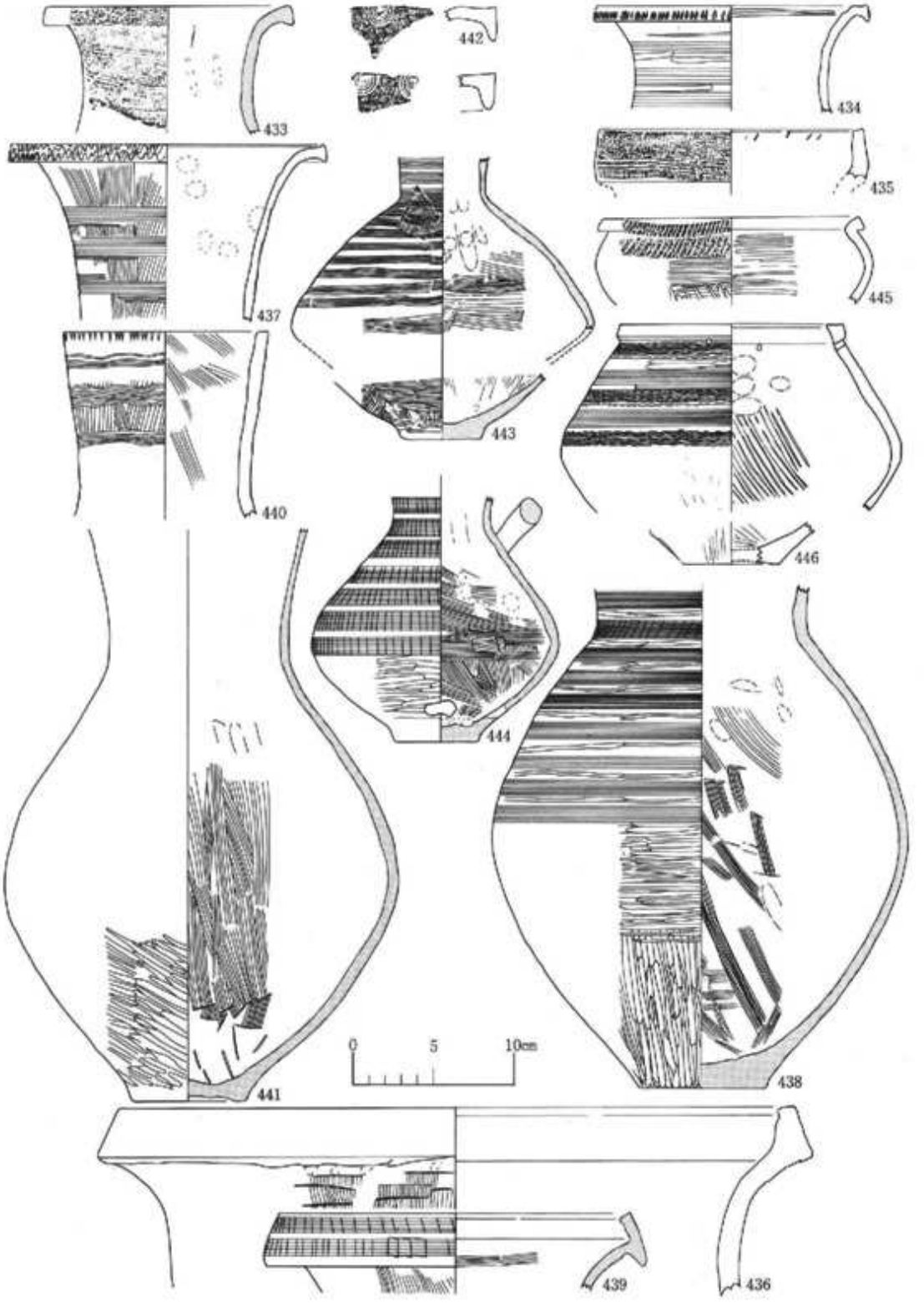
ＸＸＦ３ｆ・ｇ区から楔形石器が出土。石庖丁（891・892）は頁岩製のもの。（891）は約1/2残存。（892）は約1/3残存する。（893）は削器として使用したものとも考えられる。

動物遺体（図版三〇）　ＸＸＦ２ｇ区からイノシシ、３ｇ区からイヌ、３ｆ区からトリなどの動物遺体が出土。

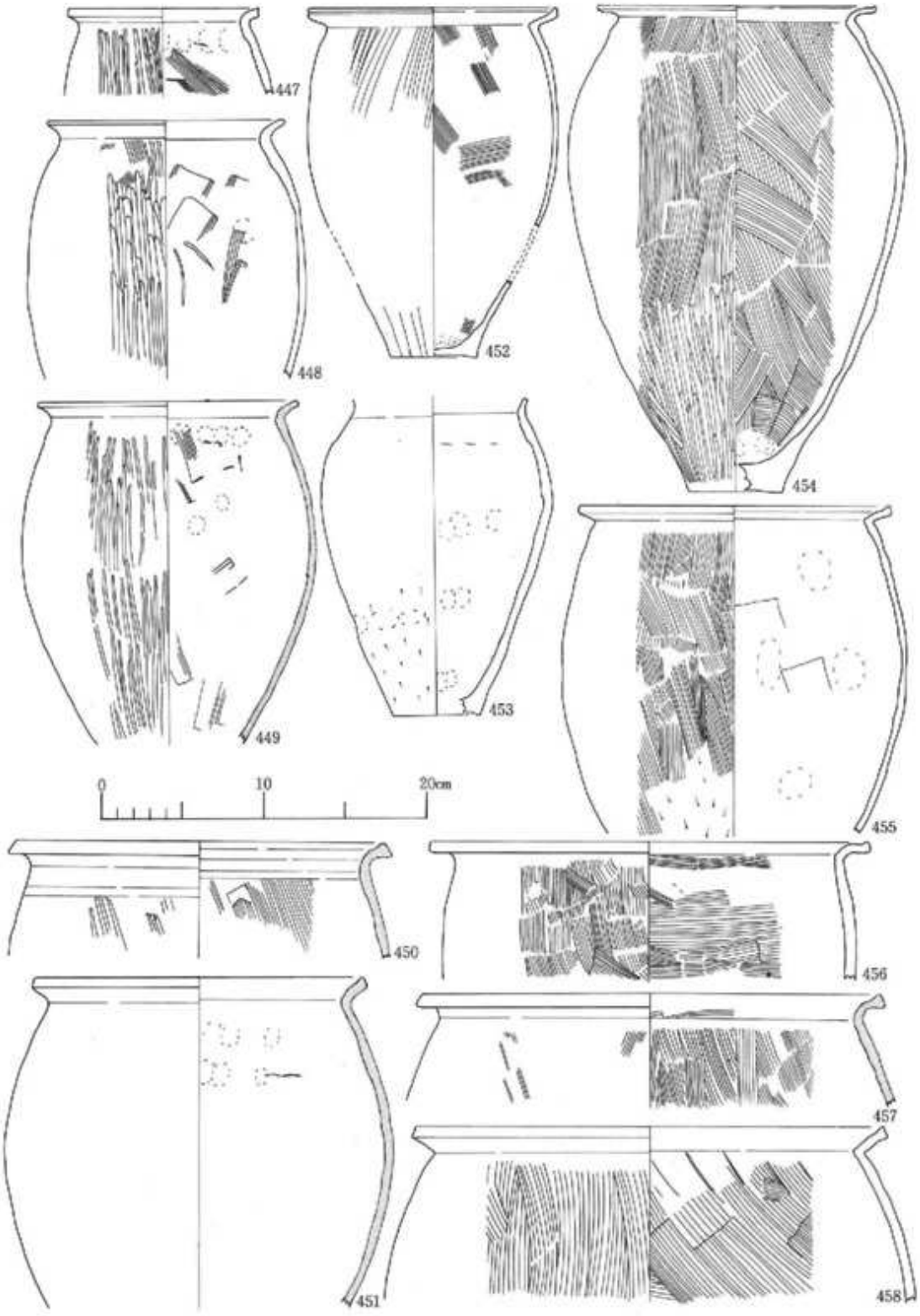
〈３層〉　・主な土器　甕（432）が出土。球形の胴部か



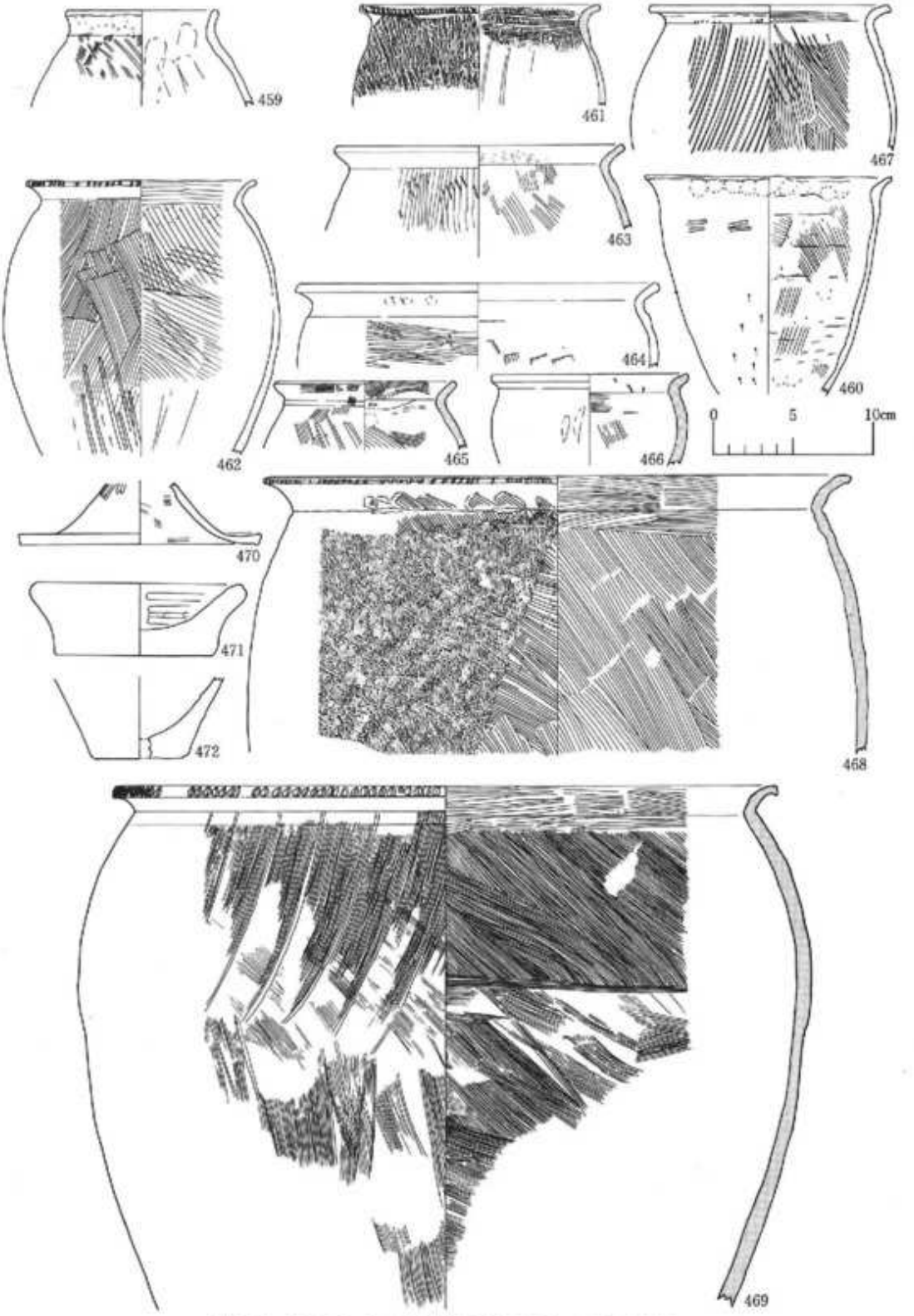

第61図　NO.７－S　３層内出土土器実測図



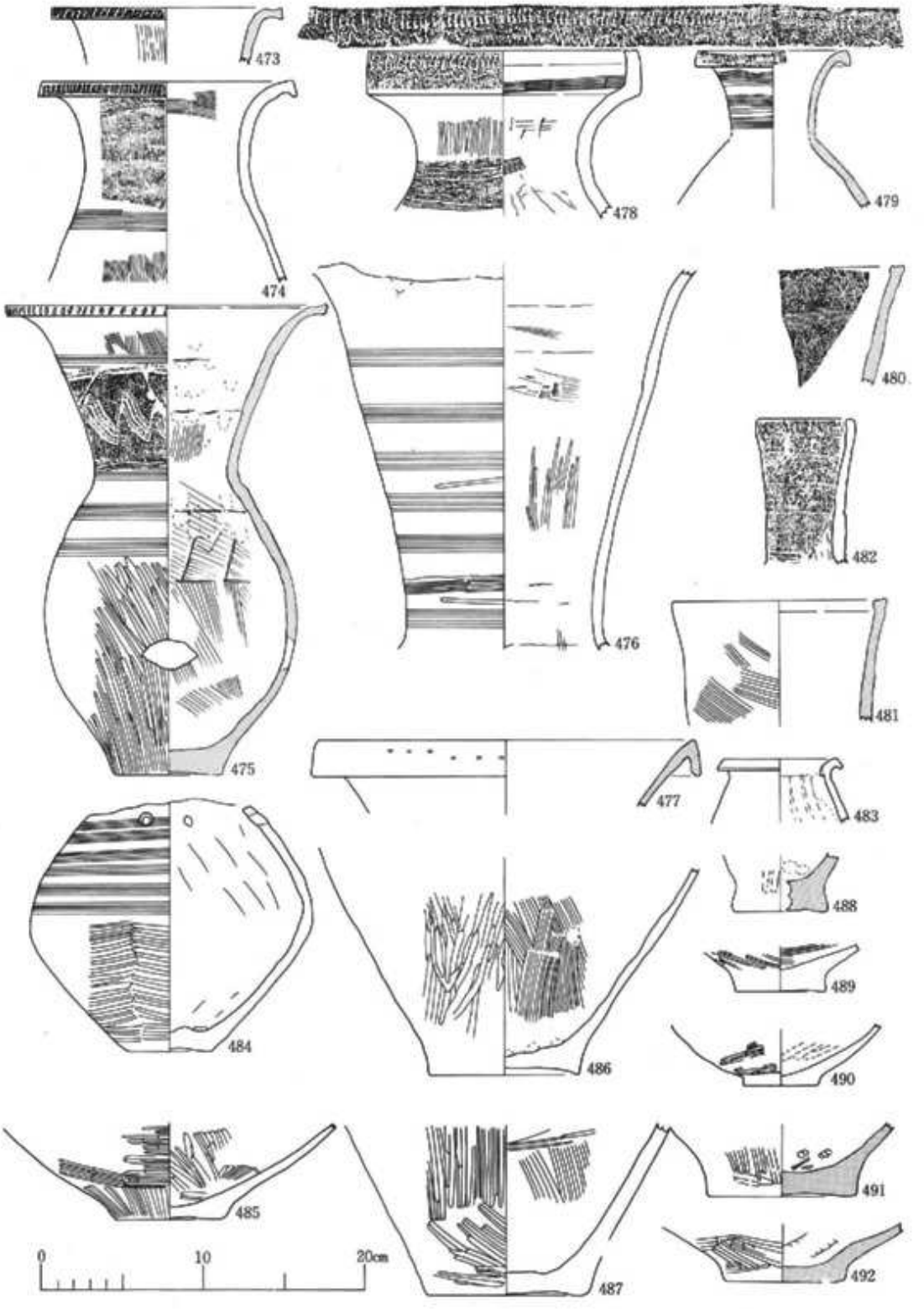

第62図　NO. 7－E　1層内出土土器（433～446）実測図



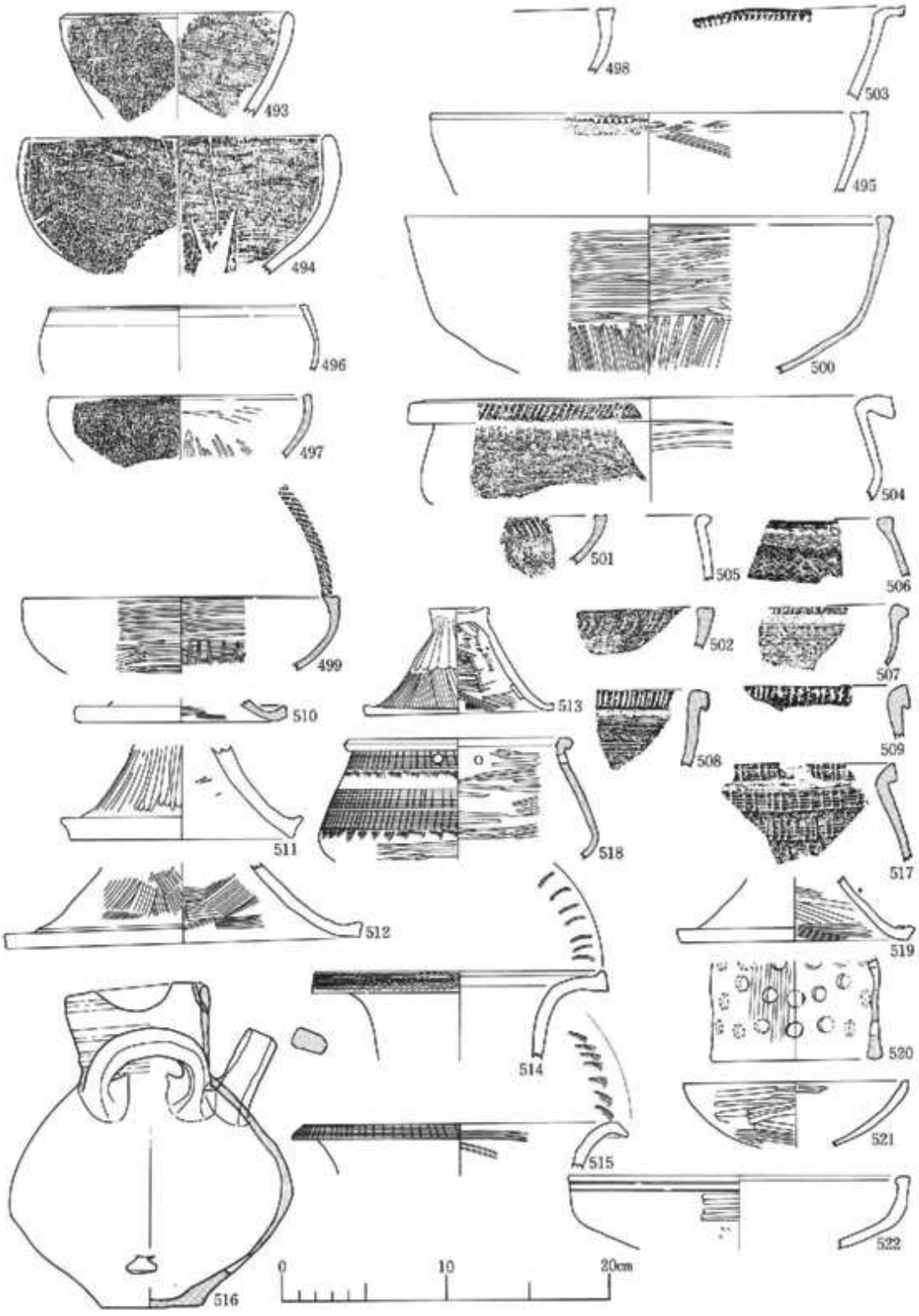

第63図　NO. 7－E　1層内出土土器（447～458）実測図



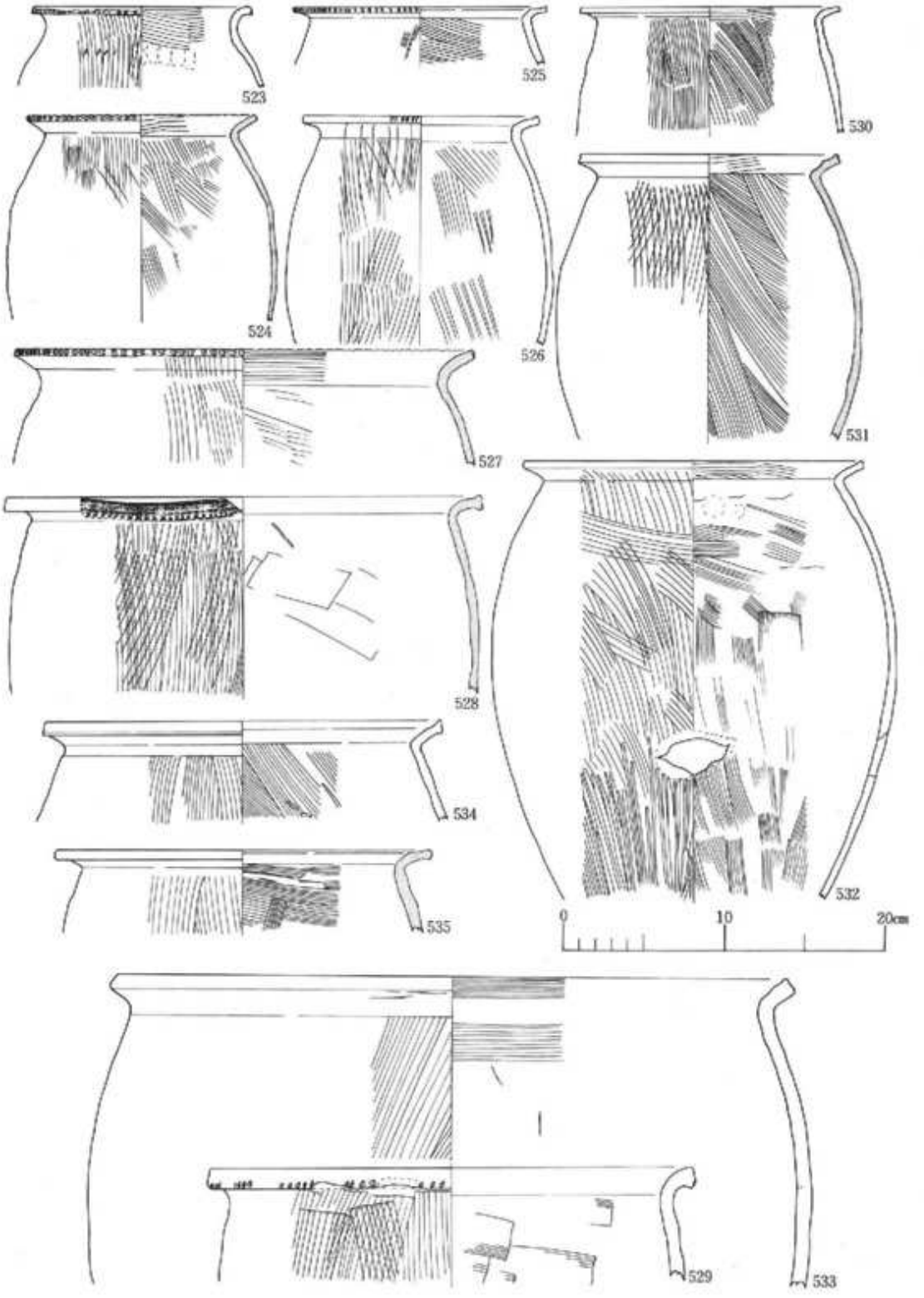

第64図　NO. 7—E　1層内出土土器（459～472）実測図



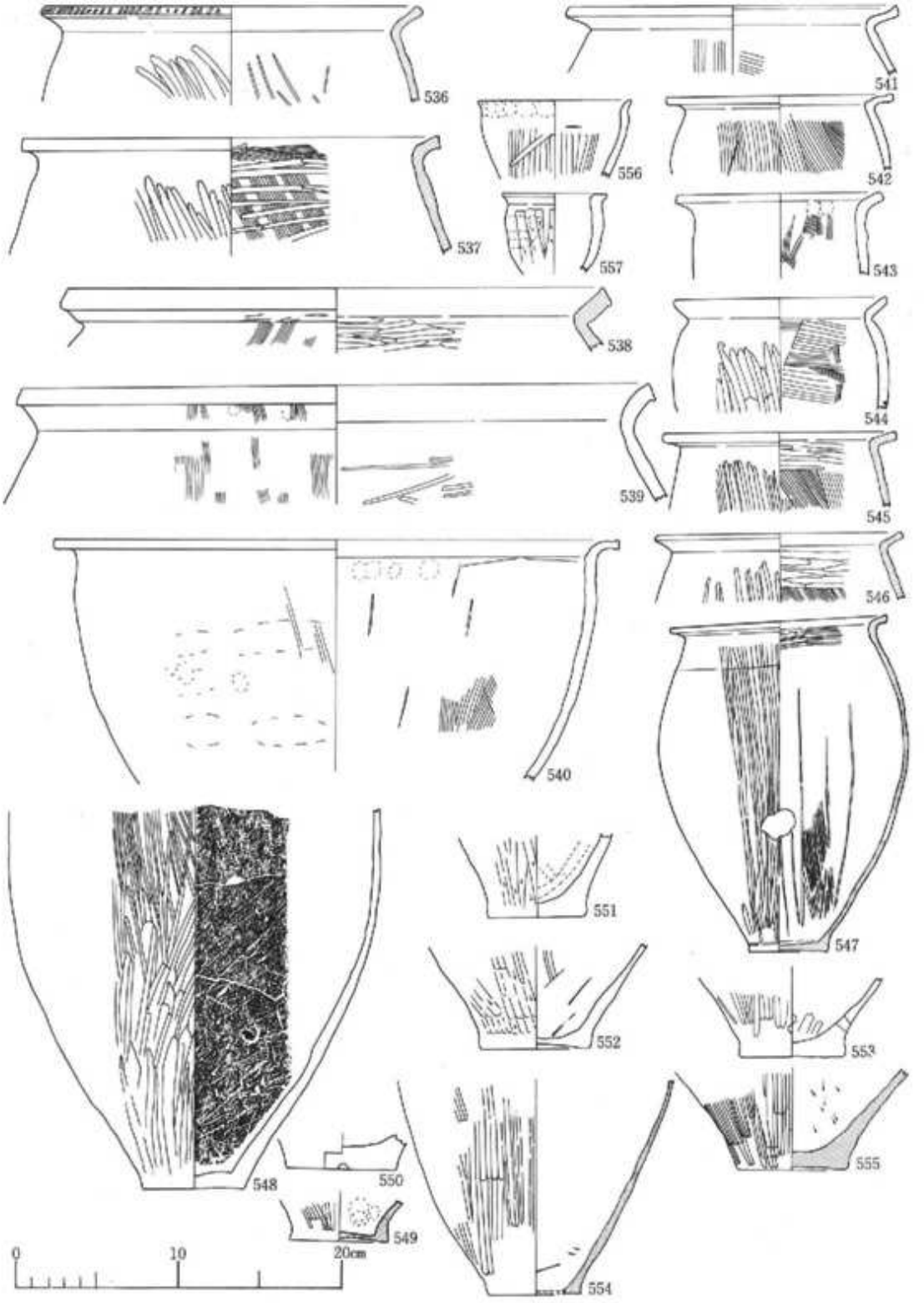

第65図　NO.7－S　1層内出土土器（473～492）実測図



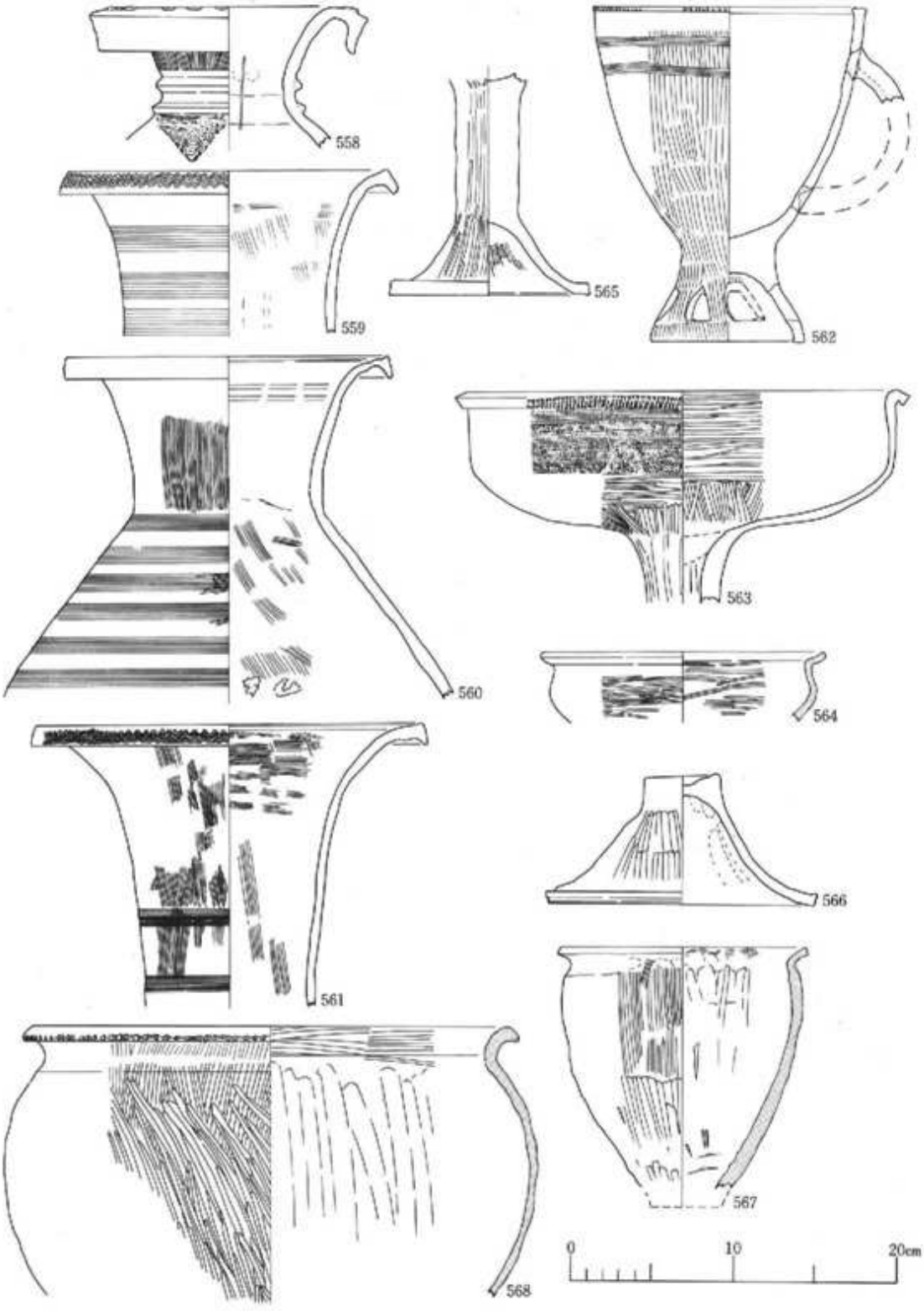

第66図　NO. 7—S・W 1層内　NO. 8—N・E 1層内（515・517・519～522）出土土器実測図



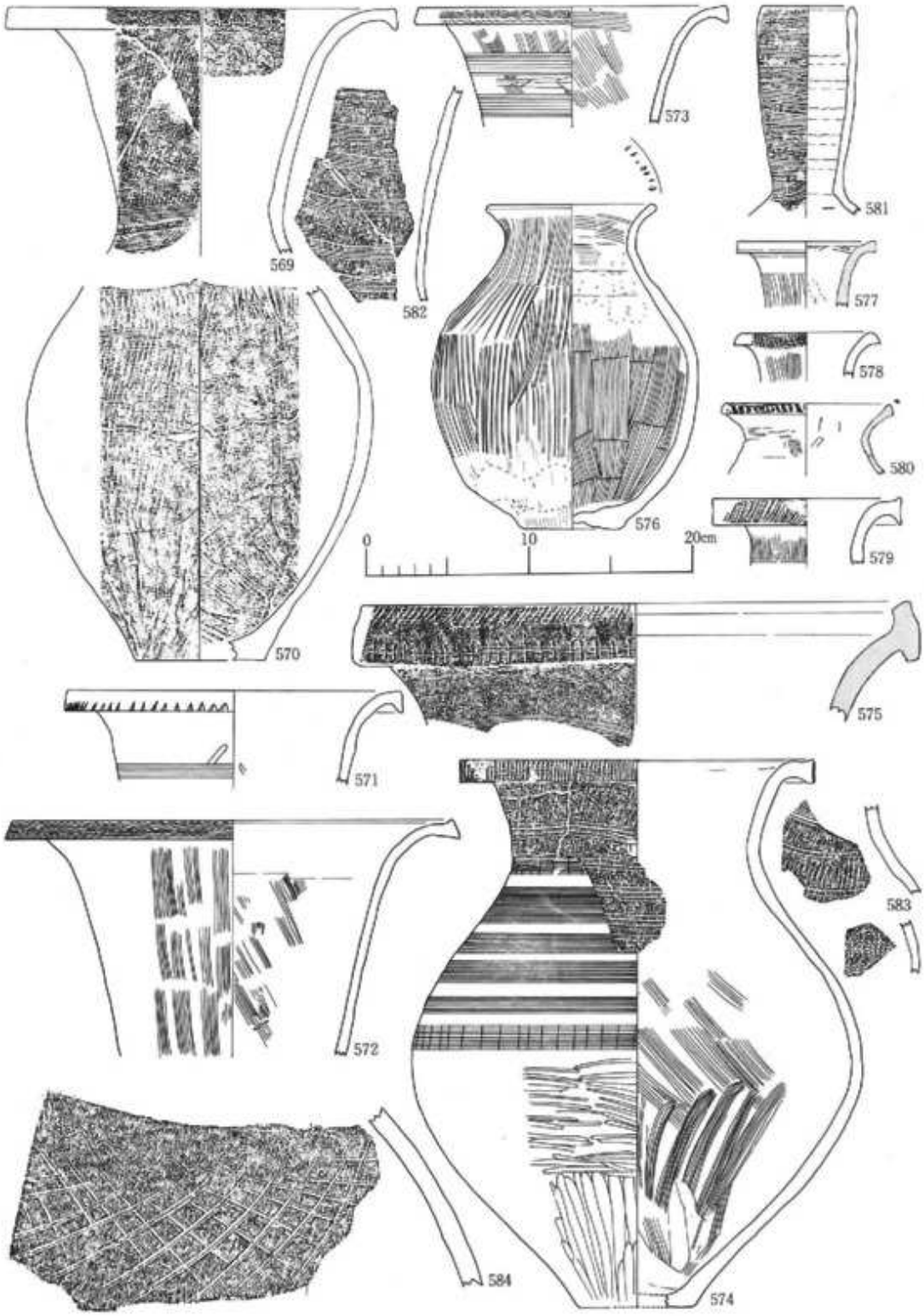

第67図　NO. 7－S　1層内出土土器（523～535）実測図



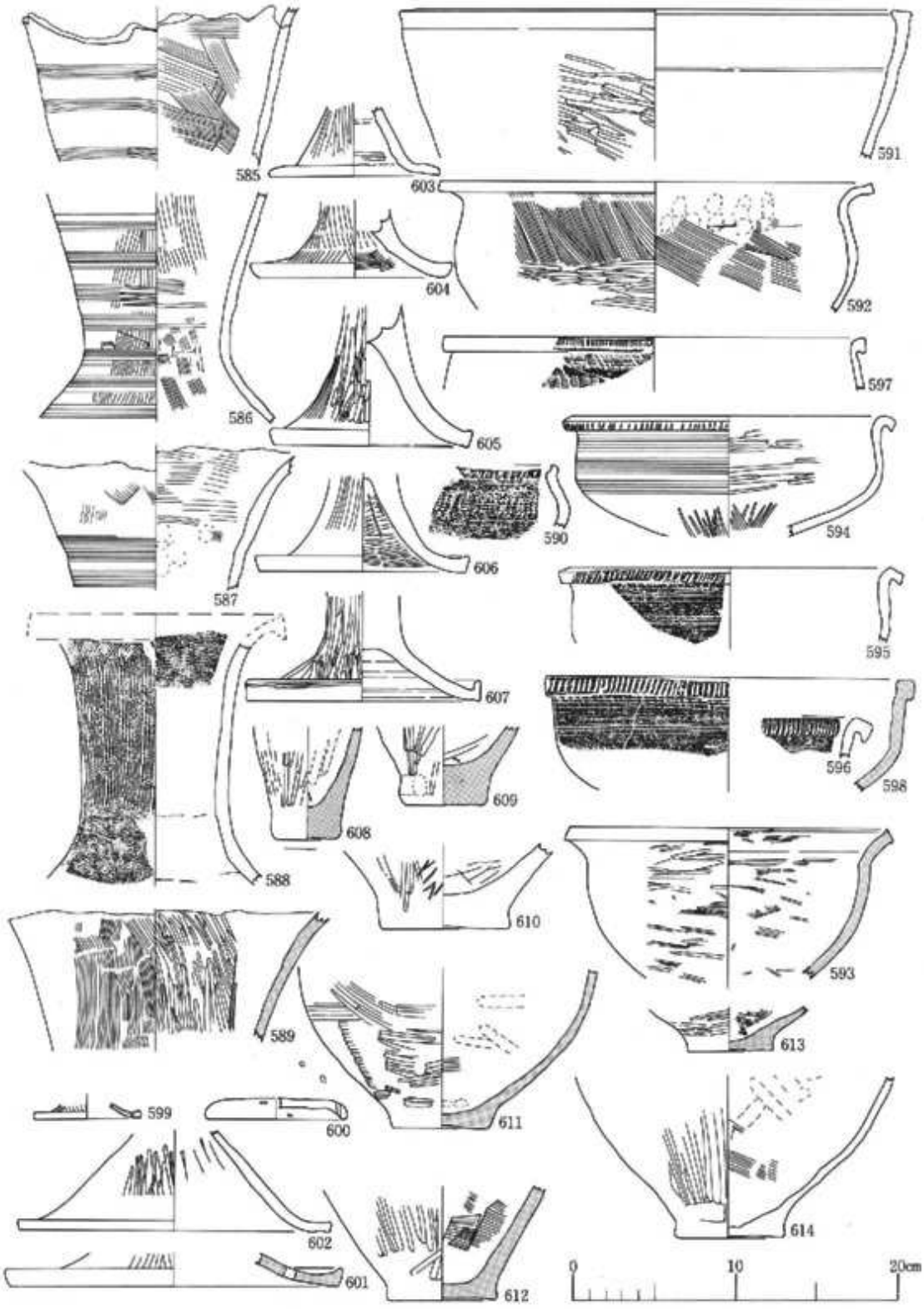

第68図　NO. 7—S・W1層内、　NO. 8—N　1層内（541・556・557）出土土器実測図



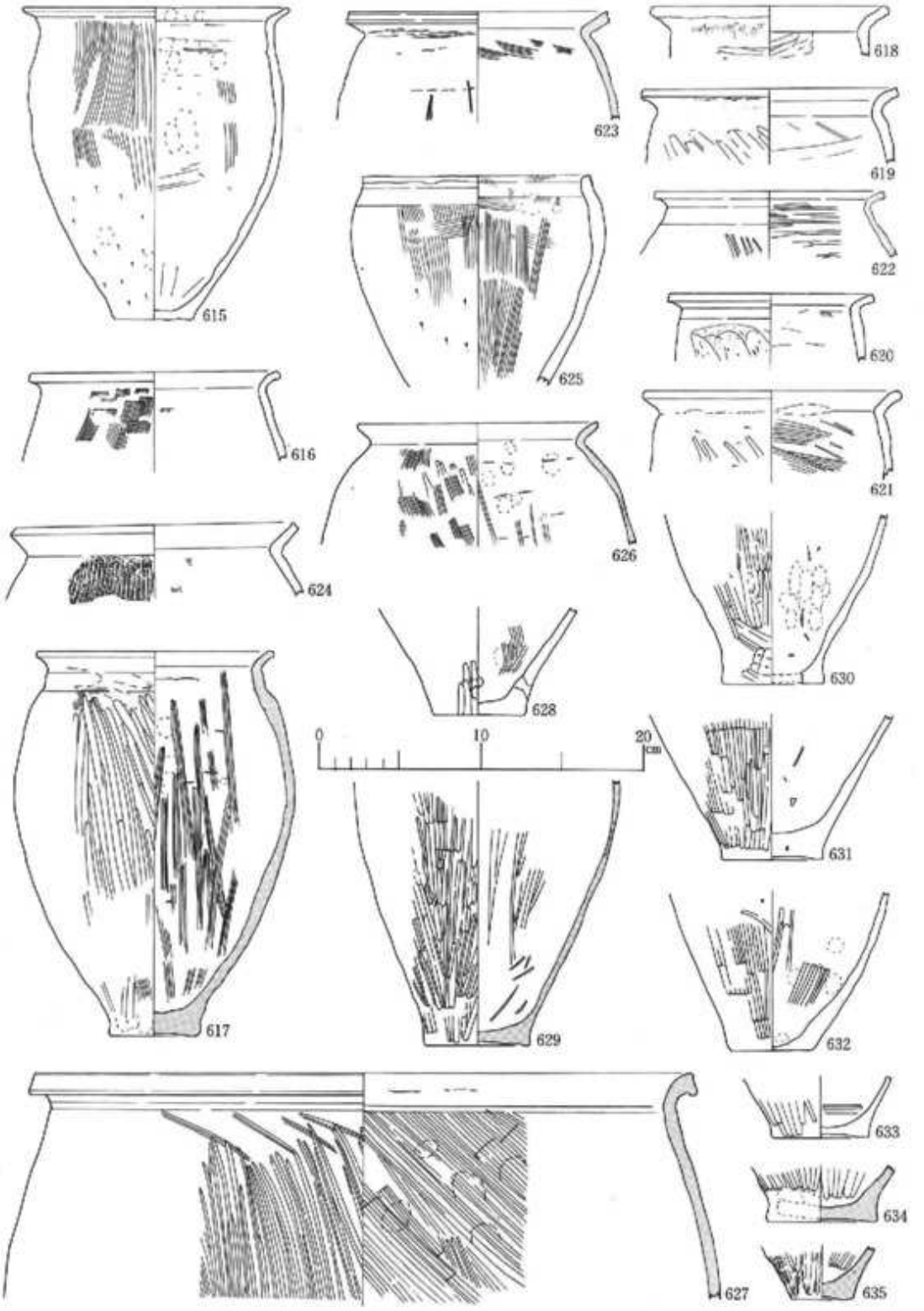

第69図　NO. 7－S ・2層内出土土器（558～568）実測図



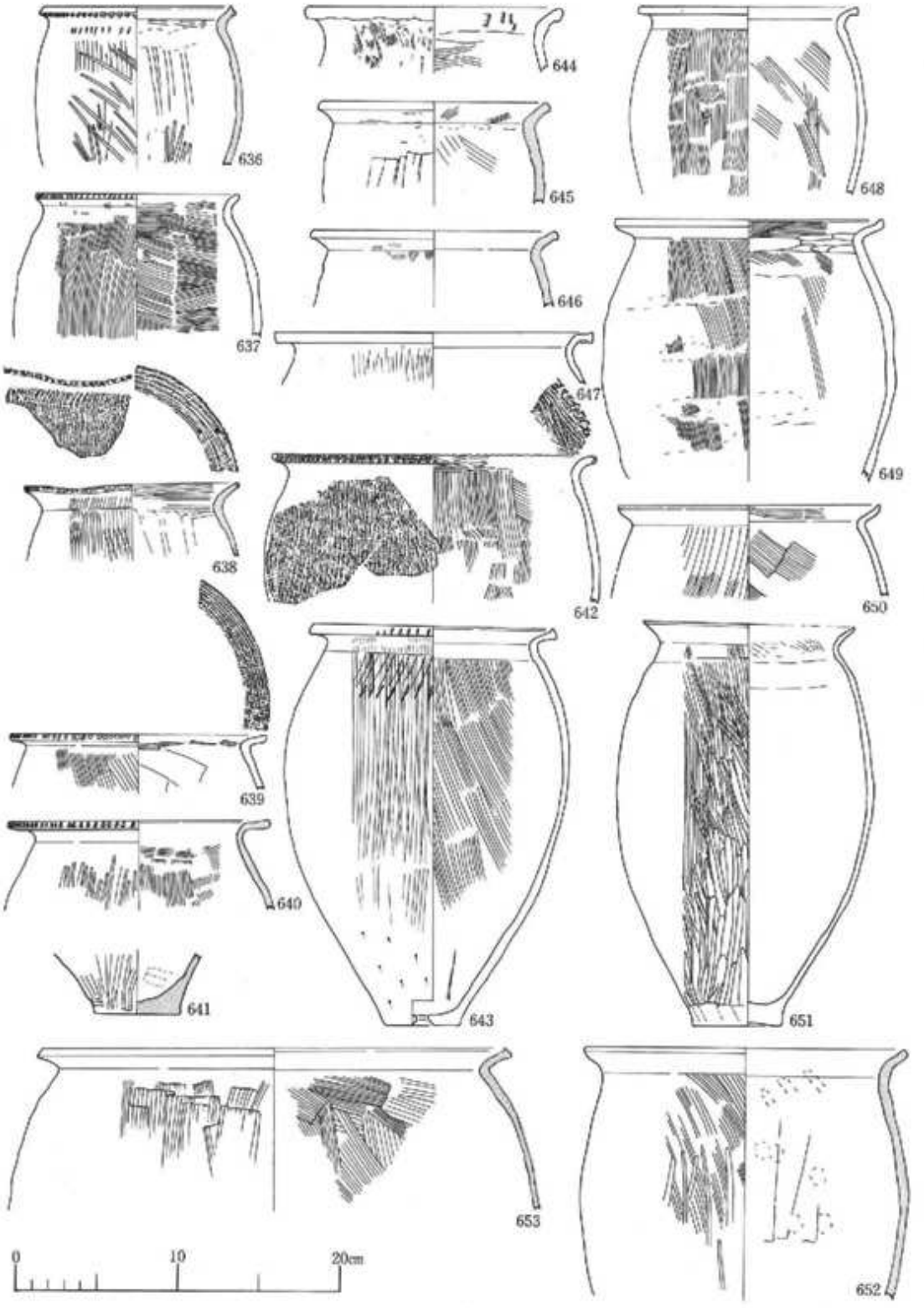

第70図　NO. 7—S　2層内出土土器（569～584）実測図




第71図　NO.7－S 2層内出土土器（585～614）実測図




第72図　NO. 7－S　2層内出土土器（615～635）実測図




第73図　NO. 7－S　2層内出土土器（636～653）実測図

ら頸部があまり締まらず、口縁部が「く」の字形に外反する。内面胴底部に赤色顔料が付く。

№7—W（XX2ｆ区1層）

7号墓の北～南に走る溝。1層からコンテナに約1.5箱分出土。

〈1層〉　弥生土器（514・516・518・547・1053）（第66・68図、図版五七）

・主な土器　同区から胴部下位に穿孔を受けた水差（516）、甕（547）が出土。

・第II～III様式　壺の口縁部の少片、底部の厚みが4㎝近くを測るものがある。鉢Aの口縁端部に刻み目文を施すものもみられる。脚部（1053）は上げ底風のつくりで裏面に爪跡が1周する。甕の口縁部片もみられる。№7—E・Sと違い、他地方の胎土のものは半分位である。

・第III～IV様式　壺（514）、受口壺、水差（516）、無頸壺B（518）、鉢B、壺蓋、脚部、甕a（547）などがみられる。壺（514）は頸部から口縁部が水平近くに外反する。口縁内面に列点文、端面に波状文を施す。他地方の胎土。水差は口縁部に把手側に抉りを入れ、口頸部に凹線文を施す。鉢Aの小片で凹線文を施し、体部下位をヘラ削りするものがある。無頸壺B（518）は体部に簾状文、扇形文を施す。鉢Bに他地方の胎土（白橙色）で口・体部に簾状文を施す小片がみられる。甕a（547）は球形に近い胴部に口縁部が外反する。他に生駒西麓の胎土で壺A、鉢B、甕などの小片もあるが、7号墓の中では7—E、7—Sに比べると土器の出土状況が異る。

**8号周溝**

№8—N（XXF3ｇ区1層）1層からコンテナに約1箱出土。7号墓の南側に位置する。

〈1層〉　弥生土器（515・519～522・541・556・557）（第66・68図、図版五八）

壺A（515）、高杯（521）、鉢の脚部（520）、脚部（519）、甕（541・556・557）などが出土。壺（515）は口縁内面に扇形文を、口縁端面に簾状文を施す。高杯A（522）は体部が屈曲して立ち上るもの。口縁端部は内方に少し肥厚する。（521）は直口の体部で口縁端部は丸くおさめる。脚部（520）は直立するもので透しの小さい円孔を穿つ。脚部（519）はなだらかに裾部がひらくもの。甕（541）は口縁部が「く」の字形に外反し端部は上方に肥厚する。甕（556・557）は小型品で胴径よりは径が大きくなるもの。口縁端部は薄く尖り気味。

№8—E（XXF3ｇ・ｈ区1層）

出土量は若干あるが、ほとんど図化できない。無頸壺B（517）は簾状文を施す。

**9号周溝**

№9—E（XIXF13ｇ区1層）

4号墓の南側と共有する溝で遺物の量は少ない。第II様式の壺A、鉢A、甕bなどみられるがいずれも小片で他地方の胎土のものである。

**10号周溝**

№10—S（XIXF20ｇ区1・2層、20ｇ・ｈ区2層、XXF1ｇ・ｈ区1・2層、1ｇ～ｈ区1層）№1—E1層、№7—S1層の土器と接合するものも多い。

1号墓の南東の溝から東へ続く。遺物は1層からコンテナに1箱、2層から3箱分出土した。

〈1層〉　弥生土器（654～660・665～667・671～675）

・第Ⅲ～Ⅳ様式　壺A（654・660）、鉢A（665～667）、脚部（655）、器台（671）、甕（656～658・672～675）などが出土している。小片が多いなかで脚部（655）は杯部を欠いた状態で出土している。器台は浅乳橙色を呈す他地方の胎土で、今回の調査では唯一の出土例である。他に壺A（654）、鉢A（666・667）が他地方の胎土である。

石器（第90図、図版六七・六八）　ＸＸＦ１ｇ区から柱状片刃石斧（897）、太型蛤刃石斧（898）の２点の磨製石斧が出土。柱状片刃石斧（897）は細粒砂岩製で、ほぼ完形であるが縁部など一部を欠く。研磨は長軸方向に行ってから、斜方向にする。刃部は外湾する。刃こぼれがみられる。断面は曲面をもつ長方形。太型蛤刃石斧（898）は斑レイ岩製で基部と刃部一部分欠くがほぼ完形である。

・その他の遺物　ＸＸＦ１ｇ区から種不明の動物遺体が出土している。

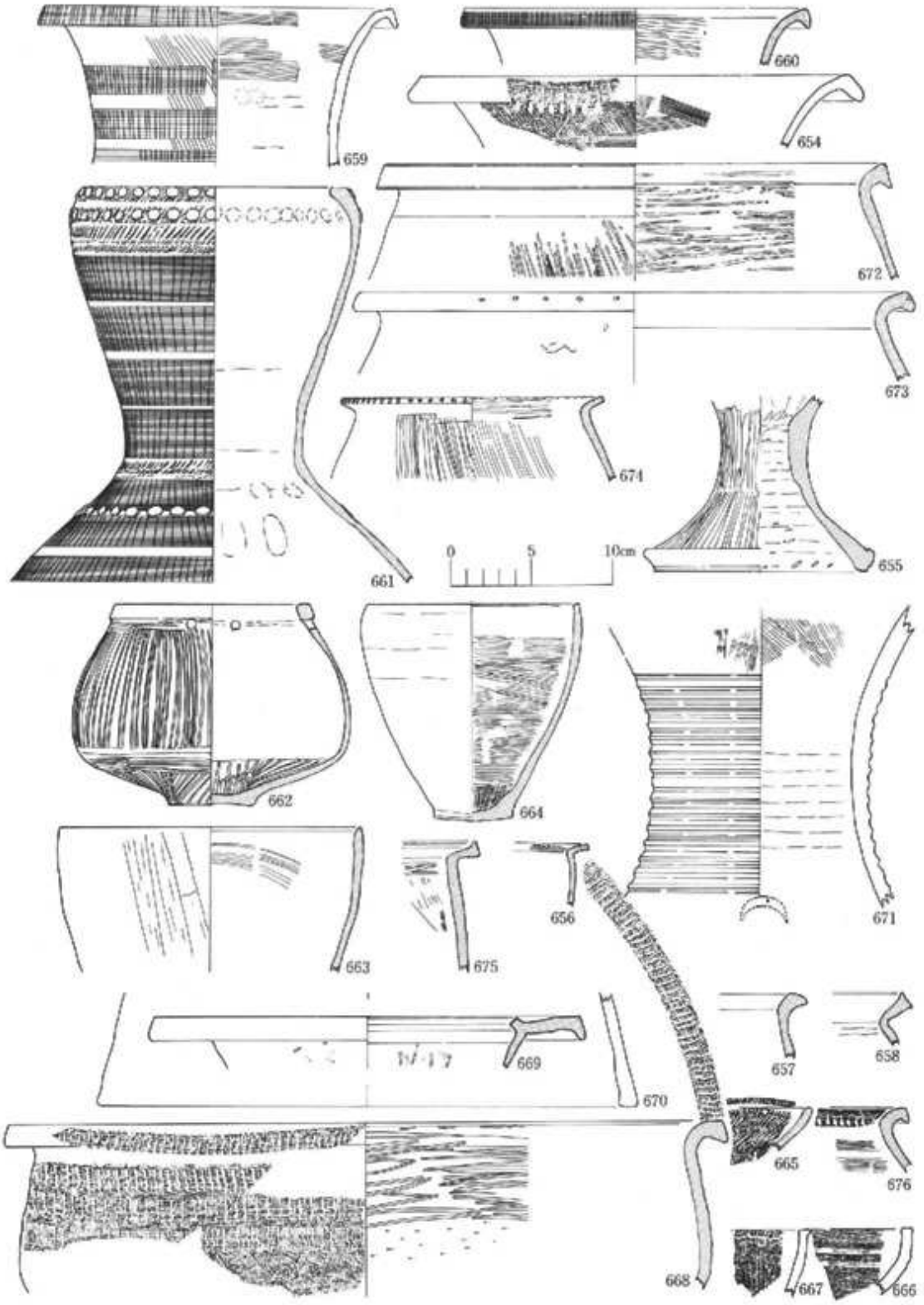
〈2層〉　弥生土器（659・661～664・668～670・676～762）（第74～77図、図版五九～六二）

・主な土器　ＸＸＦ１ｇ区から壺A（688）、甕b（750）、甕（748）、XIXF20ｇ・ｈ区から甕a（753）が出土。壺（688）は口頸部を打ち欠いたもので、胴部に小円孔を穿つ。甕（748）は全面に煤が付着する。

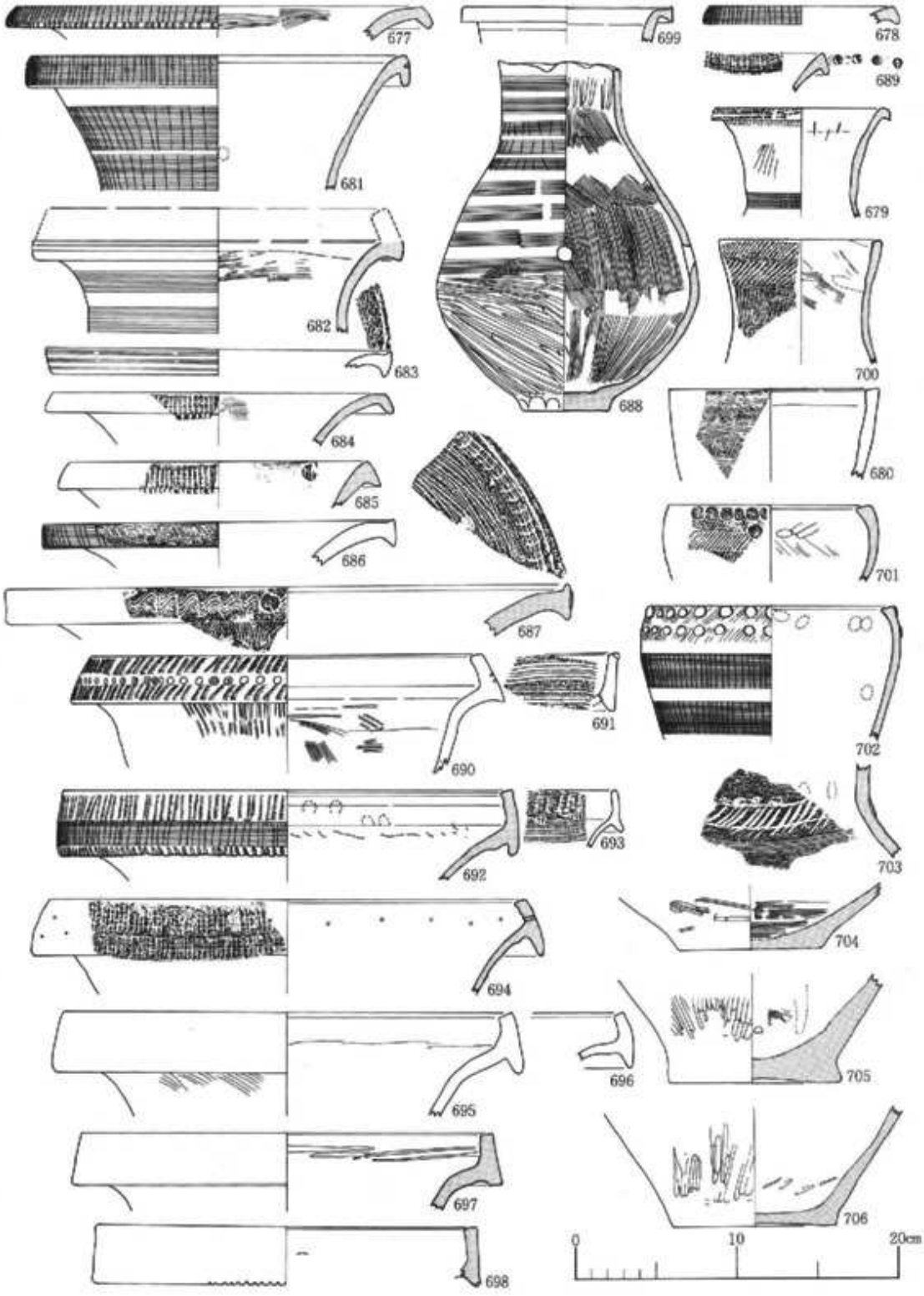
・第Ⅱ～Ⅲ様式　壺A（688）、壺B（678・679）、直口壺（680）、無頸壺A（707）、鉢A（663・664）以外に鉢、無頸壺の口縁部、脚部の小片、甕a（745・746）、甕b（747・750）、甕（748）、脚部などがある。壺A（688）は長胴形から頸部が立ち上るもの。森井氏の壺「A」タイプに相当する。壺B（679）はゆるく外湾する口頸部で、口縁端面に列点文、頸部下に簾状文を施す。直口壺（680）は波状文と直線文を施す。他地方の胎土。鉢A（716・717・719）は直線文、鉢（712・721）は口縁端部に刻み目文を施す。脚部（736・737）は小型品で他地方の胎土。甕a（748）は小型品で器壁が厚く胴径は口径より小さい。甕a（746）は口径と胴径がほぼ同じである。甕a（745）は小型品で球形の胴部に口縁部がゆるく外湾して立ち上るもの。外面はヘラミガキで光沢をもつ。

・第Ⅲ～Ⅳ様式　壺A（651・681～687）、受口壺（690～698）、壺B（689）、壺C（699）、細頸壺（661・701・702）、水差（700）、無頸壺（662）、鉢B（668・727～729）と鉢A・Bの口縁部小片、高杯A（732・733）、脚部（738・740～744）、高杯B（669・734）、甕a（751～757）、甕b（749・758～761）などがある。

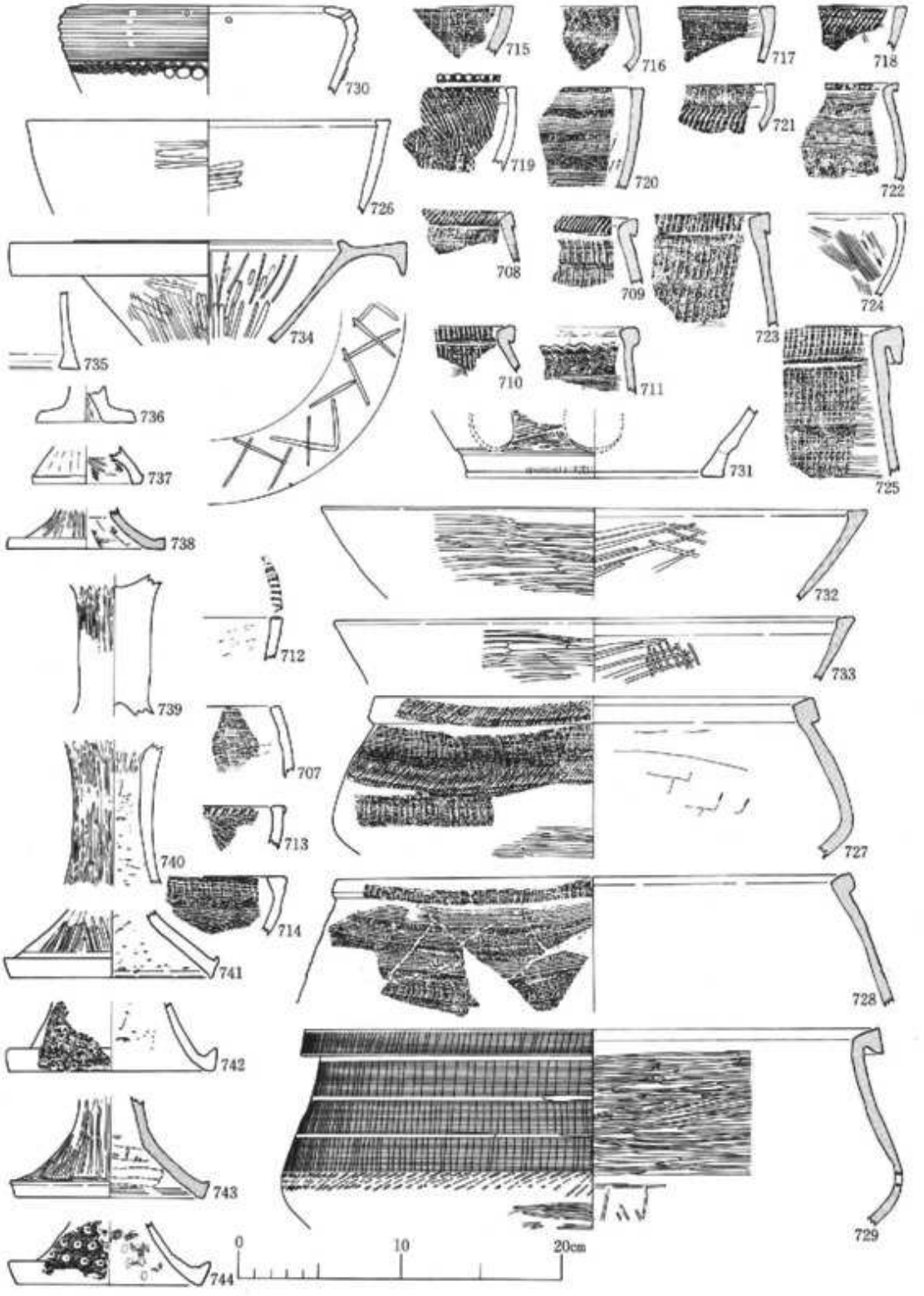
２層及び№１―Ｅ、７―Ｓの１層から出土した破片と接合できたものは、壺A（659）、細頸壺（661）、無頸壺（662）、高杯B（674）、鉢A（663・664）、鉢B（668）などがある。壺A（659）は森井氏編年の「B」タイプ、細頸壺（661）は大型品で口径16cm、口縁部は列点文の上に円形浮文、頸部は原体の幅の広い簾状文、頸部下に列点文、肩部以下に簾状文を数帯施し、肩部に円形浮文を貼り付ける。無頸壺（662）は段状口縁部をもち、外面全面と内面底部をヘラミガキする。細頸壺（661）と全く同じ色調の灰緑褐色を呈する。鉢A（663・664）は直口



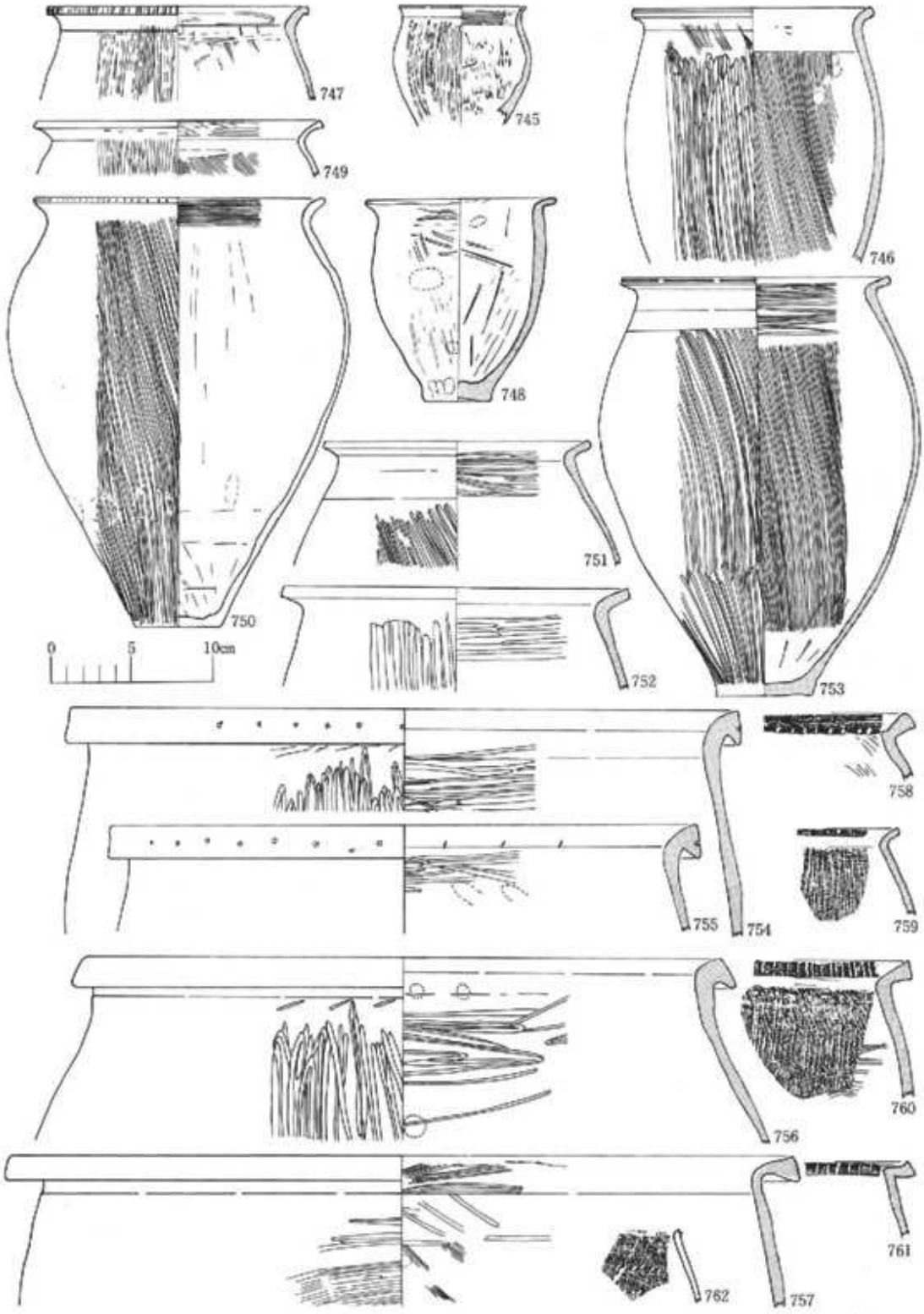

第74図　NO.10—S　1・2層内出土土器実測図




第75図　NO.10—S　2層内出土土器（677～706）実測図




第76図　NO.10—S　2層内出土土器（707～744）実測図




第77図　NO.10—S　2層内出土土器（745～762）実測図

形。（663）の口縁端部は内傾する。外面をヘラ削りのまま。（664）は外面の器表面が著しく剝離する。内面は横方向にハケ目調整する。他地方の胎土。高杯B（669・734）の垂下する口縁端部は他の出土例に比べるとやや短い。（734）は口縁内面に斜格子文を施す。鉢B（668）は口縁端部が外湾してひらき、内面に簾状文を施す。

壺A（677・684・685）は口縁端面に簾状文と刻み目文を施す。壺A（681）は森井氏編年の「C」タイプ。壺A（682）は口縁上部を欠く。端面にも直線文を施す。壺A（687）は口縁内面に粗いハケ目の上に簾状文を施す。壺（677・687）は長頸壺A′になるだろう。壺A（683）は口縁端面に凹線文を施す。受口壺（690）は口縁上端部のみ拡張される。受口壺（691～698）は上・下共に拡張される。（690・692・694）は口縁端面に簾状文＋刺突文を施し、（695～698）は無文。（691）は直線文を2帯施し、（693）は簾状文と直線文の間に扇形文を1帯付加する。壺B（689）は口縁内面に円形浮文を貼り付ける。細頸壺（701・702）は先の（661）の小型品、壺頸部（703）は貼り付け凸帯の上にヘラ圧痕を施す。出土例は少ない。壺をはじめ水差、無頸壺、鉢などはいずれも櫛描文を施すものが多い。鉢Bの口縁端部のつくりはバラエティーがある。鉢B（728）の施文は簾状文が規則正しく施文されないもの。無頸壺（730）は口縁端部が内方に長く拡張されるもので、凹線文と波状文に円形浮文を付加する。円窓付の脚部をもつものと考えられる。円窓付脚部（731）と共に白褐色を呈する他地方の胎土。脚部（740・741・743）はいずれも外面をヘラミガキする。脚部（742・744）は竹管文を施す。甕a（751～753）は口縁部がいずれもゆるやかに外反するもの。内面口縁部下をヘラミガキする。甕a（754～756）は外反した口縁端部が下方に拡張されるもの。甕a（757）は口縁部が水平近く外反するもの。甕b（758～762）は口縁部が「く」の字形に外反し、ハケ目調整及び口縁端部に刻み目文などを施すもの。甕（760）は生駒西麓の胎土である。甕（762）は胴部に列点文を施す。

石器（第90図、図版六八・六九）　ＸＸＦ１ｇ区から太型蛤刃石斧（900）、１ｇ～ｈ区から石庖丁（899）が出土。太型蛤刃石斧は安山岩製で刃部側をまん中位から欠失する。１層から出土した石庖丁よりもひとまわり大きく断面は楕円形。石庖丁（899）は千枚岩で全体の1/3位残存。

その他　XIXF20ｇ・ｈ、ＸＸＦ２ｇ区から種不明の動物遺体が出土している。

ＳＫ52

10号方形周溝の台状の北側XIXF20ｅ区で検出された土坑である。破砕された破片の大小が一括して廃棄されたものか、器壁は薄く磨耗が著しいため、接合不可能なものが多い。コンテナに約３箱分出土。

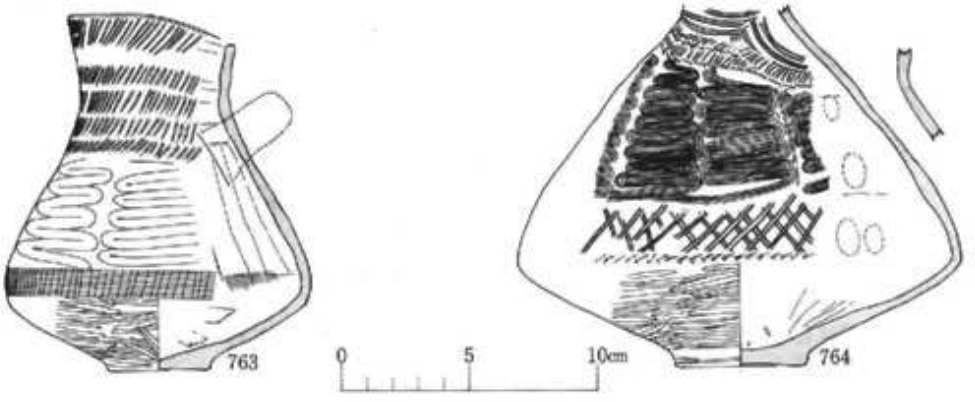
弥生土器（763～800）（第78～87図、図版六二・六三）

・主な土器　胴部に穿孔を受けた壺A（769）、底部を欠失する壺A（771）、ほぼ完形に近い壺C（773）、無頸壺（782）などがある。

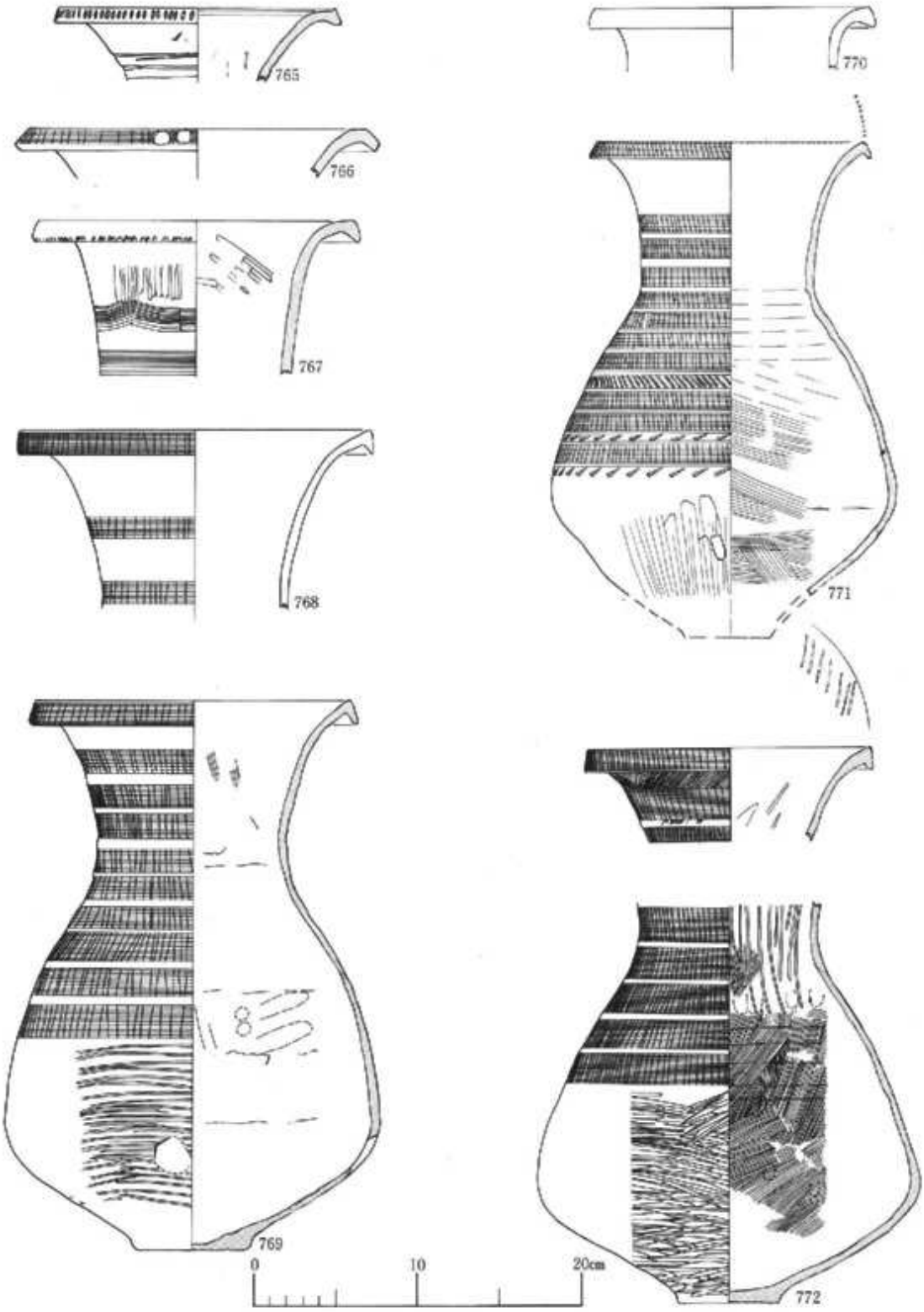
・第II～III様式　壺A（765～767）、壺C（773）、壺D（778）、無頸壺（781）、甕（790～792）、

甕b（793）などと小片で壺Aの口縁部片がある。壺A（765）は口縁端部があまり発達しない形で、頸部にヘラによる沈線がみられる。壺A（767）は森井氏編年の「A」タイプに相当する。他の壺Aはいずれも口縁端面に刻み目文を施す他地方の胎土。壺C（773）は無文で器壁が厚っぽい。壺D（778）は口縁端面の作りが粗雑。頸部は指押え。無頸壺B（781）も他地方の胎土。甕（790～792）はいずれも胴部があまり張り出さない。甕（790）は他地方の胎土か。

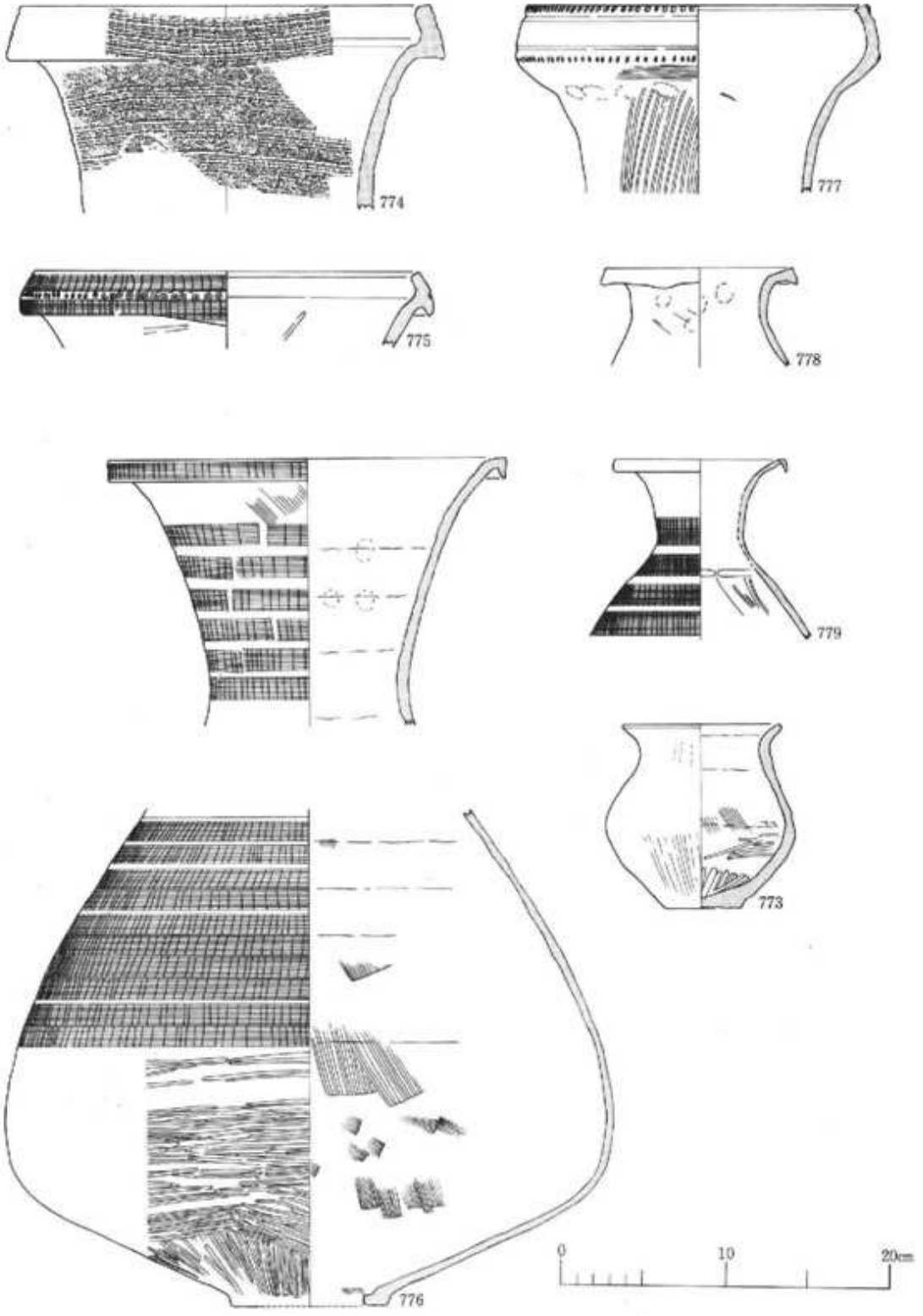
・第Ⅲ～Ⅳ様式　壺A（768～772）、受口壺（774～776）、壺B（779）、壺D（770）、水差（763）、無頸壺（781・782）、蓋（780）、円窓付脚付鉢A（788）、高杯A（784・785）、高杯B（789）、脚部（786・787）、甕（794～798）、底部（799・800）などがある。壺A（776）は長頸になると考えられる。壺A（768・769・771・772）は森井氏編年の「C」タイプ。壺A（770）は「B」タイプにそれぞれ相当する。受口壺A（774）は器壁がやや厚くて、口縁端部は上方のみに拡張される。簾状文は他の例と違いかなり目の粗い櫛状のもの。受口壺（775）は口縁端部は上下に拡張される。受口壺（777）は口縁部が内湾して立ち上る。口縁上端、下端部に刻み目、その間に本の凹線文を施す。頸部は縦方向の目の粗いハケ目調整。出土例は他にみられないが、生駒西麓の胎土。壺B（779）は森井氏編年に考え合わせれば「C」タイプの時期のものか。壺D（770）は白色系の色調を呈す他地方の胎土。水差（763）はちょうど1/2個体が残存。器表面は磨耗が著しい。列点文、流水文、簾状文を施す。細頸壺（764）は口頸部を欠く。体部は列点文、流水文、斜格子文などを施す。肩部には右側の断面図に表すようにやや外方へふくらむ部位があり、ちょうど欠損する部位に沿って直線文を丸く施す。あたかも空洞の筒状のものが欠損したようにも窺える。把手か注ぎ口のようなものがついていたのかもしれない。無頸壺（782）はほぼ完形品であるが体部の器表面は磨耗がひどく施文の列点以下は全く読みとれない。橙色系の他地方の胎土。無頸壺B（781）も磨耗している。蓋（780）は完形品である。高杯A（784）は底部から口縁部が屈曲して立ち上るもので凹線文を施す。（785）は直口である。円窓付脚付鉢A（788）は橙色を呈し、胎土は精良な土師質に似る。他地方の胎土。脚部（786）は竹管文を施す。赤褐色を呈す。高杯B（789）は外面にかすかにヘラ磨きが残る。脚部（787）は高杯B（789）と同じ形態のもの。甕a（794・796～798）は口縁部が



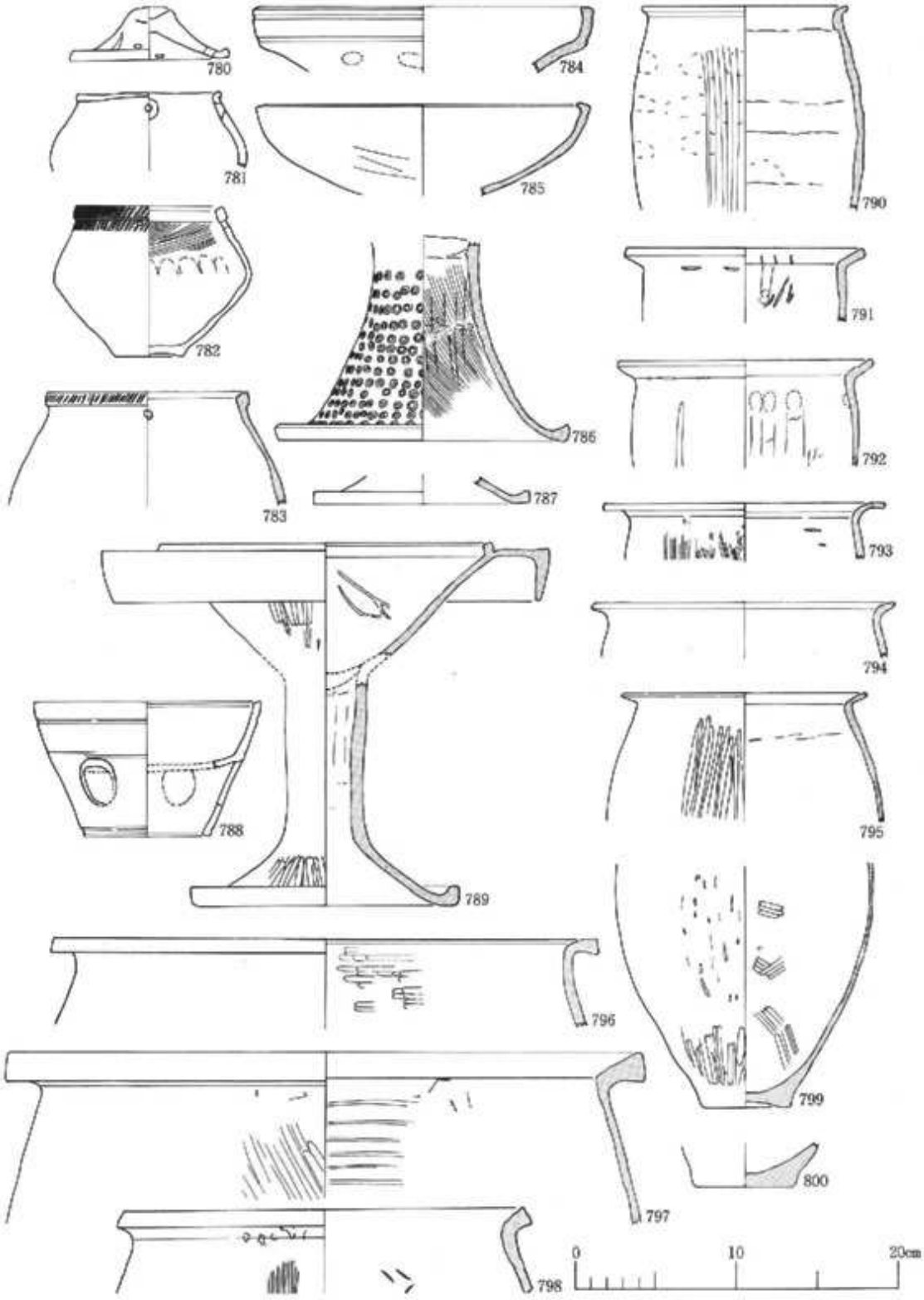

第78図　SK52内出土土器（763・764）実測図




第79図　ＳＫ52内出土土器（765～772）実測図




第80図　ＳＫ52内出土土器（773～779）実測図




第81図　ＳＫ52内出土土器（780～800）実測図

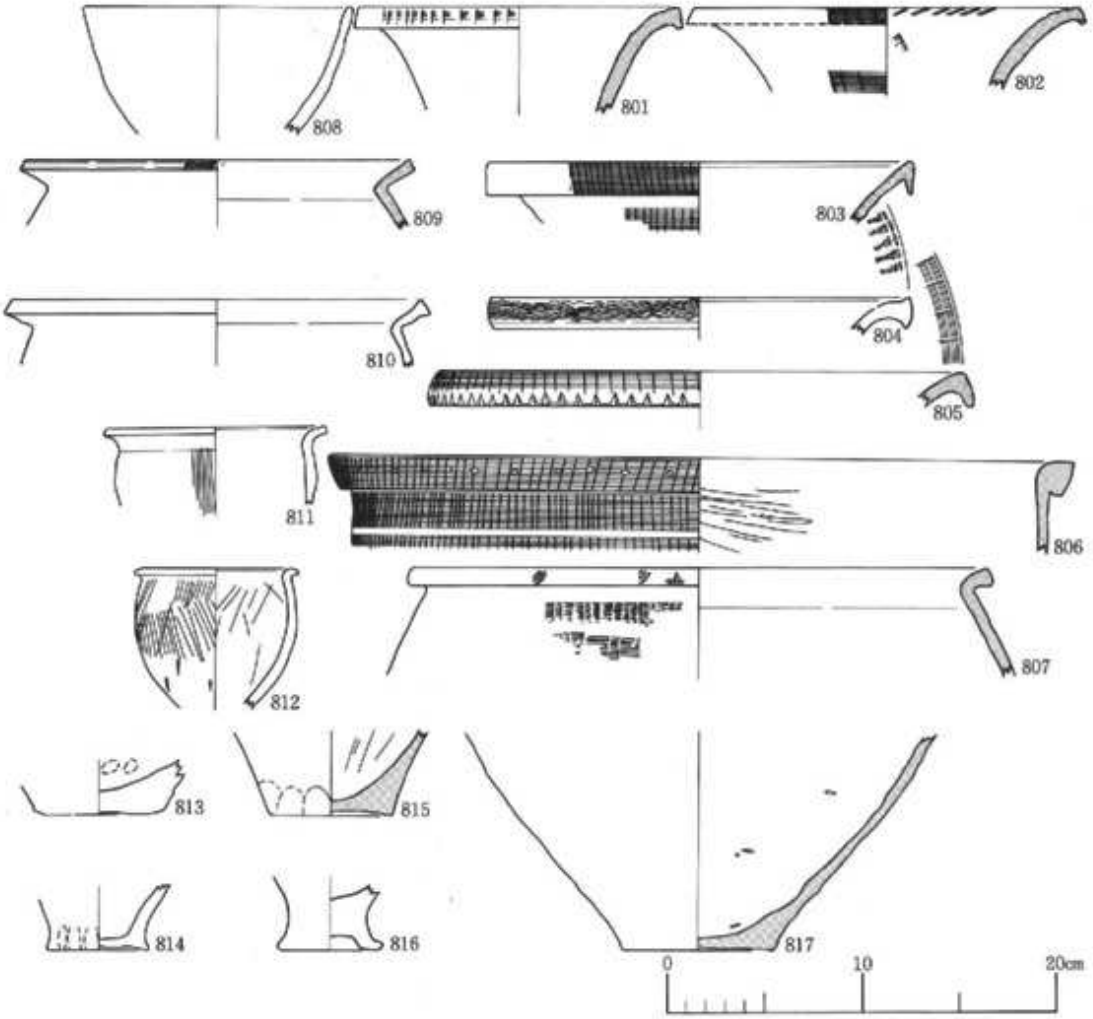
ゆるやかに外反する。甕A（795）は「く」の字形に外反する。

土製品　（第84図、図版六六）　XIXF20e区から円板（839）が出土。周縁を打ち欠いく。

石器　（第85図、図版七〇・七一）　XIXF20e区から石鏃（901）、楔形石器（902・904）、石鏃未製品（903）が出土。石鏃（901）は凸基有茎式。作りはやや粗く大きな剥離による調整、基部先端を欠く。

包含層内出土土器

各包含層から中世土器と共に弥生時代中期の土器が出土している。




第82図　包含層内出土土器実測図

墓域内出土遺物について

次に、先に述べた遺構毎の出土遺物を一覧表（第４表）にまとめ、そのあとに「主な土器」搬入土器、木片及び炭化物、土製品、石器についてを記述する。なお石器に関しては、弥生時代の遺構以外から出土したものも概ね弥生時代の資料と考えられるため、つづけて記載した。

第４表　方形周溝墓・周溝・土坑内出土遺物一覧表

※組量はコンテナ（35×55×15）㎝に約１杯分を１箱とする。

| 遺構番号 | | 弥生土器 | | 土製品 | 石器 | その他の遺物 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 組量※ | 主な土器〈様式〉 | | | |
| 1—E | 1層 | 6 | 壺A（135）〈Ⅲ～Ⅳ〉 | 円板（818） | 太型蛤刃石斧（843）<br>石鏃（840）<br>削器（841）<br>サヌカイト片、11点<br>管玉（842） | 動物遺体<br>シカ（992） |
| | 2層 | 1.5 | | | サヌカイト片、5点 | 動物遺体 |
| 1—W | 1層 | 6 | 壺A（201）〈Ⅲ～Ⅳ〉 | | 石鏃（844）<br>石鏃（845）<br>削器（846）<br>サヌカイト片、9点 | 動物遺体<br>炭化物 |
| | 1・2層<br>2層 | 3 | 壺（222）〈Ⅲ～Ⅳ〉<br>壺D（236）〈Ⅲ～Ⅳ〉<br>甕（249） | | 石鏃（847） | |
| 1—N | 1層 | 6 | 無頸壺B（264）〈Ⅲ～Ⅳ〉 | 円板（819）<br>円板（820）<br>方板（821） | 石鏃（848）<br>石鏃（849）<br>楔形石器（850）<br>楔形石器（851）<br>横形削器（852）<br>投弾（853）<br>サヌカイト片、3点 | 炭化物 |
| | 2層 | 3 | | 円板（822）<br>方板（823） | 石錐了（854）<br>石鏃（855）<br>削器（856）<br>楔形石器（857）<br>サヌカイト片、8点 | |
| | 3・4層 | 1 | | | サヌカイト片、1点 | |
| 2—W | 1層 | 1 | | | サヌカイト片、1点<br>楔形石器（858） | |
| | 2層 | 1.5 | | | 砥石（859）<br>サヌカイト片、1点 | 炭化物 |
| 2—N～W | 2層 | 0.5 | 小型壺C（329）〈Ⅱ～Ⅲ〉 | | | |

| 遺構番号 | | 弥生土器 | | 土製品 | 石器 | その他の遺物 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 総量※ | 主な土器〈様式〉 | | | |
| 2—N | 1層 | 1 | | | 石鏃（860）<br>凸刃削器<br>細部調整のある剥片（862）<br>使用痕のある剥片（863）<br>サヌカイト片、2点 | |
| | 2層 | 1.5 | | | 石庖丁（864）<br>石鏃（865）<br>サヌカイト片、5点 | |
| 3—E | 1層 | 2.5 | | | 石鏃（866）<br>楔形石器（867）<br>サヌカイト片、2点 | 動物遺体<br>ウマ（996） |
| | 2層 | 1.5 | | | 石庖丁（868）<br>サヌカイト片、1点 | |
| 3—N | 1層 | 2.5 | 鉢A（349）〈Ⅳ〉<br>壺B（1056）〈Ⅲ～Ⅳ〉 | | 磨製石剣（869）<br>石庖丁（870） | |
| | 1～2層<br>2層 | 2 | 鉢B（341）〈Ⅲ～Ⅳ〉<br>甕A（321）〈Ⅲ〉<br>壺A（350）〈Ⅲ～Ⅳ〉<br>壺D（351）〈Ⅲ～Ⅳ〉<br>壺D（352）〈Ⅲ～Ⅳ〉<br>壺D（353）〈Ⅲ～Ⅳ〉<br>高杯B（356）〈Ⅲ～Ⅳ〉 | 円板（824） | サヌカイト、7点 | |
| №4 | | | 甕棺（322）〈Ⅱ〉<br>甕棺（323）〈Ⅲ〉 | | | |
| 4—E | 2層 | 1 | | | 削器（871）<br>サヌカイト片、1点 | 木片 |
| 4—S | 1層 | 3.5 | 壺A（378）〈Ⅲ～Ⅳ〉<br>鉢A（380）〈Ⅱ〉<br>蓋（383）〈Ⅱ～Ⅲ〉<br>台付鉢B（382）〈Ⅲ～Ⅳ〉<br>壺（389）〈Ⅲ～Ⅳ〉 | 紡錘車（825） | | |
| | 1・2層 | 1.5 | 壺A（395）〈Ⅲ～Ⅳ〉 | | 石核（872）<br>剥離剥片（873）<br>サヌカイト片、1点 | |
| 4—N | 1層 | 3 | 壺A（413）〈Ⅲ〉<br>壺C（411）〈Ⅱ～Ⅲ〉<br>鉢A（412〈Ⅱ〉 | 円板（826） | 磨製石剣（874）<br>尖頭器（875）<br>楔形石器（876）<br>細部調整剥片（877）<br>サヌカイト片、6点 | 炭化物 |

| 遺構番号 | | 弥生土器 | | 土製品 | 石器 | その他の遺物 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 総量※ | 主な土器〈様式〉 | | | |
| 4—W | 1層 | 2 | 壺A（400）〈II～III〉<br>壺A（405）〈II～III〉<br>壺A（406）〈III～IV〉<br>高杯A（408）〈III～IV〉<br>高杯B（407）〈III～IV〉<br>甕（404）〈III～IV〉 | 円板（827） | | |
| 5—N | 1層 | | 台付鉢A（416）〈III～IV〉 | | 太型蛤刃石斧（878） | |
| | 2層 | 2.5 | 無頸壺B（415）〈III～IV〉<br>壺（414）〈III～IV〉 | 円板（830）<br>サヌカイト片、1点<br>サヌカイト1片 | | |
| 5—W | 1層 | 1 | 壺D（420）〈III～IV〉<br>壺D（422）〈III～IV〉<br>壺D（423）〈III～IV〉<br>細頸壺（421）〈III～IV〉<br>無頸壺B（424）〈III～IV〉<br>台付壺（425）〈III～IV〉<br>鉢A（427）〈III～IV〉<br>甕（324）〈III～IV〉 | 円板（828）<br>円板（829） | 石鏃（879） | |
| 7—E | 1層 | 6 | 水差（444）〈III～IV〉<br>直口壺（441）〈III～IV〉<br>甕（454）〈III～IV〉 | 紡錘車（831）<br>円板（832）<br>円板（833） | 削器（880）<br>削器未製品（881）<br>削器（882）<br>細部調整のある剥片（883）<br>細部調整のある剥片（884）<br>サヌカイト片、9点 | 植物遺体<br>動物遺体 |
| | 2層 | 0.5 | | | サヌカイト片、2点 | |
| 7—S | 1層 | 14 | 壺A（475）〈II〉<br>無頸壺（484）〈II〉<br>鉢（513）〈III～IV〉<br>甕（532）〈III～IV〉 | 円板（834） | 打製石剣（886）<br>石小刀（887）<br>尖頭器の一部（888）<br>叩き目（889）<br>砥石（890）<br>サヌカイト片、15点 | |
| | 2層 | 2 | 壺C（576）〈II〉<br>壺A（574）〈II～III〉<br>台付鉢A（562）〈II～III〉<br>器（566）〈II～III〉 | 円板（835）<br>円板（837）<br>方板（836） | 石槍丁（891）<br>石槍丁（892）<br>楔形石器（893）<br>石鏃未製品（894）<br>投弾（895）<br>サヌカイト片、9点 | 動物遺体<br>イノシシ（1000）<br>イヌ（1001）<br>トリ（1002）<br>木片 |
| | 1・2層 | | 壺（615）〈II～III〉<br>甕（617）〈II～III〉 | | | |
| | 2層 | | 壺（643）〈II〉<br>壺（651）〈II～III〉 | | | |

| 遺構番号 | | 弥生土器 | | 土製品 | 石器 | その他の遺物 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 総量㎥ | 主な土器〈様式〉 | | | |
| 7—W | 1層 | 1.5 | 水差（516）〈Ⅳ〉<br>壺（547）〈Ⅲ～Ⅳ〉 | | 横形削器（896）<br>サヌカイト片、3点 | |
| 10—S | 1層 | 1 | | | 柱状片刃石斧（897）<br>太型蛤刃石斧（898） | 動物遺体 |
| SK52 | 1～2層<br>2層 | 3 | 無頸壺（662）〈Ⅲ～Ⅳ〉<br>壺A（688）〈Ⅱ〉<br>壺（748）〈Ⅱ～Ⅲ〉<br>壺（750）〈Ⅱ～Ⅲ〉<br>壺（753）〈Ⅲ～Ⅳ〉 | 円板（838） | 石鏃丁（899）<br>太型蛤刃石斧（900）<br>サヌカイト片、24点 | 動物遺体<br>イヌ（1004） |
| | | 3 | 壺A（769）〈Ⅲ～Ⅳ〉<br>壺A（771）〈Ⅲ～Ⅳ〉<br>壺C（773）〈Ⅱ～Ⅲ〉<br>水差（763）〈Ⅲ～Ⅳ〉<br>鉢（780）〈Ⅲ～Ⅳ〉<br>無頸壺（782）〈Ⅲ～Ⅳ〉 | 円板（839） | 石鏃（901）<br>楔形石器（902）<br>楔形石器（904）<br>削器（903） | 炭化物<br>動物遺体<br>ウマ（118） |
| | 1層 | | | | サヌカイト片、4点 | |
| | 2層 | | | | サヌカイト片、2点 | |
| 溝1 | 1層 | 0.5 | | | サヌカイト片、9点 | 鉄<br>炭 |

## 墓域内出土遺物総点数

| 出土遺構＼器種 | | 石鏃丁 | 石小刀 | 太型蛤刃石斧 | 柱状片刃石斧 | 石剣 | 石鏃 | その他の打製石器 | 砥石 | その他の石製品 | 管玉 | 土製円板 | 穿孔をうけた土器 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 方形周溝墓（No.1～7） | 1層 | 1 | 1 | 2 | | （磨製）2<br>（打製）1 | 7<br>（大型）1 | 21 | 1 | 3 | 1 | （紡錘車）1<br>（円、方板）12 | 20（＋α） |
| | 2層 | 5 | | | | | 3<br>（未製品）1 | 6 | 1 | | | 7 | 6（＋α） |
| 方形周溝（No.10） | 1層 | | | 1 | 1 | | | | | | | | |
| | 2層 | 1 | | 1 | | | | | | | | 1 | 1（＋α） |
| SK52（土坑） | | | | | | | 1 | 3 | | | | 1 | 2（＋α） |
| 計 | | 7 | 1 | 4 | 1 | 3 | 13 | 30 | 2 | 3 | 1 | 22 | 28（＋α） |

「主な土器」について

前項で出土した土器を遺構毎に記述したが、そのなかで完形品及び完形に近いものを「主な土器」としてとりあげた。これらは土器棺と土器に焼成後の穿孔、打ち欠き、二次口縁に作り直すなど人為的な行為を加えたもの、加えていないもの、破損のために人為的な変化が確認できないものに分けられる。これらの「主な土器」は日常容器を埋葬に伴うものとして転用した可能性の大きいことが考えられる。次に以上のような土器の性格的な点について触れる。

1）土器棺　今回の調査で確認できた土器棺は4号墓の小児用の合わせ口式甕棺1（322・323）の1基である。甕（322）は大和型の第II様式からみられるもので、他地方の胎土である。甕（323）は河内型の第III様式の特徴をもつ。他に土器棺の可能性のあるもので、器高が40㎝以上を越し、完形に近い大型の甕で（321・1056）がNo.3－N内から、（324）がNo.5－W内から、また器高が27㎝を測る甕（432）がNo.7－S内からそれぞれ出土している。No.3－N内、No.5－W内の甕は他の土器と共に出土しており定かではないが、中世遺構の削平時に盛土内から混入したことも考えられる。またNo.7－S内の甕は3層内に掘方をもつ。甕の内面底部には赤色顔料が付着しており埋葬に係る可能性が強い。これらの4個体の甕は溝内に埋葬された土器棺かもしれない。

2）穿孔を受けた土器　焼成後に穿孔を受けた土器は、恩智遺跡や瓜生堂遺跡[注8]の焼成前につけた同じような穿孔をもつ土器の類例から何か機能的な働きをもつことが考えられる。これと同じ例としてあげられるのが底裏面の中央に錐状の原体で小孔を穿つものである。また、焼成後に底部側面に小孔を穿つもの（1030・1031）も何か機能的な働きがあったと思われる。一方、外側からの打ち割りによる穿孔もつ土器は方形周溝墓からの出土例が多い。今回の調査で、この穿孔の大きさは口径が1㎝内外の小円孔のものと、1.5㎝以上の不正円孔のものがみられた。小円孔をもつ土器には壺A（201）、細頸壺（128・421・688）、台付甕（425）などがあり、いずれも胴部中位か胴部下位と底部の境目ぐらいに穿つ。壺A（201）、細頸壺（421）は小円孔と不正円孔の両方を有するもので、小円孔が先に述べた例と同じ機能的な働きをしていた日常容器を埋葬の際に不正円孔を穿ったのかもしれない。口径が1.5㎝以上の不正円孔を受ける位置は胴部下位から底部に穿つのが通常であるが、底裏面にもみられる。穿孔が確認できる土器の穿孔場所は、㋑胴部上位－壺D（411）、細頸壺（421）、㋺胴部下位－壺A（378・769・771）、壺D（422）、甕（532・547）、㋩底部上位－壺A（201・350・395）、壺D（352）、水差（516）、鉢A（416・427）、㋥底部下位－壺A（400）、壺D（420・423）、水差（444）、無頸壺B（415）、鉢A（380）、台付鉢A（416）、高杯B（356・407）、㋭底裏面－壺B（405）、壺D（351）などに分けられる。圧倒的に底部に穿つものが多いが、この行為が土器を打ちこわすためではなく、穿孔を目的としていることは穿孔を有する土器のなかに穿孔部位のみ欠失するが他の部位は割れずに完全なまま出土した例－壺A（201・378）、壺B（405）、鉢A（380）から窺える。この穿孔の部位について少し触れてみたい。穿孔の際にその周辺に損傷などの影響を与えないためには底部への穿孔が条件的にはよいことが考えられる。底面から胴部へとひろがる底部は、粘

土をつなぎ合わせていく部位で器体の中では底面に次いで頑丈である。従って底部は敲打具の面が円形をしているもので打てばより安定した打力を同一平面上に受けやすい部位であるといえる。その他の穿孔箇所をみると、底面は器体の中で一番厚く打ち割るために何回かの加撃が必要であろう。胴部は底部からより大きく張り出す部位で、器壁も薄く一度の加撃で周辺部にも影響を与えるだろう。従って穿孔の際、尖った敲打具で瞬間的に打たねばならない。実際、細頸壺（411）、壺A（475）、甕（532）の孔は他の例に比べるといびつな形を呈す。以上は底部が一番穿孔しやすい部位であることを推測したが、穿孔が器体の上部でなく下部であることは、口頸部への穿孔が困難であることと土器が土器の形を残すが「容器」としての機能をなくすためということも考えられよう。穿孔を受けた土器に関しては「供献土器」と通常考えられてきたが、田代氏は葬送儀礼に使用後、けがれをはらうために廃棄した土器と考えられる。[註9] 先述したように穿孔の状況は、埋葬された人間が人間の形をして「人間」ではないという黄泉の世界に通ずることから、生前に使用していた土器を供献したものではなかろうか。

3）打ち欠きを受けた土器　口縁部は破損しやすいため欠失している土器が多く、打ち欠きを確認することは困難である。口縁部の一部を欠く土器は壺A（201）、壺C（329・576）、直口壺（441）、高杯（356）などであるが、埋葬に伴う前に欠失していたかもしれない。この内、壺A（201）、高杯（356）は穿孔も有する。またNo. 7－S内の壺頸部破片（585～589）のように口縁部と胴部以下を打ち割った痕が認められるものや、鉢、高杯の体部を欠失する脚部などが多くみられる。その他の土器破片も破砕して投棄するなど人為的な行為が加わったものか、何か他に意味があるのかは不明であるが、口縁部のみに打ち欠きを受けた土器は生前に使用していたものを供献したのではなかろうか。

4）二次口縁をもつ土器　壺などの口頸部の破損後、二次口縁を作った土器（壺などに類例が多い）[註10]がある。（484）は壺の胴部に二次口縁をつくり、2孔1対の紐孔を錐状の原体で穿ち、無頸壺に転用している。（688）は頸部の途中から上部が欠失したもので、その部分に二次口縁をつくり直口壺にしている。（688）は胴部に小円孔を穿つものである。二次口縁にすることが直接埋葬との関係があったかどうかは不明である。日常容器としての使用時の変化ではなかろうか。

5）完形土器　完形土器は穿孔も打ち欠きも受けない土器で、小型の土器にみられる。No. 1－N1層内から無頸壺（264）、No. 4－S1層内から壺用蓋（383）、No. 5－W1層内から無頸壺が完全なまま出土している。その他、器体には部分的な欠失がみられるが完形土器であったことが考えられるものに、No. 5－N2層内の壺用蓋（414）、No. 7－S1層内の二次口縁の無頸壺（484）、No.10－S2層内の小型甕（748）、SK52内の無頸壺（782）、同蓋（780）などがあげられる。これらは田代氏が言われるように何か物を入れて供膳したものかもしれない。[註11]

6）その他の土器　先に「主な土器」としてとりあげたもののなかに、欠損部が大きくて1）～5）のグループに分けられない土器がある。欠損部に何らかの人為的な行為を受けたものもあるだろう。No. 1－Wの壺D（236）、No. 4－Wの壺A（406）、No. 4－Nの壺（413）な

どは出土状況の図版からもわかるように横位置で押しつぶされて出土しており、胴部片が大きく欠失している。

次に土器からみた方形周溝墓の埋葬時期、土器の搬入品について触れてみたい。

<時期>　各方形周溝墓の埋葬時期は盛土が中世遺構で削平されていることや、古い様相をもつ土器が新しい時期まで引き継がれたり、後の儀式や追葬などの可能性もあり定かにできない。ここでは4号墓の土器棺、各周溝内の「主な土器」を中心に型式学的な面から考える。

最初に述べたように出土した土器は第II～IV様式の時期のものがみられるが、この中では各周溝とも従来の第III様式（古・新）に入る土器が多い。埋葬との関係が強いのではないかと考えられる「主な土器」を中心にみると、第II様式の特徴をもつ土器はNo.1－N内の細頸壺（128）、No.2－N～W内の壺C（329）、4号墓の甕棺（322）、No.4－S内の鉢A（380）、壺A（400）、No.4－W内の壺B（405）、No.4－N内の壺C（411）、鉢A（412）、No.7－S内の壺A（475）、壺C（576）、二次口縁の無頸壺（484）、甕b（532・651）、甕（432）、蓋（566）などがあげられる。この内、穿孔が認められた土器は（128・380・400・405・411・475・532）、また口縁部の一部分を欠く土器は（329・576）などである。1・2・4・7号墓は第II～III様式の時期の土器が埋葬に関係しているといえよう。更に1・4号墓からは第III～IV様式の土器もみられる。2号墓からは他の土器片で第III（新）様式までのものがみられる。また7号墓からは西溝内の凹線文を施す水差（516）、東溝内の無文の直口壺（441）以外の土器は第III（古）様式の時期までに留まる。周溝がつづくNo.3－NとNo.5－W内からはそれぞ

第5表　「主な土器」法量表

| 遺構番号<br>出土地区 | 器種<br>土器番号 | 挿図番号<br>図版番号 | 法量<br>(cm) | 残存状況<br>穿孔(縦×横)ロ | 主な特徴 | 胎土・時期 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1－E<br>1層<br>XIXF20f | 壺A<br>(135) | 第41図<br>31 | 21.2<br>34.9(現)<br>欠 | ○口～胴部1/3残存<br>○底部欠失 | ○下ぶくれの胴部に直立気味の頸部から口縁部に続く。<br>○施文は頸部へ肩部に簾状文、胴底部に分割したヘラ磨き、全体にヘラ磨き、全体に器表面は凸凹がある。 | ○暗褐色<br>○生駒西麓<br>○III～IV様式 |
| 1－W<br>1層<br>XIXF17g | 壺A<br>(201) | 第44図<br>33 | 16.75<br>29.4<br>6.5 | ○口縁部欠き<br>○胴部に穿孔(0.8×0.7)<br>○底部に穿孔(4×2) | ○外面は頸胴部をハケ目。胴部下位は横方向のヘラ磨き。底部は縦方向に6分割のミガキ。<br>○胴部に二次焼成痕あり。<br>○2孔をもつ面は風化。 | ○暗褐色<br>○生駒<br>○III～IV |
| 1－W<br>1、2層<br>XIXF17～18g | 甕<br>(222) | 第45図<br>33 | 18.2<br>34.5(復)<br>6.75 | ○胴部を欠く。 | ○底部の厚い体部、外面はヘラ磨き、ハケ目、内面頸部はミガキ、体部はハケ目。<br>○底部、内面の胴部に煤が付着。 | ○赤茶褐色<br>○生駒<br>○III～IV |
| 1－W<br>2層<br>XIXF17g | 壺D<br>(236) | 第46図<br>33 | 13.06<br>26.5<br>6.1 | ○口縁一部を欠失<br>○胴部中位を一部欠失 | ○卵形の胴部に短い頸部。<br>○口縁端面に凹線文<br>○胴部中位は横方向にヘラ削り。 | ○暗褐色<br>○生駒<br>○III～IV |

| 遺構番号<br>出土地区 | 器種<br>土器番号 | 挿図番号<br>図版番号 | 法量<br>(cm) | 残存状況<br>穿孔(縦×横)cm | 主な特徴 | 胎土・時期 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1－W<br>2層<br>XIXF17f | 壺<br>(249) | 第46図<br>33 | 15.6<br>22.5<br>5.1 | ○口～胴部を欠失。 | ○底面の厚い体部、上部はハケ目、下部はヘラ磨き。磨滅気味、内面はハケ目、底部に爪跡。<br>○胴底部の内外面に煤付着。 | ○黄褐色<br>○生駒西麓<br>○Ⅲ～Ⅳ様式 |
| 1－N<br>1層<br>XIXF17f | 無頸壺B<br>(264) | 第47図<br>36 | 8.0<br>9.2<br>4.2 | ○完形 | ○胴部下位で強く張り出す。<br>○羽状文、擬状文の上に縦方向1cm間隔にヘラ磨き。<br>○底部は4分割に横方向のヘラ磨き。 | ○褐色<br>○生駒<br>○Ⅲ～Ⅳ |
| 2N～W<br>2層<br>XIXF16g | 小型壺C<br>(329) | 第53図<br>37 | 8.6<br>11.3<br>4.5 | ○口縁一部を欠失<br>(ほぼ完形) | ○下ぶくれの体部に口縁部が短く外反。<br>○外面はヘラ削り、内面は上位粘土の継ぎ目を残し、凹凸が著しいなど全体に荒い作り。 | ○褐色<br>○生駒<br>○Ⅱ～Ⅲ |
| 3－N<br>1層<br>XIXF14g・h | 壺b<br>(1056)<br>第50図 | 第50図<br>38 | 32.6<br>46.1<br>10.9 | ○口～体部を1/4欠失 | ○平底から胴部が丸く張り出す体部。口縁部は「く」の字形に外反。<br>○内外面ハケ目調整、外面胴～底部をヘラ削り。<br>○胴部に黒斑。○二次焼成痕。 | ○にぶい褐色<br>○生駒<br>○Ⅲ～Ⅳ |
| 3－N<br>1、2層<br>XIXF14g・h | 壺a<br>(321) | 第50図<br>— | 24.6<br>40.8<br>8.0 | ○口～体部を1/3欠失 | ○器壁の薄い倒鐘形の体部に縁部が外反する。外面、内面肩部をヘラ磨き。<br>○全体に磨滅。 | ○茶褐色<br>○生駒<br>○Ⅲ |
| 3－N<br>1、2層<br>XIXF15g | 鉢B<br>(341) | 第53図<br>37 | 26.95<br>15.7<br>6.45 | ○口～胴部を欠失 | ○胴部が少し張り出し口縁部が内傾して立つ。<br>○整形は内外面共、磨滅のため不鮮明。底部にヘラ磨きが残える。胴部の相反する位置に黒斑。 | ○黄褐色<br>○生駒<br>○Ⅲ～Ⅳ |
| 3－N<br>1層<br>XIXF14g・h | 鉢A<br>(349) | 第53図<br>38 | 14.8<br>6.4<br>4.1 | ○口縁一部を欠失 | ○底面が厚い体部。口縁端部は内方に少し拡張。口縁部に3条の凹線文。内外面共、風化気味で底部に指押えが残る。黒斑をもつ。 | ○浅黄褐色<br>○他地方<br>○Ⅳ |
| 3－N<br>2層<br>XIXF14g・h | 壺A<br>(350) | 第54図<br>37 | 17.2<br>28.0<br>5.9 | ○口頸部を一部欠失<br>○底部に穿孔<br>(3.2×1.6) | ○下ぶくれの胴部に短かくひらく口頸部。<br>○頸部に斜め方向の指押え、体部はヘラ磨き。<br>○内面底部はくもの巣状にハケ目。胴部に黒斑。 | ○橙褐色<br>○生駒<br>○Ⅲ～Ⅳ |
| 3－N<br>2層<br>XIXF14g・h | 壺D<br>(351) | 第54図<br>38 | 8.6<br>18.3<br>5.0 | ○胴部を一部欠失<br>○底裏面に穿孔<br>(1.6×1.4) | ○丈高の胴部から頸部が直立し口縁部が短かく外反。<br>○外面胴部をヘラ磨き、下位を横方向にヘラ磨き。<br>○底部にヘラ削り。内面の器面は磨滅。 | ○浅黄褐色<br>○生駒<br>○Ⅲ～Ⅳ |
| 3－N<br>2層<br>XIXF14g・h | 壺D<br>(352) | 第54図<br>37 | 12.3<br>24.5<br>6.1 | ○完形<br>○胴部に穿孔(4.1×4.6) | ○平底から球形に近い体部。頸部は直立気味で口縁部が水平近く外反する。<br>○胴部二次焼成痕あり、煤付着。<br>○器表面はとんど磨滅状態。 | ○橙色<br>○他地方<br>○Ⅲ～Ⅳ |

| 遺構番号<br>出土地区 | 器種<br>土器番号 | 挿図番号<br>図版番号 | 法量<br>(cm) | 残存状況<br>穿孔(縦×横)cm | 主な特徴 | 胎土・時期 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 3－N<br>2層<br>XIXF14 g・h | 壺D<br>(353) | 第54図<br>—<br>— | 19.0<br>35.5<br>6.5 | ○口縁～脚部1/3を欠失 | ○丈高の肩部が張り出す脚部に短かく直立する頸部から口縁部が外反、器表面の剥離が著しい。<br>○板状工具によるハケ目調整、脚底部にヘラ削り。 | ○黄褐色<br>○生駒西麓<br>○Ⅲ～Ⅳ様式 |
| 3－N<br>2層<br>XIXF14 g・h | 高杯B<br>(356) | 第54図<br>38 | 22.9<br>20.45<br>14.15(復) | ○口縁盡下部を打欠き<br>○杯底部に穿孔<br>(2.8×2.5) | ○均一な厚みをもつ脚部から杯部に続く。口縁部上端面に斜格子文。<br>○杯部内面にハケ目の上の放射状のミガキ。<br>○丁寧な作りだが、全面磨滅気味。 | ○茶褐色<br>○生駒<br>○Ⅲ～Ⅳ |
| 4号方形周溝墓<br>XIXF13 f | 壺棺<br>(322)<br>壺b | 第51図<br>41 | 19.2<br>26.5<br>6.85 | ○完形 | ○厚い底面から脚部はあまり張り出さずに口縁部はやや外上方に立ち、端部をわずかに巻きこむ。<br>○脚部に煤付着。<br>○内外面共磨滅が著しい。指押え痕がみられる。 | ○灰褐色<br>○他地方<br>○Ⅱ |
| 4号方形周溝墓<br>XIXF13 f | 壺棺<br>(323)<br>壺a | 第51図<br>41 | 25.65<br>38.4<br>7.9 | ○完形 | ○器壁の薄い倒鐘形の体部に口縁部が外反する。<br>○外面内面共にヘラ磨き。 | ○茶褐色<br>○生駒<br>○Ⅲ |
| 4－S<br>1層<br>XIXF13 f | 壺A<br>(378) | 第56図<br>41 | 15.5<br>30.5<br>6.2 | ○完形<br>○脚部に下位穿孔<br>(2×1.5) | ○丈高の脚部の短かい頸部から外反する口縁部。<br>○外面の施文はところどころ剥離している。<br>○器表面磨滅。<br>○外面頸～脚部をハケ目、脚～底部をヘラ磨き。 | ○灰褐色<br>○生駒<br>○Ⅲ～Ⅳ |
| 4－S<br>1層<br>XIXF13 g | 鉢A<br>(380) | 第56図<br>42 | 16.3<br>9.0<br>6.1 | ○完形<br>○底部に穿孔<br>(1.5×1.6) | ○厚みが3cmもある底部をもつ。全体に均一な作りでない体部上半分を横方向にヘラ削り。下半部を指押え。<br>○体部～底面に大きな黒斑。 | ○橙色<br>○他地方<br>○Ⅱ |
| 4－S<br>1層<br>XIXF13 g | 台付鉢B<br>(382) | 第56図<br>42 | 18.5<br>18.8<br>12.4 | ○口縁部・脚部を一部欠失。 | ○脚部の器壁はかなり厚く、裾部までつづく。<br>○体部は羅状文の上から縦方向に3本ずつのヘラ磨きを8ヶ所施す。脚部は剥離気味。<br>○体部に黒斑。 | ○橙褐色<br>○生駒<br>○Ⅲ～Ⅳ |
| 4－S<br>1層<br>XIXF13 g | 蓋<br>(383) | 第56図<br>42 | 8.5<br>2.5 | ○完形 | ○つまみをもつ蓋。<br>○口縁部はそのまま終る。<br>○外面は細かいヘラ磨き。 | ○橙褐色<br>○他地方<br>○Ⅱ～Ⅲ |
| 4－S<br>1、2層<br>XIXF14 f | 壺A<br>(395) | 第57図<br>41 | 16.2<br>28.6<br>5.65 | ○口縁部一部を打欠<br>○底部に穿孔<br>(6.2×5.6) | ○下ぶくれの脚部に漏斗状にひらく口縁部。 | ○にぶい褐色<br>○生駒<br>○Ⅲ～Ⅳ |
| 4－S<br>1層<br>XIXF14 f | 甕<br>(389) | 第56図<br>— | 16.35<br>22.3(復)<br>5.6 | ○口縁～体部を一部欠失。<br>○底部に穿孔<br>(1.5×2) | ○丸く張り出す肩部に「く」の字形に外反する口縁部。<br>○内外面共磨滅が著しい。<br>○外面上部ハケ目、下部にヘラ削りがみられる。 | ○褐色<br>○生駒<br>○Ⅲ～Ⅳ |

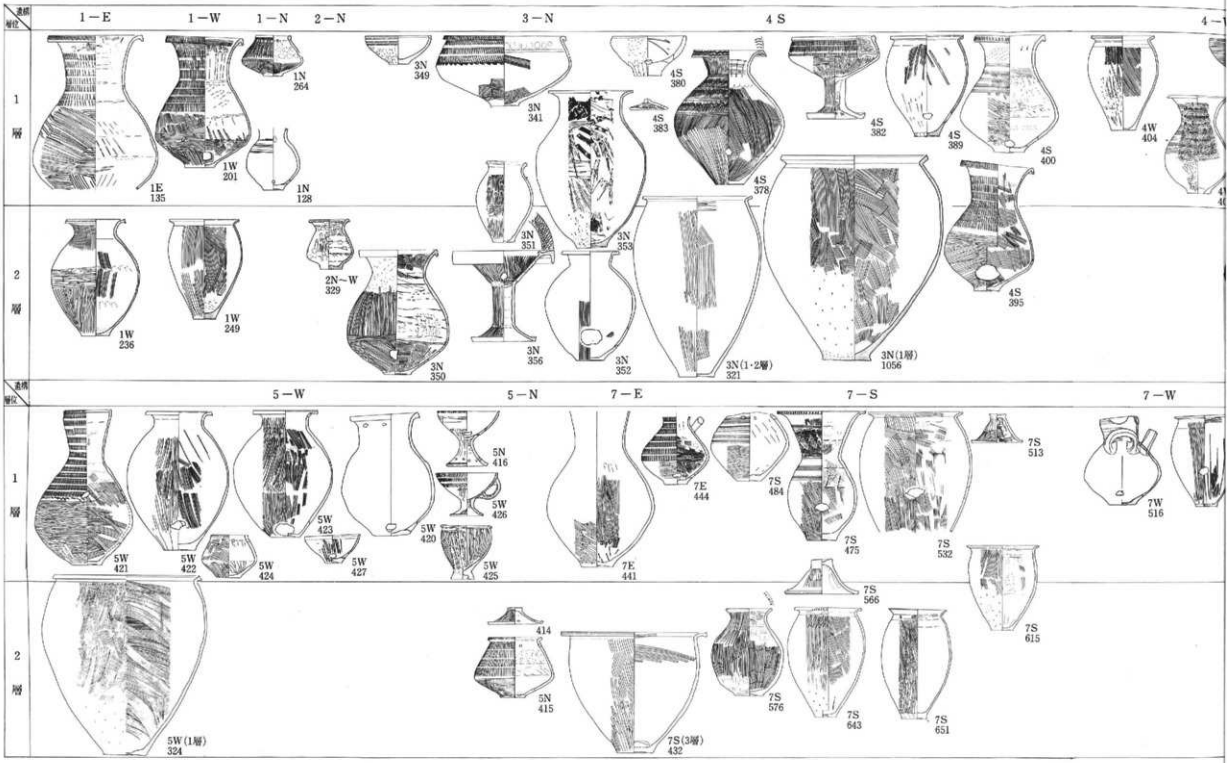
| 遺構番号<br>出土地区 | 器種<br>土器番号 | 挿図番号<br>図版番号 | 法量<br>(cm) | 残存状況<br>穿孔(縦×横)cm | 主な特徴 | 胎土・時期 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 4－W<br>1層<br>XIXF13f | 壺A<br>(400) | 第57図<br>43 | 15.35<br>26.6<br>6.8 | ○口頸部、胴部を欠失。<br>○底部下位に穿孔<br>(2.8×2.3) | ○胴部が強く張り出し、頸部は外開し口縁部に続く。<br>○頸部は斜めに指押え痕がつく。器壁は全体に厚い。<br>○頸部下位～胴部上位にハケ目の上に直線文。 | ○茨褐色<br>○生胸西麓<br>○Ⅱ～Ⅲ様式 |
| 4－W<br>1層<br>XIXF12f | 甕<br>(404) | 第57図<br>— | 14.0<br>21.5<br>5.5 | ○口～体部を1/3欠失 | ○口縁部は「く」の字形に外反し、端面に擬凹線文。<br>○外面はハケ目とヘラ削り。<br>○内面はハケ目調整、底部は器表面が剥離。 | ○明赤褐色<br>○生胸<br>○Ⅲ～Ⅳ |
| 4－W<br>1層<br>XIXF13g | 壺A<br>(405) | 第58図<br>43 | 12.6<br>22.0<br>5.0 | ○完形<br>○底面に穿孔<br>(2.4×2.2) | ○球形に近い胴部から漏斗状にひらく口縁部。<br>○口縁部は外傾する。<br>○頸胴部に稚拙な櫛描文。<br>○胴部上位をヘラ磨き、下位をヘラ削りする。 | ○にぶい黄橙色<br>○生胸<br>○Ⅱ～Ⅲ |
| 4－W<br>1層<br>XIXF14g | 壺A<br>(406) | 第58図<br>43 | 18.8<br>39.0<br>6.6 | ○胴部一部を欠失<br>○穿孔は不明 | ○口縁部内面から外面～胴部まで施文。<br>○外面胴部～底裏面をヘラミガキ。<br>○器壁が非常に薄い。 | ○橙褐色<br>○生胸<br>○Ⅲ～Ⅳ |
| 4－W<br>1層<br>XIXF13g | 高杯B<br>(407) | 第58図<br>43 | 26.0<br>24.8<br>13.2 | ○口縁部を約1/3欠く。<br>○杯部に孔(1.4×1.7)脚部に2孔を相対する位置に穿孔。 | ○丈高の脚部に器厚の非常に薄い杯部をもつ。<br>○外面はヘラ磨き。<br>○脚部はしぼり目と横方向のヘラ削り。 | ○にぶい黄褐色<br>○生胸<br>○Ⅲ～Ⅳ |
| 4－W<br>1層<br>XIXF12f | 高杯A<br>(408) | 第58図<br>— | 34.0<br>24.9<br>14.9 | ○口～体部を1/3欠失<br>○欠失部に穿孔があったかもしれない。 | ○脚部はやや太めの柱状部から裾部までひらく。<br>○杯部は直口の鉢。杯部内外面、脚部外面をヘラ磨き。脚部内面はヘラ削り。 | ○にぶい黄褐色<br>○生胸<br>○Ⅲ～Ⅳ |
| 4－N<br>1層<br>XIXF12e | 壺C<br>(411) | 第59図<br>— | 14.3<br>25.5<br>17.25 | ○口～体部を1/3欠失<br>○胴部上位に穿孔<br>(1.3×1.5) | ○肩部で張り出す丈高の器体。口頸部は内湾しながらひらく。全体にいびつな形である。<br>○内外面共剥離。胴底部に大きな黒斑。 | ○明赤褐色<br>○他地方<br>○Ⅱ～Ⅲ |
| 4－N<br>1層<br>XIXF12e | 鉢A<br>(412) | 第59図<br>44 | 19.2<br>13.6<br>7.3 | ○口縁部付近一部を欠失<br>○胴部上位に穿孔<br>(1.3×1.5) | ○上げ底風の厚めの底部から直口形の体部<br>○外面はヘラ磨きと胴下半部を横方向にヘラ削り。<br>○底部は正円形だが口縁部は楕円形を呈す。 | ○明赤褐色<br>○他地方<br>○Ⅱ～Ⅲ |
| 4－N<br>1層<br>XIXF12e | 壺A<br>(413) | 第59図<br>44 | 19.55<br>34.8<br>6.75 | ○胴部口縁部を一部欠失 | ○丈高の胴部に直立気味の頸部から内縁部が水平に開く。口縁端部に刻み目文。頸部に貼り付け凸帯。<br>○胴部の相対する位置に黒斑。 | ○浅黄橙色<br>○他地方<br>○Ⅲ |
| 5－N<br>2層<br>XIXF14f | 蓋<br>(414) | 第59図<br>44 | 12.2<br>3.7<br>3.6 | ○完形 | ○口縁部は外湾気味にひらく。端部は上方に少し肥厚する。<br>○外面の2/3～内面の1/3位黒斑。<br>○黒斑以外の面は風化。 | ○灰白色<br>○他地方<br>○Ⅲ～Ⅳ |

| 遺構番号<br>出土地区 | 器種<br>土器番号 | 挿図番号<br>図版番号 | 法量<br>(cm) | 残存状況<br>穿孔(縦×横)cm | 主な特徴 | 胎土・時期 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 5－N<br>2層<br>XIXF14 f | 無頸壺B<br>(415) | 第57図<br><br>44 | 12.0<br>13.6<br>5.6 | ○胴部を一部を欠失<br>○底部下位に穿孔<br>(1.7×1.1) | ○口縁部は外反し、面をもって終る。<br>胴部～底部のヘラミガキは6分割。<br>○底裏面に黒斑。 | ○褐色<br>○生胴西華<br>○Ⅲ～Ⅳ様式 |
| 5－N<br>1層<br>XIXF14 f | 台付鉢A<br>(416) | 第59図<br><br>44 | 13.85<br>12.4<br>8.9(脚径) | ○口～体部を一部欠失<br>○杯底部に穿孔<br>(1×2.1) | ○「八」の字形にひらく脚部に直口の鉢。<br>○口縁端部に刻み目、脚部に10個の円孔、裾部に竹管文。<br>○杯部は磨滅気味。 | ○暗灰色<br>○生胴<br>○Ⅲ～Ⅳ |
| 5－W<br>1層<br>XIXF14 g | 壺<br>(324) | 第52図<br><br>46 | 33.0<br>40.3<br>10.1 | ○口縁と胴部一部を欠失<br>ほぼ完形 | ○胴部上位で張り出す体部。<br>○外面胴部ハケ目の上にヘラ磨き、底部をヘラ削り、内面ハケ目。<br>○胴部に大きな黒斑。 | ○橙褐色<br>○他地方<br>○Ⅲ～Ⅳ |
| 5－W<br>1層<br>XIXF14 g・h | 壺D<br>(420) | 第60図<br><br>45 | 15.2<br>27.4<br>8.3 | ○口縁部一部を欠失<br>○底部に穿孔<br>(2.2×2.3) | ○球形に近い体部から頸部が立ち口縁部が下方に肥厚する。<br>○全面ナデ調整、器壁は厚く重量感がある。<br>○胴底部に二次焼成痕あり。 | ○褐灰色<br>○生胴<br>○Ⅲ～Ⅳ |
| 5－W<br>1層<br>XIXF14 g | 細頸壺<br>(421) | 第60図<br><br>45 | 10.5<br>34.4<br>6.4 | ○口頸部を一部欠失<br>○胴部中位と底部に穿孔 | ○下ぶくれの胴部から頸部下が縊まる口頸部。<br>○口頸部の櫛状文の幅は均一ではない。<br>○外面胴底部をヘラ磨き内面ハケ目。 | ○褐灰色<br>○生胴<br>○Ⅲ～Ⅳ |
| 5－W<br>1層<br>XIXF15 g | 壺D<br>(422) | 第60図<br><br>45 | 14.4<br>30.8<br>6.9 | ○ほぼ完形<br>○底部は上位に穿孔<br>(2.4×2.3) | ○口縁部が水平に外反し、端部が上方に肥厚。<br>○外面全面をヘラ磨き、内面胴底部をハケ目。<br>○外面器表面磨滅。<br>○胴部に黒斑。 | ○橙色系<br>○他地方（？）<br>○Ⅲ～Ⅳ |
| 5－W<br>1層<br>XIXF14 g | 壺D<br>(423) | 第60図<br><br>45 | 14.45<br>28.6<br>6.3 | ○口頸部を一部欠失<br>○底面近くに穿孔<br>(3.7×4.2) | ○胴部を丸く張り出す体部に短く立つ頸部から口縁部が水平近く外反する。<br>○外面上部は粗いハケ目、下部はミガキ、内面はハケ目。<br>○胴部に二次焼成痕。 | ○黄褐色<br>○他地方（？）<br>○Ⅲ～Ⅳ |
| 5－W<br>1層<br>XIXF14 g・h | 無頸壺B<br>(424) | 第60図<br><br>— | 7.4<br>9.70<br>5.0 | ○完形 | ○やや胴部下位が張り出す。体部上位部は粗いハケ目。底部はヘラ磨き。<br>○胴底部の半分は風化がひどい。 | ○にぶい褐色<br>○生胴(？)<br>○Ⅲ～Ⅳ |
| 5－W<br>1層<br>XIXF14 g | 台付壺<br>(425) | 第60図<br><br>46 | 10.4<br>12.2<br>5.1 | ○完形<br>○胴部中位に穿孔<br>(0.8×0.8) | ○裾部が内方にひろがる短脚。<br>○口縁部の作りが粗雑であまり張り出さない体部をもつ。<br>○脚部に大きく黒斑。<br>○穿孔のある面は風化がひどい。 | ○にぶい褐色<br>○生胴<br>○Ⅲ～Ⅳ |
| 5－W<br>1層<br>XIXF14 g | 台付鉢A<br>(426) | 第60図<br><br>— | 13.7<br>9.7<br>7.3 | ○口～体部は1/3を欠失 | ○短脚に把手付の体部がつく。<br>○内外面共、磨滅が著しい。 | ○にぶい橙色<br>○生胴<br>○Ⅲ～Ⅳ |

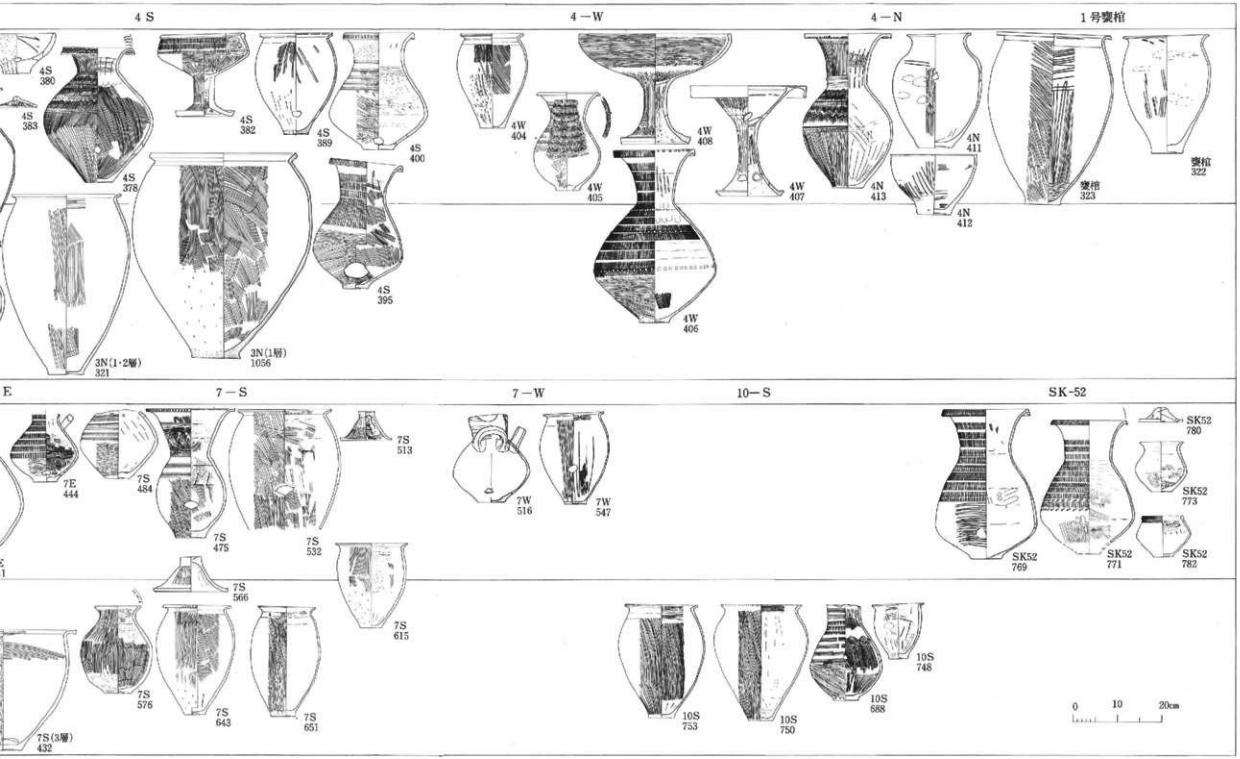
| 遺構番号<br>出土地区 | 器種<br>土器番号 | 挿図番号<br>図版番号 | 法量<br>(cm) | 残存状況<br>穿孔(縦×横)cm | 主な特徴 | 胎土・時期 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 5－W<br>1層<br>XIXF14 g・h | 鉢A<br>(427) | 第60図<br>— | 12.35<br>6.3<br>3.6 | ○口～体部を1/3欠失<br>○底面に近い位置に穿孔<br>(1.2×1.6) | ○上げ底風でやや厚めの底部から直口の体部。<br>○内外面共ヘラ磨き。<br>○体部の相反する位置に黒斑。 | ○橙褐色<br>○生駒西麓<br>○Ⅲ～Ⅳ様式 |
| 7－E<br>1層<br>XXF4 f (に) | 直口壺(現)<br>(441) | 第62図<br>49 | 欠<br>35.1(現)<br>6.6 | ○口縁部を打欠き<br>○胴部一部を欠失 | ○外面頸～胴部は風化がひどい。<br>○底部はヘラミガキ、内面はハケ目。 | ○茶褐色<br>○生駒<br>○Ⅲ～Ⅳ |
| 7－E<br>1層<br>XXF4 f (た) | 水差<br>(444) | 第62図<br>— | 欠<br>14.8(現)<br>5.0 | ○口～体部を一部欠失<br>○底部に穿孔<br>(1.6×1.8) | ○胴部中位で張り出す体部に把手をもつ。<br>○外面は磨滅気味、内面はハケ目。<br>○胴部に黒斑、反対側にやや小さい黒斑。 | ○明褐色<br>○生駒<br>○Ⅲ～Ⅳ |
| 7－E<br>1層<br>XXF3 g | 壺<br>(454) | 第63図<br>— | 17.0<br>29.5<br>5.7 | ○口～底部を2/3欠失 | ○厚い底から薄い器壁の体部口、縁部が水平近く外反。<br>○外面上半分を細かいハケ目、下部をヘラミガキ。内面はやや粗いハケ目。<br>○内外面煤付着。磨滅気味。 | ○にぶい橙色<br>○生駒<br>○Ⅲ～Ⅳ |
| 7－S<br>3層<br>XXF3 f g | 壺<br>(432) | 第61図<br>56 | 32.3<br>27.0<br>8.0 | ○口～体部を一部欠失 | ○外面上半部をハケ目、下半分をヘラ削りを残すヘラ磨き。内面の口縁部をハケ目、胴部上位のハケ目は手縞竹管の痕体。<br>○底面に赤色顔料付着か？体部に黒斑。<br>○底部に二次的成痕。 | ○にぶい橙色<br>○他地方<br>○Ⅱ |
| 7－S<br>1層<br>XXF3 f | 壺A<br>(475) | 第65図<br>51 | 19.9<br>28.6<br>6.7 | ○口～胴部一部を欠失<br>○胴部に穿孔<br>(1.8×3.5) | ○厚い底部から断形の胴部に口縁部が大きく開く。<br>○口縁部は水平にひろがり、端面に刻み目文を施す。<br>○頸部には波状文、胴部器表面剥離。 | ○赤茶褐色<br>○生駒<br>○Ⅱ |
| 7－S<br>1層<br>XXF3 f | 無頸壺<br>(484) | 第65図<br>51 | 10.0<br>15.3<br>5.1 | ○胴部を一部欠失(二次口縁) | ○壺の口頸部を欠いたもの。無頸壺として二次口縁部にし、2孔1対を2組穿つ。内面黒色を呈す。<br>○内外面磨滅<br>○黒斑をもつ。 | ○にぶい橙色<br>○他地方<br>○Ⅱ |
| 7－S<br>1層<br>XXF3 f | 蓋<br>(513) | 第66図<br>57 | 11.4<br>6.5<br>3.5(ツマミ) | ○口縁部を一部欠失 | ○天井部の凹部に爪痕がみられる。<br>○口縁端面の作りは均一ではなく凹凸をもつ。<br>○口縁部付近に煤が付着。 | ○にぶい橙色<br>○他地方<br>○Ⅲ～Ⅳ |
| 7－S<br>1層<br>XXF3 g | 壺<br>(532) | 第67図<br>— | 20.9<br>27.2(現)<br>欠 | ○底部を欠失<br>○胴部に穿孔<br>(3×3.8) | ○外面上半部を粗いハケ目。下半部をヘラミガキ。内面口縁部をハケ目。体部は細いハケ目。<br>○内外面の体部に煤付着。 | ○橙色<br>○他地方<br>○Ⅱ～Ⅲ |
| 7－S<br>2層<br>XXF3 f | 台付鉢A<br>(562) | 第69図<br>— | 16.0<br>20.5<br>9.4 | ○口～脚部の2/3を欠失 | ○短い柱状部に「ハ」の字形にひらく脚部に把手付のやや長胴形の体部がつく。<br>○脚部に三角形など矩形の透しをもつ。全面ハケ目調整。 | ○淡橙色<br>○他地方<br>○Ⅱ～Ⅲ |

| 遺構番号<br>出土地区 | 器種<br>土器番号 | 掲図番号<br>図版番号 | 法量<br>(cm) | 残存状況<br>穿孔(縦×横)cm | 主な特徴 | 胎土・時期 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 7－S<br>2層<br>XXF3 g | 壺<br>(588) | 第69図<br>—<br>— | 16.1<br>7.8<br>4.5(ツマミ) | ○口縁部を1/3欠失 | ○凹みもつ天井部から外湾気味に口縁部までひらく。<br>○外面は磨滅気味。 | ○にぶい橙色<br>○他地方<br>○Ⅱ～Ⅲ様式 |
| 7－S<br>2層<br>XXF3 g | 壺A<br>(574) | 第70図<br>53 | 21.4<br>33.3<br>6.7 | ○口～底部まで3/4欠失 | ○平底から胴部中央で張り出す体部に短かい頸部。<br>○口縁部は水平に外反し、端面に列点文、頸部～胴部上位に櫛描文を施す。 | ○赤褐<br>○他地方<br>○Ⅱ～Ⅲ |
| 7－S<br>2層<br>XXF3 g | 壺C<br>(576) | 第70図<br>53 | 9.8<br>19.85<br>5.2 | ○口縁部を一部欠失 | ○上げ底から器壁の厚い体部をつくりあげる。<br>○内外面をハケ目調整。底部の一部にハケ目の上に粘土をつぎ足す。<br>○口縁上端面に刻み目文。 | ○浅黄色～褐色<br>○他地方<br>○Ⅱ |
| 7－S<br>1、2層<br>XXF3 f・g | 壺<br>(615) | 第72図<br>—<br>— | 16.2<br>19.15<br>4.6 | ○口～体部を2/3欠失 | ○胴部があまり絞まらずに「く」の字形に口縁部が外反。<br>○外面胴部上半分はハケ目、下半分はヘラ削り。煤付着。<br>○内面は剥離。 | ○赤褐<br>○他地方<br>○Ⅱ～Ⅲ |
| 7－S<br>1、2層<br>XXF3 g、4 f | 壺<br>(617) | 第72図<br>—<br>— | 14.4<br>23.7<br>5.2 | ○口～体部を1/2欠失 | ○上げ底風でやや厚めの底部から、倒鐘形の体部。口縁部は短かく外反。<br>○外面頸部を指押え、体部をヘラ磨き。 | ○赤褐色<br>○生駒西麓<br>○Ⅱ～Ⅲ |
| 7－S<br>2層<br>XXF3 f | 壺b<br>(643) | 第73図<br>56 | 14.8<br>24.6<br>4.6 | ○胴部を一部欠失 | ○口縁部、胴部に刻み目文(7個＋α)<br>○胴部は内外面をハケ目、底部はヘラ削り。<br>○二次焼成をうけ内面はこげつき外面胴部器表面剥離。<br>○底面に焼成後の孔。 | ○橙色系<br>○他地方<br>○Ⅲ |
| 7－S<br>2層<br>XXF3 g | 壺b<br>(651) | 第73図<br>56 | 12.9<br>24.8<br>5.4 | ○口～胴部を一部欠失 | ○厚い底に体部から口縁部までに薄い器壁。<br>○内面の口縁部下位はハケ目の上をナデ。<br>○内外面の胴底部にススが付着。 | ○黄橙色<br>○他地方(？)<br>○Ⅱ～Ⅲ |
| 7－W<br>1層<br>XXF2 f (x) | 水差<br>(516) | 第66図<br>57 | 8.5<br>19.8<br>6.0 | ○胴部一部を欠失<br>○底部に穿孔<br>(1.5×1.7) | ○口縁部に凹線文<br>○外面は摩滅が著しい。<br>○胴部に黒斑。 | ○灰褐色<br>○生駒<br>○Ⅳ |
| 7－W<br>1層<br>XXF2 f (x) | 壺a<br>(547) | 第68図<br>— | 13.15<br>20.4<br>4.75 | ○ほぼ完形<br>○胴部下位に穿孔<br>(2.1×1.8) | ○胴部から口縁部が短かく外反する。内面肩部、内外面体部ミガキ調整。内面胴底部にハケ目。<br>○二次焼成のため外面剥離底面、内面胴底部黒色。 | ○茶褐色<br>○生駒<br>○Ⅲ～Ⅳ |
| 10－S<br>1、2層<br>XXF1 g | 無頸壺<br>(662) | 第74図<br>—<br>— | 12.0<br>12.5<br>5.2 | ○全体の2/3を欠失 | ○胴部下部が張り出し内湾しながら立ち上がる器体。段状口縁部。<br>○外面全面をヘラ磨き。<br>○底部は8分割のヘラ磨き。 | ○灰褐褐色<br>○生駒<br>○Ⅲ～Ⅳ |

| 遺構番号<br>出土地区 | 器種<br>土器番号 | 掲図番号<br>図版番号 | 法量<br>(cm) | 残存状況<br>穿孔(縦×横)cm | 主な特徴 | 胎土・時期 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 10－S<br>2層<br>XXF1 g | 壺A<br>(688) | 第75図<br>59 | 欠<br>21.5<br>5.3 | ○口縁部を打ち欠く<br>○胴部中位に小孔<br>(1×1) | ○球形の胴部にまっすぐ立ち上がる頸部。<br>○外面は直線文と簾状文を施す。<br>○胴部外面をヘラ磨き、内面ハケ目。胴部に黒斑。 | ○橙褐色<br>○生胴西麓<br>○II様式 |
| 10－S<br>2層<br>XXF1 g | 壺<br>(748) | 第77図<br>59 | 11.3<br>12.4<br>3.9 | ○口縁部を一部欠失 | ○厚手の上げ底から胴部はあまりひろがらず、口縁部が外反する。全体に均一な作りではない。<br>○二次焼成による煤付着。器表面剥離が多い。 | ○にぶい橙色<br>○他地方<br>○II～III |
| 10－S<br>2層<br>XXF1 g | 壺b<br>(750) | 第77図<br>— | 17.8<br>26.1<br>5.1 | ○口～体部の2/3を欠失 | ○胴部上位で張り出す体部。<br>○体部外面、口縁部内面に粗いハケ目。<br>○外面体部、内面胴部上位と底部に煤付着。 | ○にぶい褐色<br>○他地方<br>○II～III |
| 10－S<br>2層<br>XIXF20g・h、<br>XXF1 g・h | 壺a<br>(753) | 第77図<br>59 | 16.3<br>25.35<br>5.8 | ○口～胴部の1/3を欠失 | ○やや厚い底から薄手の体部。<br>○外面は肩部へ底部、底裏面までヘラミガキ。<br>○内面は口～肩部をミガキ、体部はハケ目、内外面煤付着。 | ○にぶい褐色<br>○生胴<br>○III～IV |
| SK－52<br>XIXF20 e | 水差<br>(763) | 第78図<br>63 | 6.55<br>13.85<br>3.6 | ○口～底部を1/2欠失 | ○胴部下位で張り出す体部を短かい頸部が斜めに開く。<br>○口縁部の約1/2は斜めに傾きをもつ。<br>○胴部に縦位の流水文を6帯施す。<br>○器表面の摩滅が著しい。 | ○灰褐色<br>○生胴<br>○III～IV |
| SK－52<br>XIXF20 e | 壺A<br>(769) | 第79図<br>— | 19.2<br>33.5<br>6.3 | ○口縁～胴部の1/3を欠失<br>○胴部下位に穿孔(3×2.2) | ○胴部下位で張り出す均正のとれた形を呈す。<br>○器壁が非常に薄い。<br>○胴部を横方向にヘラ磨き。<br>○外面の摩滅著しい。 | ○茶褐色<br>○生胴<br>○III～IV |
| SK－52<br>XIXF20 e | 壺A(現)<br>(771) | 第79図<br>63 | 16.4<br>30.0(現)<br>欠 | ○底部を欠失<br>○胴部下半に穿孔<br>(2×0.7) | ○下ぶくれの胴部に口頸が開く。<br>○簾状文と列点文、扇形文を組み合わす。<br>○器表面の摩滅が著しい。 | ○灰褐色<br>○生胴<br>○III～IV |
| SK－52 | 壺C<br>(773) | 第80図<br>63 | 9.6<br>11.3<br>4.6 | ○口縁～胴部の1/3を欠失 | ○球形の体部に口縁部が外反し、そのまま終る。形は均一ではない。<br>○底部～底表面にかけて黒斑。<br>○内外面摩滅著しい。 | ○明褐色<br>○生胴<br>○II～III |
| SK－52<br>XIXF20 e | 鉢<br>(780) | 第81図<br>63 | 9.6<br>3.25<br>2.4<br>(ラマミ) | ○口縁部を一部欠失 | ○厚めの器壁。口縁部は外湾気味に開き端部は上方に少し肥厚、頂部は凹みをもつ。<br>○器表面ははとんど摩滅。 | ○にぶい黄橙色<br>○他地方<br>○III～IV |
| SK－52<br>XIXF20 e | 無頸壺<br>(782) | 第81図<br>63 | 9.1<br>9.2<br>4.2 | ○完形 | ○胴部中位で張り出す。やや上げ底風。<br>○器表面の剥離がひどい。<br>○体部に黒斑をもつ。 | ○にぶい橙色<br>○他地方<br>○III～IV |




第83図　方形周溝墓・周溝・土坑出土の完形及び穿孔をうけた土器集成図




第83図　方形周溝墓・周溝・土坑出土の完形及び穿孔をうけた土器集成図

れ第Ⅲ（新）～Ⅳ様式の時期の土器が一括してみられる。以上、型式学的に土器をみた結果、1・4号墓は第Ⅱ～Ⅳ様式、2号墓は第Ⅱ～Ⅲ（新）様式、3・5号墓は第Ⅲ（新）～Ⅳ様式、7号墓は第Ⅱ～Ⅲ様式（古）・Ⅳ様式の土器が埋葬に関係しているといえる。

また、1号墓の東側にあたる10号方形周溝、ＳＫ52からは第Ⅱ～Ⅳ様式の土器がみられるが、そのなかで10号周溝内は第Ⅱ・Ⅲ（新）～Ⅳ様式の土器が多く、ＳＫ52内は第Ⅲ（新）～Ⅳ様式の土器が多い。

＜搬入品＞　地元産の土器であるのか、搬入品であるのかを見分けるためには、角閃石が胎土に含むか含まないかが大きな手掛りになることが通説であった。最近になって、山田健夫氏が伊丹市口酒井遺跡の縄文、弥生土器の胎土を分析され、角閃石には2種類あること、従って2種類の角閃石を含む土器は生駒西麓産といえるが、1種類しか含まない土器には他地方産のものがあるという研究結果を報告された[註13]。今後土器の産地を見分けるために、山田氏の胎土分析法をとり入れていく必要性が考えられるが、ここでは従来通りに肉眼観察で1）粗い角閃石を多量に含む胎土　2）微砂粒の角閃石を含む胎土　3）角閃石をほとんど含まない胎土と大まかな分類を試みた。それぞれの土器は1）が生駒西麓の胎土、2）が河内平野かあるいは生駒山の東側の大和産の胎土、3）は2）以外の他地方の胎土を有すると考えられるが、2）・3）の土器は搬入品以外に素材の粘土が運ばれてきた可能性もある。一方、1）と3）の異った2種類の胎土をもつ土器も出土している。ＳＫ52内の鉢Ａ（1039－図版六五）は口縁部が角閃石を多量に含む胎土で暗褐色を呈し、体部が角閃石を含まない胎土で乳橙色を呈する。この類例は恩智・船橋・山賀遺跡[註15]などにある。2種類の粘土を充分混ぜ合わされば2）の胎土のようになるかもしれない。

さて、墓域内から出土した土器で、口縁部を残す土器を1点として他地方の胎土の土器を数えると、No.7－Ｅ（母数131）、No.4－Ｎ（母数11）内の土器は約8割を占めるが、全周溝を合わせると（母数1600）、概ね約4割前後になる。型式学的にみると第Ⅱ様式には他地方の胎土のものが多い（小片のものが多い）。第Ⅲ（古）様式には生駒西麓の胎土のものが多く、第Ⅲ（新）様式以降も同じ状況を示すがある決った器種には他地方の胎土のものが多くなる状況を呈す。

以上、土器の地域差を胎土だけでみたが、これらの土器は形態や施文、調整などの技法差にもみられる。2）・3）の土器のなかで第Ⅱ～Ⅲ様式には、壺Ｃの形態、ハケ目調整の甕（大和、近江系）、外面にヘラ削り調整の甕（大和南部、紀伊系）、木葉痕をもつ底部（摂津系）、第Ⅲ～Ⅳ様式には、壺Ｄ、壺Ｃ（摂津系）、円窓付台付鉢（大和系）、直口壺（紀州系）の形態、頸部の断面三角形や指頭圧痕・ヘラ圧痕文を施す貼り付け凸帯（播磨、紀伊系）、口縁部内面の加飾（大和、摂津、播磨系）、各器種に施す凹線文（瀬戸内系）などの施文、ハケ目調整の甕（大和系）などいわゆる「河内」の土器とは異る特徴をもつものがあげられる。特にハケ目調整の「大和型」の甕はNo.7－Ｅ・Ｓ内では6割を越す。また逆に生駒西麓の胎土の土器の中に先にあげた他地方の特徴の影響を受けた土器がある。なかでも第Ⅱ～Ⅲ様式には先述した

「大和型」の甕、第Ⅲ～Ⅳ様式には凹線文の土器が目立つ。この状況から他地方で土器を作っていた人の移動も考えられる。No. 7－E 1層内では「大和型」の甕bが調整のわかる甕口縁部の9割近くを占め、その内の3割は生駒西麓の胎土、No. 7－S 2層内では同じく8割強を占め、その内の2割が生駒西麓の胎土である。その他の甕は体部をヘラ磨き、ヘラ削りする。凹線文を施す土器は絶対量が少ないが、壺C、高杯A、水差の口縁部、脚裾部などにみられる。一方、他地方の胎土でいわゆる「河内」の土器と同じ特徴をもつ土器のなかには粘土が搬入された可能性も考えられる。いずれにしろ鬼塚遺跡の住居址で検出された土器の素材と考えられる粘土塊[注14]のような出土例が多くなればかなり明らかになるだろう。

搬入品と埋葬の関係についても、「主な土器」及びその他の土器片のもつ意味－特に7号周溝墓の周溝内から細かい破片が一面に出土した状況－などと共に今後更に検討していきたい。

木片及び炭化物

木片は4・7号墓周溝内、炭化物は1～4号墓周溝内から少量ずつ出土した。これらは埋葬時に使用した木器を燃やした痕跡か、埋葬とその他の関連があったのかどうかは不明である。

土製品（第84図、図版六六）

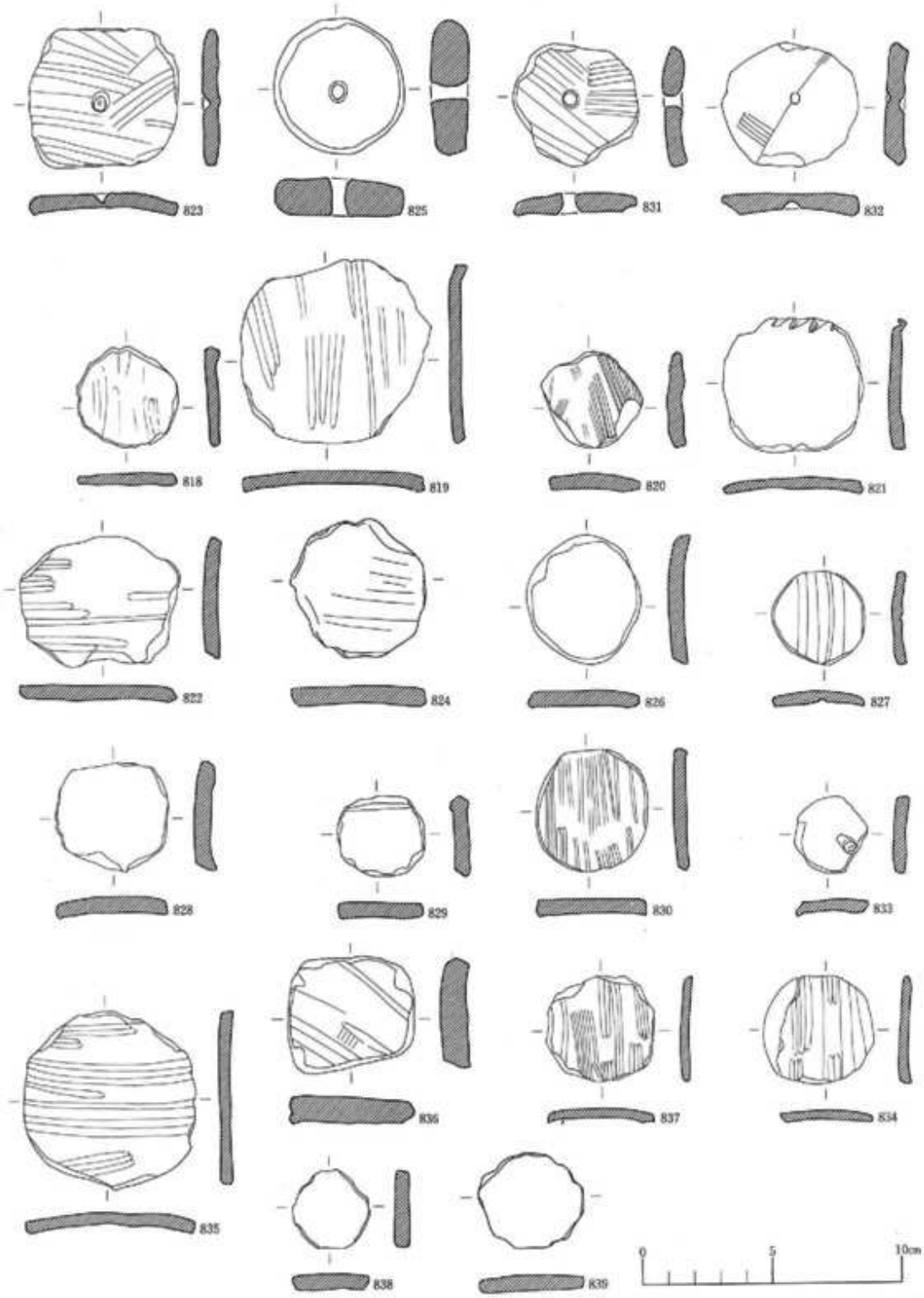
土製品のなかに紡錘車2点、未製品2点がある。（825）は最初から紡錘車として作られたもので、中央部に穿孔をもつ。径は5×5.1㎝とほぼ正円形で、断面は中央部がやや厚くなる。重量は47.1gで孔径は0.6㎝を測る。（831）は、土器片を再加工して作ったもので、周縁を打ち欠き側面を研磨しているが不正円形を呈す。重量は20.8g。中央部に両面穿孔による1孔を穿つ。（823・832）は、土器片を再加工した紡錘車の未製品として考えられる。（823）が27.0g、（832）が24.0g、（827）が6.7gである。最初から紡錘車として作られた（825）と後の3例とは重量がかなり異なる。

土製円板、方板は19点出土している。いずれも土器片を再加工したものであるが、大きさや重量共にバラエティがある。軽量のものは4.9gである。土器片を打ち欠いた後、周縁を丁寧に研磨したもの（820・821・823・825～827・830・833）、一部研磨したもの（818・828・829・832・836・838）、打欠いたままのもの（819・822・831・834・835・837・839）がみられる。概ね円形を意図して作られたものが多いが（821・836）のように方形を呈するものもある。再加工された土器片は壺、甕などの体、底部片で、土器の調整がそのまま残るものが多い。（821）は壺肩部の刻み目文を施した土器片を使っている。また胎土は生駒西麓産と他地方の産の土器片がみられる。

以上いずれも方形周溝墓、周溝・土坑内から出土しているが、紡錘車の未製品であるのか、その他の用途があるのかは不明である。

## 第6表　方形周溝墓・周溝・土坑内出土紡錘車・土製品一覧表

| 番号 | 遺構 | 形態 | 出土地区 | 縦(cm) | 横(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | ・孔<br>・研磨 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 818 | 1E1層 | 円板 | XIXF20g | 3.9 | 3.9 | 0.55 | 9.1 | ・無<br>・一部研磨 | ・壺胴部片・表面ヘラ磨き内面ハケ目<br>・他地方の胎土 |
| 819 | 1N1層 | 円板 | XIXF16、17f | 6.8 | 7.0 | 0.5 | 38.4 | ・無<br>・打ち欠きのまま | ・壺胴部片・表面ヘラ磨き内面ハケ目<br>・生駒西麓産 |
| 820 | 1N1層 | 円板 | XIXF17f | 3.7 | 3.7 | 0.6 | 8.7 | ・無<br>・全面研磨 | ・壺胴部片・表面ハケ目<br>・他地方の胎土 |
| 821 | 1N1層 | 方板 | XIXF17f | 5.1 | 5.4 | 0.5 | 19.0 | ・無<br>・ほぼ全面研磨 | ・壺肩部片・上端に刻み目文・表面ヘラ磨き<br>・生駒西麓産 |
| 822 | 1N2層 | 円板 | XIXF18e | 4.8 | 6.0 | 0.55 | 23.7 | ・無<br>・打ち欠きのまま | ・壺胴部片・表面ヘラ磨き<br>・生駒西麓産 |
| 823 | 1N2層 | 方板 | XIXF16f | 5.3 | 5.8 | 0.6 | 27.0 | ・未貫孔（両面）<br>・ほぼ全面研磨 | ・壺胴部片・両面ヘラ磨き<br>・生駒西麓産 |
| 824 | 3N2層 | 円板 | XIXF14g、h | 5.2 | 5.1 | 0.6 | 24.3 | ・無<br>・一部研磨 | ・壺胴部片・表面ヘラ磨き<br>・生駒西麓産 |
| 825 | 4S1層 | 紡錘車 | XIXF13f | 5.15 | 5.0 | 1.5 | 47.1 | ・有<br>・研磨 | ・器表面はやや磨滅気味<br>・生駒西麓産 |
| 826 | 4N1層 | 円板 | XIXF12e | 5.0 | 4.4 | 0.6 | 18.0 | ・無<br>・ほぼ全面研磨 | ・壺胴部片・両面二次焼成のため磨滅<br>・他地方の胎土 |
| 827 | 4W1層 | 円板 | XIXF12f | 3.6 | 3.6 | 0.4 | 6.7 | ・未貫孔（裏面）<br>・全面研磨 | ・壺胴部片・外面煤付着<br>・生駒西麓産 |
| 828 | 5W1層 | 円板 | XIXF14h | 4.1 | 4.3 | 0.7 | 16.0 | ・無<br>・部分研磨 | ・壺胴部片・二次焼成をうけ表面磨滅<br>・生駒西麓産 |
| 829 | 5W1層 | 円板 | XIXF14h | 3.3 | 3.1 | 0.6 | 8.0 | ・無<br>・一部研磨 | ・壺胴部片・表面叩き目<br>・他地方の胎土 |
| 830 | 5N2層 | 円板 | XIXF14f | 4.7 | 4.3 | 0.6 | 16.4 | ・無<br>・ほぼ全面研磨 | ・壺胴部片・表面ヘラ磨き<br>・生駒西麓産 |
| 831 | 7E1層 | 紡錘車 | XXF4f | 4.5 | 4.9 | 0.8 | 20.8 | ・有（両面穿孔）<br>・打ち欠きのまま | ・壺胴部片、表面ヘラ磨き<br>・他地方の胎土 |
| 832 | 7E1層 | 円板 | XXF4f | 4.7 | 5.3 | 0.8 | 24.0 | ・未貫孔（両面）<br>・一部研磨 | ・壺胴部片、表面ヘラ磨き<br>・他地方の胎土 |
| 833 | 7E1層 | 円板 | XXF4f | 2.95 | 2.8 | 0.5 | 4.9 | ・無<br>・ほとんど研磨 | ・壺胴部片<br>・他地方の胎土 |
| 834 | 7S1層 | 円板 | XXF3g | 4.1 | 3.6 | 0.35 | 8.1 | ・無<br>・打ち欠きのまま | ・壺胴部片、表面ヘラ磨き・内面ハケ目<br>・生駒西麓産 |
| 835 | 7S2層 | 円板 | XXF3g | 6.5 | 6.7 | 0.5 | 34.9 | ・無<br>・打ち欠きのまま | ・壺胴部片、表面ヘラ磨き・内面粗いハケ目<br>・他地方の胎土 |
| 836 | 7S2層 | 方板 | XXF3f | 4.3 | 4.9 | 1.0 | 28.6 | ・無<br>・一部研磨 | ・壺胴部片、表面ヘラ磨き・内面粗いハケ目<br>・他地方の胎土 |
| 837 | 7S2層 | 円板 | XXF3・4f | 4.1 | 4.1 | 0.35 | 8.5 | ・無<br>・打ち欠きのまま | ・壺体部片・表面ヘラ磨き<br>・他地方の胎土 |
| 838 | 10S2層 | 円板 | XXF1g | 3.0 | 3.0 | 0.6 | 6.4 | ・無<br>・部分研磨 | ・二次焼成を受けて器表面剥離、壺の破片か<br>・生駒西麓産 |
| 839 | SK52 | 円板 | XIXF20e | 3.7 | 4.0 | 0.5 | 10.7 | ・無<br>・打ち欠きのまま | ・壺の体部片<br>・生駒西麓産 |




第84図　方形周溝墓・周溝内出土土製品実測図

石器・装身具（第85～94図、図版六八～七六）

石器は弥生時代中期遺構、中世遺構、包含層内から出土している。石器には打製石器（石鏃・石剣・石錐・石小刀・不定形石器）、磨製石器（石庖丁・太型蛤刃石斧・柱状片刃石斧・偏平片刃石斧・石剣）とその他に叩き石・砥石・投弾などがみられる。装身具には管玉がある。これらの石器及び装身具の遺物番号は器種別ではなく遺構、包含層毎につけている。特に弥生時代中期遺構内の出土遺物は埋葬に伴う可能性があるためあえてこの方法をとった。それぞれの石器の法量、重量などは第７・９表に示す。なお表の数値は現存の最大値を示す。

磨製石器、管玉の石材は東京都のパリノ・サーヴェイ株式会社に肉眼鑑定を依頼したものである。打製石器の石材鑑定は京大原子炉研究所の藁科氏に依頼する予定であったが、今回の概報には整理作業の遅れのため間に合わすことができなかった。改めて石材鑑定の結果と共に石器の統括的な報告を別の機会にもちたい。サヌカイトの石器・剥片などの出土地、点数は第８・10表に掲げた。中世遺構、包含層内の石器は概ね弥生時代中期頃までの遺物と考えたい。

弥生時代中期遺構内

今回の調査は墓域内のため出土した石器は少ない。石器は石庖丁７点、石小刀１点、太型蛤刃石斧４点、柱状片刃石斧１点、磨製石剣２点、打製石剣１点、石鏃13点、不定形石器30点、砥石２点、その他３点と管玉１点がある。他にサヌカイト片は133点が出土した。

石庖丁（854・864・868・870・891・892・899）　各方形周溝墓の溝内から土器片と共に出土した。完形品はなくすべて破損したものである。（854・891・899）は半月形直刃形態、（870）は半月形内湾刃形態、小片の（864・868・870）は形態が不明である。いずれも使用が激しかったのか刃こぼれが（854・870・891）に、背部の破損が（854・864・870・899）に、身部の敲打痕及び紐孔の上部の磨滅痕が（854・870）にそれぞれみられる。（868）は未貫孔の紐孔の凹みが両面に残る。石材は（854・870・891・892）が頁岩製、（868）は粘板岩製、（899）は千枚岩製である。

石小刀（889）　No.７－Ｓ１層内から完形のまま出土。表面に自然面、両面に大剥離面を中央に残し、周縁を細部調整する。断面形は先端部が六角形、基部が菱形をなす。

太形蛤刃石斧（843・878・898・900）（843）はNo.１－Ｅ１層内、（878）はNo.５－Ｎ１層内、（898）はNo.10－Ｓ１層内、（900）はNo.10－Ｓ２層内からそれぞれ出土。（843）は体部の側辺部で断面形は隅丸方形を呈す。（878）は刃部側を残す。体部の断面形は楕円形。刃先には刃こぼれがあり、特に左辺が磨り減っている。左側辺部には破損がみられる。（898）はほぼ全形を残す。頂部は敲打されたままで、体部側に頂部からの加撃痕がみられる。体部の損傷は着柄のために加工した痕かもしれない。刃部は両端が剝落し、片端は体部側まで大きく欠落している。断面形は片側が部厚く幅広の面をもち、もう一方の側面はやや扁平な楕円形になる。（900）は頂～体部のみで刃部を欠く。頂部は敲打されたままで断面形は楕円形になる。（843）は砂岩、（878）はヒン岩、（898）は班レイ岩、（900）は安山岩製である。

柱状片刃石斧（897）　No.10－Ｓ１層内から出土。ほぼ全形を残す。全面を研磨で仕上げ

られている。左縁部の中ほどに角を削って面とりをし、そのすぐ上部には着柄のためか加工痕が認められる。右面は縦方向に浅い溝状の凹みがみられる。刃部は刃こぼれと共に右辺がやや磨り減っている。細粒砂岩製。

磨製石剣（869・874）（869）はNo.３－Ｎ１層内、（874）はNo.４－Ｎ１層内から出土。（869）は剣部の刃先部。先端部が折損し、片側辺も欠落する。斜め方向の研磨痕がみられる。断面形はやや厚手の菱形を呈す。（874）は剣身～基部。剣身部は断面形が扁平な菱形を呈し、剣身から柄部にかわる側辺部に面をつくる。断面形は六辺形。刃部は鋭利である。粘板岩製。

打製石剣（886・888）　No.７－Ｓ１層内から出土。基端部を欠失する。刃先部は丸みをもつ。側辺の１辺は刃部の先端から１㎝と、現存する基端部から２㎝の幅を残す約6.8㎝にわたって、他の辺は先端から２㎝、基端部から2.2㎝の幅を残す約5.6㎝の幅に磨滅痕が激しく面状を呈す。面の最大幅は3㎜を測る。（888）は胴身部のみで、側辺の一部を欠く。

石鏃（840・844・845・865・866－凸基無茎式、847～849・860・879・901－凸基有茎式、894－未製品）　各方形周溝、土坑内などから出土。先端部、基部が折損しているものが多いなかで、（847）はNo.１－Ｗ２層内から完全なまま出土。今回の調査で出土した石鏃のなかで一番大型で、縁部は鋸歯状に細部調整を加えている。（894）は削器として使用後、石鏃に再加工しようとしたものか。（865）は両面の中央に剥離面を残し、基部は中心軸を通らず片寄る。

尖頭器（875）　No.４－Ｎ１層内から出土。先端部が欠失する。全体が大きな剥離面で調整されている。大きさからいえば石鏃に入るがかなり荒い加工である。

楔形石器（850・851・857・858・867・876・877・893・902・904）　各周溝、土坑内から出土。断面が部厚い素材で複数の縁部に細部調整を加えるが、相対する縁部などに自然面を残したものや、折りとり面、截断面など側縁に平坦な面をもつ。片縁部に使用痕が認められるものが多い。（850）は截断面の稜、対縁部に潰れや磨滅痕などがみられる。（904）の調整は台石技法による。

削器（841・846・852・856・861・871・873・880～882・896・903）　各周溝、土坑内から出土。楔形石器と同じく自然面を残す。細部調整を加えた刃部は直刃の（841・852・873・896）、凸刃の（846・852・856・861・871・880・882・903）がある。（880）は尖頭器の未製品になるかもしれない。（896）の刃部は鋸歯状を呈す。（903）は縦長剥片。（871）の上縁部に石核調整がみられる。

他に細部調整剥片（862・883～885）、使用痕のある剥片（863）がある。（862・863）はNo.２－Ｎ１層、（883～885）はNo.７－Ｓ１層内から出土。（863）は裏面の右上部と左下部の縁部に使用痕を残す。

石核（872・889）（872）はNo.４－Ｓ２層、（889）はNo.７－Ｓ１層内から出土。（872）は頂部に敲打痕、下縁部に細かい剥離痕がみられる。（889）は全面に自然面が残り、側縁部から下縁部に著しい敲打痕がみられる。叩き石としての機能が考えられる。

その他　（859）はNo.２－Ｗ２層、（853）はNo.１－Ｎ１層、（895）はNo.７－Ｓ２層内

から出土。（859）は一面に摩耗痕が残り、（853）は六面体で各辺は丸味をもつ。砂岩製。卵形の（895）は珪岩製。

管玉（842）　No.１－Ｅ１層内から出土。シルト岩製。

以上の石器の出土状況は、石庖丁が各周溝内に１点ずつ点在するが、他の器種はバラつきがある。またサヌカイトの出土量は、石器が46点で1086.1ｇ、その他の剥片が133点で1214.7ｇになる。最大重量を測るものはNo.７－Ｓ１層内の石核（叩き石）で162.2ｇである、各溝内の石製品は１・２・３号墓が共有するXIXF16～18区の溝内、７号墓の東・南溝内からやや多く出土しており、サヌカイト剥片も上記の溝内と10号周溝内に多くみられる。

古墳時代以降の遺構内

各遺構から出土している石器は、中世遺構のＳＫ05内の砥石（907）以外は、概ね弥生時代の混入物と考えられる。石器には磨製石剣１点、打製石器（石剣３点、石鏃６点、尖頭器１点、小刀２点、不定形石器13点）の他に砥石１点、その他の石製品１点がある。

磨製石剣（908）　胴身部の一部である。断面形はレンズ形。頁岩製。

打製石剣（905・917・930）（905）は胴身部、（917・930）は基部である。断面形は（905）がやや扁平な菱形で、（917・930）は部厚い菱形をなす。（917）は基端部に自然面を残す。両面共磨滅をうけ、調整剥離の各稜は滑らかになる。（930）は基端部が幅狭になる。

石鏃（912・916・929・931－凸基無茎式、906・911－凹基有茎式）　いずれも小型で、（906）が3.1ｇを測る以外は２ｇ以下のものである。

尖頭器（918）　細部調整をうけた縁部に使用痕、中央部の大剥離面にも磨滅痕がみられる。

小刀（910・922）　中央に大剥離面を残し、縁部に細部調整を加える。（910）は先端部に自然面を残したままである。断面形は（910）の中軸が上方に片寄る菱形、（922）が六角形。

楔形石器（913・920）　（913）は上縁部、（920）は上・下縁部に潰れの痕がみられる。

削器（909・919・925・926）（909）は先端部に縁部と直交する条線が残る。（919）は周縁上半部に極厚形の細部調整をする。（925）は横形削器で下縁部片面を細部調整し、使用痕を残す。（926）は大剥離面を残し、片縁部両面に細部調整する。その他の細部調整痕をもつ剥片は（914・921・923・924・927・928・933）がある。（932）には自然面の対縁部に細かい剥離がみられる。

砥石（907）　ＳＫ05内から出土。頁岩製で表面のみ薄く剥離する。線条痕がみられる。

その他（915）　円筒状の形に磨かれたもので黄鉄鉱染凝灰岩製。ＳＥ01内から出土。

包含層内

各層内から石器が出土している。出土状況は６層内が４点、５層内が19点、４層内が25点、３層内が８点、１層内が１点である。サヌカイト剥片も４・５層内に多い。石器には磨製石器（石庖丁３点、扁平片刃石斧１点）、打製石器（石鏃22点、石小刀２点、石剣２点、石錐６点、不定形石器16点）と石核１点、砥石１点、その他の石製品３点と管玉１点がある。

石庖丁（934・935・939）（934・935）は６層内、（939）は５層内から出土。いずれも破損

しているが半月形直線刃の形態。（934）は擬灰質頁岩、（935・939）は頁岩製。（939）は紐孔の近くに口径3㎜の未貫孔の凹みを残す。

扁平片刃石斧（938）　5層内から出土。身部の中ほどに柄部装着のための抉りをもつ、刃先部に刃こぼれがみられる。安山岩製。

石鏃（937・947～949・951・958～962・984・985－凸基無茎式、950・952・953・965・966・986－凸基有茎式、983－平基無茎式、963・964・967－未製品）　層位毎の出土点数は6層内1点、5層内7点、4層内8点、3層内4点である。凸基無茎式の石鏃は3ｇ以下のもので、横形剥片の素材のため左右不均等のものが多い。また凸基有形式の石鏃は（950）の2.2ｇから、（966）の基端部を欠失するが9.7ｇを測るものまで大きさにバラつきがある。（963・964）は基端部を欠失し、（967）と共に身幅が広く尖頭器類に入るかもしれない。（986）の抉りは柄部装着のためと考える。

石小刀（954・968）*（954）は5層内、（968）は4層内から出土。（954）は基端部に、（968）は表面に自然面を残す。刃部に磨滅痕がある。断面形は（954）が台形状を呈し、（968）は部厚い菱形をなす。（968）は中軸線が片寄る。尖頭器類に入るかもしれない。

石剣（971・972）　4層内から出土。（971）は柄部で断面形が楕円形に近くなるほど縁部及び中央の調整剥離の稜に磨滅痕がみられ滑らかである。（972）は身部の一部分で断面形は五角形。

石錐（955～957・969・970・987）（955～957）は5層内、（969・970）は4層内、（987）は3層内から出土。（955・957・969）は大剥離面を残し、錐部と頭部の境界がはっきりしない。（955・957）は錐部に磨滅痕がみられ、先端部は丸みをもつ。（969）は横長剥片の一端を錐部にしたもので、先端部が折損。（956）は菱形の頭部に錐部をつくる。錐部の断面形は菱形。（970）は錐部が折損。（987）は頭部から錐部までほぼ同じ幅で、断面形は三角形。

楔形石器（941・942・973～979・990）（941・942）は5層内、（973～979）は4層内、（990）は3層内から出土。（941）は平面形が長方形を呈すが、他は不定形である。縁部に使用痕を残すものが多いが、（973・977）は截断面の縁部に潰れの使用痕がある。（990）は中央にステップタイプの調整をする。

削器（943～945・980・981・989）（943～945）は5層内、（980・981）は4層内、（989）は3層内から出土。（943）は凸刃削器、（944）は横形削器で下縁部の片面に細部調整を加える。（945）は下縁部の片面に極厚形細部調整、自然面の側縁部には平形の細部調整を加え、下縁部には使用痕が残る。（980）は内湾する刃部に、（981）は凸刃部に磨滅痕が残る。（989）は長軸に沿う折りとり面を残す。

石核（991）　全面に剥片を剥離した痕がある。突起する縁部に潰れのような使用痕が残る。

砥石（988）　3層内から出土。表面に煤が付着する。超塩性岩製である。

その他（936・940・982）　（936）は6層内、（940）は5層内から出土した砂岩製の礫である。（982）は全面を研磨し棒状を呈す。いずれも用途は不明である。

第7表　弥生時代の遺構内出土石器

| 番号 | 遺構 | 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 出土地区 | 最大長<br>(cm) | 最大幅<br>(cm) | 最大厚<br>(cm) | 重量<br>(g) | 先端角度 | 石材 | 残存状況 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 840 | 1E1層 | 85−70 | 石鏃 | XXF1h | 2.7 | 1.3 | 0.4 | 1.2 | 41°(欠) | サヌカイト | 基部欠失 |
| 841 | 1E1層 | 85−71 | 削器 | XIXF20g | 3.8 | 2.6 | 0.6 | 8.2 | | サヌカイト | 下縁部に細部調整 |
| 842 | 1E1層 | 91−65 | 管玉 | XIXF20g | 3.5 | 1.3 | 1.25 | 9.8 | | シルト岩 | 上縁部破損 |
| 843 | 1E1層 | 90−68 | 太型蛤刃石斧 | XIXF20g | 4.4 | 3.5 | 4.9 | 81.9 | | 砂岩 | 胴身部の一部のみ |
| 844 | 1W1層 | 85−70 | 石鏃 | XIXF17〜18g | 3.7 | 1.3 | 0.7 | 3.0 | 36°(欠) | サヌカイト | 尖端部、片側縁〜基部欠失 |
| 845 | 1W1層 | 85−70 | 石鏃 | XIXF18g〜h | 3.15 | 1.35 | 0.5 | 0.9 | 30°(丸) | サヌカイト | 基部欠失 |
| 846 | 1W1層 | 85−71 | 削器 | XIXF17f | 11.2 | 4.9 | 1.85 | 77.5 | | サヌカイト | |
| 847 | 1W2層 | 85−70 | 石鏃 | XIXF17g | 6.85 | 2.3 | 0.5 | 6.7 | 66°(突) | サヌカイト | 完形 |
| 848 | 1N1層 | 85−70 | 石鏃 | XIXF16f | 4.5 | 1.25 | 0.7 | 2.9 | 35°(丸) | サヌカイト | 逆剥部、潰れ |
| 849 | 1N1層 | 85−70 | 石鏃 | XIXF17f | 5.1 | 2.1 | 0.6 | 4.0 | 37°(欠) | サヌカイト | 尖端部欠失 |
| 850 | 1N1層 | 85−71 | 楔形石器 | XIXF16f | 3.2 | 4.2 | 1.2 | 20.4 | | サヌカイト | 上下縁に摩耗痕 |
| 851 | 1N1層 | 85−71 | 楔形石器 | XIXF17f | 2.1 | 3.7 | 1.1 | 8.2 | | サヌカイト | |
| 852 | 1N1層 | 85−71 | 横形削器 | XIXF17f | 5.3 | 4.4 | 0.9 | 16.3 | | サヌカイト | 下縁部に細部調整 |
| 853 | 1N1層 | 90−68 | 投弾 | XIXF17f | 5.1 | 5.3 | 4.9 | 219.3 | | 細粒砂岩 | |
| 854 | 1N2層 | 90−69 | 石庖丁 | XIXF18e | 3.6 | 6.8 | 0.8 | 30.0 | | 頁岩 | 敲打痕、刃こぼれ |
| 855 | 1N2層 | 85−70 | 石鏃 | XIXF17f | 2.9 | 1.5 | 0.55 | 2.0 | 52°(欠) | サヌカイト | 尖端、基端部欠失 |
| 856 | 1N2層 | 85−71 | 削器 | XIXF16〜17f | 2.6 | 3.2 | 0.9 | 8.4 | | サヌカイト | |
| 857 | 1N2層 | 85−71 | 楔形石器 | XIXF18e | 6.1 | 4.35 | 1.4 | 36.7 | | サヌカイト | 表上縁部に潰れ |
| 858 | 2W1層 | 86−71 | 楔形石器 | XIXF18g | 4.6 | 2.95 | 0.95 | 13.9 | | サヌカイト | |
| 859 | 2W2層 | 86−67 | 砥石 | XIXF16f | 6.95 | 3.8 | 1.7 | 60.3 | | 砂岩 | 表面と平滑な摩耗痕 |
| 860 | 2N1層 | 86−70 | 石鏃 | XIXF15e | 5.35 | 2.8 | 0.65 | 6.6 | 37°(欠) | サヌカイト | 先端部欠失 |

| 番号 | 遺構 | 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 出土地区 | 最大長<br>(cm) | 最大幅<br>(cm) | 最大厚<br>(cm) | 重量<br>(g) | 先端角度 | 石材 | 残存状況 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 861 | 2N1層 | 86−71 | 凸刃削器 | XIXF15e | 3.7 | 5.95 | 1.4 | 27.9 | | サヌカイト | 下縁部に細部調整 |
| 862 | 2N1層 | 86−71 | 細部調整片 | XIXF15e | 5.1 | 5.75 | 1.4 | 43.4 | | サヌカイト | 裏右縁部に細部調整 |
| 863 | 2N1層 | 86−71 | 剥片 | XIXF15e | 7.05 | 5.5 | 1.6 | 72.4 | | サヌカイト | 外側縁、裏下縁部に使用痕 |
| 864 | 2N2層 | 86−69 | 石鹿丁 | XIXF15e | 3.9 | 5.5 | 0.6 | 19.8 | | 頁岩 | 背部は破損、刃部に条線痕 |
| 865 | 2N2層 | 86−70 | 石鏃 | XIXF15e | 3.0 | 1.15 | 0.3 | 1.0 | 45°(丸) | サヌカイト | 尖端部欠失 |
| 866 | 3E1層 | 86−70 | 石鏃 | XIXF16g | 4.65 | 1.4 | 0.7 | 4.1 | 21°(欠) | サヌカイト | 先端部欠失 |
| 867 | 3E1層 | 86−71 | 楔形石器 | XIXF16g | 3.2 | 3.15 | 0.9 | 9.5 | | サヌカイト | |
| 868 | 3E2層 | 86−69 | 石鹿丁 | XIXF16g | 4.25 | 2.5 | 0.8 | 14.9 | | 粘板岩 | 未貫孔の穿孔 |
| 869 | 3N1層 | 87−67 | 磨製石剣 | XIXF16g | 8.9 | 4.4 | 1.3 | 52.2 | | 粘板岩 | 剣先部の先端、片縁部欠失 |
| 870 | 3N1層 | 87−69 | 石鹿丁 | XIXF16g | 4.5 | 8.9 | 0.8 | 45.1 | | 凝灰質頁岩 | 両端部欠失、敲打痕 |
| 871 | 4E2層 | 87−74 | 削器 | XIXF14e | 3.95 | 4.8 | 1.65 | 27.8 | | サヌカイト | 上縁部に石核調整 |
| 872 | 4S2層 | 87−74 | 石核 | XIXF13g | 4.75 | 5.2 | 1.7 | 44.4 | | サヌカイト | 上縁に敲打痕、下縁に剥離痕 |
| 873 | 4S2層 | 87−74 | 削器破片 | XIXF14f | 3.1 | 3.1 | 0.7 | 7.1 | | サヌカイト | |
| 874 | 4N1層 | 87−67 | 磨製石剣 | XIXF12f | 12.1 | 3.2 | 0.65 | 42.3 | | 粘板岩 | 剣先部欠失 |
| 875 | 4N1層 | 87−74 | 尖頭器 | XIXF13e | 5.4 | 2.0 | 0.9 | 9.9 | 26°(欠) | サヌカイト | 先端部欠失 |
| 876 | 4N1層 | 87−74 | 楔形石器 | XIXF12e | 4.7 | 3.5 | 1.7 | 21.9 | | サヌカイト | 下縁部に潰れ |
| 877 | 4N1層 | 87−74 | 楔形石器 | XIXF13e | 2.0 | 3.1 | 0.8 | 5.4 | | サヌカイト | 内側に敲断面 |
| 878 | 5N1層 | 87−68 | 太型刃蛤石斧 | XIXF14f | 7.5 | 7.1 | 4.8 | 273.4 | | ヒン岩 | 刃部のみ |
| 879 | 5W1層 | 87−70 | 石鏃 | XIXF14g | 2.95 | 1.2 | 0.6 | 2.2 | 19°(欠) | サヌカイト | 先端部、基部折損 |
| 880 | 7E1層 | 89−72 | 削器 | XXF4g | 7.8 | 3.6 | 1.5 | 33.5 | | サヌカイト | 先端部欠失、尖頭器破片？ |
| 881 | 7E1層 | 89−72 | 削器未製品 | XXF4f | 7.4 | 3.7 | 1.05 | 18.5 | | サヌカイト | |
| 882 | 7E1層 | 89−72 | 削器 | XXF4f | 6.65 | 5.4 | 1.2 | 58.8 | | サヌカイト | |

| 番号 | 遺構 | 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 出土地区 | 最大長<br>(cm) | 最大幅<br>(cm) | 最大厚<br>(cm) | 重量<br>(g) | 先端角度 | 石材 | 残存状況 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 883 | 7E1層 | 89−72 | 細部調整片 | XXF4f～g | 2.5 | 2.2 | 0.65 | 5.1 | | サヌカイト | 両面下縁部に細部調整 |
| 884 | 7E1層 | 89−72 | 細部調整片 | XXF4f | 3.6 | 4.3 | 0.75 | 10.2 | | サヌカイト | 裏上下縁部に細部調整 |
| 885 | 7E1層 | 89−72 | 細部調整片 | XXF4g | 4.7 | 5.3 | 1.1 | 25.9 | | サヌカイト | 両面下縁部に細部調整 |
| 886 | 7S1層 | 88−70 | 打製石剣 | XXF3f | 9.85 | 3.0 | 1.5 | 45.6 | 40°(丸) | サヌカイト | 基部欠失、側縁部に摩耗痕 |
| 887 | 7S1層 | 88−70 | 石小刀 | XXF3f | 3.7 | 6.85 | 0.8 | 11.0 | | サヌカイト | 完形 |
| 888 | 7S1層 | 88−72 | 尖頭器の一部 | XXF3～4f | 4.0 | 2.5 | 1.4 | 15.2 | | サヌカイト | 脚身部の一部 |
| 889 | 7S1層 | 88−72 | 叩き石 | XXF3g | 8.2 | 5.2 | 3.45 | 162.2 | | サヌカイト | 側縁部、下面に敲打痕 |
| 890 | 7S1層 | 88−67 | 砥石 | XXF3～4f | 10.5 | 7.9 | 2.6 | 228.5 | | 凝灰質頁岩 | 上下面の損傷が著しい |
| 891 | 7S2層 | 89−69 | 石皿丁 | XXF3f | 4.8 | 7.3 | 0.9 | 50.3 | | 頁岩 | 約1/3欠失、紐孔を3ヶ所 |
| 892 | 7S2層 | 89−69 | 石皿丁 | XXF3g | 2.8 | 4.2 | 0.65 | 8.6 | | 頁岩 | 片端部のみ |
| 893 | 7S2層 | 89−72 | 楔形石器 | XXF3f～g | 4.5 | 5.75 | 1.45 | 31.5 | | サヌカイト | |
| 894 | 7S2層 | 89−72 | 石鏃未製品 | XXF3g | 7.2 | 5.6 | 1.75 | 68.2 | | サヌカイト | 先端部欠失、尖頭器を転用 |
| 895 | 7S2層 | 88−68 | 磨き石 | XXF3g | 8.0 | 4.7 | 3.35 | 162.1 | | 建岩 | 半分欠失 |
| 896 | 7W1層 | 88−72 | 横形削器 | XXF2f | 6.3 | 7.0 | 1.7 | 72.5 | | サヌカイト | 刃部は鋸歯状 |
| 897 | 10S1層 | 90−67 | 柱状片刃石斧 | XXF1g | 15.6 | 4.4 | 2.6 | 403.8 | | 細粒砂岩 | 装着部に損傷、刃こぼれ |
| 898 | 10S1層 | 90−68 | 太型蛤刃石斧 | XXF1g | 12.7 | 5.7 | 4.5 | 517.8 | | 流レイ岩 | 頂部下、刃部に損傷 |
| 899 | 10S2層 | 90−69 | 石皿丁 | XXF1g～h | 3.3 | 4.25 | 0.8 | 17.3 | | 千枚岩 | 片端部のみ |
| 900 | 10S2層 | 90−68 | 太型蛤刃石斧 | XXF1g | 9.25 | 6.5 | 4.6 | 538.4 | | 安山岩 | 刃部が折損 |
| 901 | SK52 | 85−70 | 石鏃 | XIXF20e | 3.5 | 1.8 | 0.6 | 2.6 | 24°(欠) | サヌカイト | 尖端部欠失 |
| 902 | SK52 | 85−71 | 楔形石器 | XIXF20e | 2.4 | 2.8 | 0.6 | 4.9 | | サヌカイト | |
| 903 | SK52 | 85−71 | 削器破片 | XIXF20e | 4.9 | 2.0 | 1.1 | 12.2 | | サヌカイト | 上部に原礫面の打撃痕 |
| 904 | SK52 | 85−71 | 楔形石器 | XIXF20e | 3.9 | 4.5 | 1.3 | 25.8 | | サヌカイト | 台石技法の特徴をもつ剥片 |

第8表　方形周溝墓・周溝・土坑内出土サヌカイト一覧表

| 遺構 | 石鏃 | | その他のサヌカイト | | 合計 | | 備考　出土地区と個数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 重量(g) | 個数 | 重量(g) | 個数 | 重量(g) | 個数 | |
| 1E1層 | 9.4 | 2 | 70.0 | 11 | 79.4 | 13 | XIXF19~20f (2)、20g～h (9)、1h (1) |
| 1E2層 | | | 23.4 | 5 | 23.4 | 5 | XIXF20g～h (5) |
| 1W1層 | 95.3 | 4 | 119.7 | 9 | 215.0 | 13 | XIXF17f～g (2)、17f (5)、17~18g (2)、18g (3)、18g～h (1) |
| 1W2層 | 6.7 | 1 | | | 6.7 | 1 | XIXF17g (1) |
| 1N1層 | 51.8 | 5 | 14.5 | 3 | 66.3 | 8 | XIXF16f (2)、17f (6) |
| 1N2層 | 47.1 | 3 | 86.8 | 8 | 133.9 | 11 | XIXF16~17f (5)、16f～g (1)、17f (4)、18e (1) |
| 1N3層 | | | 3.8 | 1 | 3.8 | 1 | XIXF17f (1) |
| 2N1層 | 150.3 | 4 | 15.7 | 2 | 166.0 | 6 | XIXF15e (6) |
| 2N2層 | 1.0 | 1 | 18.6 | 5 | 19.6 | 6 | XIXF14、15e (2)、15e (4) |
| 2W1層 | 13.9 | 1 | 7.3 | 1 | 21.2 | 2 | XIXF16f～g (1) |
| 2W2層 | | | 2.0 | 1 | 2.0 | 1 | XIXF16f (1) |
| 3E1層 | 16.0 | 2 | 39.2 | 2 | 107.5 | 4 | XIXF16f (1)、16g (3) |
| 3E2層 | | | 0.8 | 1 | 0.8 | 1 | XIXF16g (1) |
| 3N2層 | | | 107.5 | 7 | 107.5 | 7 | XIXF14g (4)、15~16g (1)、16g (2) |
| 4E2層 | 27.8 | 1 | 9.7 | 1 | 37.5 | 2 | XIXF14e (2) |
| 4N1層 | 37.2 | 3 | 39.7 | 6 | 76.9 | 9 | XIXF12e (4)、13e (5) |
| 4S2層 | 51.5 | 2 | 3.2 | 1 | 54.7 | 3 | XIXF14f (2)、13g (1) |
| 5W1層 | 2.2 | 1 | | | 2.2 | 1 | XIXF14g (1) |
| 5N2層 | | | 2.1 | 1 | 2.1 | 1 | XIXF14f (1) |
| 7E1層 | 152.0 | 6 | 85.1 | 9 | 237.1 | 15 | XXF4f (14)、4g (1) |
| 7E2層 | | | 8.9 | 2 | 8.9 | 2 | XXF4f (2) |
| 7W1層 | 72.5 | 1 | 27.2 | 3 | 99.7 | 4 | XXF2f (4) |
| 7S1層 | 233.4 | 4 | 176.2 | 15 | 409.6 | 19 | XXF3f (5)、3g (11)、3～4f (3) |
| 7S2層 | 99.7 | 2 | 77.0 | 9 | 176.7 | 11 | XXF3f (1)、4f (1)、3g (7)、3～4f (1)、3f～g (1) |
| No.10S | | | 189.0 | 24 | 189.0 | 24 | XXF1g (4)、1g～h (19)、20g～h (1) |
| SK52 1層 | 45.5 | 4 | 53.1 | 4 | 98.6 | 8 | XIXF20e (6)、20e～f (2) |
| SK52 2層 | | | 20.3 | 2 | 20.3 | 2 | XIXF20e (2) |
| 総計 | 1,086.1 | 46 | 1,214.7 | 133 | 2300.8 | 179 | |

第9表　古墳時代以降の遺構包含層内出土石器一覧表

| 番号 | 遺構・包含層 | 挿図番号 図版番号 | 器種 | 出土地区 | 最大長 (cm) | 最大幅 (cm) | 最大厚 (cm) | 重量 (g) | 先端角度 | 石材 | 残存状況 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 905 | SD16 | 91−70 | 石鏃の一部 | XXF1g | 4.3 | 2.8 | 1.15 | 16.7 | | サヌカイト | 脚身部の一部 |
| 906 | SD16 | 91−70 | 石鏃 | XXF1g〜h | 3.4 | 1.6 | 0.6 | 3.1 | 62°(丸) | サヌカイト | 横長剥片を利用 |
| 907 | SD42 | 91−76 | 砥石 | XIXF17e | 4.2 | 3.3 | 0.4 | 8.0 | | 頁岩 | 表面に条線 |
| 908 | SD42 | 91−67 | 石剣 | XIXF20e | 6.6 | 3.4 | 0.8 | 22.7 | | 粘板岩 | 脚身部、斜方向の研磨痕 |
| 909 | SD64 | 90−74 | 石錐 | XIXF19g | 4.0 | 2.1 | 0.8 | 6.0 | | サヌカイト | 錐部に条線、横長剥片 |
| 910 | SD109 | 91−74 | 石小刀 | XXF5g | 2.7 | 4.5 | 0.85 | 11.0 | | サヌカイト | 刃部に潰れ |
| 911 | SD122 | 91−70 | 石鏃 | XXF4g | 2.6 | 2.0 | 0.5 | 1.9 | 43°(欠) | サヌカイト | 先端、基部欠失 |
| 912 | SD123 | 91−70 | 石鏃 | XXF4g | 3.2 | 1.0 | 0.4 | 1.2 | 48°(欠) | サヌカイト | 先端部欠失 |
| 913 | SD125 | 91−74 | 楔形石器 | XXF4f | 2.6 | 2.25 | 0.7 | 3.6 | | サヌカイト | |
| 914 | SD126 | 91−74 | 細部調整片 | XXF3f | 3.45 | 5.6 | 1.15 | 20.3 | | サヌカイト | 表右縁に細部調整 |
| 915 | SE01 | 91−76 | 小型磨石 | XXIIF2e | 1.65 | 1.7 | 0.8 | 2.6 | | 黄鉄鉱鉱染凝灰岩 | 両面共光沢をもつ |
| 916 | 中世落ち込み | 92−70 | 石鏃 | XXF4f | 2.6 | 1.3 | 0.4 | 1.2 | 73°(突) | サヌカイト | |
| 917 | 中世落ち込み | 92−74 | 石剣 | XXF5f | 6.0 | 3.05 | 1.45 | 34.5 | | サヌカイト | 両面共磨滅 |
| 918 | 中世落ち込み | 92−74 | 尖頭器 | XXF3f | 6.0 | 2.6 | 1.0 | 13.9 | | サヌカイト | 片縁部欠失、横長剥片 |
| 919 | 中世落ち込み | 92−74 | 石鏃未製品 | XXF3f | 4.6 | 1.9 | 0.7 | 6.7 | 29°(欠) | サヌカイト | 表左縁に厚形細部調整 |
| 920 | 中世落ち込み | 92−74 | 楔形石器 | XXF4f | 2.95 | 4.5 | 1.35 | 17.2 | | サヌカイト | 上下縁部に潰れ |
| 921 | 中世落ち込み | 92−74 | 細部調整片 | XXF4f | 2.6 | 2.3 | 0.45 | 3.2 | | サヌカイト | 表左、裏右縁部に細部調整 |
| 922 | 中世落ち込み | 92−74 | 石小刀 | XXF3f | 2.9 | 5.5 | 0.9 | 17.4 | | サヌカイト | 刃部先端欠失、刃部に潰れ |
| 923 | 中世落ち込み | 92−74 | 細部調整片 | XXF4f | 3.2 | 2.0 | 0.8 | 4.4 | | サヌカイト | |
| 924 | 中世落ち込み | 92−74 | 細部調整片 | XXF4f | 4.2 | 3.5 | 1.1 | 21.5 | | サヌカイト | |
| 925 | 中世落ち込み | 92−74 | 楔形削器 | XXF5f | 2.2 | 5.15 | 1.6 | 14.0 | | サヌカイト | 表縁部に細部調整 |

| 番号 | 遺構・包含層 | 挿図番号 図版番号 | 器種 | 出土地区 | 最大長（cm） | 最大幅（cm） | 最大厚（cm） | 重量（g） | 先端角度 | 石材 | 残存状況 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 926 | 中世落ち込み | 92－74 | 削器 | XXF4 f | 8.0 | 4.5 | 1.8 | 70.9 | | サヌカイト | |
| 927 | S P23 | 91－73 | 細部調整片 | XXF9 g | 4.4 | 4.1 | 1.0 | 18.0 | | サヌカイト | 上縁部に潰れ |
| 928 | S P55 | 91－73 | 細部調整片 | XIXF20 f | 4.3 | 3.5 | 0.9 | 14.0 | | サヌカイト | |
| 929 | S K15 | 92－70 | 石鏃 | XXF7 g | 2.55 | 1.2 | 0.4 | 1.2 | 42°（欠） | サヌカイト | 先端、基部欠失 |
| 930 | S K35 | 92－73 | 打製石剣 | XIXF18 g | 3.5 | 2.1 | 1.25 | 10.4 | | サヌカイト | 柄部のみ |
| 931 | S K 3 7 | 92－70 | 石鏃 | XXF1 g | 3.4 | 1.05 | 0.35 | 1.2 | 39°（丸） | サヌカイト | 尖端部欠失、横長剥片 |
| 932 | S K56 | 92－73 | 剥片 | XXF6 g | 3.0 | 4.0 | 0.95 | 12.5 | | サヌカイト | 表右縁部に潰れ |
| 933 | S K56 | 92－73 | 細部調整片 | XXF6 g | 3.0 | 3.7 | 1.3 | 12.4 | | サヌカイト | 表左縁、裏右下縁細部調整 |
| 934 | 6層 | 94－69 | 石庖丁 | XXF11 g | 3.2 | 3.1 | 0.6 | 9.0 | | 凝灰質頁岩 | 片端部み |
| 935 | 6層 | 94－69 | 石庖丁 | XXF11 g | 5.0 | 8.0 | 0.95 | 60.1 | | 頁岩 | 1/3残存、敲打痕 |
| 936 | 6層 | 94－76 | 磨石 | XXF11 g | 4.0 | 5.45 | 1.0 | 29.5 | | 砂岩 | 全面研磨か |
| 937 | 6層 | 93－75 | 石鏃 | XXF3 f | 2.6 | 1.6 | 0.6 | 2.0 | 58°（欠） | サヌカイト | 尖端部欠失 |
| 938 | 5層 | 91－67 | 扁平片刃石斧 | XXF3 f | 4.7 | 3.25 | 1.25 | 40.2 | | 安山岩 | 身部に挟り、刃こぼれ |
| 939 | 5層 | 91－69 | 石庖丁 | XXF4 f | 4.2 | 5.8 | 0.9 | 35.1 | | 頁岩 | 1/3残存、器貫孔の小孔 |
| 940 | 5層 | 91－76 | 叩き石 | XXF3 g | 12.7 | 4.4 | 2.5 | 172.2 | | 砂岩 | |
| 941 | 5層 | 91－73 | 楔形石器 | XXF5～6 f | 3.05 | 2.4 | 1.0 | 8.7 | | サヌカイト | 上～左縁部に潰れ |
| 942 | 5層 | 91－73 | 楔形石器 | XXF6 f | 4.2 | 3.9 | 1.1 | 21.0 | | サヌカイト | 表左縁部に潰れ |
| 943 | 5層 | 91－73 | 凸刃削器 | XXF3 f | 2.85 | 2.55 | 0.75 | 4.9 | | サヌカイト | |
| 944 | 5層 | 91－73 | 横形削器 | XXF2～3 f | 3.75 | 4.1 | 1.3 | 13.3 | | サヌカイト | 裏下縁部に細部調整 |
| 945 | 5層 | 91－73 | 削器 | XXF4 f | 2.6 | 3.7 | 1.15 | 8.7 | | サヌカイト | 表下縁部に極厚形細部調整 |
| 946 | 5層 | 90－65 | 管玉 | XXF4 g | 3.0 | 1.05 | 1.0 | 5.8 | | 珪質頁岩 | 完形 |
| 947 | 5層 | 93－75 | 石鏃 | XXF6 f～g | 2.3 | 1.6 | 0.5 | 2.0 | 31°（欠） | サヌカイト | 先端部欠失、横長剥片 |

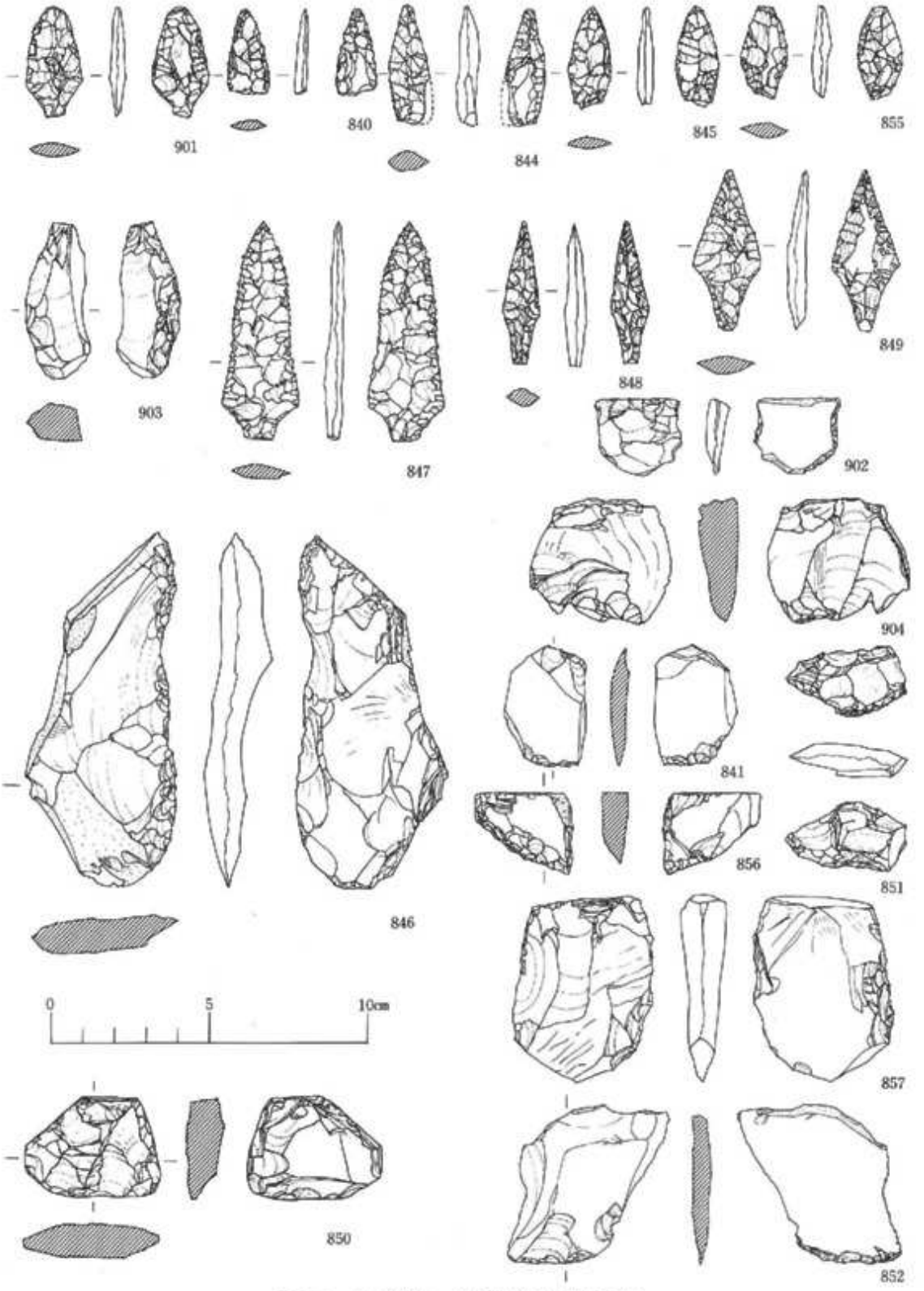
| 番号 | 遺構・包含層 | 挿図番号 図版番号 | 器種 | 出土地区 | 最大長（cm） | 最大幅（cm） | 最大厚（cm） | 重量（g） | 先端角度 | 石材 | 残存状況 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 948 | 5層 | 93−75 | 石鏃 | XXF3 f | 2.6 | 1.4 | 0.3 | 1.2 | 74°（欠） | サヌカイト | 先端、基部欠失 |
| 949 | 5層 | 93−75 | 石鏃 | XXF5～6 f | 3.8 | 1.7 | 0.5 | 2.9 | 40°（丸） | サヌカイト | 尖端部欠失 |
| 950 | 5層 | 93−75 | 石鏃 | XXF4 g | 3.7 | 1.9 | 0.45 | 2.2 | 34°（欠） | サヌカイト | 尖端部欠失 |
| 951 | 5層 | 93−75 | 石鏃 | XXF3 e～f | 3.75 | 1.65 | 0.7 | 3.7 | 38°（欠） | サヌカイト | 先端部、表左下縁欠失 |
| 952 | 5層 | 93−75 | 石鏃 | XXF3 f | 4.9 | 2.6 | 0.6 | 6.2 | 39°（欠） | サヌカイト | 先端部欠失 |
| 953 | 5層 | 93−75 | 石鏃 | XXF3 g | 3.55 | 1.6 | 0.7 | 3.7 | 16°（欠） | サヌカイト | 先端～左縁部欠失 |
| 954 | 5層 | 93−73 | 石小刀 | XXF3 g | 2.8 | 6.8 | 1.0 | 17.7 | | サヌカイト | 刃部に潰れ、基部は自然面 |
| 955 | 5層 | 93−75 | 石錐 | XXF3 f | 2.6 | 1.5 | 0.5 | 1.9 | 42°（欠） | サヌカイト | 錐部は摩耗 |
| 956 | 5層 | 93−75 | 石錐 | XXF4 g | 3.75 | 1.3 | 0.6 | 2.4 | 35°（丸） | サヌカイト | 錐先端部は摩耗 |
| 957 | 5層 | 93−75 | 石錐 | XXF3 f | 2.9 | 1.7 | 0.8 | 3.9 | 39°（欠） | サヌカイト | 錐部は摩耗 |
| 958 | 4層 | 93−75 | 石鏃 | XXF8 g | 2.25 | 1.2 | 0.3 | 0.9 | 43°（丸） | サヌカイト | 先端部は摩耗 |
| 959 | 4層 | 93−75 | 石鏃 | XXF3 f | 2.7 | 1.15 | 0.45 | 1.4 | 26°（欠） | サヌカイト | 尖端部欠失 |
| 960 | 4層 | 93−75 | 石鏃 | XXF3 f | 3.1 | 1.25 | 0.55 | 2.2 | 29°（丸） | サヌカイト | 先端部は摩耗 |
| 961 | 4層 | 93−75 | 石鏃 | XXF6 f | 3.15 | 1.3 | 0.5 | 1.9 | 39°（欠） | サヌカイト | 尖端部欠失 |
| 962 | 4層 | 93−75 | 石鏃 | XXF6 f | 3.35 | 1.5 | 0.45 | 2.2 | 39°（欠） | サヌカイト | 尖端部欠失 |
| 963 | 4層 | 93−75 | 石鏃 | XXF11 f | 4.0 | 2.3 | 1.0 | 8.0 | 42°（欠） | サヌカイト | 先端、基部が折損 |
| 964 | 4層 | 93−75 | 石鏃 | XXF6 f | 3.8 | 2.8 | 0.6 | 7.2 | 57°（欠） | サヌカイト | 尖端、基部が欠失 |
| 965 | 4層 | 93−75 | 石鏃 | XIXF17 f | 4.7 | 2.2 | 0.65 | 4.2 | 42°（丸） | サヌカイト | 片逆刺部欠失 |
| 966 | 4層 | 93−75 | 石鏃 | XIXF17 f | 5.9 | 2.1 | 1.05 | 9.7 | 39°（丸） | サヌカイト | 片縁～基部欠失 |
| 967 | 4層 | 93−75 | 石鏃 | XIXF13 e | 5.7 | 2.6 | 0.9 | 12.2 | 67°（欠） | サヌカイト | 尖端部欠失 |
| 968 | 4層 | 93−73 | 石小刀 | XXF7 g | 2.0 | 4.6 | 0.9 | 8.0 | | サヌカイト | 刃部～基部欠失 |
| 969 | 4層 | 93−75 | 石錐 | XXF4 g | 4.2 | 2.0 | 0.8 | 7.2 | 45°（欠） | サヌカイト | 錐先端部折損 |

| 番号 | 遺構・包含層 | 挿図番号 図版番号 | 器　種 | 出土地区 | 最大長（cm） | 最大幅（cm） | 最大厚（cm） | 重量（g） | 先端角度 | 石　材 | 残存状況 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 970 | 4層 | 93－75 | 石　錐 | XXF5 g | 3.0 | 1.3 | 0.8 | 3.9 | | サヌカイト | 錐部折損 |
| 971 | 4層 | 94－73 | 石剣の一部 | XIXF12 g | 6.55 | 2.8 | 1.6 | 38.5 | | サヌカイト | 柄部全面に磨滅 |
| 972 | 4層 | 94－73 | 石剣の一部 | XIXF12 e | 2.8 | 2.55 | 1.2 | 10.9 | | サヌカイト | 胴身部の一部 |
| 973 | 4層 | 94－73 | 楔形石器 | XIXF14 g | 2.2 | 4.4 | 1.1 | 11.0 | | サヌカイト | 上下縁部に潰れ |
| 974 | 4層 | 94－73 | 楔形石器 | XXF8 g | 3.05 | 3.9 | 1.7 | 11.7 | | サヌカイト | 下縁部の一部に潰れ |
| 975 | 4層 | 94－73 | 楔形石器 | XXF7 g | 3.1 | 3.8 | 0.7 | 8.5 | | サヌカイト | 上下縁部に潰れ |
| 976 | 4層 | 94－73 | 楔形石器 | XXF5 f | 3.2 | 2.85 | 1.2 | 8.4 | | サヌカイト | 上下縁部に潰れ |
| 977 | 4層 | 94－73 | 楔形石器 | XXF7 g | 3.3 | 1.8 | 0.85 | 6.3 | | サヌカイト | 表左縁部に潰れ |
| 978 | 4層 | 94－73 | 楔形石器 | XXF4 f | 2.5 | 2.8 | 0.7 | 5.0 | | サヌカイト | 周縁部に潰れ |
| 979 | 4層 | 94－76 | 楔形石器 | XIXF17 f | 4.15 | 5.65 | 0.9 | 25.4 | | サヌカイト | 下縁部の一部に潰れ |
| 980 | 4層 | 94－76 | 削　器 | XXF6 g | 6.7 | 5.15 | 1.8 | 49.8 | | サヌカイト | 刃部に潰れ |
| 981 | 4層 | 94－76 | 削　器 | XXF4 g | 8.2 | 5.3 | 2.8 | 93.8 | | サヌカイト | 表左縁部に潰れ |
| 982 | 4層 | 94－76 | 棒状石製品 | XIXF11 g | 3.2 | 0.7 | 0.7 | 2.7 | | 不　明 | 下部折損 |
| 983 | 3層 | 95－75 | 石　鏃 | XIXF18 g | 2.8 | 1.9 | 0.5 | 2.2 | 38°（欠） | サヌカイト | 先端部欠失、表右上縁潰れ |
| 984 | 3層 | 95－75 | 石　鏃 | XIXF18 g | 2.6 | 1.1 | 0.5 | 1.0 | 34°（丸） | サヌカイト | 尖端、基部欠失 |
| 985 | 3層 | 95－75 | 石　鏃 | XXF11 g | 2.7 | 1.3 | 0.5 | 1.7 | 33°（欠） | サヌカイト | 先端、基部欠失 |
| 986 | 3層 | 95－75 | 石　鏃 | XXF5 g | 3.0 | 1.6 | 0.4 | 2.2 | 39°（欠） | サヌカイト | 先端部欠失、抉部磨滅 |
| 987 | 3層 | 95－75 | 石　錐 | XXF8 g | 3.0 | 0.8 | 0.4 | 1.0 | | サヌカイト | 錐先端部摩耗 |
| 988 | 3層 | 95－76 | 砥　石 | XXF4 g | 4.05 | 4.6 | 2.7 | 73.5 | | 超塩性岩 | 煤付着 |
| 989 | 3層 | 95－76 | 削　器 | XXF4 g | 5.3 | 2.3 | 1.05 | 11.5 | | サヌカイト | 表左縁部に潰れ |
| 990 | 3層 | 95－76 | 楔形石器 | XXF3 f | 3.55 | 3.7 | 0.7 | 11.2 | | サヌカイト | 周縁部に潰れ |
| 991 | 1層 | 95－76 | 石核 | XXF4 f | 2.75 | 2.6 | 2.1 | 15.3 | | サヌカイト | 稜に摩耗痕 |

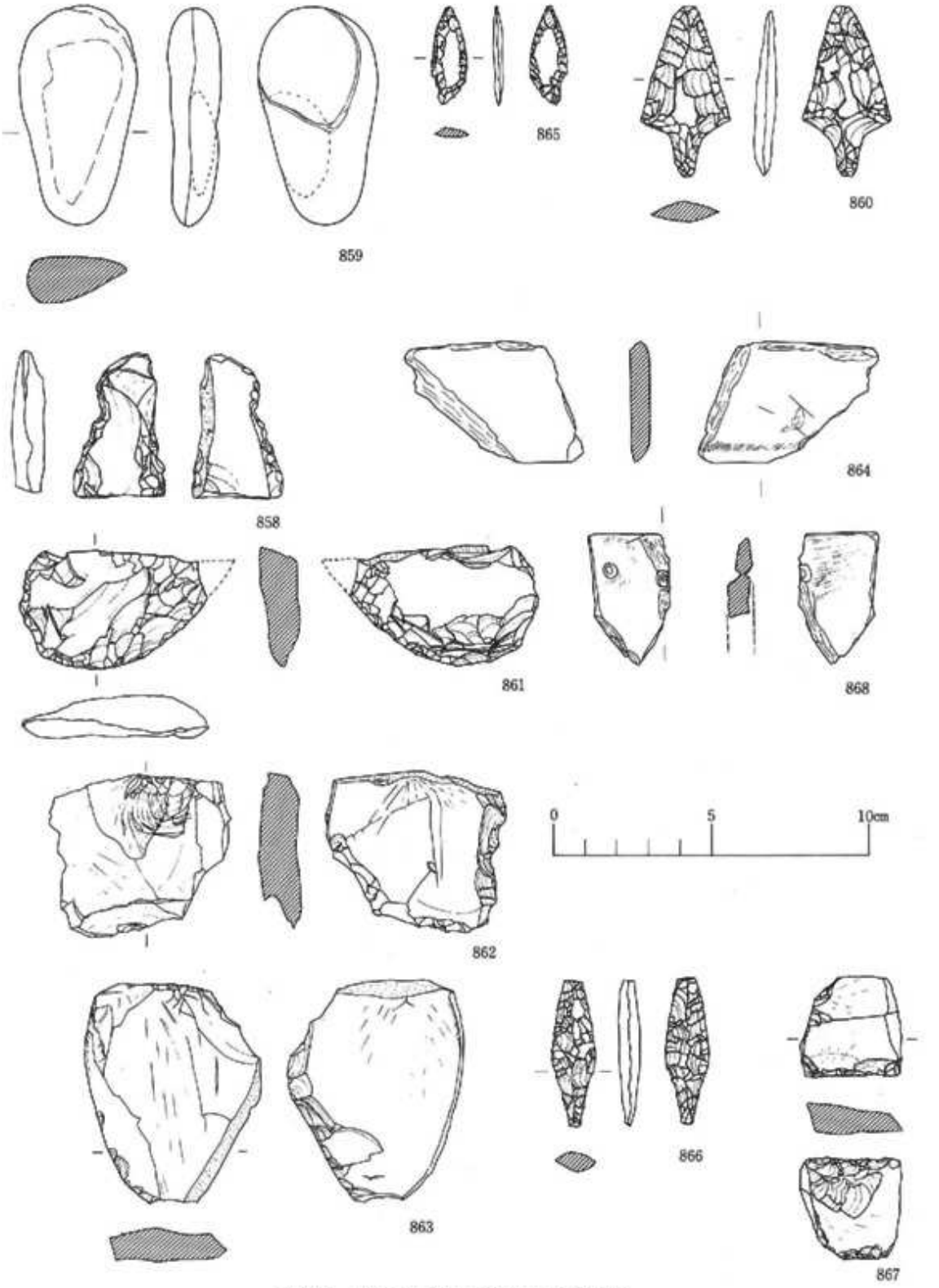
第10表　古墳時代以降の遺構・包含層内出土サヌカイト一覧表

| 遺構 | 石器 | | その他のサヌカイト | | 合計 | | 備考　出土地区と個数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 重量(g) | 個数 | 重量(g) | 個数 | 重量(g) | 個数 | |
| SD13 | | | 5.4 | 1 | 5.4 | 1 | XXF7 g(1) |
| SD16 | 19.8 | 2 | 26.0 | 2 | 45.8 | 4 | XXF1 f(1), 1 g(2), 1 g～h(1) |
| SD40 | | | 3.2 | 1 | 3.2 | 1 | XIXF17 f(1) |
| SD45 | | | 2.1 | 2 | 2.1 | 2 | XXF9 h(2) |
| SD64 | 6.0 | 1 | | | 6.0 | 1 | XIXF1 f～g(1) |
| SD67 | | | 3.1 | 1 | 6.9 | 1 | XIXF1 f～q(1) |
| SD79 | | | 6.9 | 1 | 3.1 | 1 | XIXF5 f(1) |
| SD93 | | | 2.8 | 1 | 2.8 | 1 | XXF5 g(1) |
| SD96 | | | 1.8 | 2 | 1.8 | 2 | XXF4 g～h(2) |
| SD98 | | | 7.5 | 2 | 7.5 | 2 | XXF3 g(1), 4 g(1) |
| SD100 | | | 4.7 | 1 | 4.7 | 1 | XXF3 g(1) |
| SD101 | | | 9.1 | 3 | 9.1 | 3 | XXF2～3 g(3) |
| SD104,105 | | | 3.5 | 1 | 3.5 | 1 | XXF13 e(1) |
| SD108 | | | 2.5 | 1 | 2.5 | 1 | XXF5 g(1) |
| SD109 | 11.5 | 1 | | | 11.5 | 1 | XXF5 g(1) |
| SD114 | | | 1.7 | 1 | 1.7 | 1 | XXF5 g(1) |
| SD121 | | | 1.0 | 1 | 1.0 | 1 | XXF4 g(1) |
| SD122 | 1.9 | 1 | | | 1.9 | 1 | XXF4 g(1) |
| SD123 | 1.2 | 1 | 14.8 | 6 | 16.0 | 7 | XXF3 f(2), 4 g(5) |
| SD125 | 3.6 | 1 | | | 3.6 | 1 | XXF4 f(1) |
| SD126 | 20.3 | 1 | 30.4 | 4 | 50.3 | 5 | XXF3 f(5) |
| SK14 | | | 0.7 | 1 | 0.7 | 1 | XXF7 g(1) |
| SK15 | 1.2 | 1 | | | 1.2 | 1 | XXF7g(1) |
| SK35 | 10.4 | 1 | | | 10.4 | 1 | XIXF18g(1) |
| SK36 | | | 2.8 | 1 | 2.8 | 1 | XXF3 g(1) |
| SK37 | 1.2 | 1 | 8.2 | 2 | 9.4 | 3 | XXF1 g(2), 不明(1) |
| SK38 | | | 0.6 | 1 | 0.6 | 1 | XXF7 g(1) |
| SK45 | | | 6.0 | 1 | 6.0 | 1 | XXF6 f(1) |

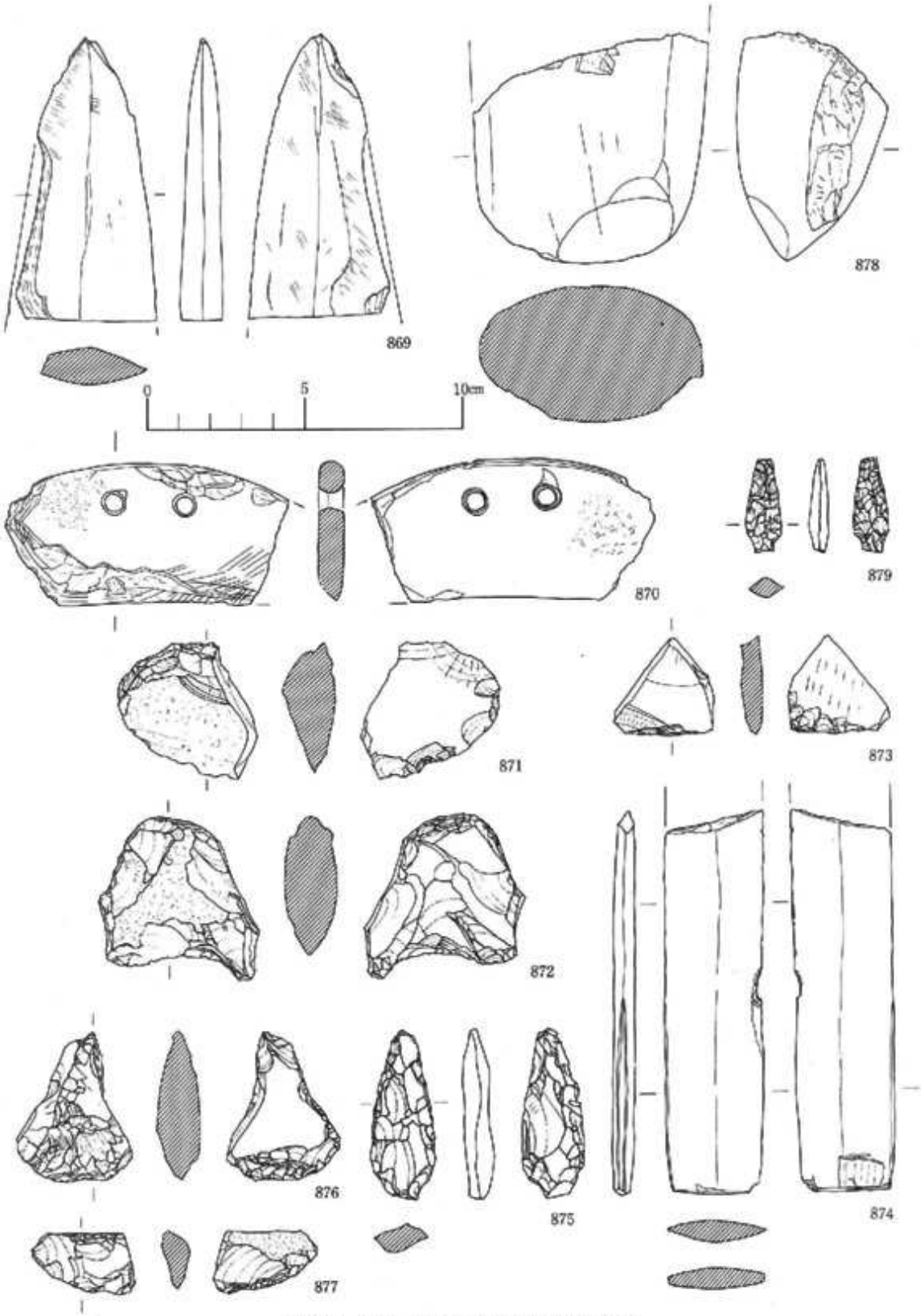
| 遺構 | 石器 | | その他のサヌカイト | | 合計 | | 備考　出土地区と個数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 重量(g) | 個数 | 重量(g) | 個数 | 重量(g) | 個数 | |
| SK49 | | | 4.6 | 1 | 4.6 | 1 | XIXF17g(1) |
| SK55 | | | 2.2 | 1 | 2.2 | 1 | XXF4g(1) |
| SK56 | 24.9 | 2 | 10.0 | 2 | 34.9 | 4 | XXF6g(4) |
| SK57 | | | 0.4 | 1 | 0.4 | 1 | XXF3g(1) |
| SP23 | 18.0 | 1 | | | 18.0 | 1 | XXIIF21(1) |
| SP55 | 14.0 | 1 | | | 14.0 | 1 | XIXF20f(1) |
| SP64 | | | 1.4 | 1 | 1.4 | 1 | XIXF19f(1) |
| SP131 | | | 4.0 | 1 | 4.0 | 1 | XIXF18e(1) |
| SP279 | | | 4.4 | 2 | 4.4 | 2 | XXF6g(2) |
| SP305 | | | 1.4 | 1 | 1.4 | 1 | XXF4g(1) |
| 中央落ち込み | 204.9 | 10 | 135.1 | 30 | 340.0 | 40 | XXF3f(3), 4f(6),5f(8),6f(1) |
| 総計 | 338.9 | 25 | 307.9 | 77 | 646.8 | 102 | |
| 1層 | 15.3 | 1 | 60.3 | 15 | 75.6 | 16 | XXF2g(1),3g(8),4f(1), XXIIF21(6) |
| 2層 | | | 3.6 | 1 | 3.6 | 1 | 不明 |
| 3層 | 32.3 | 6 | 131.2 | 16 | 163.5 | 22 | XXF2～3f(2),3f(3),4f(2),4,9,16g(各2),2,3,6,8,11g(1づつ),18g(3),11h(1) |
| 4層 | 336.1 | 23 | 455.7 | 81 | 791.8 | 104 | XIXF12,13e(各2),15e(1),12～14f(1),17f(3),5,14g(各1),12g(4), XXF3f(5),4f(11),5f(9),6f(6),7f(3),9f(1),3,11g(各3), 4g(17),5g(9),6g(5),7g(6),8g(4),9g(2),8,11h(各1) |
| 5層 | 102.9 | 16 | 384.5 | 65 | 487.4 | 81 | XXF2～3f(5),3f(21),4f(9),5f(3),6f(10),5～6f(3),6f(4),3g(15),4g(8),5g(1),6g(2) |
| 6層 | 2.0 | 1 | 9.4 | 3 | 11.4 | 4 | XXF3f(4) |
| 7層 | | | 16.2 | 1 | 16.2 | 1 | XXF11g(1) |
| 9層 | | | 1.8 | 1 | 1.8 | 1 | XXF5f(1) |
| その他 | 3.7 | 1 | 3.0 | 2 | 6.7 | 3 | XXF3e(1),3e～f(1),3f(1) |
| 総計 | 492.3 | 48 | 1065.7 | 185 | 1558.0 | 233 | |
| 弥生＋中世＋包含層合計 | 1931.2 | 119 | 2574.4 | 395 | 4505.6 | 514 | |



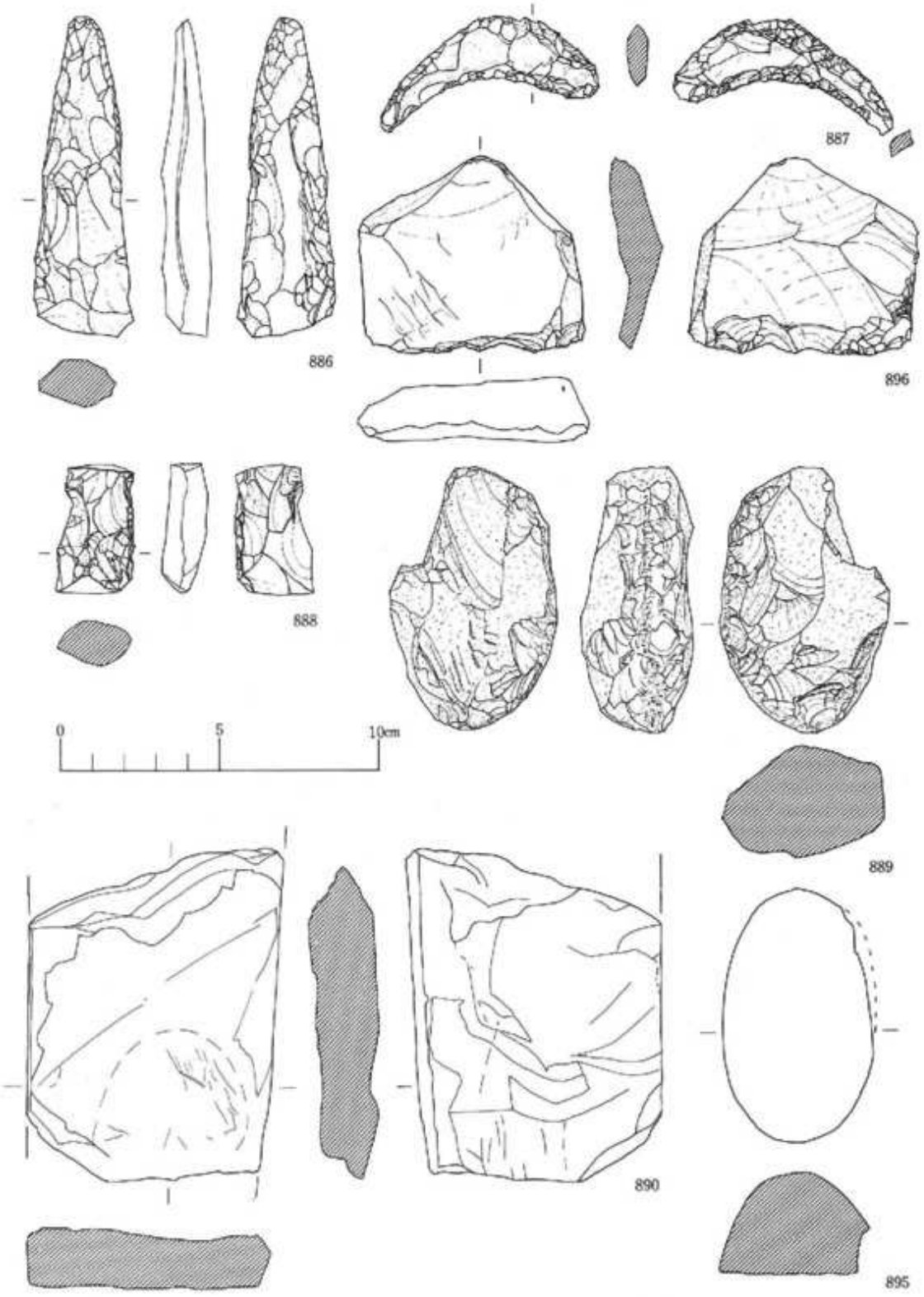

第85図　1号周溝墓・SK52内出土石器実測図



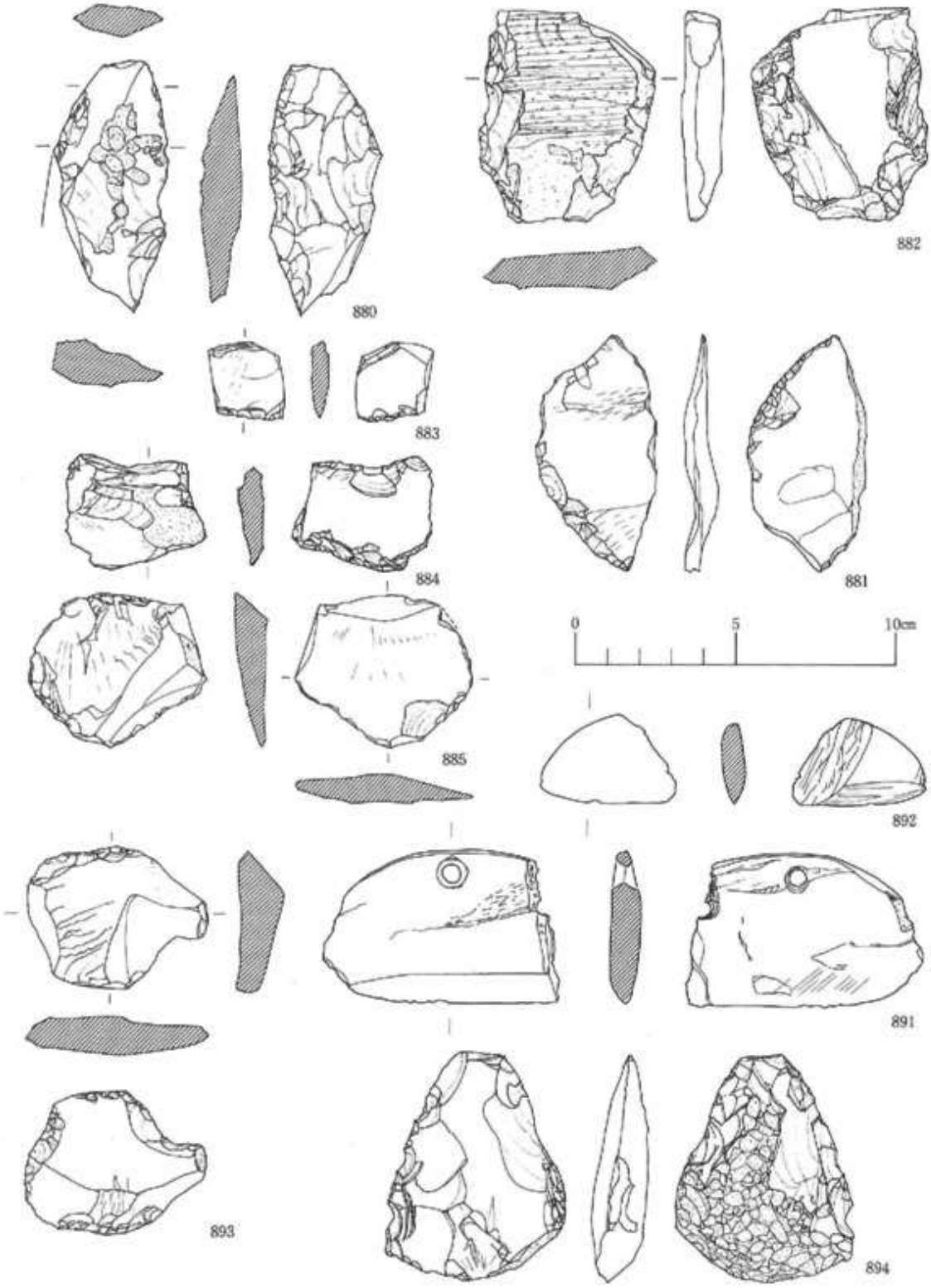

第86図　2号・3号周溝墓内出土石器実測図



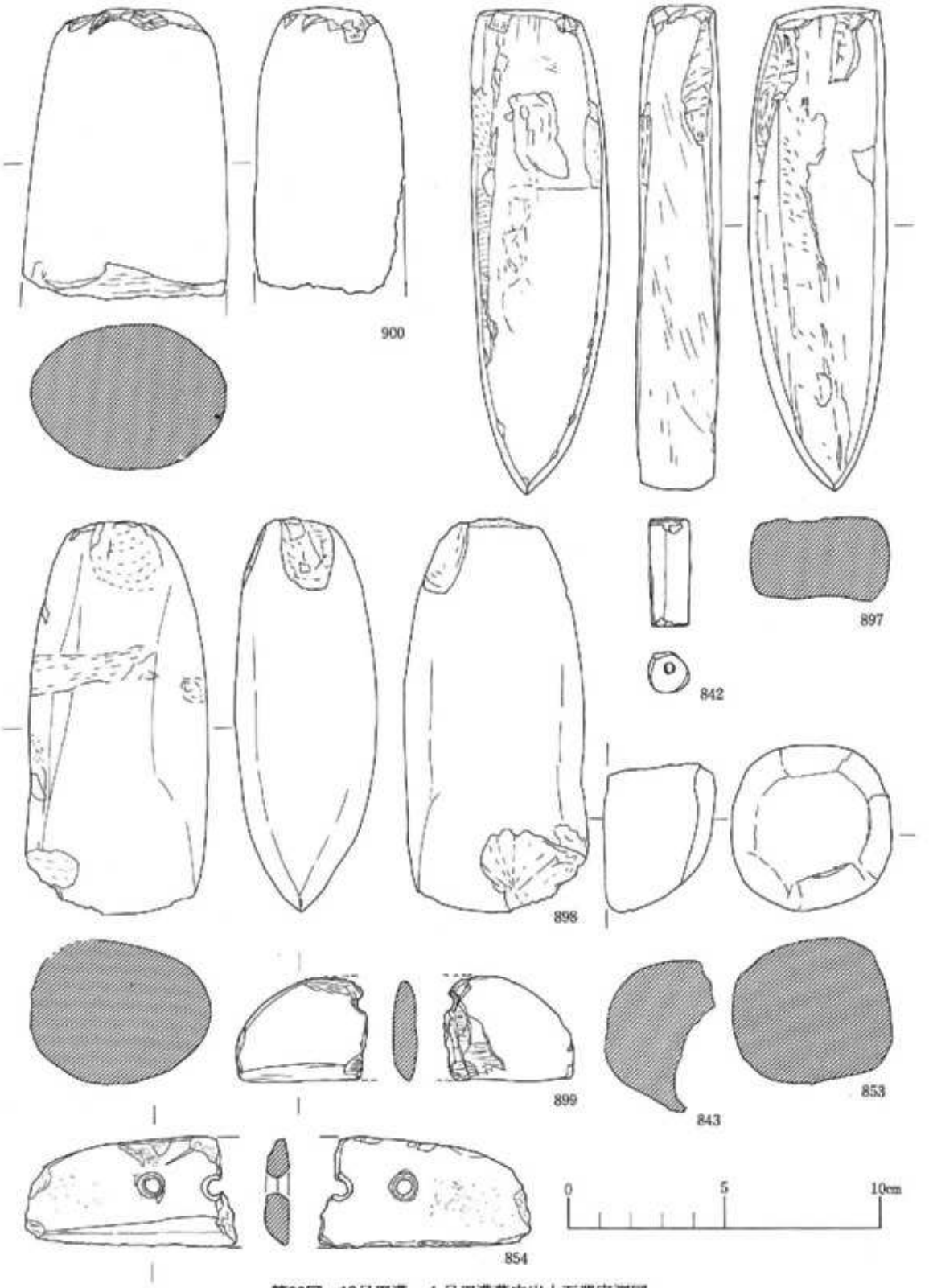

第87図　3号・4号周溝墓内出土石器実測図



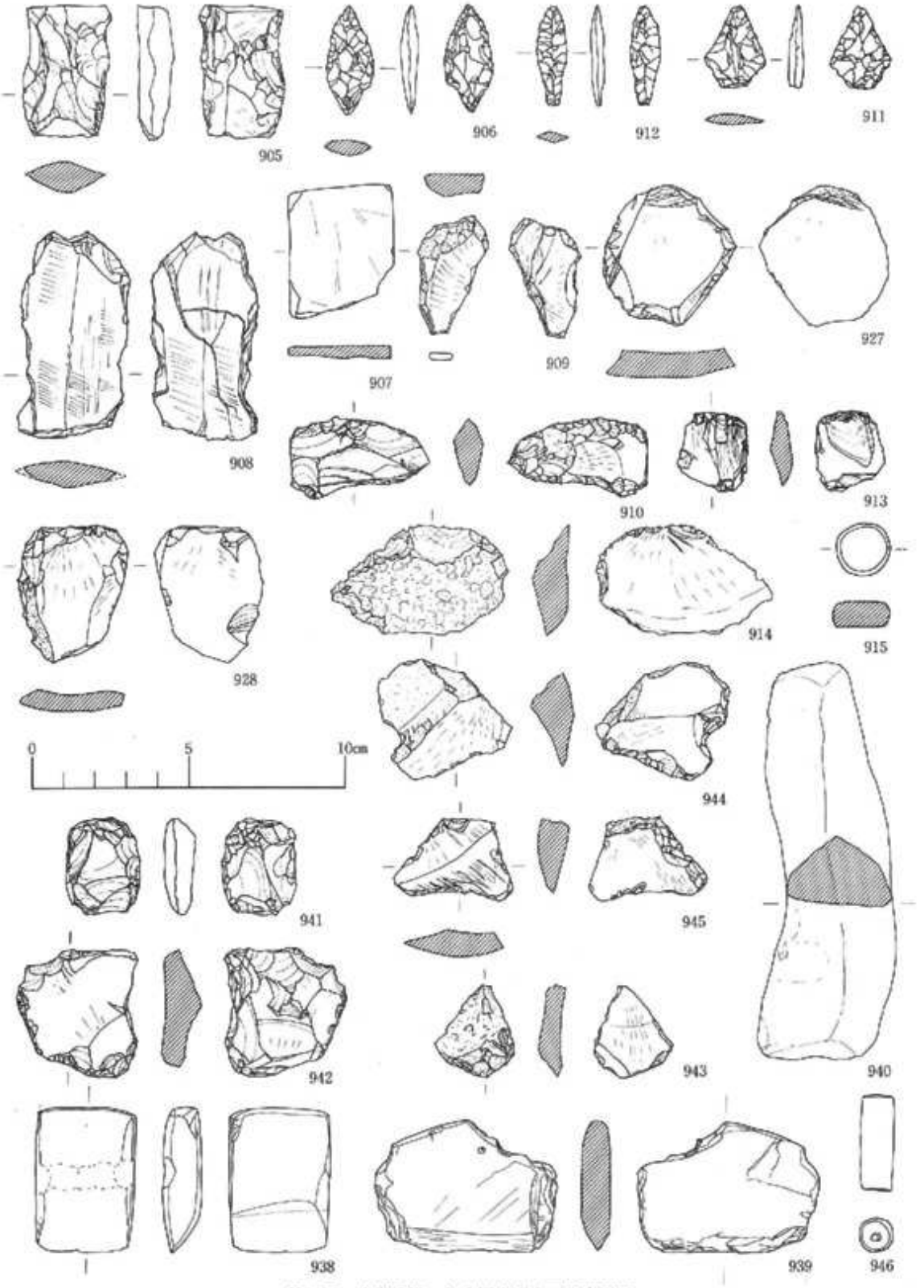

第88図　7号周溝墓内出土石器（880～885・891～894）実測図



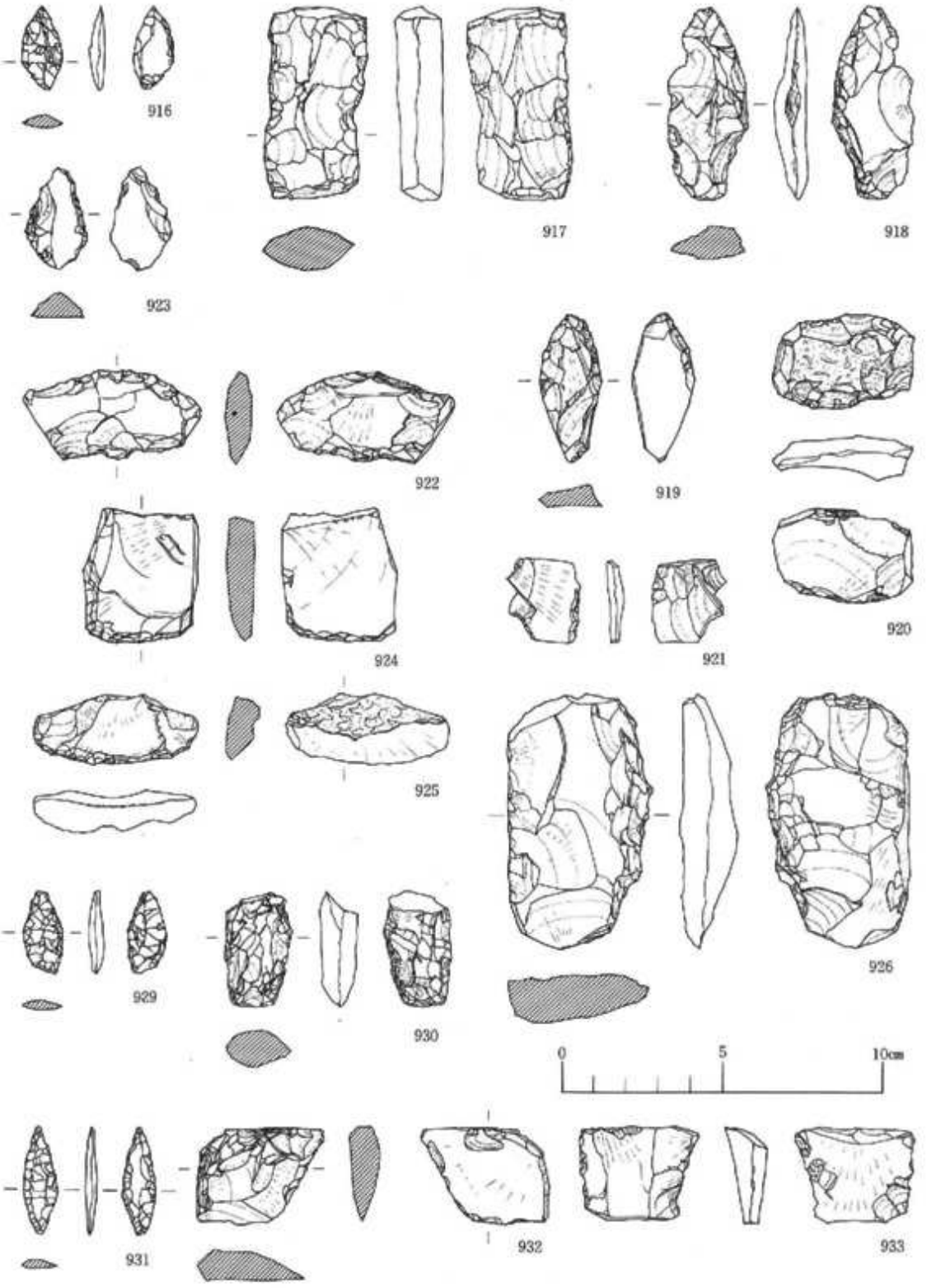

第89図　7号周溝墓内出土石器（886～890・895・896）実測図



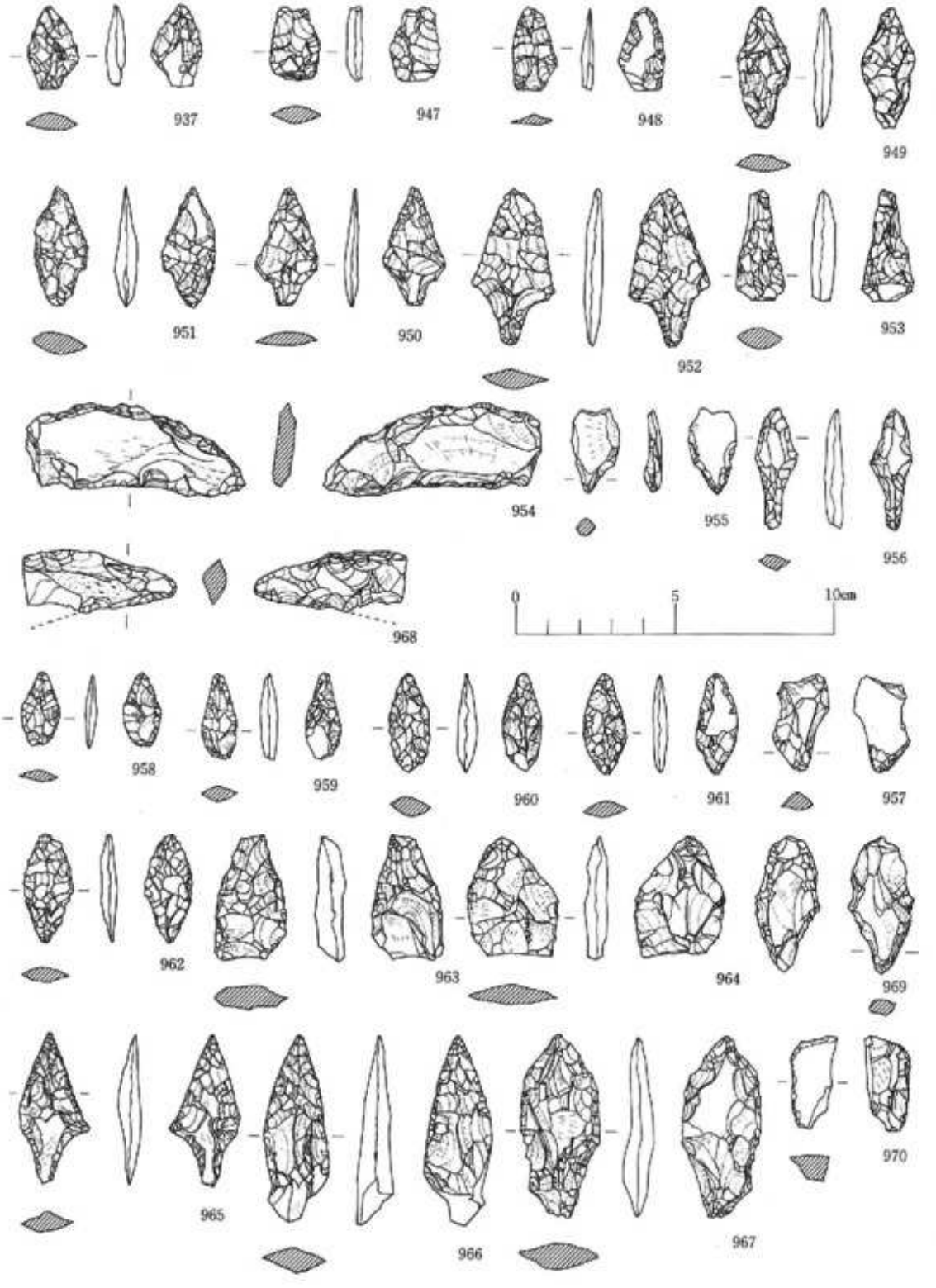

第90図　10号周溝・1号周溝墓内出土石器実測図



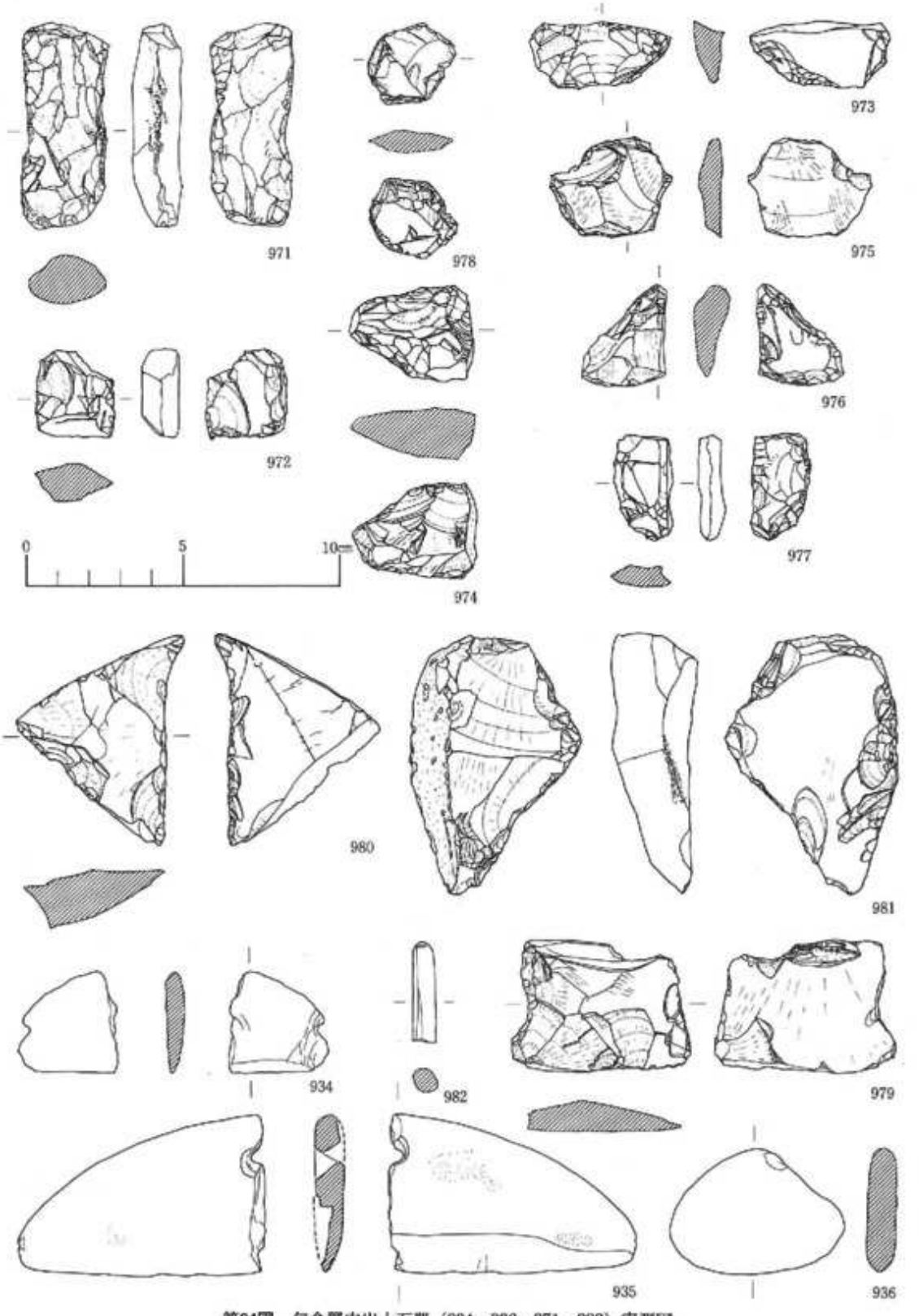

第91図　中世遺構・包含層内出土石器実測図



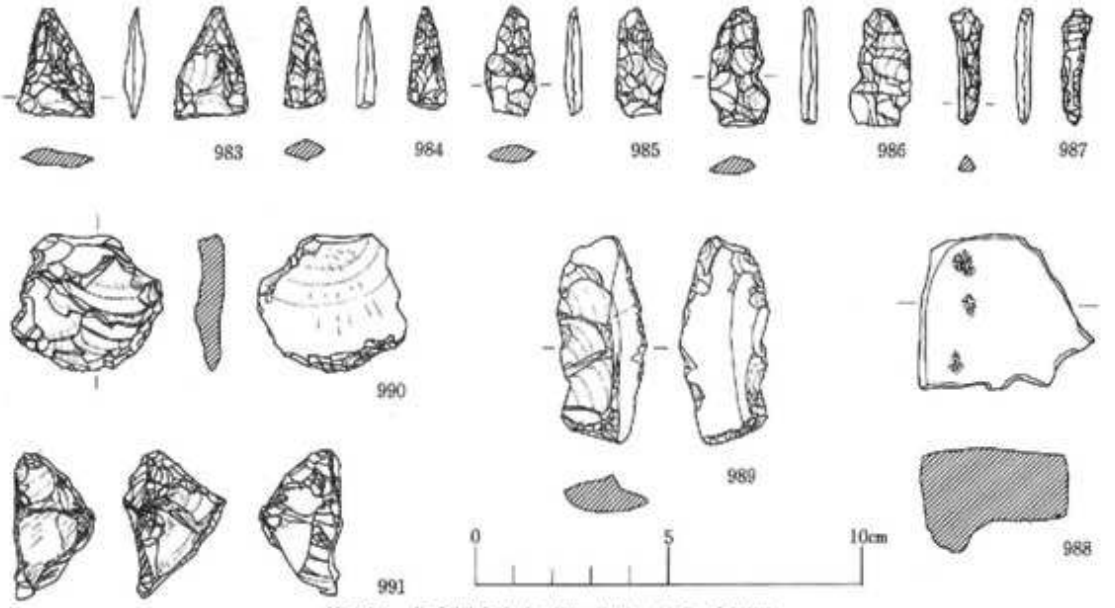

第92図　中世遺構内出土石器実測図




第93図　包含層内出土石器（937・947～970）実測図




第94図　包含層内出土石器（934～936・971～982）実測図




第95図　包含層内出土石器（983～991）実測図

以上、包含層内出土の石器は中世遺構内と同じく砥石以外のものを概ね弥生時代中期頃までに属すると考える。古墳時代以降の遺構内のサヌカイトの出土状況は、石器が25点で338.9ｇ、その他の剥片77点で646.8ｇである。最大重量を測るものは、中世落ち込み内出土の削器（926）で70.9gである。同じように包含層内では石器が48点で492.3ｇその他の剥片が185点で1,558ｇである。最大重量を測るものは第５層内出土の剥片で48.8ｇである。

今回の調査範囲約2,600㎡から出土したサヌカイトの総計は石器が119点で1931.2ｇ、剥片が395点で2574.4ｇになる。石器、剥片の合計は514点で4505.6ｇになり重量でいえば約４割を石器に加工したことになる。出土地区別にみるとＸＸ３～４Ｆ区の弥生時代遺構のNo.７－Ｅ・Ｓとその上層の中世遺構、包含層内に多く、その区域から東・西区へ広がるにつれて少なくなる。

縄文土器（図版七七）

弥生時代の遺構を検出した区域内の東側にあたるNo.１－Ｅ内から（1041・1042）、No.７－Ｓ２層内から（1043～1045）、No.10－Ｓ２層内から（1046～1051）などの縄文時代晩期の土器が出土している。

船橋式　丸味を帯びる口縁端部のやや下部にに刻み突帯を巡らすもの（1041）、刻み目文をもたないもの（1046）、胴部に刻み目突帯文をもつもの（1044・1050）がある。いずれも粗い角閃石を多量に含む生駒西麓の胎土をもつ。

長原式　尖り気味の口縁端部から貼り付け突帯まで一緒になでつけ、突帯に刻み目文を施すもの（1042）がある。

その他－「く」の字形に外反する口縁部で胴部は条痕を施すもの（1043）、口縁端部に面を有するもの（1049）、直口型の鉢で胴部をヘラ削りするもの（1051）などがある。（1043・1049）は微粒の角閃石を、（1051）はやや粗粒の角閃石を含む。

動物遺体（図版三〇）

第11表に示すように、弥生時代の墓域内から動物遺体が検出された。種はシカ、ウマ、イノシシ、イヌ、トリなどと他に遺存状態が悪く種不明なものがある。No.1－E1層内のシカの角には焼けこげが認められる。

第11表　方形周溝墓・周溝内出土動物遺体一覧表

| 番号 | 遺構 | 出土地区 | 種類 | 部位 |
|---|---|---|---|---|
| 992 | 1E | XIXF20h | シカ | 角（焼けこげ有り） |
| 993 | 1E2層 | XIXF20g | 不明 | |
| 994 | 1W1層 | XIXF17g | 不明 | |
| 995 | 1W1層 | XIXF17g | 不明 | |
| 996 | 3E1層 | XIXF16、17g | ウマ | 臼歯破片 |
| 997 | 7E1層 | XXF4f | 不明 | |
| 998 | 7S2層 | XXF3g | 不明 | |
| 999 | 7S2層 | XXF3g | 不明 | |
| 1000 | 7S2層 | XXF2g | イノシシ | 右大腿骨 |
| 1001 | 7S2層 | XXF3g | イヌ | 左上顎 |
| 1002 | 7S2層 | XXF3f | トリ | （種不明） |
| 1003 | 10S1層 | XXF1g | 不明 | |
| 1004 | 10S2層 | XIXF20g | イヌ | 下顎（？） |
| 1005 | 10S2層 | XXF2g | 不明 | |
| 1006 | 10S2層 | XXF20h | 不明 | |
| 1007 | 10S2層 | XIXF20g、h | 不明 | |

注1　下村晴文　曽我恭子『神並遺跡Ⅰ』　東大阪市教育委員会（財）東大阪市文化財協会　1986年

2　菅原正明　「畿内における土釜の製作と流通」（『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集　1982年
菅原正明　「畿内における中世土器の生産と流通」（『古文化論叢』藤沢一夫先生古稀記念論集）1983年

3　尾上　実　「南河内の瓦器椀」（『古文化論叢』藤沢一夫先生古稀記念論集）1983年

4　赤羽一郎　「常滑」―知多半島古窯址群―（『世界陶磁全集』3　日本中世　小学館　1977年）

5　横田賢次郎・森田　勉　「大宰府出土の輸入陶磁器について―型式分類と編年を中心として」（『九州歴史資料館研究論集4』）1978年

6　佐原　真　「畿内地方」『弥生式土器集成本編2』　1968年

7　森井貞雄　「河内地方の畿内Ⅲ・Ⅳ様式編年の一視点」（『大阪文化誌第15号』（財）大阪文化財センター　1982年

8　曽我恭子　「弥生土器」（『恩智遺跡』瓜生堂遺跡調査会　1980年）
同上　「弥生土器について」（『瓜生堂遺跡　Ⅲ』瓜生堂遺跡調査会　1983年）

9　田代克巳　「いわゆる方形周溝墓の供献土器について」（『鳥越憲三郎博士古希記念論文集』1985年）
曽我恭子　「西ノ辻遺跡出土遺物について」（『東大阪市文化財協会ニュース』Vol.3，No.4　1988年

10　注8と同書

11　注9と同書

12　上田健夫　「兵庫県伊丹市口酒井遺跡出土土器の胎土の構成鉱物と、構成鉱物による胎土の産地推定」（『伊丹市口酒井遺跡―第11次発掘調査報告書』伊丹市教育委員会　（財）古代学協会　1988年）

13　注8の上段と同書
中西靖人他　（『大和川環境整備事業柏原地区高水敷整工事に伴う船橋遺跡試掘調査報告書』大阪文化財センター　1976年
上西美佐子　「山賀遺跡（その3）出土の弥生土器について」（『山賀（その3）』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書―本文編―』（財）大阪文化財センター1984年）

14　芋本隆裕　「鬼塚遺跡」Ⅱ（『鬼塚遺跡・若江遺跡発掘調査報告』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報　東大阪市教育委員会1979年）

## 4）西ノ辻遺跡第８次発掘調査

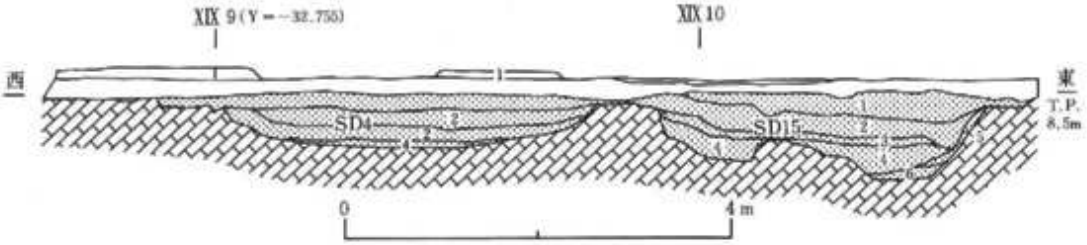
### （1）層序

西ノ辻遺跡における弥生期、中世期の層序は、後世の削平によりすべて消失しており、残っていない。第２層中には中世期の遺物が含まれていたものの、近現代の遺物が混じり、また、図化しうる資料は殆ど無い。第８次調査地点の基本層序は以下の通りである。

第１層　耕土。オリーブ黒色（５Y3.5/1）砂質シルト。粗粒砂～細礫多量に含む。

第２層　床土。褐色（2.5Y3/2）砂質シルト。粗粒砂～細礫多量に含む。上部は褐色（7.5Y4/3.5）砂質シルト。

第３層　褐色（10YR4/4）粘土質シルト。




第96図　西ノ辻遺跡第８次調査土層断面図

（ＳＸ４）

第１層　黒褐色（2.5Y3/2）砂質シルト。中粒砂～細礫混じる。

第２層　黒褐色（2.5Y3/1）砂質シルト（粗粒砂～細礫多量に混じる）と、褐色（10YR4/4）粘土質シルト混合。

第３層　オリーブ黒色（５Y3/1）砂質シルト。粗粒砂～細礫多量に含む。
炭片少量混じる。

第４層　黒色（10YR2/1）シルト質粘土。粗粒砂多し。

（ＳＤ15）

第１層　オリーブ黒色（５Y3.5/1）砂質シルト。中粒砂～細礫多量に含む。

第２層　黒褐色（2.5Y3.5/2）砂質シルト。粗砂粒～細礫多量に含む。

第３層　オリーブ黒色（５Y3/1）シルト質粘土と、暗褐色（10YR3/4）シルト質粘土の混合。細礫多量に含む。

第４層　オリーブ黒色（7.5Y3.5/1）粘土と砂混じりシルト質粘土の混合。上部に上層のしみ込み有り。

第５層　オリーブ黒色（５Y3.5/1）粘土質シルト。極細砂～中粒砂多量に含む。褐色（10YR4/4）粘土質シルトのブロックを少量含む。

第６層　灰色（7.5Y4/1）シルト質粘土。中～極粗粒砂混じる。

（2）中世の遺構

第8次調査で検出した中世の遺構については、溝、井戸、土坑、柱穴群がある。これらの遺構は、16世紀前半、14世紀末から15世紀初めの大きく2時期にわかれる。16世紀代の遺構としては調査範囲南西一帯に検出した柱穴群、ＳＤ１～18・27、ＳＸ３・４・６がある。14～15世紀代では、ＳＤ16・17・21～23、ＳＫ２・５、ＳＥ１、柱穴群がある。それぞれの遺構群内には、前後関係が認められるが、出土遺物から大きな時期差は認められない。

ＳＤ１～14・18・20・27

調査区全域に検出した。南北方向にのび、幅40～90cmを測る。深さは、上部を削平されているため、大半の溝が浅く、５～15cmである。

ＳＤ15（第98図）

南北方向にのびる溝である。幅４～4.5m前後、最深部１mを測る。溝底の傾斜はわずかに南に向って下がり、約15cmの比高が認められる。溝肩南東部では、ゆるやかな落ち込み状を呈しており、溝底との比高はわずかに30cmとなっている。第１層より第４層までは埋土、第５層・６層は堆積土である。第４層下面で人頭大の礫が多量に認められる。溝廃棄時に埋められたと考えられる。埋土内より16世紀頃の土器が出土しており、溝の廃絶時期と考えられる。

ＳＤ16・17・21～23

調査区北東部で検出。幅30～60cm、深さ10～25cmを測る。溝の方向は東西、南北の両方向があり、各溝間の切り合いが認められる。

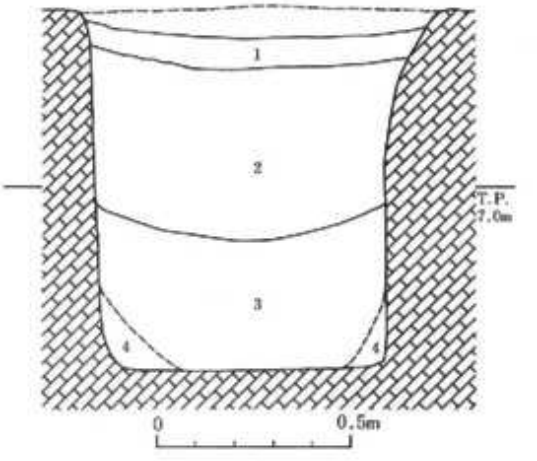
柱穴群

調査区西半一帯に広がる。明確な建物は復元できなかったが、２棟分程度が検出範囲から考えられる。時期は２時期にわたってあったと考えられる。

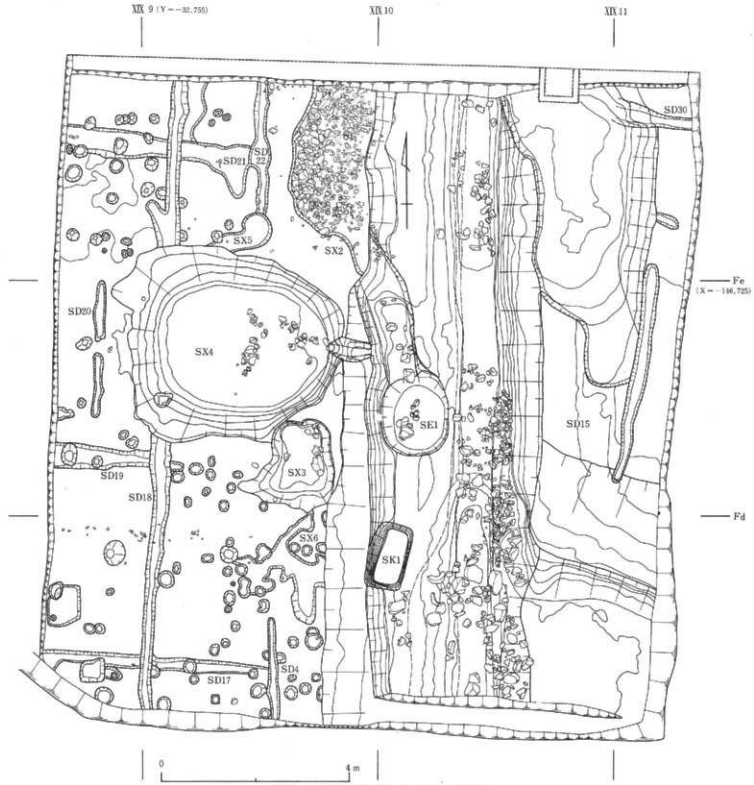
ＳＥ１

ＳＤ15の西側肩部で検出した。ＳＤ15により上部を削平されている。平面形はほぼ正円を呈し、上端での直径0.9m、底部直径0.7m、深さ0.96mを測る。内部にタガの痕跡がわずかに残る。

第１層はオリーブ黒色（５Ｙ3/2）シルト質粘土と、オリーブ褐色（2.5Ｙ4/6）粘土の混合で、埋土である。第２層は暗オリーブ灰色（2.5Ｙ4/6）粘土質シルトで、緑灰色（５Ｇ4/1）シルトのブロックを含む。第３層は黒褐色（2.5Ｙ3/1）粘土質シルト。細～粗粒砂、植物遺体を多量に含む。第４層は暗緑灰色（7.5ＧＹ4/1）シルト質粘土と第３層の混合で、壁面が崩れて堆積した層と考えられる。出土遺物より14世紀末か



第97図　ＳＥ１断面図



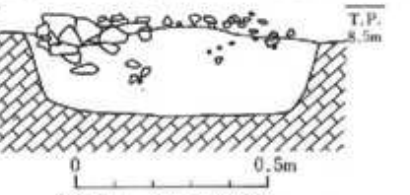

第98図　西ノ辻遺跡第８次調査中世遺構平面図

ら15世紀初めと考えられる。

ＳＥ１の北側につながる溝状遺構は、ＳＤ15内の第４層が堆積しているものの、ＳＥ１に関連した溝と考えられる。この溝はわずかにＳＥ１に向って傾斜する。

ＳＫ１

ＳＥ１同様、ＳＤ15により上部が削平されている。平面形はほぼ長方形を呈し、長辺68cm、短辺40cm、深さは現状で24cmを測る。長軸の方向は、N30°Ｅ向く。土坑内はにぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）シルト質粘土と、黒褐色（2.5Ｙ3.5/1）粘土質シルトの混合で、すべて埋土である。上部に５～10cm大の礫が多量に混じる。土坑墓の可能性が考えられる。



第99図　ＳＫ１断面図

ＳＫ２

ＳＤ15によって東半が切られている。現状で東西0.8m、南北２m、深さ0.35mを測る。黒褐色（2.5Ｙ3.5/1）粘土質シルト、にぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）粘土質シルトの混合で、上面に５～20cm大の礫が多量に認められる。埋土である。

ＳＫ４

東西2.５m、南北２m、深さ0.6mを測る、皿状の断面を呈する土坑である。溝、柱穴の一部を切っており、最も新しい時期の土坑と考えられる。

（３）弥生時代の遺構（第101図）

弥生時代の遺構には、ＳＤ28・29がある。いずれも遺物の量は微量で、明確な時期は不明であるが、第７次調査の例から、中期頃の遺構と考えられる。

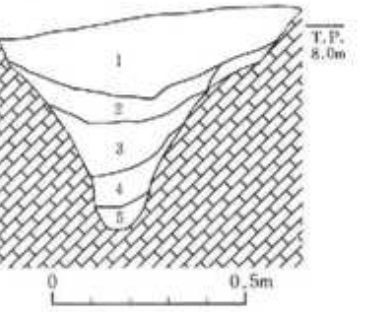
ＳＤ28

調査区東端（XIXF12ｅ地区）で検出した。幅10～25cm、深さ５～10cmを測る、東西方向の溝である。西側はＳＤ15で切られ消滅している。溝底は西に向って傾斜する。

ＳＤ29

上部は中世期の遺構によって削平され、ＳＫ４の第１層が上面に堆積する。幅約1.2m、深さ約1.2mを測り、溝底は北東方向に傾斜する。溝底の比高は調査範囲内で30cmで

第１層　黒褐色(2.5Ｙ3.5/1)砂質シルト（極粗粒砂多量）と、暗褐色（10ＹＲ3.5/1)粘土質シルト（細礫多量）混合。
第２層　オリーブ黒色（５Ｙ3.5/1)砂質シルトとベースの混合。
第３層　灰色（7.5Ｙ4/1)シルト質粘土と、オリーブ黒色（５Ｙ3.5/1)粗粒砂混じり砂質シルト、ベース混合。
第４層　黒褐色（2.5Ｙ3.5/1)粗粒砂混じり砂質シルトと、ベースの混合。
第５層　灰色（7.5Ｙ4/1)シルト質粘土（細～粗粒砂多量)。

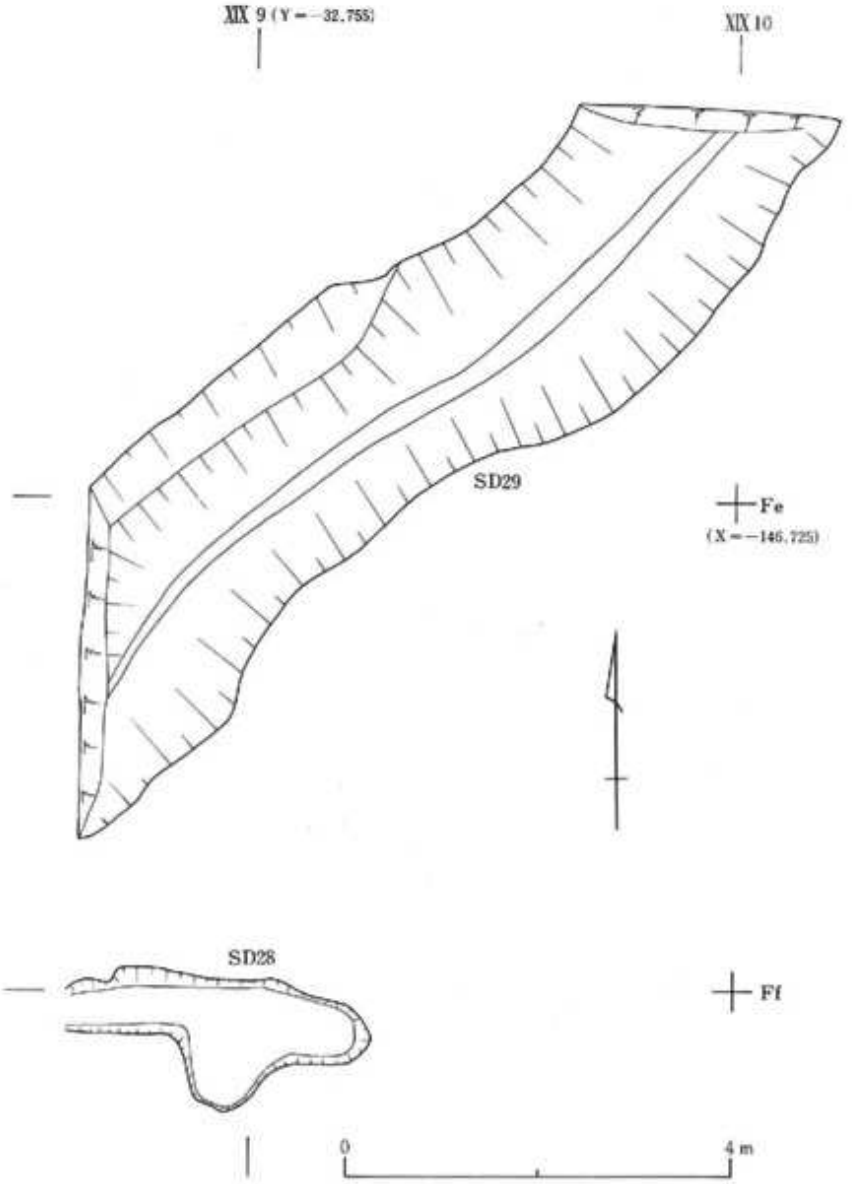


第100図ＳＰ29断面図

ある。溝の方向は南西から北東方向にのびる。断面はほぼV字状を呈する。第1～4層までは埋土と考えられる。

SD30

XIXF9～10f～g地区にまたがって検出した、東西方向にのびる溝である。幅30～70cm、深さ約40cmを測る。上部は削平され、上面には中世期の遺物が混入する。溝内は黒褐色（10YR3/2）粘土質シルトで、細～粗粒砂が多量に混じる。埋土である。




第101図　SD28・29平面図

（4）出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・瓦・土製品・石器・鉄製品・動物遺体などである。遺物は弥生時代と中世遺構に伴うものと、包含層から出土したものである。大半の遺物は中世遺構に伴うものが多いが、完形になるものは少ない。次に主な出土遺物を遺構毎に記述する。出土遺物に関しては、西ノ辻遺跡７次調査と同様に整理・分類を試みた。

土器・陶磁器

中世遺構出土遺物

中世の遺構は井戸（ＳＥ１）、土坑（ＳＫ１～５）、溝（ＳＤ１～30）を検出した。これらは大きく２つの時期に分けることができる。

〈１〉ＳＤ１（第102図）

土師器・瓦器・陶磁器などの細片が出土。２層からの出土量が多いが図化できるものは少ない。瓦器椀は大和型（４・５）と和泉型（６）のものがみられる。（４・５）は『神並遺跡』[注1]のＡ₂かＡ₃に相当する。（６）は同じくＢ₃に相当する。13世紀後半～14世紀頃のもの。瓦質の摺鉢（18）は口縁端部を丸くおさめる15世紀代のもの。（17）は摺鉢の底部である。白磁碗（12）は横田・森田氏の分類・編年[注2]によると「Ⅳ類」の12世紀のもの。

〈２〉ＳＤ15（XIXＦ11ｇ区）（第102・103図、図版八一・八二）

土師器・瓦器・須恵器・陶磁器などが１・２・３層の各層から出土している。細片のものが多く図化できたものは少ない。

〈１層〉東播系の須恵質の甕（20）、鉢底部片などがある。甕は口縁端部が上方に肥厚。体部に横方向の細かい叩き目を施し、頸部下から肩部にかけて斜め方向の叩き目。

〈２層〉土師質の羽釜・皿（１）・（16）などがある。小皿（１）は上げ底から口縁部がそのまま外上方に開く。口縁端部は薄く尖る。口径は8.4㎝。器高1.2㎝。色調は淡橙褐色。中皿（16）はやや丈高いもので、底部から口縁部がなだらかにひらく。端部は薄くなる。口径は13.2㎝。瓦（160）は巴文軒丸瓦である。左廻りの巴文を配す。

〈３層〉出土量は多い。土師皿（47～50）、土師椀（46）、瓦質摺鉢（21～26）、土師・瓦質羽釜（32～37）、火舎（38～45）などが見られる。土師皿（47・48）は底部から口縁部がなだらかにひらく丈高のもの。（47）の口径は9.8㎝、器高は2.5㎝。（48）は口径10.8㎝。器高は2.7㎝。色調はいずれも浅黄橙色を呈す。土師大皿（49・50）は口径が14.5㎝、15㎝で乳白色を呈す。土師椀（46）は平底から体部が内湾して立ち上がり、口縁部は外湾してひらく。口径は7.9。器高は4.5㎝。色調はにぶい橙色を呈す。瓦器椀（３）は内面のヘラミガキが密である。大和型の13世紀初め頃のものと思われる。瓦器摺鉢は口縁端部を断面三角形にするもの（26）、口縁端部を丸くおさめるもの（23）、面をもつもの（24）、外上方にひらくもの（25）、先端を薄く尖らせて内傾させるもの（21・22）などがある。羽釜（33・34）は口縁部が内傾するもの。

（32・35・37）は口縁部が内湾するもの。（32～36）の口縁端部は内傾し、（37）は外傾する面をもつ。（32）は口縁部の下位に２孔１対を向い合わせの位置に穿つ。菅原氏の分類・編年[注3]によれば「河内Ｄ型」の13世紀～14世紀頃のもの。火舎（42・43）は逆「ハ」の字形に口縁部が立ち上るもの。火舎（38～40）は直口する口縁部に２本の突帯を巡らせ、その間に押印を施すもの。（41）・（45）は火舎の底部と考えられている。３脚をつける。（34・36・37）は土師質である。磁器碗には龍泉窯系の森田・横田氏編年の「Ｉ－１類」にあたる13世紀頃のもの（165）、白磁碗の底部（162）などがある。

〈３〉ＳＥ１（XIXF10ｆ区）（第104図、図版八〇）

土師器・瓦器・須恵器・陶磁器などが１～３層の各層毎に出土。

〈１層〉　瓦質羽釜（52）は口縁部が内傾し、面をつくる。肩部に幅の狭い鍔を巡らせる。

〈２層〉　土師皿（54・57・59）がある。いずれも厚い底部から口縁部が外湾気味にひらく。口径は８～8.6㎝、器高1.8㎝、色調は淡灰褐色を呈す。須恵質鉢（62）は口縁端部が断面三角形。

〈３層〉　土師皿（53・55・56・60・61）、瓦質羽釜・鉢（63～65）などがある。土師皿（53・55・56）は１層の皿と同じ作りであるがやや丈高になる。小皿（53）の口径は８㎝、器高２㎝、中皿の口径は10㎝、器高は（55）が２㎝、（56）が2.6㎝で色調はにぶい黄橙色を呈す。中皿（60・61）は平底からそのまま口縁部が外上方にひらく。口径は9.8㎝、器高2.2㎝。色調は浅黄橙色を呈す。瓦質摺鉢（63・64）は口縁部外側を断面三角形にする。口径は26.7㎝と26.3㎝。菅原氏によると14世紀後半のものといえる。片口鉢（65）は平底から体部が斜め上方にひらき端部を尖らせる。口縁端面に１本の沈線を巡らす。片口は貼り付けている。外面はナデ、内面はハケ目調整。口径は13.6㎝、器高4.1㎝。

〈４〉ＳＫ１（XIXF11ｇ区）（第104図）

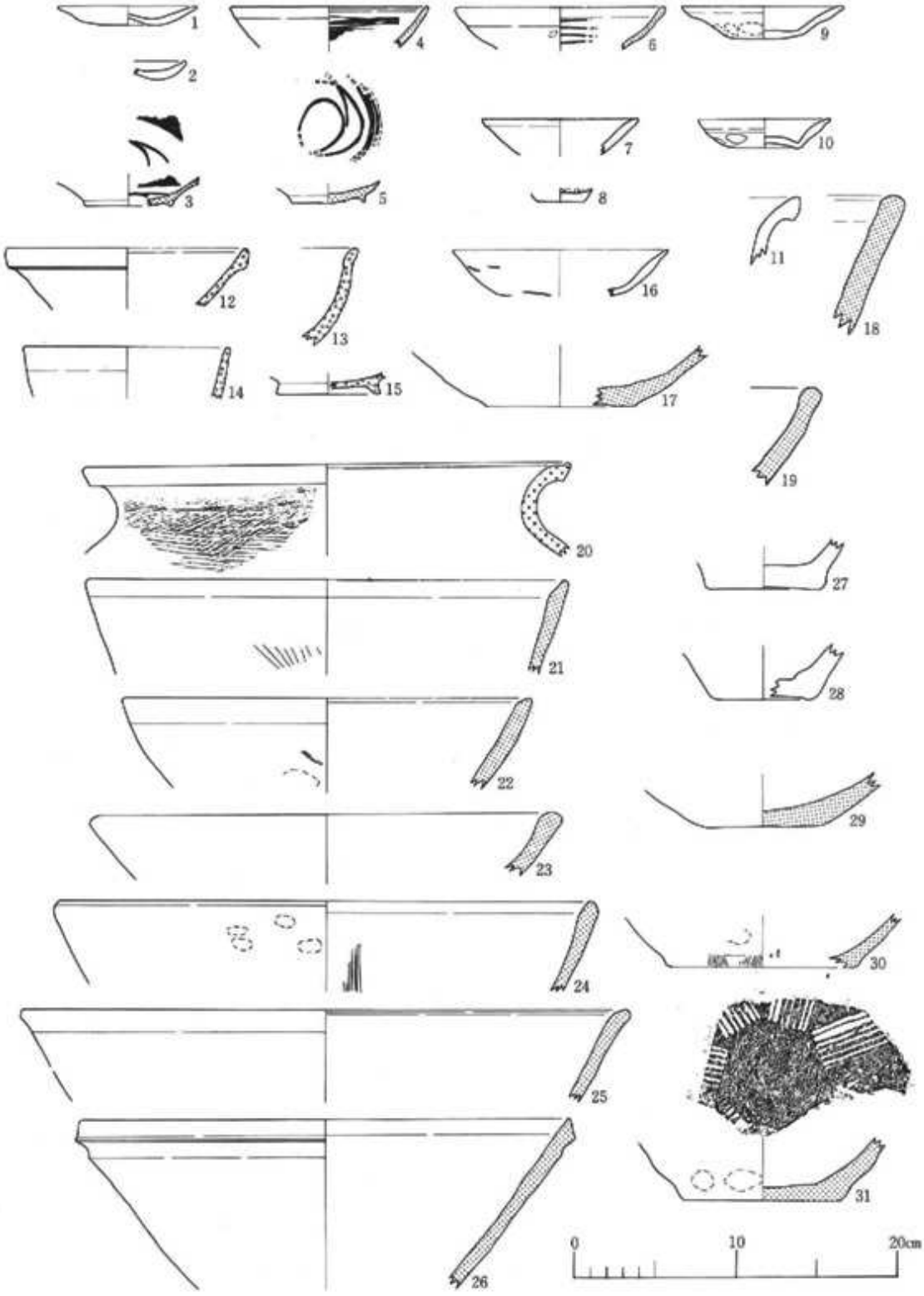
１層から出土している。

〈１層〉　土師皿（71・73）、白磁碗（66）、須恵質甕（69）、瓦質鉢底部（70）などがある。土師皿は神並遺跡の「Ｂ」タイプのもの。色調はにぶい黄橙色を呈す。白磁碗（66）は森田・横田氏分類・編年の「Ⅳ類」の12世紀頃のもの。須恵質甕（69）は口縁部を玉縁状につくる。菅原氏編年の16世紀代のもの。摺鉢（68）は備前焼の口縁部の小片。

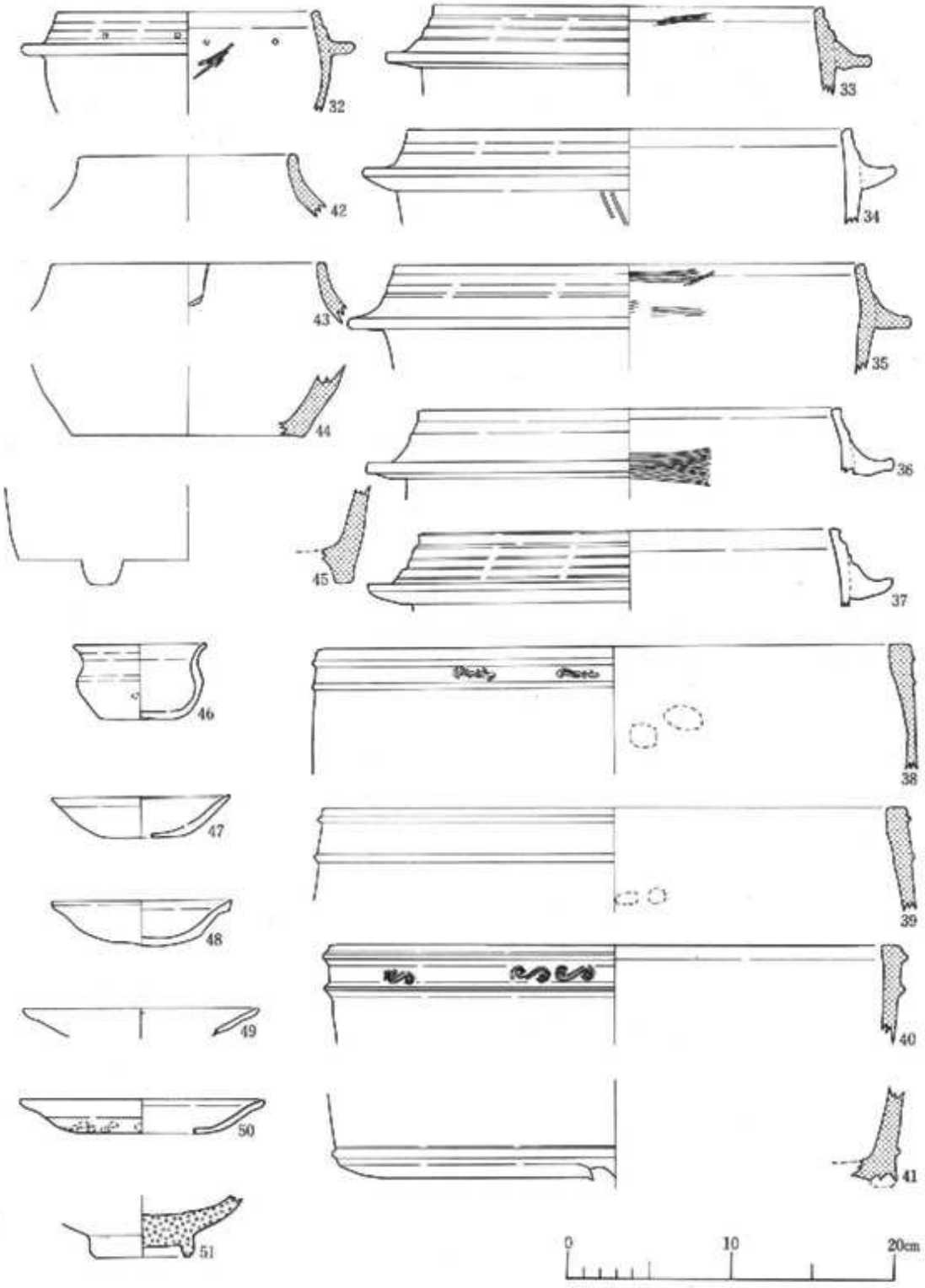
〈５〉ＳＫ２（XIXF10ｅ区）（第105図、図版八二・八三）

土師皿（85～96）、瓦器椀（115～116）・瓦質鉢（97～104）・甕（105）・火舎（110）、須恵質鉢（112）・甕（113）、常滑甕（117）、磁器（169）などが出土。

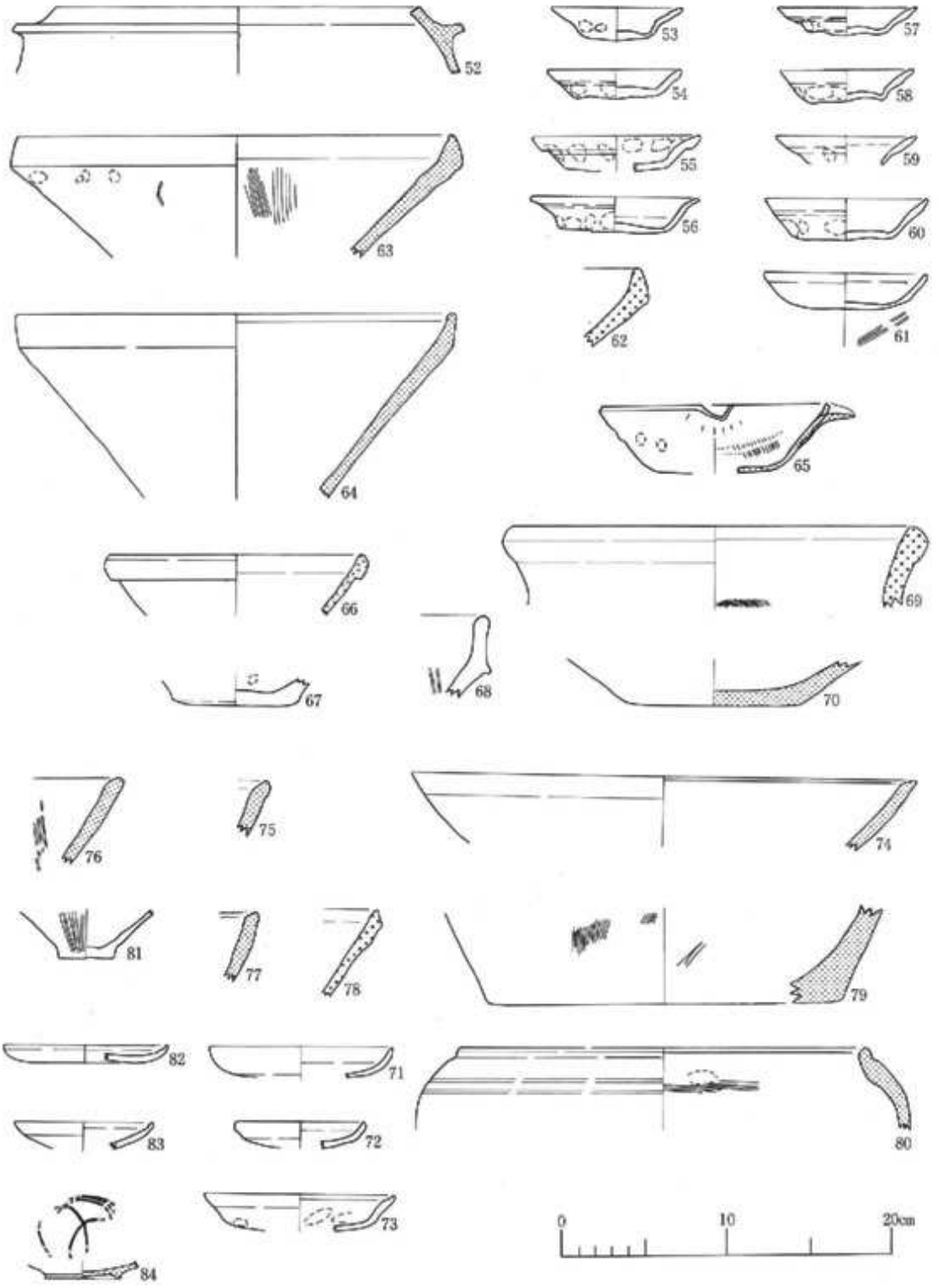
土師皿（85・90・94）は底部から口縁部が屈曲して立ち上るもので神並遺跡の「ｂ」タイプ。口径は７～９㎝位のものまでみられる。（94）はやや大きくなり中皿ともいえる。器高は１㎝である。色調は淡橙褐色を呈す。土師皿は丈高で1.8㎝位になる。土師皿（91）・（93）は底部から口縁部が外湾してひらく。小皿の口径は7.4㎝、器高は1.9㎝。中皿（91）の口径は9.4㎝、器高は2.0㎝、色調は淡乳褐色を呈す。中皿（95）、大皿（96）は前例と比べ浅くなり、底部か



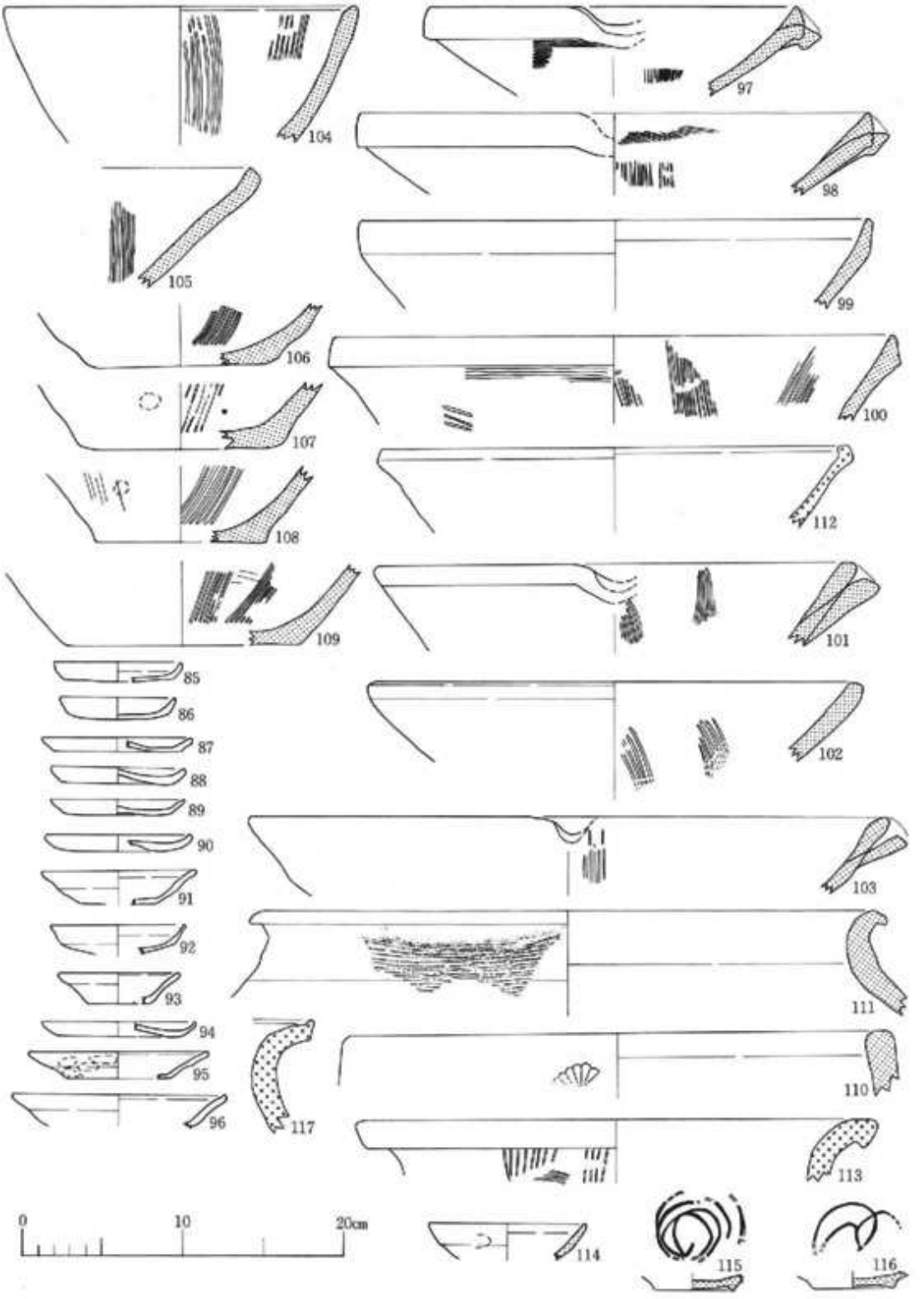

第102図　中世遺構内出土土器（1～31）実測図




第103図　中世遺構内出土土器（32～51）実測図




第104図　中世遺構内出土土器（52～84）実測図

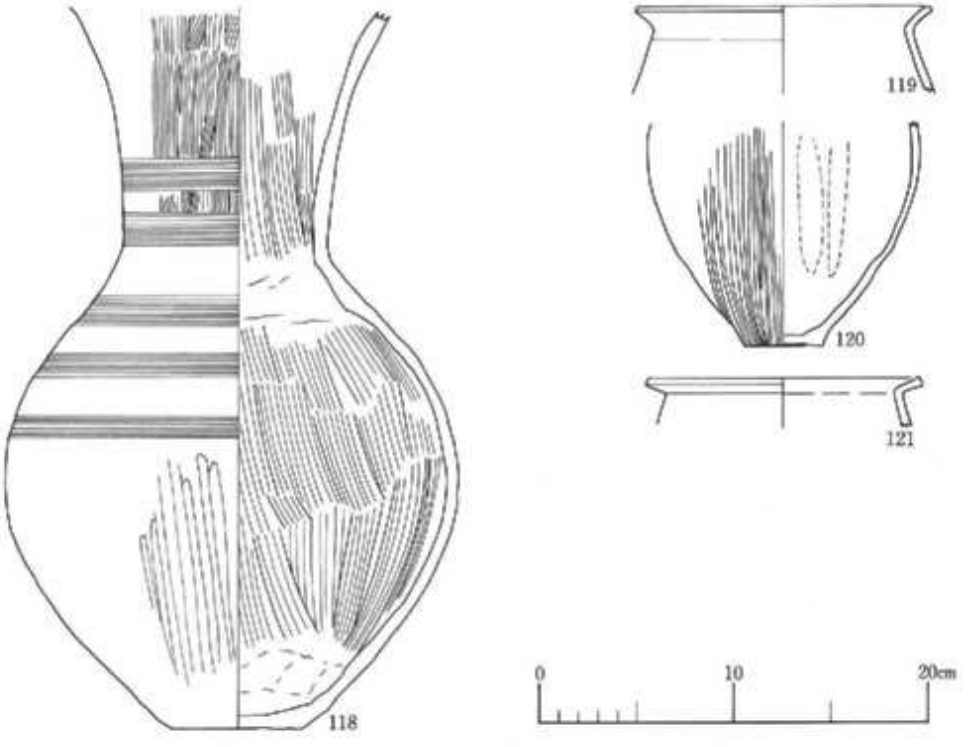



第105図　中世遺構内出土土器（85～117）実測図

ら口縁部が外上方へ大きくひらく。（95）は、口径は11㎝、（96）は口径が13㎝、色調は乳白色に近い。瓦器椀（115）・（116）は高台が断面三角形を呈す。見込みの暗文は（115）は同心円文、（116）は連結輪状文を施す。神並遺跡の「大和型A₂」の時期13世紀頃のもの。瓦質鉢は口縁部が断面三角形になるもの（97～100）、平端な面をもつもの（101・102・105）、口縁端部に内傾する面をもつもの（103・104）などがある。菅原氏の分類・編年によると、先の2グループは15世紀代、最後のグループは16世紀代のものに相当する。それぞれ摺り目をもち、また片口をつける。（106・109）はこれらの底部と考えられる。甕（111）は同氏によると河内国の14世紀、甕（113）は和泉国の15世紀のものに相当すると思われる。鉢（112）は須恵質で口縁端部が上方に拡張するもの。14世紀代と考えられる。火舎（110）は口縁部がそのまま終るもので菊花文を押印する。常滑甕（117）は口縁端部が上方のみに拡張するもので赤羽氏分類・編年[註4]の「Ⅲ—1期」—13世紀後半のもの。青磁器（169）は龍泉窯系の「Ⅰ—5—C類」—13世紀末のものに相当する。

〈6〉SX4（XIXF10f区）（第104図）

瓦質摺鉢（75～77）はいずれも口縁端部を薄くし、内傾する面をつくるもの。須恵質の鉢（78）は口縁端部に面をもつ。火舎（80）は内湾する体部に口縁部が少し立ち上り、口縁端部をそのままおさめるもの。




第106図　SD28・29・30内出土土器実測図

〈7〉その他

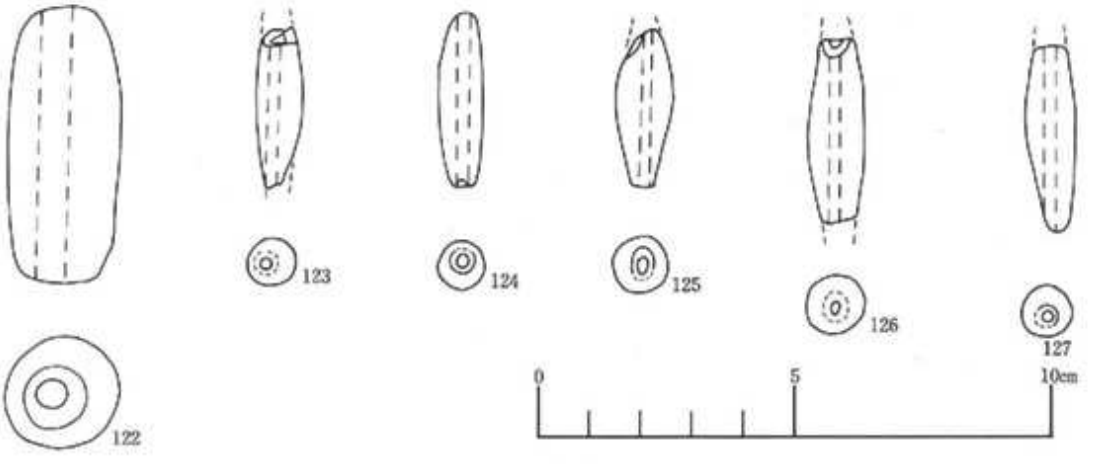
ＳＸ３内から瓦質鉢（79）、ＳＰ33内から土師皿（82）、ＳＰ53内から土師皿（83）、瓦器椀（84）などが出土。皿（82）・（83）は神並遺跡の「ｂ」タイプ。瓦器椀は「大和型Ａ$_2$」型式で13世紀代のもの。

弥生時代の遺構（ＳＤ28・29・30）出土土器（第106図）

出土遺物は非常に少ない。ＳＤ28から甕（118）、ＳＤ29から甕底部（119）、ＳＤ30から甕（120）、壺（117）が出土している。甕は口縁部が「く」の字形に外反するがいずれも磨滅のため整形は不明。壺（117）は球形の胴部に口頸部がそのまま斜め方向にひらく。口縁部は欠失する。内面の全面と頸部外面はハケ目調整。外面胴部はヘラミガキする。頸部から胴部上位まで直線文を施す。黄褐色を呈す。他地方の胎土。先の甕は弥生時代中期中頃、他者の壺は中期初頭のものと考える。

第12表　土錘一覧表

| 番号 | 遺構・包含層 | 出土地区 | 縦(cm) | 横(cm) | 孔径(cm) | 重量(g) | 残存状況 | 備考（胎土） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 122 | ＳＤ15　２層 | XIXF10g | 5.4 | 2.2 | 0.6 | 28.5 | 完形 | 精良 |
| 123 | ＳＤ15 | | 3.1 | 0.9 | 0.2 | 2.0 | 片端が欠損 | 精良 |
| 124 | ＳＤ19　３層 | XIXF10g | 3.4 | 0.9 | 0.2 | 2.6 | 完形 | 精良 |
| 125 | ＳＰ80 | XIXF9f | 3.1 | 1.1 | 0.3 | 2.9 | 片端が欠損 | 精良 |
| 126 | ２層 | XIXF9g | 3.6 | 1.1 | 0.2 | 5.1 | 両端が欠損 | 砂粒を含む |
| 127 | ３層 | XIXF10f | 3.6 | 1.0 | 0.2 | 2.6 | 片端が欠損 | 精良 |




第107図　土錘実測図

土錘（第107図、図版八三）

ＳＤ15、ＳＤ19、ＳＤ80、包含層内から土錘が出土している。重量的にみると３ｇ以下の小型土錘（123～126）、５ｇ（＋α）の中型土錘（127）、28ｇの大型土錘（122）がある。形態的にみると、（122～124）は中央部が筒状を呈し、両端がすぼまるもの、（125～127）は中央部に最大径をもち、両端に向って除々にすぼまるものである。孔径は大型土錘（122）が６㎜を測る。小・中型土錘（123～127）の孔径は2.1～3.0㎜である。胎土は土師質で精良なものと、粒砂を含むものがある。

石器（第108図、図版八五）

石器は中世遺構内、包含層内からそれぞれ少量ずつ出土している。器種は磨製石器（石庖丁）、打製石器（石鏃・石剣・削器・楔形石器）、砥石などがある。

中世遺構内

石器は中世遺構内に伴うものに砥石が３点、他に弥生時代の混入物と考えられる石鏃３点、削器１点、サヌカイト剥片９点がある。

砥石（130・134・135）　（130）はＳＤ15下層内から出土。表面から上部の傾斜面にかけて

第13表　中世遺構・包含層内出土石器一覧表

| 番号 | 遺構 | 器種 | 出土地区 | 最大長（㎝） | 最大幅（㎝） | 最大厚（㎝） | 重量（g） | 先端角度 | 石材 | 残存状況 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 128 | ＳＸ１上層 | 石鏃 | | 3.35 | 1.95 | 0.6 | 2.9 | 52°（欠） | サヌカイト | 片逆刺部欠失 |
| 129 | ＳＤ１下層 | 削器 | XIXF11 e | 6.8 | 8.1 | 1.8 | 120.1 | | サヌカイト | |
| 130 | ＳＤ15下層 | 砥石 | XIXF11 e | 8.55 | 6.2 | 4.0 | 330.8 | | 混成岩 | 表面が研砥面 |
| 131 | ＳＤ15最下層 | 石鏃 | XIXF11 g | 3.3 | 2.25 | 0.5 | 4.0 | 25°（欠） | サヌカイト | 先端部折損 |
| 132 | ＳＤ15最下層 | 石鏃 | XIXF11 f | 3.4 | 1.9 | 0.6 | 3.4 | | サヌカイト | 先端部折損 |
| 133 | ＳＤ15最下層 | 石庖丁片 | XIXF11 g | 3.6 | 5.9 | 1.05 | 27.6 | | 頁岩 | 一部破片のみ、風化 |
| 134 | ＳＥ１下層 | 砥石 | XIXF10f | 8.8 | 7.25 | 1.7 | 140.0 | | 流紋岩 | ２面が研砥面、表面内湾 |
| 135 | ＳＰ74 | 砥石 | XIXF９ g | 7.0 | 3.35 | 1.15 | 37.1 | | 頁岩（風化） | ２面が研砥面、穿孔 |
| 136 | ２層 | 楔形石器 | XIXF11 e | 3.4 | 2.1 | 0.5 | 4.1 | | サヌカイト | 両縁部潰れ |
| 137 | ２層 | 石鏃 | XIXF12 f | 4.0 | 2.05 | 0.6 | 4.9 | | サヌカイト | 刃部に潰れ |
| 138 | ３層 | 石剣片 | XIXF10 e | 3.1 | 2.9 | 1.1 | 11.3 | | サヌカイト | 胴身部の一部 |

第14表　中世遺構・包含層内出土サヌカイト一覧表

| 遺構 | 石器 | | その他のサヌカイト | | 合計 | | 備考　出土地区と個数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 重量(g) | 個数 | 重量(g) | 個数 | 重量(g) | 個数 | |
| SD1上層 | | | 9.2 | 1 | 9.2 | 1 | XIXF10f（1） |
| SD1下層 | 120.1 | 1 | | | 120.1 | 1 | XIXF11e（1） |
| SD15下層 | | | 5.0 | 2 | 5.0 | 2 | XIXF11f・g、12g（各1） |
| SD15最下層 | 7.4 | 2 | 68.9 | 3 | 76.3 | 5 | XIXF11e、11f（各1）、11g（3） |
| SD19 | | | 6.9 | 1 | 6.9 | 1 | XIXF9f（1） |
| SD26 | | | 2.2 | 1 | 2.2 | 1 | XIXF11e（1） |
| SX1上層 | 2.9 | 1 | | | 2.9 | 1 | 不明（1） |
| SX2 | | | 181.2 | 1 | 181.2 | 1 | XIXF10e（1） |
| 総計 | 130.4 | 4 | 273.4 | 9 | 403.8 | 13 | |
| 2層 | 9.0 | 2 | 20.1 | 7 | 29.1 | 9 | XIXF9e（2）、10e（4）、11e（1）、11f（1）、12f（1） |
| 3層 | 11.3 | 1 | 4.7 | 1 | 16.0 | 2 | XIXF10e（1）、XIXF12g（1） |
| 総計 | 20.3 | 3 | 24.8 | 8 | 45.1 | 11 | |
| 中世＋包含層 計 | 130.4 | 7 | 273.4 | 17 | 403.8 | 24 | |

研砥のためか光沢をもつ。混成岩製である。（134）はＳＥ１下層内から出土。表裏面、両側面が研砥のために内湾する。流文岩製。（135）はＳＰ74内から出土。表裏面に条線が残る。側面の稜線上、裏面左下の稜線は研砥のため磨り減る。上部に紐孔を穿つ。

石庖丁（133）　ＳＤ15最下層内から出土した小破片で損傷がひどい。頁岩製。

石鏃（131・132）　ＳＤ15最下層内から出土。（131）は平基無茎式で先端部が折損している。（132）は横長剥片で表周縁、裏右下縁部に細部調整を施す。

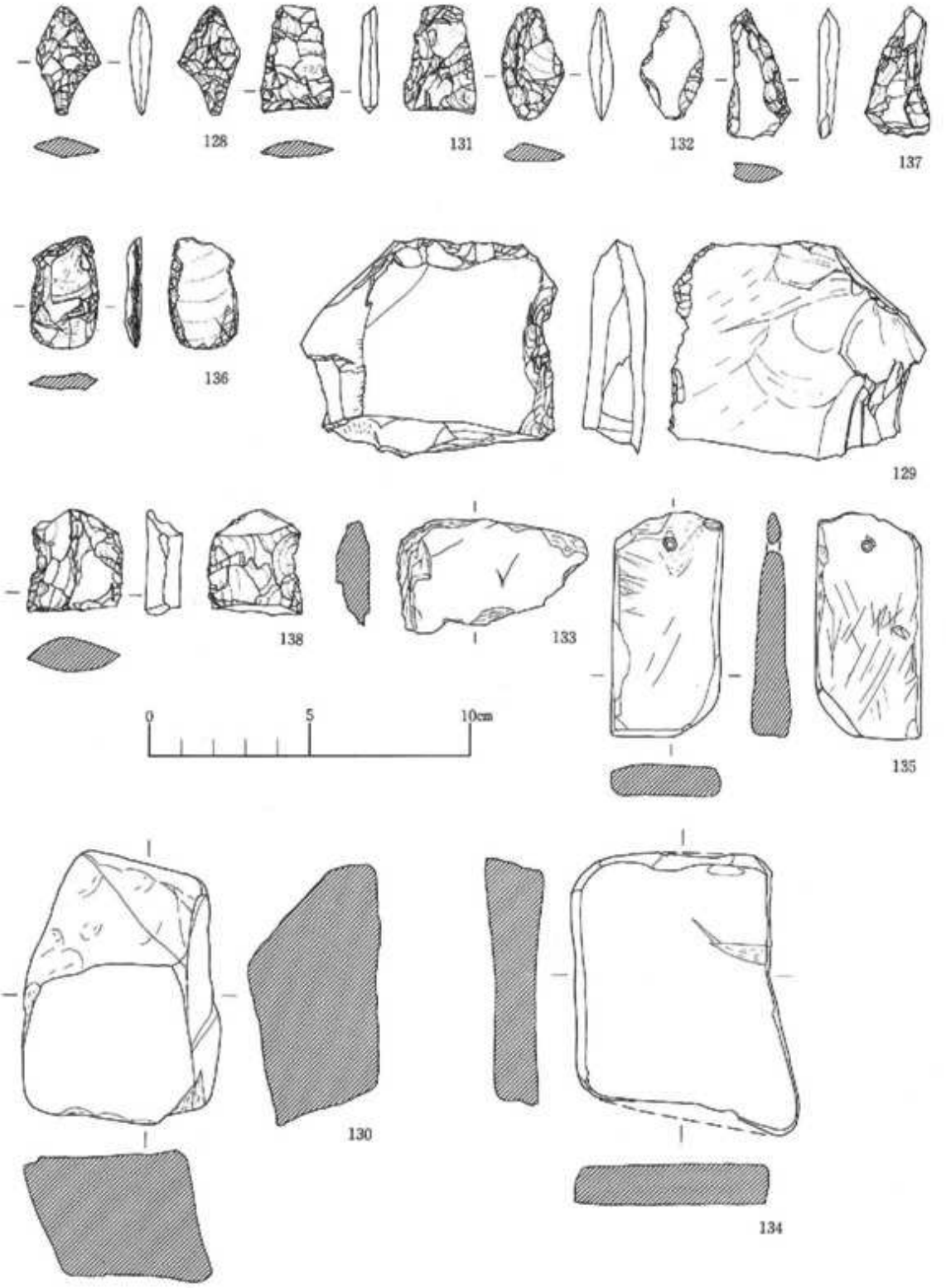
削器（129）　ＳＤ１下層内から出土。表上縁、右縁部に細部調整がみられる。

包含層内

２・３層内から弥生時代のサヌカイト製の打製石器が３点、剥片が11点出土している。楔形石器（136）、削器（137）が２層内、石剣の胴身部（138）が３層内から出土。サヌカイトの全重量は、403.8ｇ、そのうち石器に130.4ｇ（約1/4）が加工されている（調査範囲約200㎡）。最大重量を測るものはＳＤ１層内の削器（129）で120.1ｇである。

動物遺体（図版八四）

各中世遺構内、包含層内から動物遺体が表15に示すように出土している。ＳＸ２内から出土したヒトの左脛骨に犬のかじった痕跡がみられる。




第108図　中世遺構・包含層内出土石器実測図

表15　中世遺構・包含層内出土動物遺体一覧表

| 番号 | 遺構 | 出土地区 | 種類 | 部位 |
|---|---|---|---|---|
| 139 | SD1 下層 | XIXF11e | 不明 | |
| 140 | SD15 下層 | XIXF11e | 不明 | |
| 141 | SD15 最下層 | XIXF11e | 不明 | |
| 142 | SD15 最下層 | XIXF11f | 不明 | 大腿骨 |
| 143 | SD22 | XIXF12f | 不明 | |
| 144 | SE1 下層 | XIXF10f | シカ | 基節骨 |
| 145 | SE1 下層 | XIXF11f | トリ | 上腕骨(種不明、若いトリ) |
| 146 | SE1 最下層 | XIXF11f | カメ | 腹甲（種不明） |
| 147 | SP65 | XIXF11f | 不明 | |
| 148 | SX1 上層 | XIXF12g | 不明 | |
| 149 | SX1 | XIXF12g | 不明 | |
| 150 | SX2 | XIXF10e | ヒト | 左経骨（犬のかじったあと有り） |
| 151 | SX2 | XIXF10e | ヒト | |
| 152 | SX2 | XIXF10e | 不明 | |
| 153 | SX2 | | 不明 | |
| 154 | 3層 | XIXF12g | 不明 | |
| 155 | 3層 | XIXF10e | 不明 | |
| 156 | 3層 | XIXF10f | 不明 | |
| 157 | | XIXF11e II | 不明 | |

注1　下村晴文　曽我恭子　『神並遺跡Ⅰ』　東大阪市教育委員会　（財）東大阪市文化財協会　1986年

2　横田賢次郎・森田　勉　「大宰府出土の輸入陶磁器について一型式分類と編年を中心として」（『九州歴史資料館研究論集4』）1978年

3　菅原正明　「畿内における土釜の製作と流通」（『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集　1982．12

4　赤羽一郎　「常滑」—知多半島古窯址群—（『世界陶磁全集』3　日本中世　小学館　1977年）

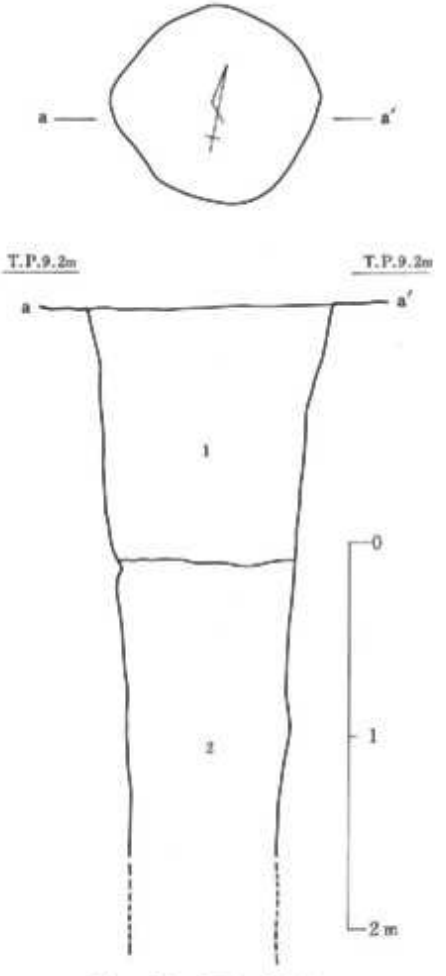
## 5）鬼虎川遺跡第18次発掘調査

### (1) はじめに

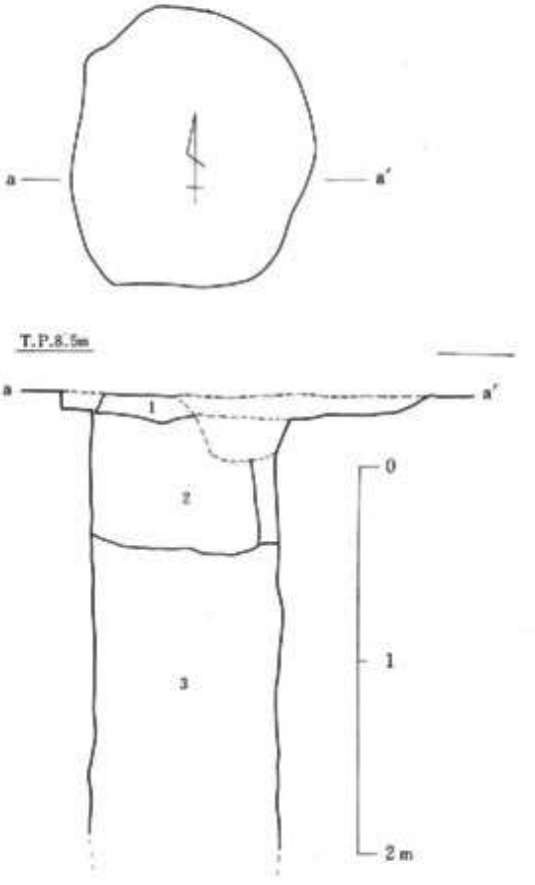
鬼虎川遺跡と西ノ辻遺跡の境界は、発掘調査を実施する以前では９ラインを境として設定した。これは、９ライン前後に未買収地が一区画残されており、ここで境界を引くことが、調査上都合が良いために便宜的に設定されたラインである。調整後の結論としては、中世遺構は西ノ辻遺跡、鬼虎川遺跡の範囲を越えて広がり、境界線を引く事はできない。ただ、弥生時代の遺構については、後述のように７ライン前後を境にして、西へは続かず鬼虎川遺跡とは明確に区別することができた。そこで今回は、同一の調査であるが当初の境界設定に基づいて、鬼虎川18次調査として、別に報告することにした。ただ、中世遺構については前述のように一連の遺構としてとらえたほうが良いと思われるが、分けて記述をしている。ご寛容いただきたい。

### (2) 中世の遺構

調査地は、現状が水田であり、耕土・床土を除去するとすぐに中世の遺構面が検出された。




第109図　ＳＥ１実測図



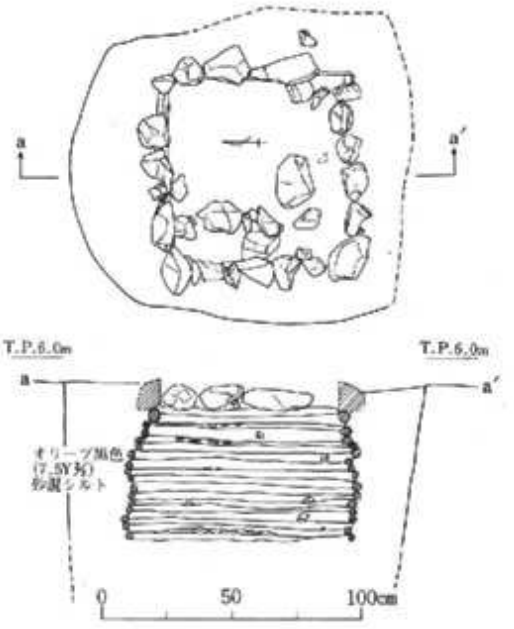

第110図　ＳＥ３実測図

遺構面は精査を繰り返したところ、溝・柱穴・土坑などの遺構が多数重複して検出できた。しかしながら、同時期の遺構を追及することは困難であり、遺構の切り合い関係及び出土遺物によって決定せざるを得ない状況である。

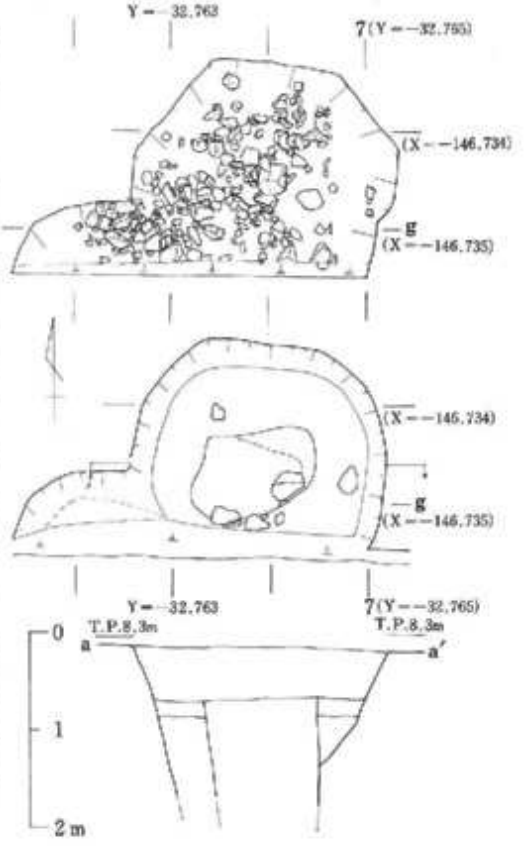
中世の遺構には、大きく２時期あると思われる。１時期は、13世紀後半～14世紀頃でＳＥ３、ＳＫ18などが相当する。もう１時期は、15世紀～16世紀にかけてでＳＤ14、ＳＥ５、ＳＫ６、ＳＫ35など大部分の遺構がこの時期に相当する。これは、15世紀～16世紀に大規模な整地が行われ、それ以前の遺構がかなり破壊されたためであろう。以下順に遺構の説明を記す。

ＳＥ１

５ｇで検出した。検出面で短辺1.28m、長辺1.88m、深さ３ｍ以上を測り長楕円形を呈する素堀の井戸である。井戸内の堆積土は、大きく２層に分けられる。第１層は、黒褐色（10ＹＲ2/2）シルト混細礫層、第２層オリーブ黒色シルト層となり、瓦器、土師器の小片が出土している。出土遺物から13世紀頃に属すると思われる。ＳＥ２　19・20ｇ区で検出した。５～８㎝の丸太材を井桁状に１辺1.8mの方形に組み合わせ井筒とし、井筒最上段には人頭大の自然石を方形に並べて井桁としている。出土遺物はなく、近世以降と思われる。ＳＥ３　８ｇ区で検出した。直径1.0mの円形プランを呈し、深さ２ｍ以上を測る素堀の井戸である。内部の堆積は、３層に分けることができるが、第２層黒褐色（10ＹＲ2/2）シルト層より土師器皿、瓦器椀が出土している。出土遺物から、13世紀後半頃のものと思われる。




第111図　ＳＥ２実測図



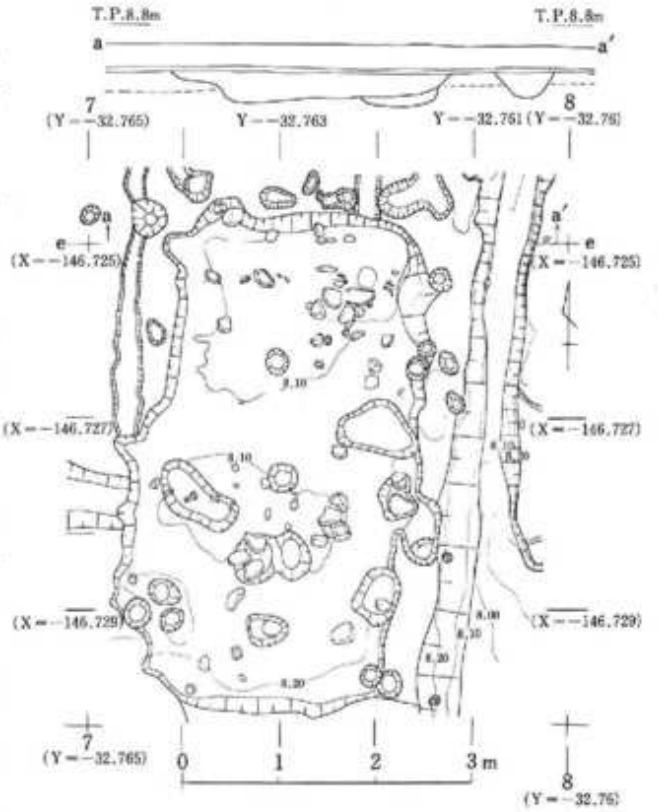

第112図　ＳＫ５実測図

ＳＫ５

７ｇで検出した。南壁部分で直径3.5m以上の規模をもつ土坑で、トレンチ外へ広がっている。北から南へなだらかに凹み、南壁で約30cmの深さになる。内部には30～40cm大の礫や拳大の礫が多量に認められた。出土遺物には土師器皿・羽釜、須恵質甕、摺鉢、瓦質火舎、常滑焼甕などがある。出土遺物から遺構の年代は15世紀～16世紀と考えられる。

ＳＫ６

８ｆ区で検出した。南北5.2m、東西3.1mの長方形状を呈し、深さ20～30cmで底面は平坦になっている。土坑内には18箇所のピットが認められるが、いずれも後世のものである。内部からは、焼土塊が多量に出土しているが、壁面・底面は焼けていない。この土坑の性格については不明な点が多い。出土遺物には土師器皿、須恵質摺鉢などが出土している。出土遺物から、15～16世紀代と考えられる。




第113図　ＳＫ６実測図

ＳＫ14

６ｅ～７ｅ区で検出した。雲形状にいびつな形で北側のトレンチ外へ広がっている。深さ15～25cmで底面はほぼ平坦である。内部より土師器皿、瓦器椀・焼土が出土している。時期は、15～16世紀と考えられる。

ＳＫ35

１ｅ・１ｆ・１ｇ区で検出した。東西6.4m、南北8.9mの長方形プランの土坑で深さ1.2mを測り、皿状に凹んでいる。南東コーナーで幅３mの溝が取り付き、西側の北と中央部で幅１mの溝が２箇所取り付いている。溝底の高低から南から流れ込んだ水が、一時ＳＫ35内に貯水され、満水になったところで西側の２箇所の溝から下へ流れ落ちるような施設と考えられる。内部には、30～40cm大の礫が少量認められるが、その他の施設は認められなかった。このことから、庭園内の池状の遺構の可能性が高い。出土遺物には、土師器皿・羽釜、瓦質の羽釜・焼土などが出土している。時期は、15～16世紀代と考えられる。

ＳＤ14

８ｆ～８ｇ区で検出した。南北方向に走る溝で途中幅が広くなったり、他の溝と切り合うなどしているが、ほぼ一直線で検出された。幅50～80cm、深さ約20cmである。南側でＳＥ３と切

り合い、北側でＳＫ06の東側に沿って走っている。出土遺物は、土師器皿、白磁などがある。

ＳＤ40

６ｅ～６ｆ区で検出した。1.1ｍ～1.7ｍ、深さ70～80cmを測る。溝は、南から北に向かうが６ｆ区の中央部で丸く終息している。出土遺物には、土師器皿、磁器類が出土している。時期は15～16世紀代と考えられる。

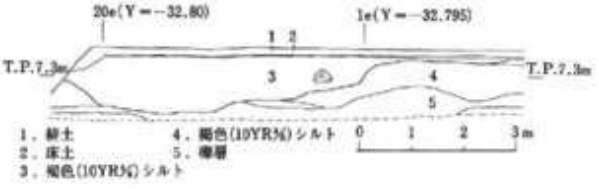
ピット群

今回の調査地では201箇所以上のピットを検出している。各ピットは、同一遺構面で検出したもので、重複も激しく同時期の遺構を決定することができず、性格、規模とも不明である。

（３）弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は、中世の遺構や後世の削平によって、検出状況は非常に悪い。西ノ辻遺跡で検出したような方形周溝墓は検出されず、わずかに不規則な土坑状の遺構を３箇所検出したのみである。

第114図　ＳＫ35平面図




第115図　ＳＫ35断面図

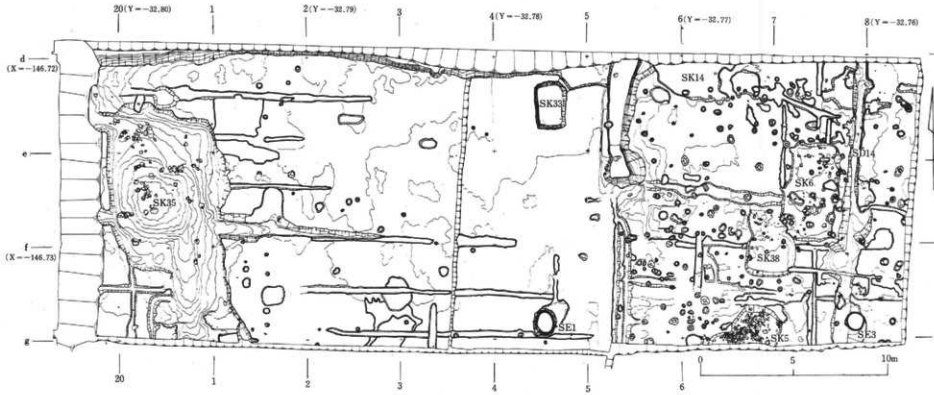
ＳＫ53は、９ｅ区で検出した。東では幅１ｍの溝状を呈し、西では幅３ｍ以上にラッパ状に広がって、徐々に輪郭線が不明確になって終わっている。内部から、小児用甕棺１基、胴部下半に穿孔のある壺などが出土している。

ＳＫ55～ＳＫ57

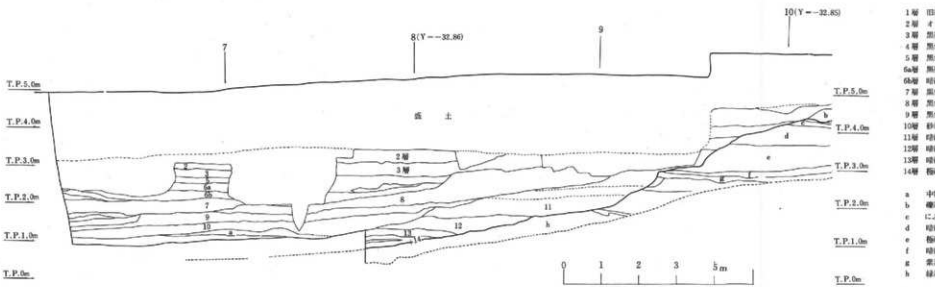
ＳＫ55、56、57は、Ｌ字形の溝状を呈し、それぞれつながっている。ＳＫ55は、内部より大型の甕が出土しており、小児用の甕棺墓の可能性が高い。

ＳＤ53

調査地の西端でＳＤ53の一部が検出された。ＳＤ53は、昭和55年度の第12次調査で検出したＳＤに対応する溝と思われる。溝は、第７層（黒色粘土）を切ってつくられており、最後に埋




第116図　鬼虎川遺跡第18次調査中世遺構配置図




1層　旧耕土
2層　オリーブ黒色(7.5Y³/2)シルト層
3層　黒褐色(2.5Y3/1)粘質シルト遺物層
4層　黒色(7.5YR¹/2)粘質シルト
5層　黒色(7.5YR¹/2)粘質シルト、(遺物、炭片を多く含む)
6a層　黒褐色(10YR3/1)シルト(遺物、炭少々混じる)
6b層　暗緑灰色(10G3/1)シルト～細粒砂の互層
7層　黒色(10YR¹/2)粘土
8層　黒色(5YR¹/2)砂質シルト
9層　黒色(7.5YR¹/2)砂質シルト
10層　砂層
11層　暗緑灰色(5G3/1)砂質シルト
12層　暗緑灰色(7.5GY³/1)シルト
13層　暗緑灰色(7.5GY³/1)細粒砂
14層　極細砂～細砂層

a　中粒砂
b　礫層
c　にぶい黄橙色(10YR6/3)粘土層
d　暗緑灰色(10GY5/1)粘質シルト
e　極細粒砂～細礫
f　暗緑灰色(5G4/1)粘質シルト
g　黒黒色(5P5/1)粘土
h　緑灰色～暗緑灰色(10G³/1)粘質シルト

第117図　縄文時代海岸線断面図

没する段階では、第６ｂ層（シルト～細粒砂）が溝内から外へオーバーホローした状態で溝を含めた周辺に厚く砂層が堆積していた。

１層　シルト～中粒砂の互層。

２層　細砂～細礫の互層。

３層　シルト～中粒砂の互層、下部で細砂～細礫の互層、植物遺体のラミナーが認められる。

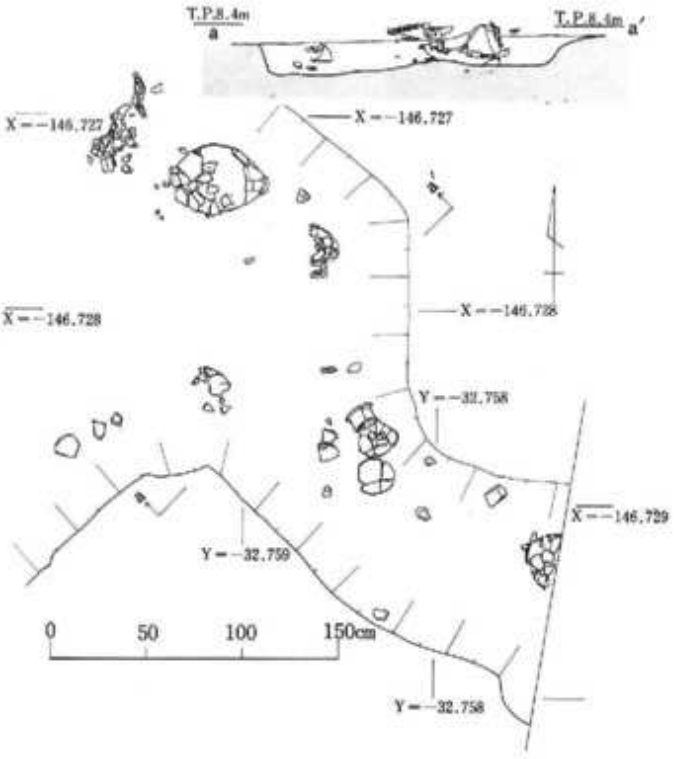
４層　砂混じり粘質シルト、細礫少々含む。

５層　シルト～細礫の互層。

６層　シルト～細礫の互層、炭片・木片少量含む。

７層　シルト～粗粒砂の互層。

８層　黒色（５ＹＲ1.7/1）砂混じり粘質シルト、細礫少量含む。




第118図　ＳＫ53実測図

となり、内部はシルト～細礫の堆積層であり、埋没は砂の流れ込みによって一気に埋まったことがわかる。内部からは遺物は全く出土しなかった。

（４）縄文時代の海岸線

10ｅ、10ｆ区で地山が急激に傾斜する地点を確認した。８ライン付近の地山の高さは、T.P.0.9mを測り、10ライン上での地山の高さはT.P.4.3mを測るので10mの間で3.4m以上下がっていることになる。10ｅ区付近は、現在も周辺の地形では大きく段差がついており、旧地形を反映したものと考えられる。当初、この傾斜が単なる自然地形と考えていた。８ライン付近の地山直上層から、縄文時代前期～中期の土器片及び軽石などが少量出土したことから、この傾斜は、縄文時代前期の縄文海進時の海岸線にあたり、当時海蝕崖を形成していたことがわかった。軽石等は、他所から流れついたものである。

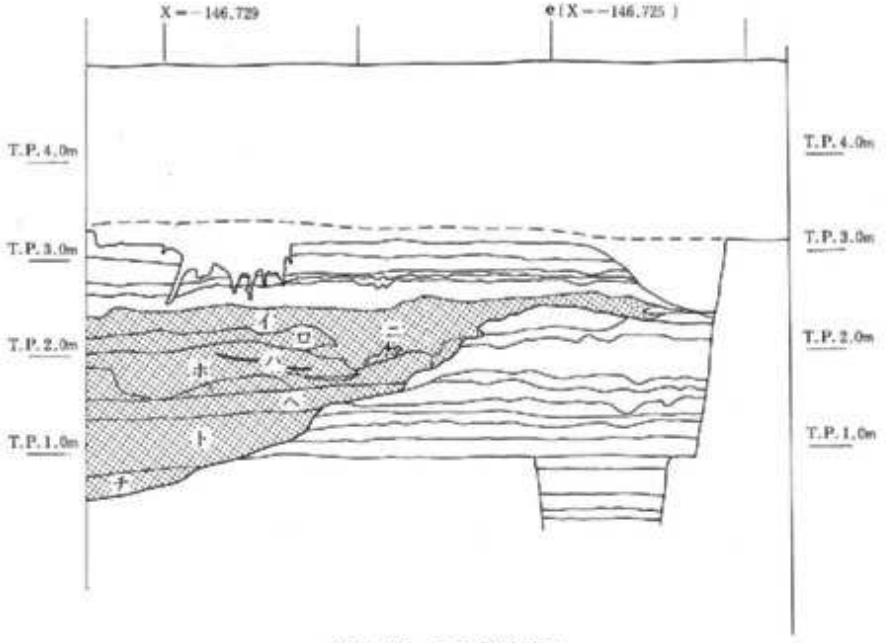
８ライン付近の層位を以下に記す。

盛土　1.6～1.8mの厚さ、コンクリートのガラ、残土。

１層　旧耕土。

２層　オリーブ黒色（7.5Y3.5/2）シルト層。細礫を含む。平安時代～中世の土器が少量出土。

３層　黒褐色（2.5Y3/1）粘質シルト、細礫少々含む。奈良時代の須恵器、土師器が少量出




第119図　ＳＤ53断面図

土。

4層　黒色（7.5Y R2/1）粘質シルト、調査地の西側のみで検出された。

5層　黒色（7.5Y R1.7/1）粘質シルト、細礫、炭片を多く含む。黒褐色粘質シルトのブロックを少量混じる。

6層　暗緑灰色シルト～細粒砂の互層。炭片少量混じる。弥生時代後期の叩き目がつく甕の細片が出土している。

7層　黒色（10Y R1.7/1）粘土。縄文時代晩期突帯文土器が出土している。

8層　黒色（5 Y R1.7/1）砂混じりシルト、細～粗粒砂多量に混じる。

9層　黒色（7.5Y R1.7/1）砂混じりシルト。

10層　砂層（中粒砂）細礫少量含む。

11層　暗緑灰色砂混じりシルト、細礫少量混じる。最下層に礫が部分的に多くなる。

12層　暗緑灰色（7.5G Y3.5/1）シルト、細礫混じり、軽石を含む。

13層　暗緑灰色（7.5G Y3.5/1）細粒砂。

14層　極細砂～細砂層。

下層になるに従って、シルトから礫に変化し、海底、地山直上では少～中礫層が認められる。

（5）出土遺物

今回の調査で出土した遺物は縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、陶磁器、瓦、土製品、石器、鉄器、銭貨、動物遺体、炭化物など縄文時代から中世に至るものが出土した。遺物は弥生時代と中世の遺構に伴うものと、包含層から出土したものである。縄文時代の遺物は包含層から出土している。次に主な遺構及び包含層から出土した遺物について記述する。

## 第16表　鬼虎川遺跡第18次調査遺構一覧表

SE

| SE番号 | | 規模 長辺×短辺×深さ（cm） | 出土遺物 |
|---|---|---|---|
| XIXF　5 g | 1 | 123×144×75 | 須、師、瓦、⑤、焼土、鍾 |
| XIXF　8 g | 3 | 103×99 ×46 | 須、師、瓦、⑤、鍾骨、木 |

SK

| SK番号 | | 規模 長辺×短辺×深さ（cm） | 出土遺物 |
|---|---|---|---|
| XIXF　8 g | 1 | 79 ×81 ×24 | 須、師、⑤ |
| XIXF　8 g | 2 | 162×148×33 | 師、瓦 |
| XIXF8～9 f | 3 | 99 ×111×12 | 師、瓦 |
| XIXF8～9 f | 4 | 84 ×137× 8 | 師、瓦 |
| XIXF　7 g | 5 | 270×202×38 | 弥、師、瓦、人骨、木、石 |
| XIXF　8 f | 6 | 270×485×？ | 師、瓦、石、鉄、銅鍾、焼土 |
| XIXF　8 e | 9 | 287×183×12 | 師、瓦 |
| XIXF7～8 e | 13 | 150×128×16 | 師、瓦、⑤、陶磁、鉄、石 |
| XIXF6～7 e | 14 | 328×199×22 | 須、師、瓦、焼土 |
| XIXF　7 e | 15 | 60 ×36 × 1 | 師、石 |
| XIXF　6 f | 17 | 50 ×46 ×39 | —— |
| XIXF　3 g | 21 | 165×178×13 | 弥、須、師 |
| XIXF　3 g | 22 | 247×155× 8 | 須、師 |
| XIXF　4 g | 23 | 53 ×54 × 5 | 師 |
| XIXF　2 g | 24 | 122×104×13 | 須、師 |
| 〃 | 25 | 41 ×53 ×25 | 師、瓦 |
| XIXF　3 f | 26 | 49 ×54 ×20 | 須、師 |
| XIXF　4 e | 27 | 95 ×53 ×10 | 師、瓦 |
| XIXF　3 e | 28 | 136×53 × 9 | 師、瓦 |
| XIXF　2 e | 29 | 71 ×28 × 9 | 須、師 |
| 〃 | 30 | 263×218× 2 | 須、師 |
| 〃 | 31 | 130×296× 7 | 須、師 |
| XIXF1～2 f | 32 | 162×254×16 | 須、師、焼土、鍾 |
| XIXF　5 e | 33 | 173×257×50 | 須、師、瓦 |
| XIXF　7 e | 37 | 47 ×91 ×10 | 須、師 |
| XIXF　1 f | 35 | 555×865×？ | 弥、須、師、瓦、⑤陶磁、鉏、石、鉄、焼土、種子、鍾 |
| XIXF7 f～g<br>XIXF8 f～g | 38 | 265×380×？ | 弥、須、師、瓦、磁 |
| XIXF　6 f | 40 | 57 ×46 ×23 | 師 |

SD

| SD番号 | | 規模 巾×深さ | 出土遺物 |
|---|---|---|---|
| XIXF8 f～g | 1 | 25× 6 | 師 |
| XIXF　8 e | 3 | 32× 2 | 須、師、瓦 |
| 〃 | 4 | 76× 6 | 師、瓦 |
| XIXF　9 f | 5 | 26×11 | 師、瓦 |
| XIXF　9 g | 6 | 71× 8 | 師 |
| XIXF　8 e | 7 | 21× 3 | 師 |
| XIXF7～8 g | 8 | 44× 2 | —— |
| XIXF　7 g | 9 | 41× 4 | —— |
| XIXF7 f～g | 10 | 33× 7 | 須、師、瓦、鍾、焼土、石 |
| XIXF8 e～g | 14 | 37× 3 | 須、師、瓦、⑤、鉄鏃骨、陶、磁、鍾 |
| XIXF4～5 g | 16 | 39× 7 | 弥、須、師、瓦 |
| XIXF　5 g | 17 | 40× 8 | 師 |
| XIXF　4 f | 18 | 57×14 | 師 |
| XIXF　6 f | 20 | 25×12 | 師 |
| XIXF　4 g | 21 | 34× 3 | 師 |
| 〃 | 22 | 43× 3 | 師、瓦、磁 |
| XIXF　3 g | 23 | 44×17 | 須、師 |
| XIXF3～4 f | 24 | 33×16 | 須、師 |
| XIXF2～3 f | 25 | 51×15 | 須、師、瓦、陶磁 |
| XIXF　2 f | 26 | 31×10 | 須 |
| XIXF　2 e | 27 | 22× 1 | 須、師 |
| XIXF2～3 e | 28 | 46×10 | 須、師 |
| XIXF　5 g | 29 | 24× 1 | 須、師 |
| XIXF　8 e | 34 | 35× 6 | 須、師、瓦、石、鍾 |
| XIXF　6 g | 37 | 56×10 | —— |
| XIXF6 g～f | 38 | 44× 8 | 師、瓦 |
| XIXF　6 g | 39 | 41×10 | 師、瓦 |
| XIXF6 e～f | 40 | 150×？ | 師、瓦、⑤、陶磁、骨（？） |

SP

| SP番号 | | 規模 長径×短径×深さ | 出土遺物 |
|---|---|---|---|
| XIXF　9 g | 1 | 32×36×13 | —— |
| XIXF　9 g | 2 | 43×39× 8 | 弥、師 |
| XIXF　8 g | 3 | 32×24× 3 | —— |
| XIXF　9 f | 4 | 23×29×12 | 師、瓦 |
| 〃 | 5 | 35×44×27 | 師、瓦 |
| 〃 | 6 | 30×33×18 | 師、瓦 |
| XIXF　8 f | 7 | 22×22×10 | 師、瓦 |
| XIXF　9 f | 8 | 26×22×10 | 瓦 |
| 〃 | 9 | 41×52×32 | 師、瓦 |
| XIXF　9 e | 10 | 42×33×19 | 師、瓦、陶、鍾 |
| 〃 | 11 | 29×23× 5 | 師、鉄 |
| 〃 | 12 | 22×23× 9 | 師 |
| 〃 | 13 | 52×47×12 | 弥 |
| XIXF　8 g | 17 | 24×23×19 | 師 |
| 〃 | 18 | 42×30×12 | —— |
| 〃 | 19 | 23×27×17 | 師 |
| XIXF7～8 g | 20 | 20×24×17 | —— |

| | | | |
|---|---|---|---|
| XIXF 7 g | 21 | 33×35×22 | 師、瓦、石 |
| 〃 | 22 | 21×19×17 | 師 |
| 〃 | 23 | 22×21×9 | — |
| 〃 | 24 | 12×13×7 | — |
| 〃 | 25 | 19×21×11 | 師 |
| XIXF 7 f | 26 | 35×42 | 師 |
| XIXF 7 f | 33 | 18×21×4 | — |
| 〃 | 34 | 22×22×7 | — |
| 〃 | 35 | 38×28×13 | 師、瓦、焼土、石 |
| XIXF 7 f | 42 | 40×45 | 師、瓦 |
| XIXF 8 e | 47 | 28×33×16 | 師 |
| 〃 | 48 | 25×30×7 | — |
| 〃 | 49 | 25×22×18 | 師、瓦 |
| XIXF 8 e | 50 | 79×61×36 | 師、瓦 |
| 〃 | 51 | 50×60×11 | 師 |
| 〃 | 53 | 36×44×20 | 師、瓦 |
| 〃 | 54 | 25×26×8 | 師、瓦 |
| 〃 | 55 | 31×25×13 | 須、師 |
| 〃 | 56 | 23×24×9 | 師 |
| XIXF 7 e | 57 | 15×18×1 | — |
| 〃 | 58 | 21×24×10 | — |
| 〃 | 60 | 21×20×11 | 師、瓦 |
| 〃 | 61 | 22×25×5 | — |
| 〃 | 62 | 37×30×19 | 須、師、瓦 |
| 〃 | 63 | 24×28×9 | 師、瓦 |
| XIXF 7 e | 64 | 40×40 | 師、瓦 |
| XIXF 8 e | 67 | 26×29×12 | 師、瓦 |
| 〃 | 68 | 34×38×119 | 師、瓦 |
| XIXF 7 e | 69 | 27×27×24 | 師 |
| XIXF 5 g | 70 | 44×38×30 | 師 |
| XIXF 5 h | 72 | 14×19×11 | — |
| XIXF 5 g | 73 | 31×24×3 | 師 |
| XIXF 4 g | 74 | 26×21×8 | 師、瓦 |
| 〃 | 75 | 26×24×5 | — |
| XIXF 4 e | 76 | 15×15×11 | |
| XIXF 4 g | 78 | 16×15×8 | — |
| XIXF 7 f | 79 | 21×22×13 | — |
| XIXF 3 f | 80 | 33×32×16 | — |
| 〃 | 81 | 24×24×12 | 師 |
| 〃 | 82 | 31×36×15 | — |
| 〃 | 83 | 13×14×8 | — |
| XIXF 2 f | 85 | 14×15×11 | — |
| 〃 | 86 | 35×38×15 | — |
| 〃 | 87 | 16×10×13 | — |
| XIXF 2 e | 88 | 24×23×8 | 須、師、瓦 |
| 〃 | 89 | 19×18×8 | — |
| 〃 | 91 | 21×22×3 | — |
| 〃 | 92 | 29×31×16 | 師 |
| 〃 | 93 | 32×31×8 | — |
| XIXF 1 e | 94 | 51×92×1 | — |
| XIXF 3 g | 95 | 36×33×13 | 師、瓦 |
| XIXF 4 g | 96 | 21×23×6 | 師 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| XIXF 3 g | 97 | 20×22×10 | — |
| 〃 | 98 | 11×13×8 | — |
| XIXF 3 h | 99 | 25×13×9 | — |
| XIXF 2 g | 100 | 14×10×16 | — |
| 〃 | 101 | 22×20×21 | — |
| 〃 | 102 | 35×30×20 | 師 |
| 〃 | 103 | 13×18×16 | — |
| 〃 | 104 | 20×20×21 | — |
| 〃 | 105 | 19×16×22 | — |
| 〃 | 106 | 11×12×15 | — |
| 〃 | 107 | 31×30×24 | 師、瓦 |
| XIXF 2 f | 108 | 17×16×7 | — |
| XIXF 8 g | 109 | 17×18×13 | — |
| XIXF 7 g | 114 | 32×32×12 | — |
| 〃 | 115 | 45×43×30 | 師、瓦 |
| 〃 | 116 | 20×20×17 | — |
| 〃 | 117 | 30×28×119 | 須、師 |
| 〃 | 119 | 31×32×6 | — |
| 〃 | 120 | 23×18×18 | — |
| 〃 | 121 | 15×15×19 | — |
| 〃 | 122 | 21×20×6 | 須、師 |
| 〃 | 123 | 26×23×15 | 師 |
| XIXF 7 g | 124 | 34×27×85 | — |
| 〃 | 125 | 38×23×16 | — |
| 〃 | 126 | 27×25×118 | 師、瓦 |
| XIXF 6 g | 127 | 46×37×28 | 師 |
| 〃 | 128 | 12×12×7 | — |
| XIXF 6 h | 129 | 56×33×10 | — |
| XIXF 6 g | 130 | 21×33×21 | — |
| 〃 | 131 | 29×27×12 | ㊗ |
| 〃 | 132 | 27×32×14 | — |
| 〃 | 133 | 27×24×8 | 師、瓦 |
| 〃 | 134 | 23×15×15 | 弥、師 |
| 〃 | 135 | 38×22×12 | 師 |
| 〃 | 136 | 26×25×11 | 須、師 |
| 〃 | 137 | 49×28×10 | — |
| 〃 | 138 | 23×23×5 | — |
| XIXF 6 g | 139 | 20×19×5 | 師、瓦 |
| 〃 | 140 | 16×29×2 | — |
| 〃 | 141 | 15×18×3 | — |
| 〃 | 142 | 29×33×15 | 師、瓦 |
| 〃 | 143 | 25×24×12 | 師 |
| XIXF 6 f | 144 | 19×19×16 | 師、瓦 |
| XIXF 6 g | 147 | 23×39×6 | 須 |
| 〃 | 148 | 22×26×8 | — |
| XIXF 6 f | 152 | 24×25×8 | — |
| 〃 | 153 | 26×22×22 | 師、瓦、焼土 |
| 〃 | 154 | 30×25×17 | — |
| XIXF 6 e | 175 | 19×12×7 | 師、瓦、焼土 |

中世の遺構内出土遺物

中世の遺構は井戸（ＳＥ１～３）、土坑（ＳＫ１～59）、溝（ＳＤ１～62）、柱穴（ＳＰ１～258）を検出している。これらの遺構の規模、出土遺物などは別表の16表に掲げ、そのなかで主な遺構の出土遺物について記述をすすめる。なお、遺構は13世紀後半～14世紀頃（Ｉ期）と15世紀～16世紀頃（II期）の２時期に分けられるが、出土遺物に関しては、Ｉ期に相当する『神並遺跡１』1986年[注1]、II期以降に相当する毛利光用子氏の『布留遺跡　布留（西小路）地区出土の中世土器』[注2]、２時期を通じて菅原正明氏の「畿内における土釜の製作と流通」「畿内における中世土器の生産と流通」[注3]などを参考に整理を試みた。また土師器の小皿に関しては、『神並遺跡１』で試みた分類に入らないより新しい時期の資料もみられるため、次のように分類した。

$Ⅲ_1$ 平底及び丸底から口縁部が屈曲して短かく立ち上がるもの（「神並遺跡１」の$b_1$～$b_4$）。口径は7.4～8.8㎝、器高は0.8～1.3㎝。色調は灰褐色、浅黄橙色、浅橙褐色を呈す。

$Ⅲ_2$ $Ⅲ_1$に比べると底径は小さくなり、なだらかに湾曲して口縁部が外上方にひらく（『同書１』のＣにあたる。口径は7.6～7.8㎝、器高は1.3～1.5㎝。色調は淡灰橙色を呈す。

$Ⅲ_3$ 底部の中央が盛り上がる上げ底から口縁部が外上方にひらく（「ヘソ皿」）。口径は7.8～8.2㎝、器高は1.4～1.8㎝。色調は黄橙色を呈す。

$Ⅲ_4$ 底部から口縁部が屈曲してやや高く立ち上がる。口径は7.8～8.4㎝、器高は1.7～2.1㎝。色調は淡黄橙色を呈す。

$Ⅲ_5$ 底部は丸底風になり、なだらかに湾曲して口縁部がやや高く立ち上がる。口径は7.4～8.0㎝、器高は1.5～2.1㎝。色調は白黄橙色を呈す。

$Ⅲ_6$ 平底から屈曲して立ち上がった後に外湾しながら大きくひらく。口径は7.3～7.7㎝器高は２㎝前後。色調は浅黄橙色を呈す。

$Ⅲ_7$ 平底から口縁部が斜め上方に広くひらき口縁端部は更に外方にのびる。口径は８～8.3㎝、器高は1.6～1.8㎝。色調は灰白色を呈す。

なお、中皿は10㎝～13㎝未満、大皿は13㎝以上に分類する。$Ⅲ_1$は13世紀、$Ⅲ_2$は14世紀、$Ⅲ_3$～$Ⅲ_4$は14世紀以降に多く、$Ⅲ_7$は更に新しい時期のものと考えている。

各井戸内出土遺物

〈１〉ＳＥ１（XIXF５ｇ区）

出土量は少ない。第１層から瓦器（椀・羽釜・摺鉢・甕）、土師器皿、丸瓦などが出土。第２層からは焼き締め陶器の底部、土師器皿などが出土。いずれも少片のため図化できない。

〈２〉ＳＥ２（XIXF19～20ｇ区）（図版九七）

出土量は極少量である。土師器皿摺鉢の小片と軒平瓦が出土。軒平瓦（366）は中心飾りに花状のものを設け、左右に唐草文を配する。

〈３〉ＳＥ３（XIXF８ｇ区―１・２層）（第122図　図版九七・一一二）

出土量は少量である。第２層から土師器小皿、瓦器（椀・羽釜・火舎）、須恵器（摺鉢）、土錘などが出土。

土師器　小皿（２～７）は神並遺跡のｂタイプにあたるもので平底から口縁部が屈曲して立ち上がる。口径は８～９㎝弱を測る。色調は灰黄色を呈す。

瓦器椀は大和型(8)、和泉型（９～11）のものがみられる。いずれも14世紀前後のものである。

羽釜(12)は内傾する口縁部に続けて鍔をめぐらす菅原氏編年・分類の「河内$D_1$型」、また(13)は「和泉$D_2$型」に相当する。前者は13世紀後半、後者は14世紀後半に相当する。火舎(14)は口縁部下に凸帯を２条めぐらす。

須恵器　鉢(15)は口縁部が下方に肥厚するもので14世紀中頃のものである。

各溝内出土遺物

〈４〉ＳＤ14（XIXF８ｅ～ｇ区）（第122図　図版一〇四）

出土量は少ない。土師器（皿・羽釜）、瓦器（羽釜・摺鉢）、磁器（青磁）、銭貨、動物遺体などが出土。

土師器　小皿$_4$(16・17)がある。口径は７㎝、7.6㎝。色調は浅黄橙色を呈す。羽釜(18)はＳＫ５の出土例と同じで菅原氏の分類・編年の「大和$H_2$型」で14世紀頃のもの。同じく羽釜(19)は「大和$B_2$型」で14世紀頃のもの。鍔がほとんど退化している。(18)の色調は浅黄橙色を呈す。(15)は白黄色を呈す。

瓦器　羽釜(20)は「和泉$D_2$型」で15世紀に所属する。摺鉢(17)は16世紀のもの。

磁器　青磁碗(22)は森田・横田氏の分類・編年[註4]の龍泉窯系「Ｉ類―Ｉ」の13世紀代のもの。

その他銭貨「元豊通宝」（1078年鋳造）（289）、動物遺体でウマの左上顎臼歯（290）が出土。

〈５〉ＳＤ40（XIXF６ｅ区）（第122図、図版一〇三）

出土量は少ない。主に土師器皿が出土。他に陶磁器がみられる。

土師器小皿$_3$（24）は丸底風に作るやや深手のもの。口径は7.3㎝、器高は2.1㎝。色調は、白黄橙色を呈す中皿$_1$（25・26）は平底から体部が斜めにひらき、更に口縁部が外方へ向くもの。口径は10.4㎝、器高は1.8㎝。中皿（25）の内面は煤が付着する。大皿（27～29）は中皿と同じ形態で、口径は13.4～13.7㎝。器高は2.2㎝。色調は乳白色を呈す。陶器（30）は美濃焼の天目茶碗で口径は12.2㎝、器高が6.3㎝を測る。土師器皿と共に16世紀後半頃のもの。

溝内からは他にＳＤ36で完形の磁器皿（367）（図版一〇二）が出土。平面が６角形をなし緑色を呈す。近世のものと思われる。ＳＤ59からは須恵器の高杯（174）（第127図）が出土。

各柱穴内出土遺物

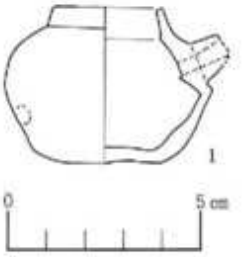
〈６〉pit（第122図）

各pitから出土した遺物は極少量であるため図化できた遺物のみを記述する。

土師器　土師器皿$_1$はＳＰ11の（31）、ＳＰ42の（32）、ＳＰ175の（35）、ＳＰ193の(37）などがある。平底で器高の低いもの。『神並遺跡Ｉ』で分類したｂタイプに相当する。口径は7.5～9.2㎝。器高はは0.9～1.3㎝。色調は概ね淡橙褐色を呈する。ＳＰ64の小皿$_2$（33）は口径が7.9㎝、器高は1.3㎝、色調は淡橙色を呈す。ＳＰ175の小皿$_1$（34）は器壁がやや厚い。口径は8.1㎝、器高は1.8㎝。色調は橙褐色を呈す。ＳＰ175の中皿（36）、ＳＰ193の（38）は底部

を欠失するが体部がやや外湾してひらく皿$_4$になると考えられる。

瓦器　ＳＰ９の瓦器椀（39）は内面に切れ切れのミガキ調整をする。和泉型である。口径10.7㎝、器高2.8㎝。高台をもたない。尾上氏の分類・編年によると「Ⅳ―４期」に相当する。ＳＰ26の瓦器椀（40）は内面にやや粗いヘラミガキ調整を行う和泉型。10.8㎝と大きい割に器高は低くなりそうである。ＳＰ62の椀（41）は内面に幅の太いヘラミガキ調整をする。口径は12.8㎝。外面に指押え痕がみられる。尾上氏の分類・編年によれば「Ⅳ―２期」に相当する。



第120図　ＳＫ５内出土土器実測図

各土坑内出土遺物

〈７〉ＳＫ５（XIXF７ｇ区）（第122～124図、図版九八～一〇〇）

出土量は多くコンテナに６箱分ある。土師器（小・中皿・杯・羽釜）、瓦器（椀・羽釜・甕・鉢・水滴・火舎）、須恵器（甕・鉢）、常滑甕、瓦、砥石、木器、人骨、獣骨などが出土。

土師器　皿は小皿（42～52）と中皿$_6$（53～56）があり、完形のまま出土したものもみられる。小皿は次の様に分類できる。小皿$_1$（48）、小皿$_2$（42～47）、小皿$_4$（49・50）、小皿$_5$（51）、小皿$_6$（52）である。椀（57・58）は皿$_6$を更に器高を高くしたもので口径が10.1㎝、10.3㎝、器高は３㎝、2.6㎝である。羽釜（59・60・61）は口縁部を「く」の字形に外反させ、端部を内側に折り曲げる。器壁は薄い。（59）は体部に断面三角形の鍔を巡らせる。（60・62）は鍔をもたない。いずれも淡黄色を呈す。（59）は同氏の分類・編年によると「大和Ｂ$_2$型」の14世紀に相当する。（60・62）は毛利光氏の分類・編年によると14世紀後半～15世紀前半に位置つづけられている。羽釜（61）は口縁部を内側上方に折り返すもの。菅原氏の分類・編年によると「大和Ｈ$_2$型」の15世紀頃のものである。

瓦器　羽釜（63）は内傾する体部からそのまま口縁部につづく。口縁上端部に面をもち、口縁部に近い位置に鍔を巡らす。体部外面胴部に三足を貼り付けるもの。内面は全面をハケ目調整。外面には煤が付着する。甕（74・75）は大きく張り出す体部から口縁部を逆「Ｕ」字形に折り曲げ体部に平行叩きを残す。甕（64）は頸部が長い。菅原・毛利光氏の編年から（64）は14世紀代、（74・75）は15世紀代のものといえる。水滴（１）は注ぎ口を少し欠失するが、完形で出土。平底から球形に近い体部に短い注ぎ口を貼り付けたもの。口径2.8㎝、器高４㎝を測る。色調は灰白色を呈す。擂鉢（69）は口縁部外側を断面三角形に突出させる。体部外面はヘラ削りのままにする、片口をもつ。内面には擂り目をつけている。色調は灰色を呈す。鉢（68）は外面はナデ調整、黒色を呈す。同編年によると15世紀頃のもの。火舎（76）は円形火鉢で内湾しながら立ち上がる体部から口縁部はそのまま終わり、上端部を水平にする。（76）は口縁部に菊花文を押印する。色調は灰黄色を呈す。

須恵器　甕（73）は短く直立する頸部から口縁部を短かく折り曲げる。体部外面には綾杉文叩きを施す。13世紀頃のものか。甕（77）は球形の体部から短い頸部を有し、口縁部が逆「Ｕ」字形に外反する。体部外面は平行叩きを一面に残す。内面はハケ目調整。口径は38.8㎝を測る。

色調は白黄色を呈す。14世紀頃のものか。鉢（70・71）は口縁部が上方に拡張する。鉢（72）は他の2例に比べると厚い。口唇部は黒灰色を呈する。いずれも14世紀代のものである。

陶器常滑甕（78）は口径51.2cmを測る大型品である。体部からなだらかに頸部につづき、口縁部は外反後、上端部をつまみ上げる。13世紀半ば以降のものである。

磁器　青磁碗の小片（320）が出土。太宰府の横田・森田氏の分類・編年によると13世紀末頃の龍泉窯碗「Ⅰ—5—b」類の鎬蓮弁の文様を有するものである。

瓦　平瓦がコンテナに1箱分位出土。大部分は（79・80）のように表面に縄席文、裏面に布目痕を残す。平瓦（67・68）は菊花文を押印する。15世紀半位のものか。

石器　砥石（253・254）が2点と磨石風のものが1点出土。砥石はいずれも流紋岩質凝灰岩製で、磨石は砂岩製。

動物遺体　人骨の左脛骨（295）とウマの指基節骨（297）が出土。

木器　遺存状態が悪く図化できないが、漆器の底部、曲物の底板、板材などが出土している。

＜8＞ＳＫ6（XIXF8Ｆ区）（第125図、図版一〇四）

出土量は多い方であるが、特に焼土はコンテナに1箱分ある。遺物は土師器（皿）、瓦器（椀・羽釜・鉢）、須恵器（鉢）、磁器（青磁）、銭貨、土錘などである。

土師器　皿は小皿$_1$（81・82・86）、中皿$_1$（89～91）、小皿$_2$（83・84）、小皿$_3$（85）、中皿$_2$（87・88）がある。

瓦器　大和型の椀小片、摺鉢がある。摺鉢（93）はＳＥ5内の（69）に似、15世紀頃のもの。

磁器　青磁碗の底部片（321）が出土。横田・森田氏の分類・編年によると13世紀頃の龍泉窯系の「Ⅰ－5－a」類の碗である。

＜9＞ＳＫ14（XIXF6～7ｅ区）（第125図、図版九七・一〇四）

出土量は少ない。土師器（皿）、瓦器（椀・羽釜）、磁器、焼土などが出土。

土師器　皿は小皿$_1$（95・102～104）、小皿$_2$（100）と底部中央部を欠く小皿（96～98）がある。（96～98）は小皿$_3$になる。小皿$_1$は13世紀代のもの。小皿$_2$・小皿$_3$は14世紀以降のもの。中皿$_2$（101）は底部から体部がなだらかに移行し、口縁部が外湾気味に大きくひらく。口径の割には器高が低くく中皿$_1$に近い。口径が12.5cm、器高が1.4cmを測る。乳白色を呈す。

瓦器　大和型と和泉型の椀がある。椀（106）は「神並遺跡」のＡ$_4$、椀（105）は椀Ｂ$_4$に比定できる。14世紀頃のもの。

磁器　青磁碗の口縁部片（318）が出土。横田・森田氏の分類・編年によると13世紀末頃の龍泉窯系の「Ⅰ—5—b」類に相当する。白磁碗の口縁部片（328）は同分類・編年によると11世紀末～12世紀初頃のⅨである。

〈10〉ＳＫ18（XIXF6ｅ～8ｇ区）（第125図、図版一〇〇）

土師器（皿）、瓦器（椀・羽釜・摺鉢・火舎）、陶器（備前焼・常滑焼）など出土量は多い。

土師器　小皿と中皿がある。小皿$_7$（107～110）と中皿$_7$（111）、大皿$_7$（112～114）がみられる。椀（115）は口径が11.3cm。器高が4.5cm。色調は褐色を呈す。体部に小孔を穿つ。孔径は

2㎜である。中皿7（111）は口径が12㎝、器高は2㎝。大皿$_{7}$（112～114）は口径が14～15㎝、器高は1.6～1.8㎝。器高は1.6～2㎝。色調は乳白色を呈する。皿$_{7}$が多いが、これらは菅原氏も指摘されているように胎土はきめ細かく、丁寧な作りである。

瓦器　大和型の椀の底部（116）は神並遺跡のA$_{1}$、和泉型の椀（118）はB$_{1}$、（117）はB$_{2}$にそれぞれ相当する。14世紀代のもの。他には菅原氏編年の「河内J型」の羽釜がある。
摺鉢（120）は口縁端部を斜上方に突出させ、端部を丸く納める菅原氏編年の16世紀のもの。
火舎（122）は円形火鉢で内湾しながら立ち上がる体部をもち、口縁上端部に面をもつ。口縁部下に2条の突出を有し、その間に押印する。毛利光氏の編年によると15世紀後半のものだろう。底部（123）は底面が平らで体部は外傾して立ち上がる。同編年で16世紀前後のもの。

陶器　常滑焼の甕は口縁部の小片を残すが赤羽氏編年[113]の14世紀後半以降のもの。備前焼の摺鉢（121）は口径が30.2㎝、器高10.5㎝。

〈11〉SK35（XIXF1e・f・g区）（第126・127図、図版一〇一・一〇二）

出土量は多い。土師器（皿・羽釜）、瓦器（羽釜・摺鉢・火舎）、須恵器（甕）、磁器（白磁、青磁）、瓦、砥石、土錘、人骨、獣骨などが出土している。

土師器　皿は小皿$_{7}$（126・127）、小皿$_{8}$（130・131）、小皿$_{9}$（129・132～139）、小皿$_{10}$（140）、中皿$_{2}$（143）、中皿$_{4}$（144・145）がある。羽釜（148・149・151）は半球形に近い体部から内傾する口縁部をもつ。肩部にそれぞれ鍔をつけ口縁部は凹線文を巡らせ、体部外面はヘラ削り、内面はハケ目調整をする。口径は24.6～29.6㎝である。これらの羽釜は菅原氏の分類・編年によると、「河内D$_{2}$型」で14世紀後半～15世紀に所属する。またSK5でみた14世紀後半～15世紀の「大和H$_{2}$型」の羽釜（152）、鍔を有しない14世紀代の羽釜（146）などがある。羽釜（150）は半球形に近い体部から内弯する口縁部につづく。口縁端部は上方にわずかに突出させる。口縁部には沈線を有し、肩部に幅の狭い鍔を貼り付ける。内外面共ナデ調整。菅原氏の分類・編年によると「河内J型」で15世紀に所属する。

瓦器　羽釜（147）は内傾する口縁部で上端部に面をもつ。鍔は上方に反り気味のものがつく。同氏の分類・編年の「河内D$_{2}$型」で14世紀代に所属する。摺鉢は口縁部外側を断面三角形に突出させ、体部外面を削る同氏編年の15世紀頃の口縁部片（141・142）（図版一〇二）と、口縁を内傾させる（156・157）のような16世紀に所属するものがある。底部（158～161）は内面に擂目を施す。甕（155）は体部からすぐ口縁部を短かく外方に拡張し、体部外面に粗い平行叩き、内面はハケ目調整を残す。色調は白灰色で須恵質にもみえる。火舎（162・163）は口縁部下に凸帯が2条巡り、その間に同心円文の押印をつける。盤の底部（164～166）は平底で体部が外傾して立ち上がる。（164）は器壁がやや薄い。

磁器　白磁碗の底部（327）は横田・森田氏の分類・編年によると12世紀の「Ⅳ—Ⅰ」類に相当する他に底部（325）がある。青磁碗は同氏の13世紀の龍泉窯系Ⅰ—1類（313）、13世紀末のⅠ—5—a類（311）、14世紀のⅢ—2類（312・315）に相当する口縁部の小片である。

瓦　軒平瓦（167）は均正唐草文を飾る。

石器　砥石（260～264）が5点出土。砥石（260）は流文岩製、（261）は流文岩質凝灰岩（262）はホルンフエルス、（263）は砂岩、（264）は千枚岩製である。他にサヌカイト製の楔形石器（259）、砂岩製の石棒（265）が出土。

土坑からは以上の他に古墳時代の須恵器が出土している。ＳＫ６の壺体部（168）、ＳＫ14の高杯（169・170）、ＳＫ31の杯蓋（171）、ＳＫ37の壺（172）、ＳＫ38の脚部（173）などがある。

弥生時代の遺構出土遺物

弥生時代の遺構はＳＫ53、ＳＫ55～57の各土坑で、それぞれ弥生時代中期の土器が出土している。土器についての用語は本書の西ノ辻遺跡第７次調査と同様にする。

〈１〉ＳＫ53（XIXF９ｅ区）（第128図、図版一〇五・一〇六）

土器　XIXF９ｅ区から穿孔をうけた壺Ａ（177）と胴部以下を欠失する壺Ｂ（179）細頸壺（180）、水差（181）とほぼ完形の甕（175）が出土した。甕（175）は小児用の甕棺と考えられる。壺Ａ（177）は森井氏編年[註6]によると「Ｂ」タイプになると考えられる。壺Ａ（178）は口頸部を打ち欠いたもので体部はヘラミガキを施す。西ノ辻Ｎ式になるだろう。壺Ｂ（179）は口縁部外端面に波状文、内面に扇形文を施す。胴部は丸みをもちながら下位で張り出すものと思われる。細頸壺は口縁端部が内方に傾く。口頸部に簾状文を施す。水差（181）は口縁部に列点文、胴部に簾状文を施す。これら３個体は口縁～肩部までを残す。甕棺ａ（175）は内外面共器表面が著しく摩滅している。外面にヘラ磨きの痕跡がみえる。長胴の体部から丸味をもちながら口縁部が外反する。口縁部下の内面は横方向のヘラミガキか。第Ⅱ様式の時期のものと考えられる。生駒西麓の胎土。その他に他地方の胎土の第Ⅱ様式の甕ｂなどの破片がある。

〈２〉ＳＫ55（XIXF８ｇ区）（第129図、図版一〇六）

大型の甕（186）が口縁～底部まで全体の約1/2個体分、接合できた。口縁部は「く」の字形に外反する。体部は摩滅するが肩部にハケ目、底部にヘラミガキが残る。他地方の胎土。壺Ｃ（183）は厚い底部から球形に近い体部に直立する頸部に口縁部が短く外反する。器表面は剥離するがハケ目調整がみられる。他地方の胎土。

〈３〉ＳＫ57（XIXF８ｇ区）（第128図、図版一〇六）

甕ｂの頸部～体部片、底部などがある。甕は外面をハケ目調整するもの。底部は上げ底風のものでいずれも他地方の胎土である。

XIXF８ｆから甕棺（176）が出土している。長胴の体部から口縁部は「く」の字形に外反する。内外面が摩滅する。底部にはヘラ磨きが少しみられる。生駒西麓の胎土。

包含層内出土遺物（第130・131図、図版一〇七～一一〇）

包含層から出土した遺物の内土器、陶磁器は縄文時代から中世に至る。２層から土師器羽釜（187）、小皿（192・193）、土釜（189）、須恵器（190・191・194・195）、３層から土師器小皿（196・197）、丸底壺（198～200）、須恵器（201～212）、４層から弥生土器（213・214）、丸底壺（216）、須恵器壺（217）、丸底壺（223）、甕（224）、５層から土師質高杯（215）、須恵器（218～222）、６層から弥生土器（227）、土師平底壺（228）、８層から弥生土器（229、図版一

○九)、縄文土器（230)、10層から縄文土器（図版一一〇）などが出土している。

7・8・10層内から出土した縄文土器は少量ながら前期～晩期のものまでみられる。

10層内－前期の（349）は上段に左撚縄文、下段に右撚の羽状縄文を施す。前期中葉以降の北白川下層II式に属する。色調は濃茶褐色を呈し、角閃石を少量含む。中期の（350～352）は低い貼り付け突帯にC字瓜形文を施す鷹島式に近い船元I式、（353）は突帯に押し引くようにしてC字瓜形文を施す船元II式にそれぞれ属する。色調は淡～暗褐色を呈す。（353）は角閃石を小量含む。他に後期中葉の（354)、RL右撚りの縄文を施す（355・356)、L左撚りの縄文を施す（357・358)、その他不明の（359～362）がある。色調は（354）が青緑褐色、内面は黒色を呈す。角閃石を小量含む。（355）は淡～黒褐色、内面は黒色を呈す。（356）は淡茶褐色。（357・358）は濃褐色を呈す。

7・8層内－後期の（362）は注口土器片でR右撚りの縄文を施す。暗褐色を呈し角閃石を小量含む。（363）は後期中葉のもの。晩期の（364）は二枚貝条痕で調整する。滋賀里IIIaかbに属する晩期中葉のもの。（365）は口縁部に貼り付け突帯に刻み目文を施すもので長原式に属する。（231）は粗製鉢。（364・365）は暗茶褐色で角閃石を含む。（231）は淡褐色。

次に遺構、包含層内から出土した銭貨、土錘、石器、その他の遺物をまとめて記述する。

銭貨（図版一一二）

古銭（第121図）は4点出土している。SK12内の（285）は「元豊通宝」（元豊元年、1078年初鋳造）で外径は2.3㎝、内径は0.7㎝、重さ3.0g。SD14内の（289）は「元祐通宝」（元祐元年、1086年初鋳造）で外径は2.35㎝、内径は0.7㎝、重さ3.0g。SK13内の（287）は「天聖元宝」（天聖元年、1023初鋳造）で外径は2.4㎝、内径は0.7㎝、重さ4.1g。3層内の（288）は「景徳元宝」（景徳元年、1044年初鋳造）で外径は2.4㎝、内径は0.65㎝、重さ2.7g。

第121図　銭貨拓影図

土錘（第132図、図版一一一）

各中世遺構、包含層から土錘が合計19点出土している。重量別にみると3.5g以下の小型土錘、3.6～5gの中型土錘、7.2gの大型土錘がある。一番軽量の土錘は（234）で先端をわずかに欠くが1.4gを測る。形態的には中央部が筒状で両端がすぼまり、筒部の径は1㎝未満のもの…(a)、中央部に最大径をもち、両端に向って除々にすぼまり、最大径は1㎝以上を測るもの…(b)の2つに分類できる。概ね、小型土錘は(a)形態、中・大型土錘は(b)形態のものが多い。孔径は2～3.5㎜である。胎土は土師質で精良なものと、砂粒を含む生駒西麓の胎土を使ったものが半分ずつみられる。

石器（第133～135図、図版一一四・一一五）

石器は中世以降、包含層内から出土している。石器には磨製石器（石庖丁・石剣・扁平片刃石斧）、打製石器（石鏃・石剣・不定形石器）、砥石、双孔円板、紡錘車、その他の石製品がある。今回の石器の報告は西ノ辻遺跡７次調査に準じる（Ｐ119）。

中世遺構内

中世遺構に伴う石器は砥石が６点、縄文～弥生時代の混入物と考えられるものに磨製石器２点、石鏃１点、不定形石器５点と時期が不明の叩き石１点、その他の石製品２点がある。

砥石（253・254・260～263）（253・254）はＳＫ５内、（260～263）はＳＫ35内から出土。（253）は表面と左側面が研砥のため内湾し滑らかになる。（253・254・261）は流紋岩質凝灰岩製で、条痕が残らない。（260）は流紋岩製で表・側面に条痕を残す。（262）は熱変作成用をうけた頁岩～粘板岩－ホルンフェルスで茶褐～黒色を呈す。両面共研砥のためか下端にいくほど狭くなる。（263）は側面も部厚く全形はかなり大きかったことが窺える。砂岩製で条線がよく残る。

磨製石器（264・267）（264）は千枚岩製の石庖丁の一部分である。（267）は頁岩製で表面は研磨をうけているが、裏面は剝離している。石剣の一部分かもしれない。

打製石器（256・258・259・268・269）（268）は凹基有茎式の石鏃で先端部を欠失する。縄文時代に属する。（256・259・269）は楔形石器、（256）は上縁部に、（259）は周縁部に、（269）は上・下縁部に磨滅がみられる。（258）は凸刃削器、刃部に使用痕がある。

石核（257）周縁に敲打痕がみられる。叩き石として機能していたものと考えられる。

その他（255・265）（255）は平面が楕円形で、断面は片側が薄くなる円礫である。（265）は上端部が欠失し、下端部は丸みを帯びるもので棒状を呈す。いずれも砂岩製。

包含層内

出土量は少ない。縄文～古墳時代のものまでみられる。石器には扁平片刃石斧１点、打製石剣１点、石鏃７点、不定形石器３点、その他の石製品３点がある。

扁平片刃石斧（271）　８層内から出土。縄文時代後～晩期、弥生時代前期の土器が伴出する。頂部・刃部の損傷がひどい。刃先部はほとんど欠失する。

打製石剣（276）　３層内から出土。先端部を欠失するがほぼ完形である。身部から基部に移る箇所に抉りを入れる。基部は両縁部を丁寧に細部調整する。

石鏃（273－平基式、274・279・275－凹基式、283－凸基無茎式、272・280－凸基有茎式）１～４層内から出土。（272）は大型でほぼ完全なもの。（279）は大方が二上山産のなかで香川県産のものかもしれない。凹基式の（274・275）は縄文時代にさかのぼる形態である。

不定形石器（277・281・282）（277）は細部調整のある剝片。（281・282）は楔形石器で周縁部に磨滅痕が残る。（282）は特に著しい。

その他の石製品（270・278・284）（270）は10層内から出土。平面形は三角形を呈し、側面は丸みを帯びる。双孔円板（278）は３層内から出土。紡錘車は半分が欠失する。

第17表　中世遺構・包含層内出土土錘一覧表

| 番号 | 遺構・包含層 | 出土地区 | 縦(cm) | 幅(cm) | 孔径(cm) | 重量(g) | 残存状況 | 胎土※ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 234 | SE1 | XIXF5 g | 3.05 | 0.7 | 2.5 | 1.4 | 片端が欠損 | 精良 |
| 235 | SE3 | XIXF9 g | 4.1 | 1.1 | 2.7 | 5.0 | 両端が少し欠損 | 砂粒を含む（生） |
| 236 | SE3 | XIXF8 g | 2.5 | 0.8 | 2.0 | 1.4 | 片端が欠損 | 精良 |
| 237 | SK6 | XIXF8 f | 4.25 | 1.15 | 3.0 | 5.0 | 完形 | 砂粒を含む（生） |
| 238 | SK32 | XIXF2 f | 4.0 | 1.1 | 2.5 | 3.9 | 完形 | 砂粒を含む |
| 239 | SK35 | XIXF1 f、g | 2.2 | 1.05 | 2.5 | 2.0 | 片端が折損 | 精良 |
| 240 | SK38 | XIXF7 f | 2.4 | 0.8 | 2.0 | 1.4 | 片端が欠損 | 精良 |
| 241 | SD10 | XIXF7 f | 3.7 | 1.05 | 2.0 | 3.9 | 完形 | 砂粒を含む（生） |
| 242 | SD14 | XIXF8 e | 3.3 | 1.1 | 3.0 | 3.9 | 約1/2が欠損 | 砂粒を含む（生） |
| 243 | SD14 | XIXF8 g | 3.9 | 1.05 | 3.5 | 3.9 | 片端が欠損 | 砂粒を含む（生） |
| 244 | SD34 | XIXF8 e | 2.5 | 1.05 | 2.5 | 2.4 | 片端が欠損 | 砂粒を含む（生） |
| 245 | SD48 | XIXF7 f | 3.6 | 0.85 | 2.0 | 2.4 | 完形 | 砂粒を含む（生） |
| 246 | SP10 | XIXF9 e | 3.3 | 1.1 | 3.0 | 2.2 | 片端が欠損 | 精良 |
| 247 | SP196 | XIXF8 e | 3.9 | 1.05 | 2.6 | 4.2 | 完形 | 砂粒を含む（生） |
| 248 | 1層 | XIIIF16 f | 3.35 | 0.9 | 2.5 | 3.0 | 片端が欠損 | 精良 |
| 249 | 2層 | XIXF1 g | 3.35 | 0.95 | 2.5 | 1.9 | 完形 | 精良 |
| 250 | 2層 | XIXF7 f | 3.85 | 1.05 | 3.0 | 3.7 | 完形 | 砂粒を含む（生） |
| 251 | 2層 | XIXF9 g | 4.2 | 0.9 | 2.1 | 2.7 | 完形 | 精良 |
| 252 | 3層 | XIXF8、9 f | 4.5 | 1.3 | 2.9 | 7.2 | 完形 | 砂粒を含む（生） |

※胎土の欄の（生）は生則西鶴産の胎土を表わす

## 第18表　中世遺構・包含層出土石器一覧表

| 番号 | 遺構 | 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 出土地区 | 最大長<br>(cm) | 最大幅<br>(cm) | 最大厚<br>(cm) | 重量<br>(g) | 先端角度 | 石材 | 残存状況 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 253 | S K 5 | 第133図<br>115 | 砥石 | XIXF7 g | 7.3 | 5.3 | 2.3 | 112.0 | | 流紋岩質凝灰岩 | 三面が研磨面、一面内湾 |
| 254 | S K 5 | 第133図<br>115 | 砥石 | XIXF7 g | 4.9 | 4.3 | 2.9 | 100.2 | | 流紋岩質凝灰岩 | 三面が研磨面 |
| 255 | S K 5 | 第133図<br>115 | 磨石 | XIXF7 g | 7.7 | 5.8 | 2.6 | 151.6 | | 砂岩 | |
| 256 | S K13 | 第134図<br>114 | 楔形石器 | XIXF7～8 e | 4.1 | 2.3 | 0.95 | 10.0 | | サヌカイト | 周縁部に潰れ |
| 257 | S K18 | 第134図<br>114 | 叩石 | XIXF6 e～8 g | 8.7 | 3.5 | 2.1 | 84.7 | | サヌカイト | 側面に敲打痕 |
| 258 | S K18 | 第134図<br>114 | 削器 | XIXF7 g | 5.3 | 7.8 | 1.9 | 84.5 | | サヌカイト | 刃部に潰れ |
| 259 | S K35 | 第134図<br>114 | 楔形石器 | XIXF1 e～g | 2.4 | 4.3 | 1.7 | 18.9 | | サヌカイト | 周縁部に潰れ |
| 260 | S K35 | 第133図<br>115 | 砥石 | XIXF1 f | 6.0 | 3.3 | 2.6 | 86.8 | | 流紋岩 | 五面が研磨面 |
| 261 | S K35 | 第133図<br>115 | 砥石 | XIXF1 g | 7.4 | 3.5 | 0.6 | 16.3 | | 流紋岩質凝灰岩 | 側面に条線 |
| 262 | S K35 | 第133図<br>115 | 砥石 | XIXF1 g | 7.8 | 4.1 | 1.7 | 85.7 | | ホルンフェルス | 三面が研磨面 |
| 263 | S K35 | 第133図<br>115 | 砥石 | XIXF1 f | 7.4 | 5.55 | 4.3 | 291.3 | | 砂岩 | 三面が研磨面 |
| 264 | S K35 | 第133図<br>115 | 石鏃丁片 | XIXF1 f | 3.2 | 3.5 | 0.55 | 9.2 | | 千枚岩 | 刃部の一部 |
| 265 | S K35 | 第133図<br>115 | 石棒 | XIXF1 f g | 6.5 | 2.7 | 2.4 | 71.3 | | 砂岩 | 上部折損 |
| 266 | S K45 | 第134図<br>114 | 細部調整片 | XIXF9 e | 6.1 | 4.4 | 1.1 | 39.5 | | サヌカイト | |
| 267 | S D49 | 第133図<br>115 | 磨製石器 | XIXF1 g | 6.7 | 2.7 | 0.9 | 18.2 | | | 裏面剥離 |
| 268 | S D54 | 第134図<br>114 | 石鏃 | XIXF6～7 g | 2.3 | 1.5 | 0.4 | 1.4 | | サヌカイト | 先端部折損 |
| 269 | S D58 | 第134図<br>114 | 楔形石器 | XIXF6～7 f | 2.7 | 4.0 | 1.3 | 16.5 | | サヌカイト | 上下縁部に潰れ |
| 270 | 10層 | 第133図<br>115 | 石鏃丁形石器 | XⅧF7 e | 7.6 | 8.8 | 1.7 | 120.4 | | 珪質頁岩 | |
| 271 | 8層 | 第133図<br>115 | 扁平片刃石斧 | XⅧF8 f | 8.0 | 4.4 | 1.3 | 82.5 | | 玄武岩 | 頭部、刃部に損傷 |
| 272 | 4層 | 第134図<br>114 | 石鏃 | XⅧF8 e | 5.9 | 2.55 | 0.6 | 5.5 | 52°(突) | サヌカイト | 完形 |
| 273 | 3層 | 第134図<br>114 | 石鏃 | XIXF6 f～g | 3.1 | 1.5 | 0.3 | 1.9 | 53°(欠) | サヌカイト | 先端部欠失 |
| 274 | 3層 | 第134図<br>114 | 石鏃 | XⅧF9 e | 2.7 | 1.5 | 0.45 | 1.2 | 53°(突) | サヌカイト | 完形 |
| 275 | 3層 | 第134図<br>114 | 石鏃 | XIXF5 f | 2.1 | 1.5 | 0.4 | 0.8 | 45°(欠) | サヌカイト | 先端部磨滅 |
| 276 | 3層 | 第134図<br>114 | 石剣 | XIXF6 f～g | 9.3 | 3.5 | 1.3 | 43.5 | 52°(欠) | サヌカイト | 先端部欠失 |

| 番号 | 遺構 | 挿図番号<br>図版番号 | 器種 | 出土地区 | 最大長<br>(cm) | 最大幅<br>(cm) | 最大厚<br>(cm) | 重量<br>(g) | 先端角度 | 石材 | 残存状況 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 277 | 3層 | 第134図<br>114 | 細部調整片 | XIXF8 f | 4.2 | 3.8 | 1.1 | 20.9 | | サヌカイト | |
| 278 | 3層 | 第133図<br>113 | 双孔円板 | | 2.5 | 3.15 | 0.45 | 6.0 | | シルト岩 | 一部欠失、両面に研磨痕 |
| 279 | 2層 | 第134図<br>114 | 石鏃 | XⅧF11 e | 4.1 | 1.7 | 0.4 | 2.0 | 30°(欠) | サヌカイト | 尖端部欠失 |
| 280 | 2層 | 第134図<br>114 | 石鏃 | XⅧF11 e | 3.7 | 1.6 | 0.6 | 2.9 | 66°(欠) | サヌカイト | 先端、基部欠失 |
| 281 | 1層 | 第135図<br>114 | 楔形石器 | 不明 | 3.85 | 2.7 | 1.5 | 18.2 | | サヌカイト | 周縁部摩耗 |
| 282 | 1層 | 第135図<br>114 | 不定石器 | 不明 | 5.0 | 4.1 | 1.4 | 31.4 | | サヌカイト | 周縁部摩耗 |
| 283 | 1層 | 第135図<br>114 | 石鏃 | 不明 | 3.0 | 1.5 | 0.45 | 2.0 | 50°(欠) | サヌカイト | 先端～左縁部欠失 |
| 284 | Z | 第133図<br>113 | 紡錘車 | 不明 | 3.4 | 1.7 | 0.55 | 4.6 | | 蛇紋岩 | 約1/2残存 |

第19表　中世遺構、包含層内出土サヌカイト一覧表

| 遺構・包含層 | 石器 | | その他のサヌカイト | | 合計 | | 備考　出土地区と個数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 重量(g) | 個数 | 重量(g) | 個数 | 重量(g) | 個数 | |
| S D54 | 1.4 | 1 | | | 1.4 | 1 | XIXF6～7 g (1) |
| S D58 | 16.5 | 1 | | | 16.5 | 1 | XIXF6～7 g (1) |
| S K13 | 10.0 | 1 | | | 10.0 | 1 | XIXF7～8 e (1) |
| S K18 | 169.2 | 2 | 1.3 | 1 | 170.5 | 3 | XIXF6 e～8 g (1)、6 g (1)、7 g (1) |
| S K35 | 18.9 | 1 | 5.3 | 1 | 24.2 | 2 | XIXF1 e～g (1)、1 g (1) |
| S K45 | 39.5 | 1 | | | 39.5 | 1 | XIXF9 e (1) |
| 総計 | 255.5 | 7 | 6.6 | 2 | 262.1 | 9 | |
| 1層 | 56.2 | 3 | 6.5 | 1 | 62.7 | 4 | 不明 (4) |
| 2層 | 4.9 | 2 | 52.8 | 5 | 57.7 | 7 | XIXF1 e、5 e、3 g、XⅧF9 e、10 e (各1)、XⅧF11 e (2) |
| 3層 | 68.3 | 5 | 31.5 | 4 | 99.8 | 9 | XIXF8 e、5 f、7～8 f、XⅧF9 e (各1)、XIXF8 f (2)、XIXF6 f～g (3) |
| 4層 | | | 8.9 | 1 | 8.9 | 1 | XⅧF9 e (1) |
| 10層 | | | 17.7 | 2 | 17.7 | 2 | XⅧF7 e (2) |
| 総計 | 129.4 | 10 | 112.6 | 13 | 242.0 | 23 | |
| 中世＋包含層 計 | 384.9 | 17 | 119.2 | 15 | 504.1 | 32 | |

今回の調査の範囲約400㎡から出土したサヌカイトの総計は石器が17点で384.9g、剥片は15点で119.2gになる。石器、剥片の合計は32点で504.1gになり重量でいえば約8割近くを石器に加工したことになる。

第20表　焼土出土地区（遺構内）一覧表

| 地　　区 | 遺　構 |
|---|---|
| XIXF1 e | SK36 |
| 〃 | SK46 |
| XIXF1 f | SK32 |
| XIXF1 f・g | SK35 |
| XIXF5 g | SE1 |
| XIXF6 e | SP175 |
| XIXF6 f～g | SK18 |
| 〃 | SD38 |
| 〃 | SD39 |
| XIXF6 f | SP153 |
| XIXF7 e | SK14 |
| 〃 | SP257 |
| XIXF7 f | SP10 |
| 〃 | SP35 |
| XIXF6 f | SP153 |
| XIXF7 e | SK14 |
| 〃 | SP257 |
| XIXF7 f | SP10 |
| 〃 | SP35 |
| 〃 | SP187 |
| 〃 | SP249 |
| 〃 | SP252 |
| 〃 | SP257 |
| XIXF7 g | SP118 |
| 〃 | SP240 |
| XIXF8 e | SK8 |
| 〃 | SP192 |
| XIXF8 f | SK6 |
| 〃 | SP212 |
| XIXF8 f | SP213 |
| 〃 | SP215 |
| XIXF8 g・h | SD55 |

第21表　中世遺構・包含層内出土動物遺体一覧表

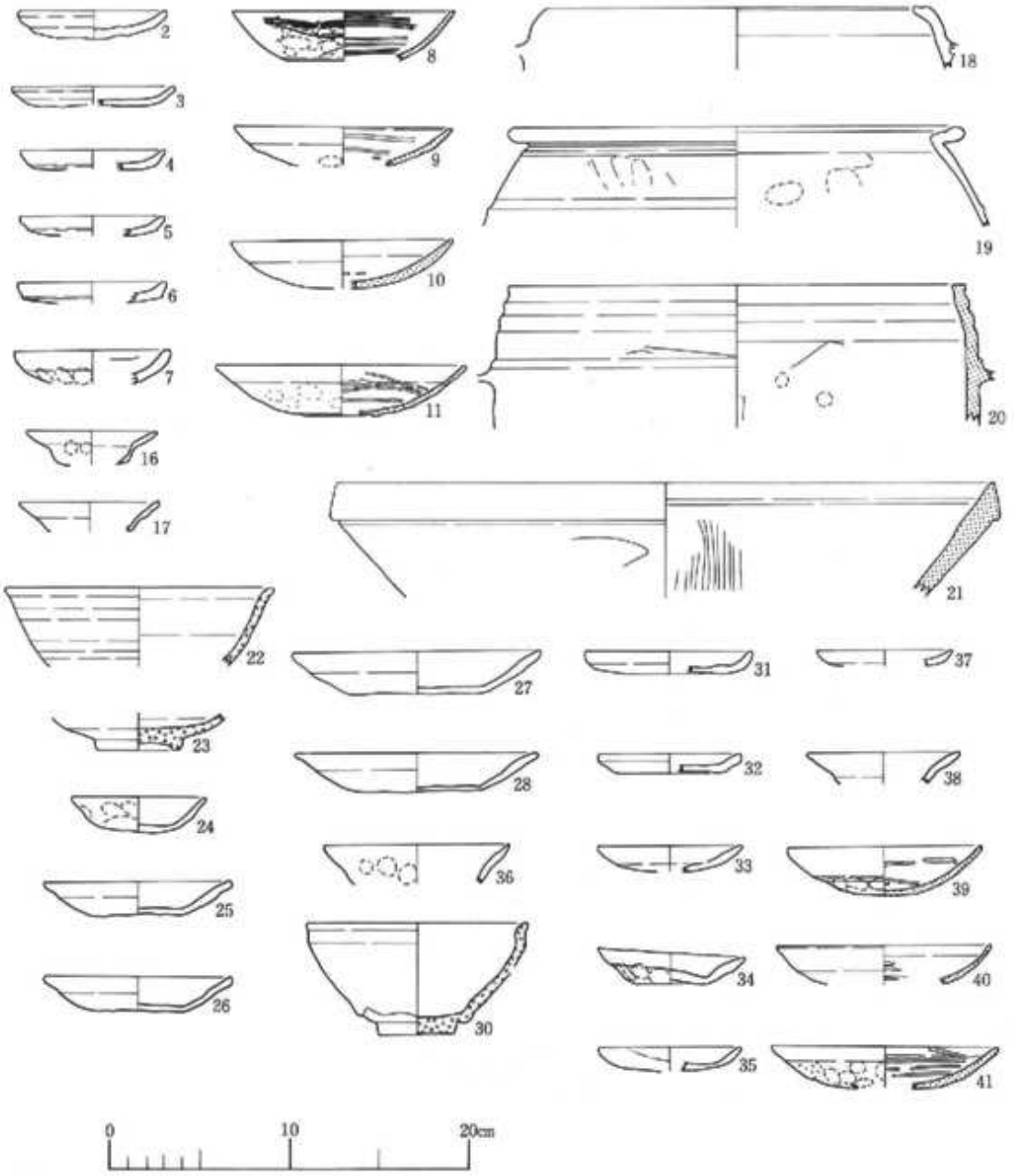
| 番号 | 遺構・包含層 | 出土地区 | 種類 | 部　位 |
|---|---|---|---|---|
| 290 | SD14 | XIXF8 g | ウマ | 左上顎臼歯 |
| 291 | SD40 上層 | XIXF6 e | 不明 | |
| 292 | SD53 | XVIIIF7 f | シカ | 左距骨 |
| 293 | SD53 | XVIIIF7 f | シカ | 左上腕骨 |
| 294 | SE3 下層 | XIXF8 g | 魚類 | 背骨（種不明） |
| 295 | SK5 | XIXF7 g | ヒト | 左脛骨 |
| 296 | SK5 上層 | XIXF7 g | 不明 | |
| 297 | SK5 上層 | XIXF7 g | ウマ | 基節骨（指の根元） |
| 298 | 2層 | XIXF5 e | 不明 | |
| 299 | 2層 | XIXF8 f | 不明 | |
| 300 | 2層 | XXIIIF9 d | ウマ | 切歯 |
| 301 | 3層 | XVIIIF10 e | ウシ | 中足骨か |
| 302 | 5層 | XVIIIF7 e | 不明 | |
| 303 | SE2 | XVIIIF19、20 g | | |

動物遺体（図版一一二）（第21表）

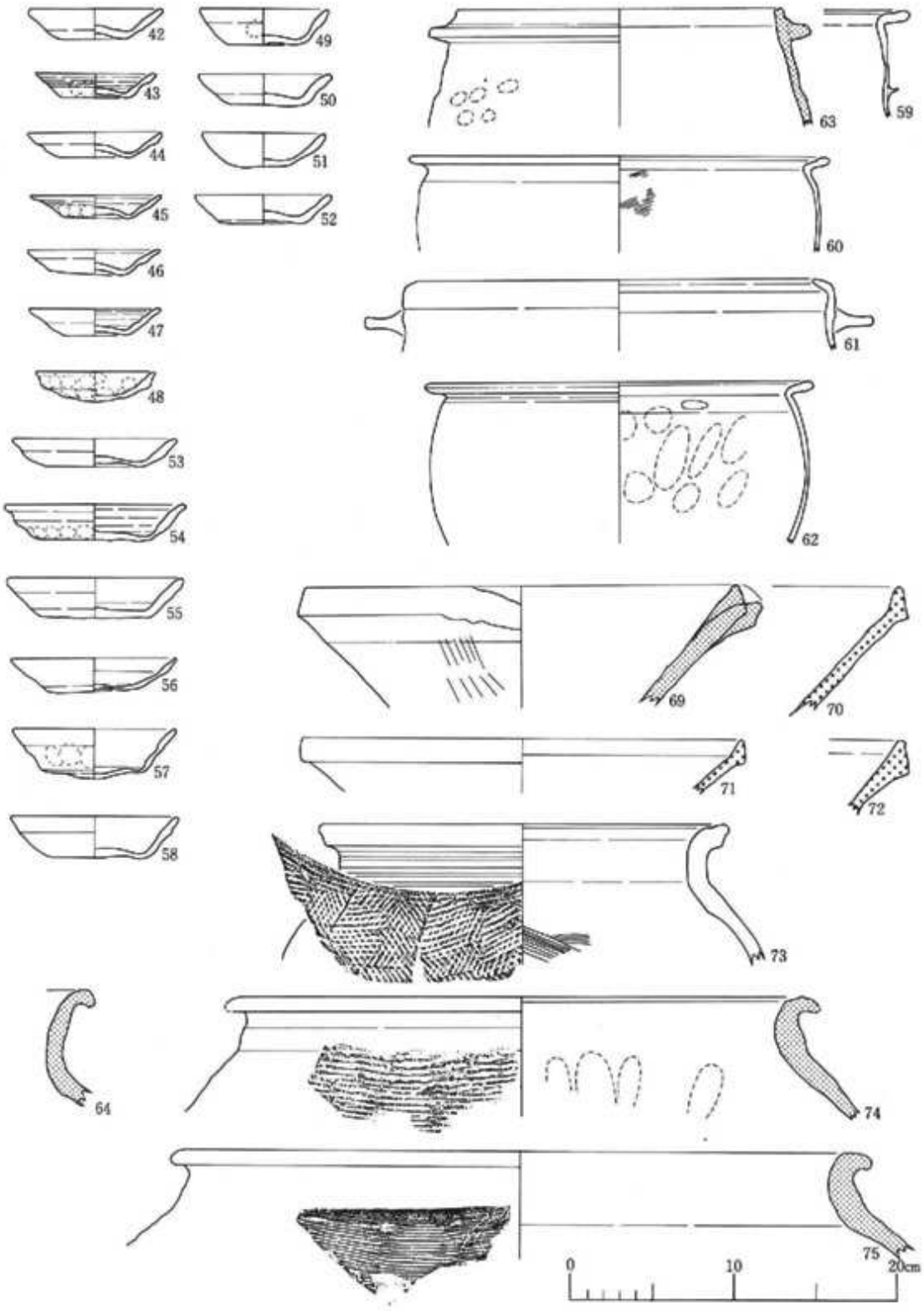
SK5から人骨の左脛骨（295）の出土がみられた。獣骨はSD14からウマ（290）、SD53からシカ（292・293）、SE3から魚類（294）、SK5からウマ（297）、包含層からウマ・ウシなどが第21表に示すように出土している。

焼土（第20表）　調査地域の各遺構内から焼土が多量に出土している。特にSK5からはコンテナ1箱分に達する。

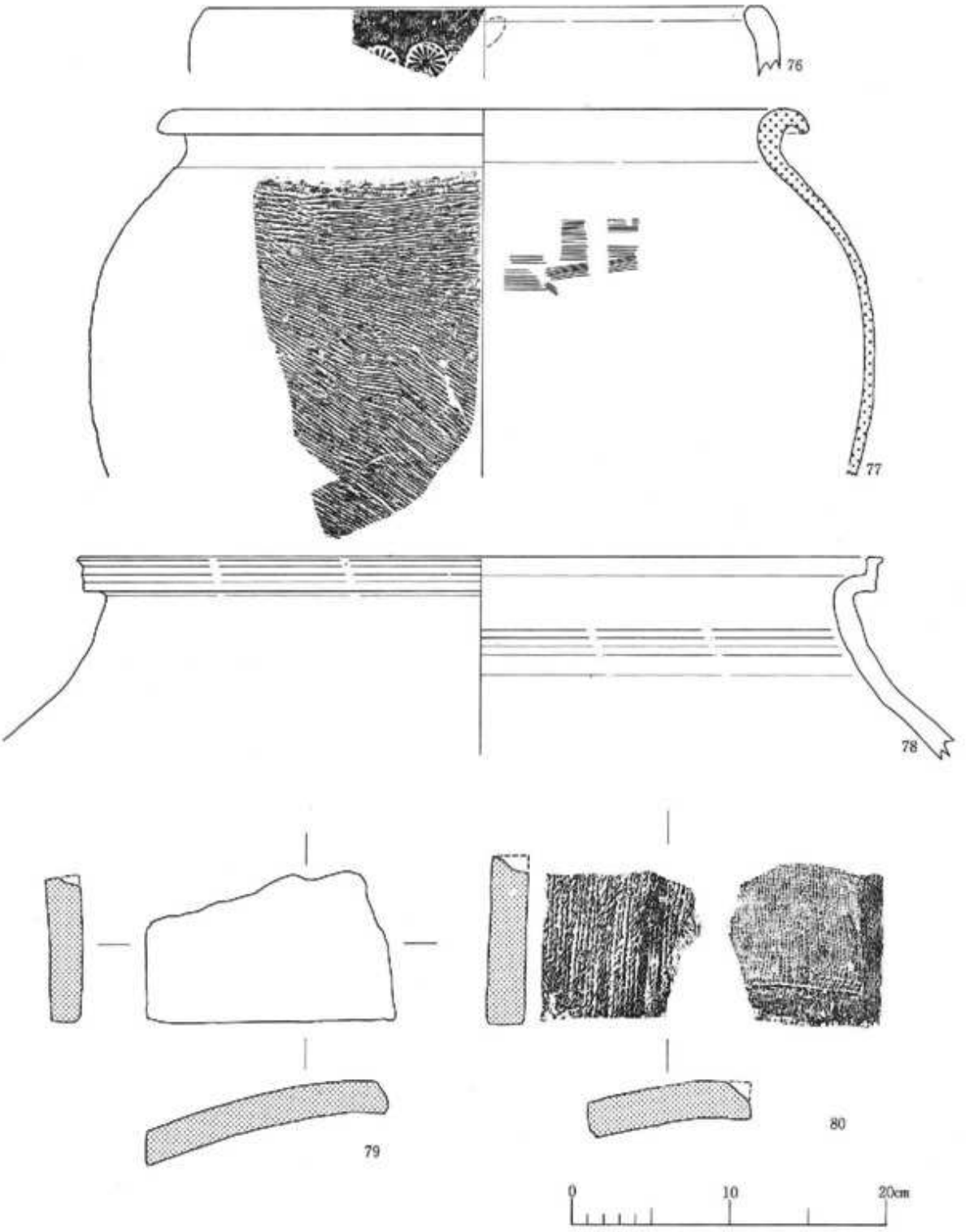
その他（図版一一三）　円筒埴輪がＳＥ２（341）、ＳＫ35（339・340）と中世遺構から混入物として出土している。鉄製品（335）はＳＫ35から、瓦製品（286）はＳＥ２、同（336）はＳＤ34、伏見人形（337）、泥面子（338）、骨製品（306）は１・２層から、シルト岩製の双孔円板（278）、蛇紋岩製の紡錘車（284）は３層からそれぞれ出土している。



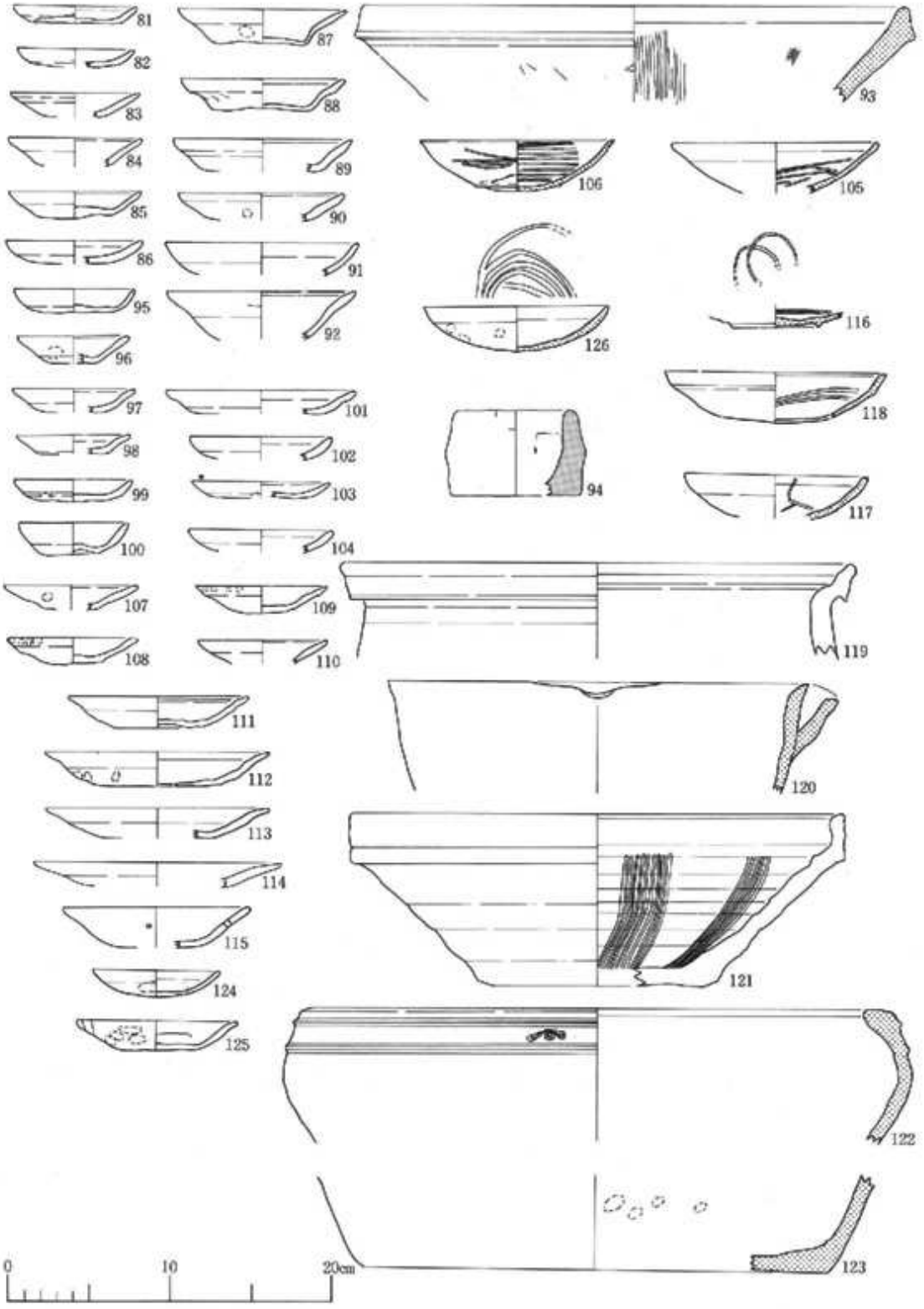

第122図　中世遺構内出土遺物実測図



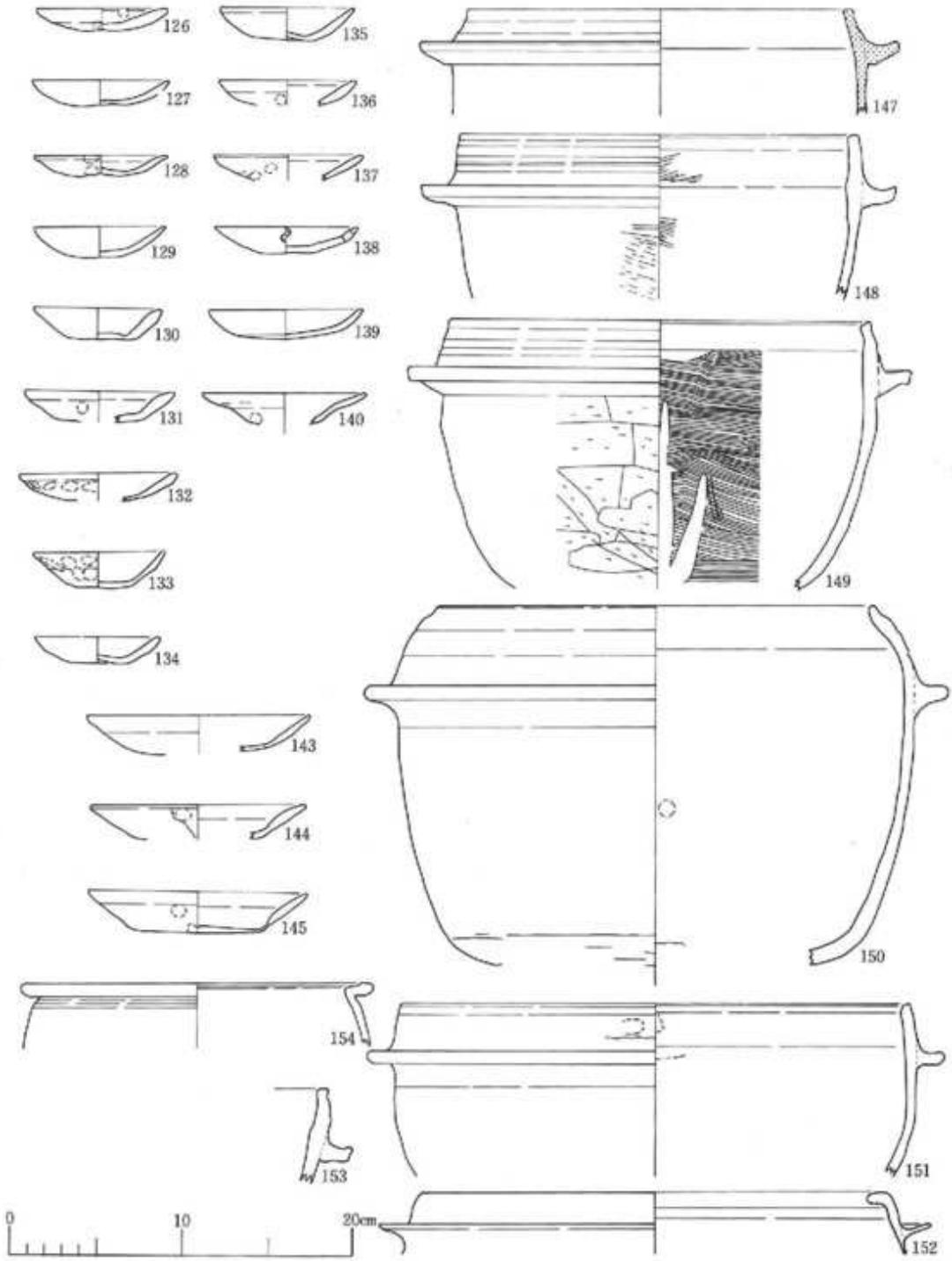

第123図　ＳＫ５内出土土器実測図－１



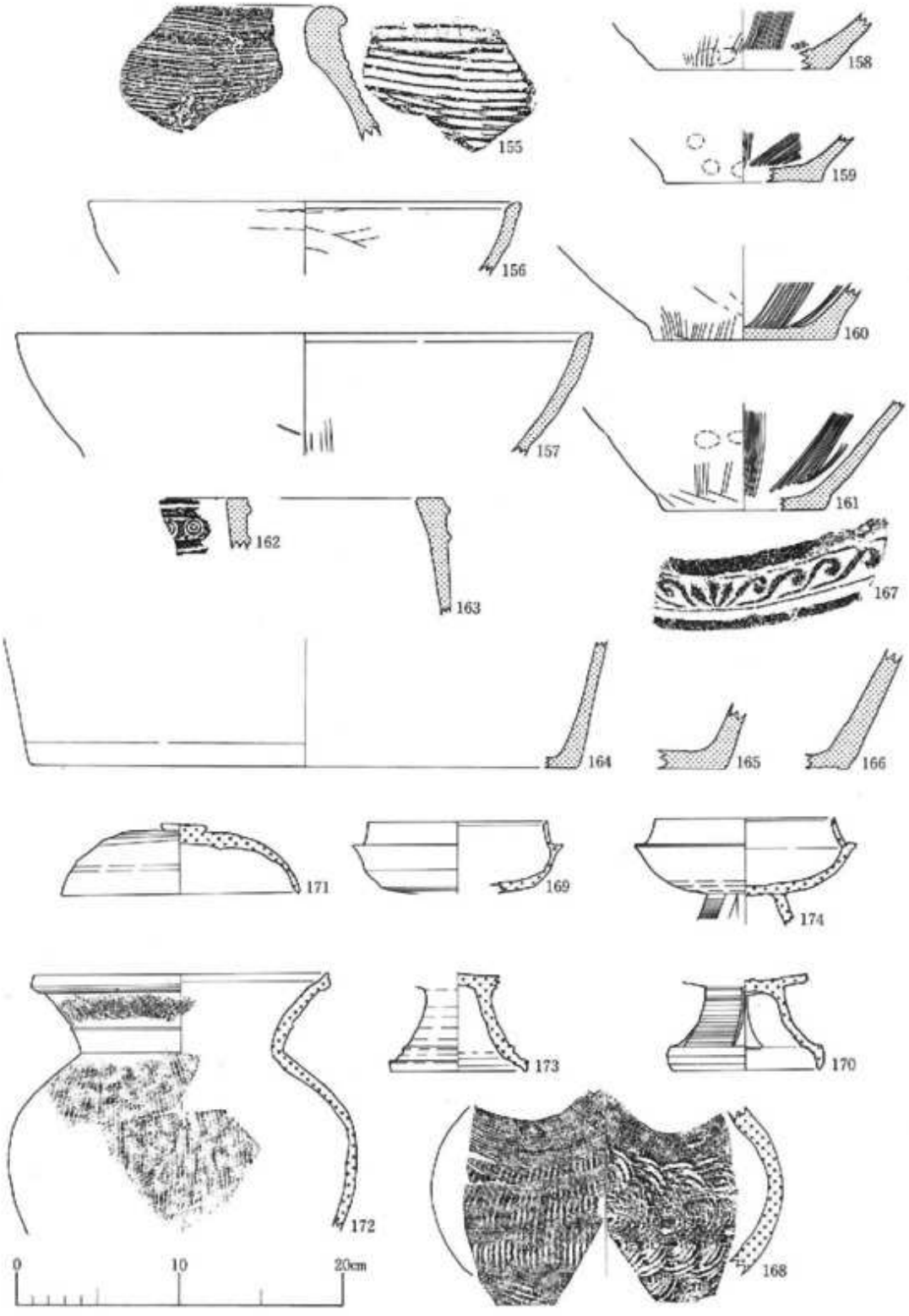

第124図　ＳＫ５内出土遺物実測図－２



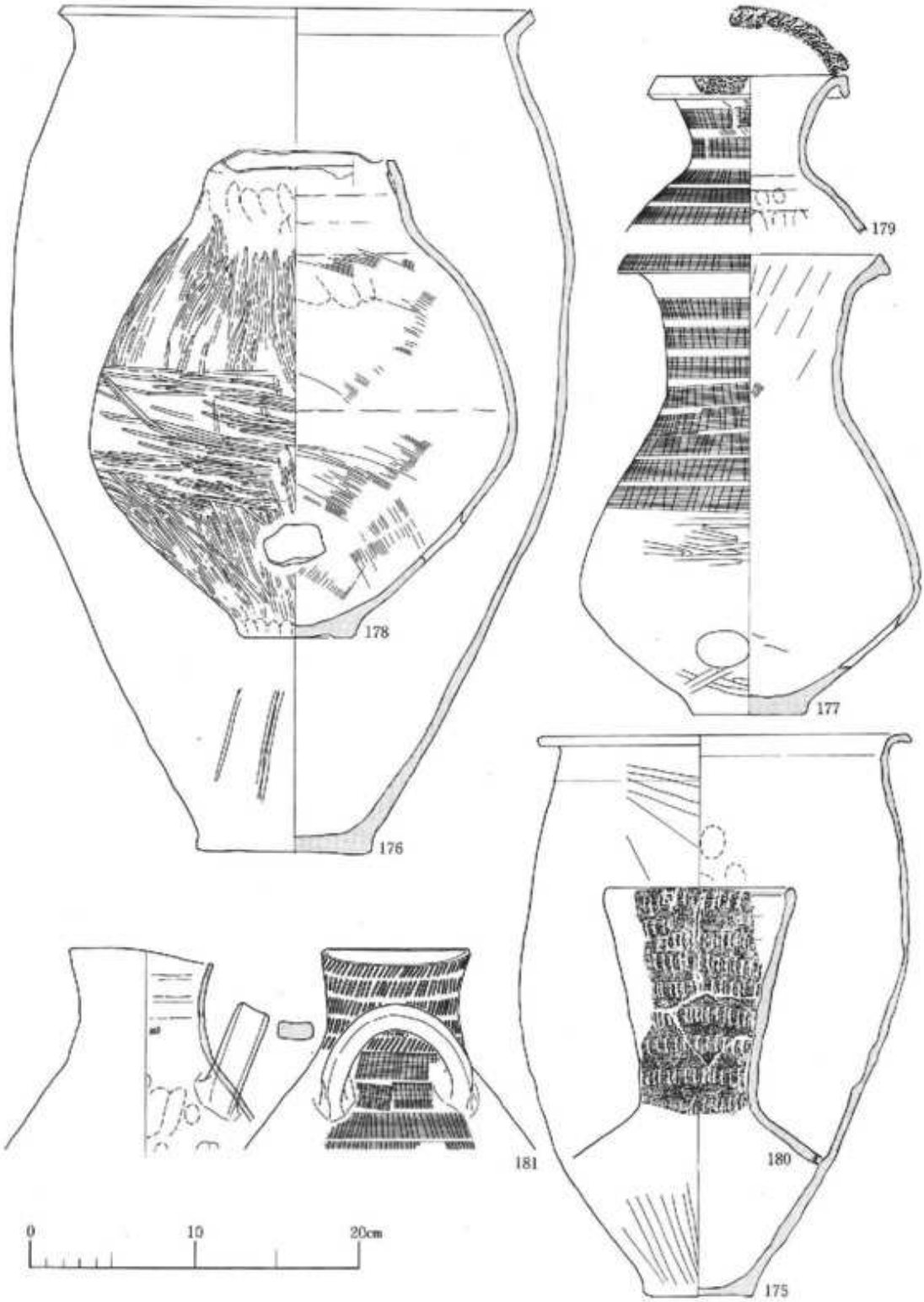

第125図　中世遺構内出土遺物実測図－2



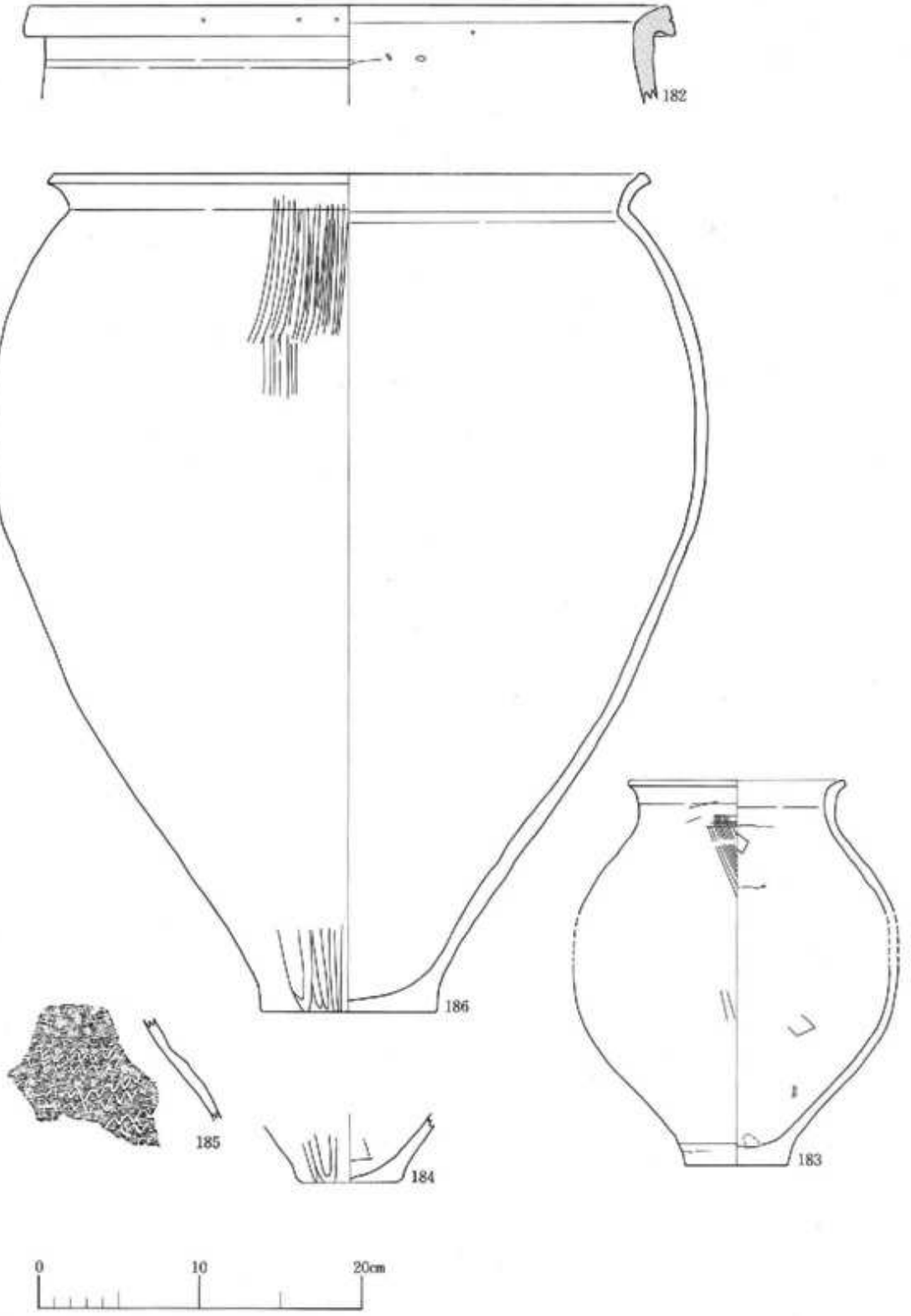

第126図　中世遺構内出土土器実測図－3



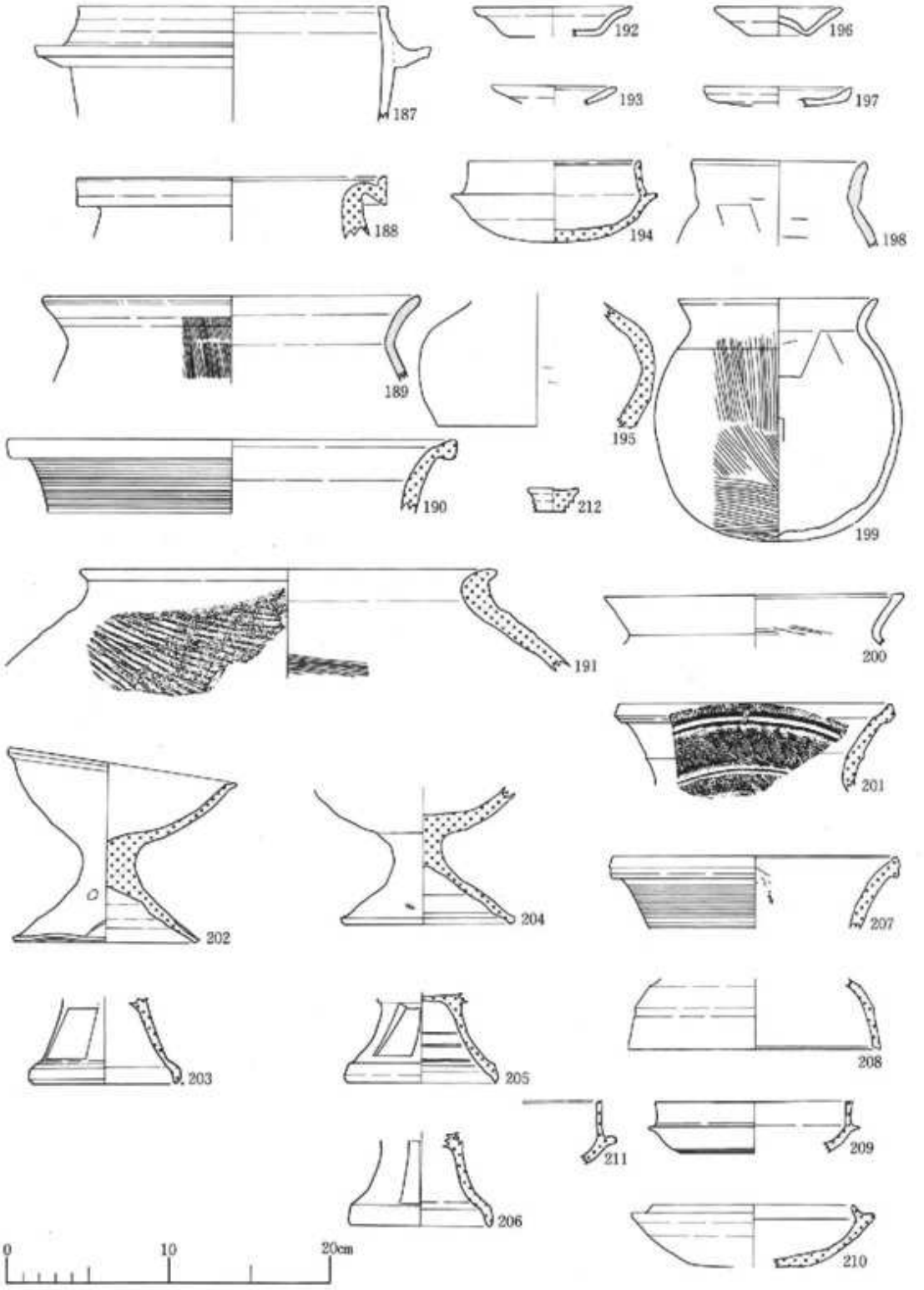

第127図　ＳＫ35内出土土器実測図



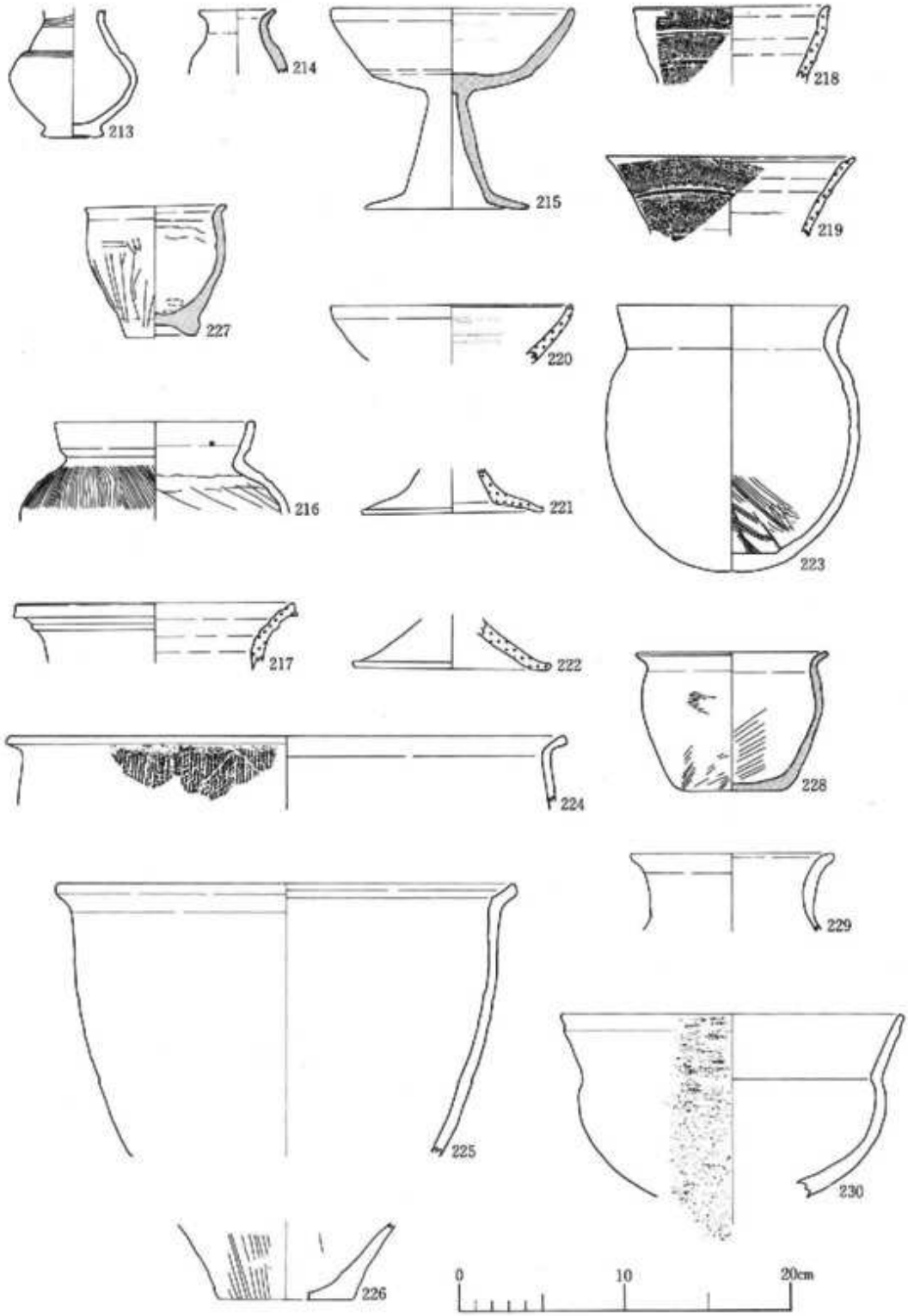

第128図　ＳＫ53内出土土器実測図



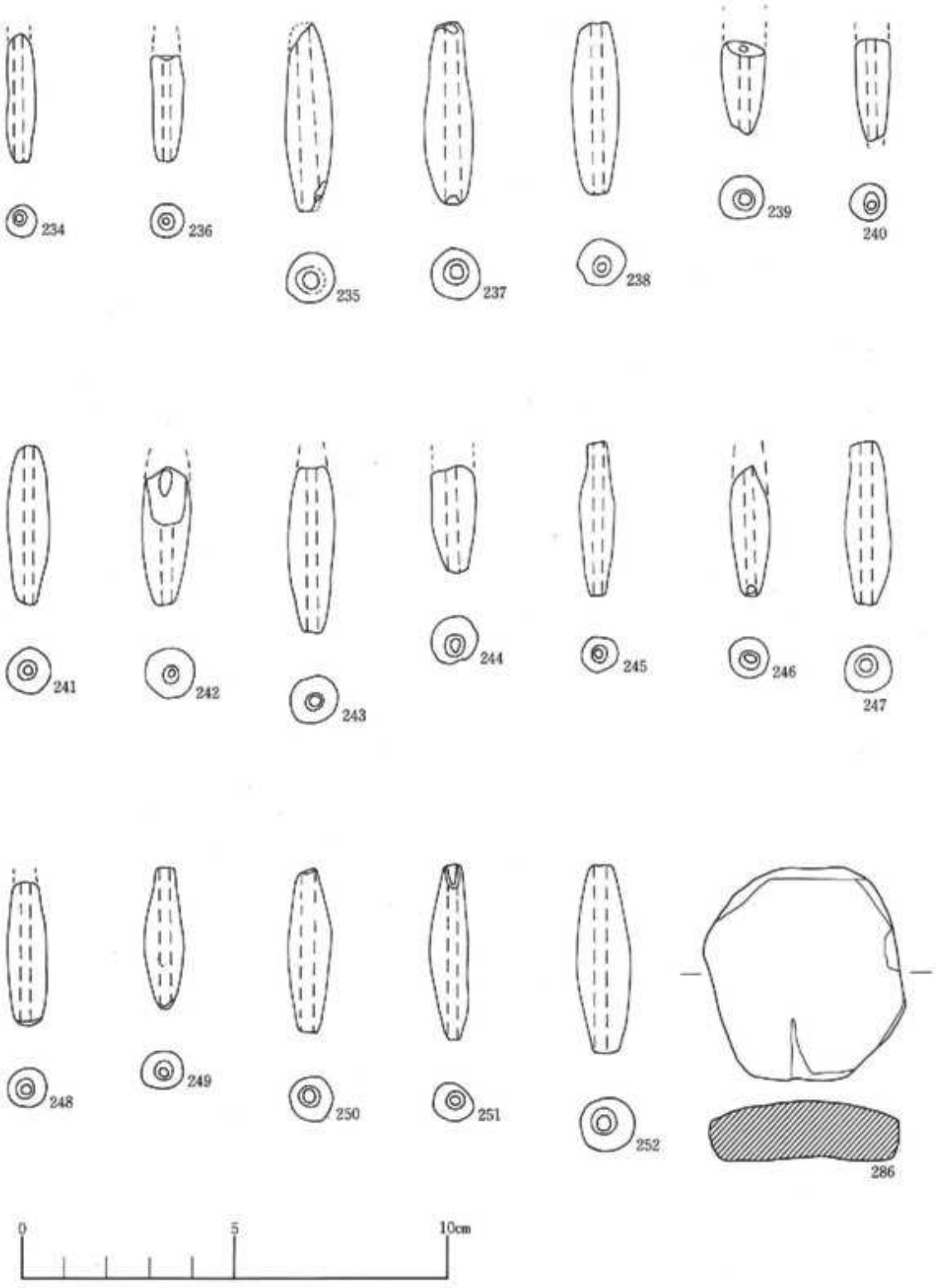

第129図　ＳＫ56内出土土器実測図



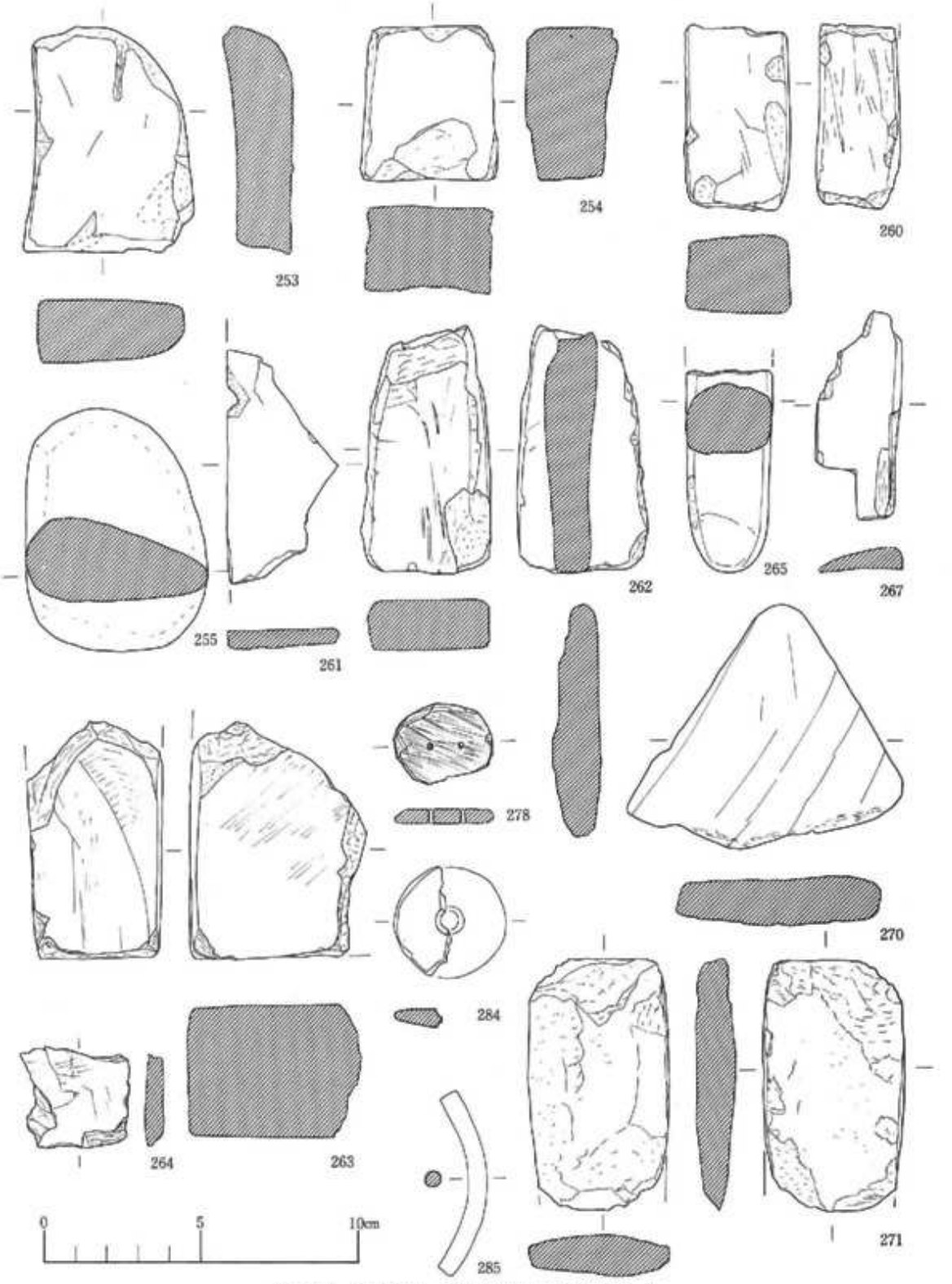

第130図　包含層内出土土器実測図－1



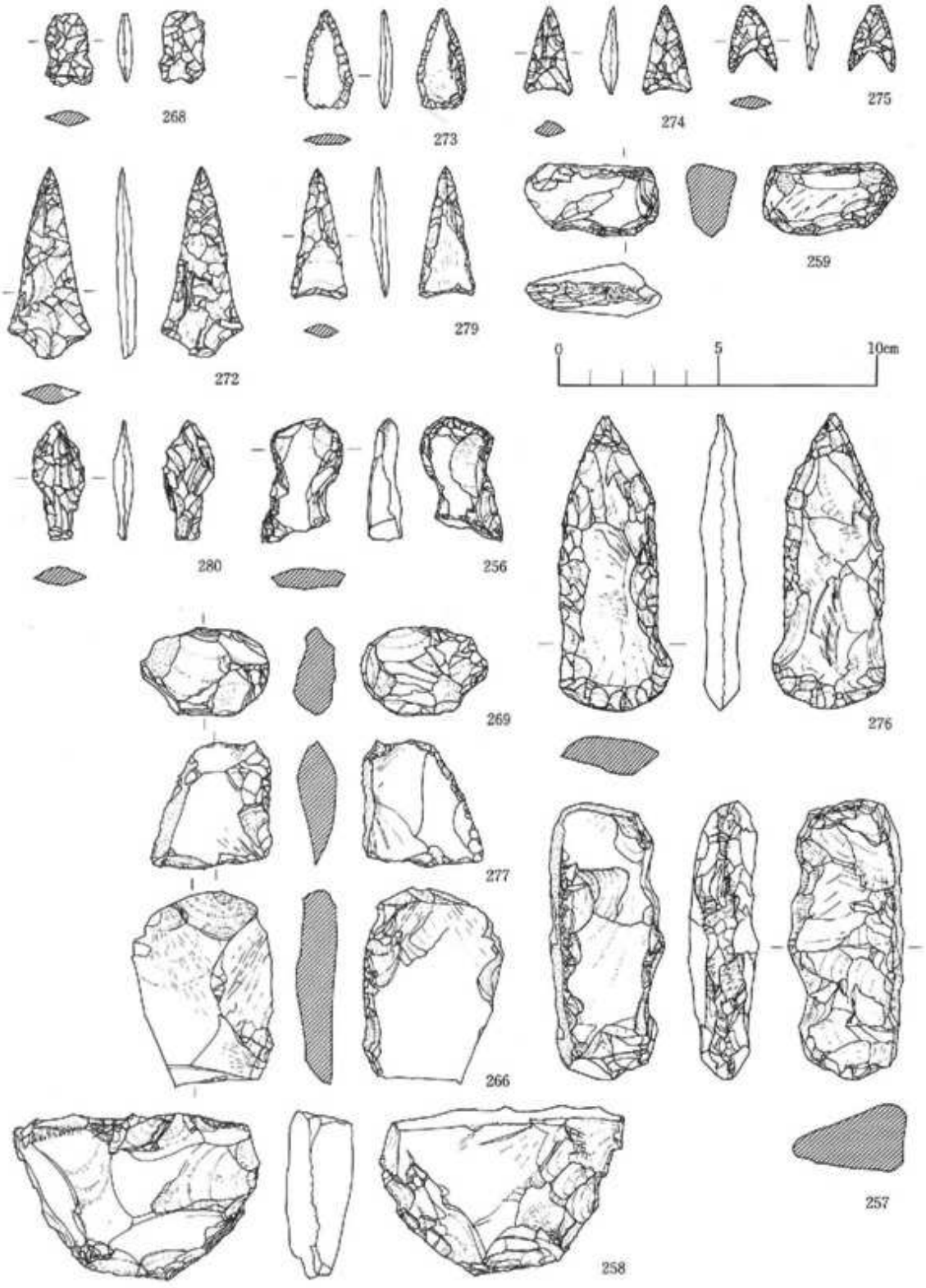

第131図　包含層内出土土器実測図－2



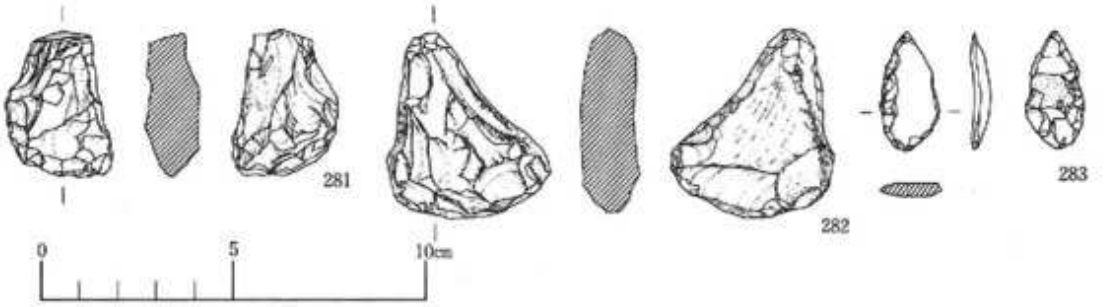

第132図　土錘（234～252）・瓦製円板（286）実測図




第133図　中世遺構・包含層内出土石器実測図－1




第134図　中世遺構・包含層内出土石器実測図－2




第135図　包含層内出土石器実測図

注1　下村晴文、曽我恭子　『神並遺跡　I』　東大阪市教育委員会　（財）東大阪市文化財協会　1986年

2　毛利光用子、金原正明他　『布留遺跡、布留（西小路）地区　中世の遺構と出土瓦器』　1976．9～1977．3調査　（『考古学調査研究中間報告』6　埋蔵文化財天理教調査団　1982年）

3　菅原正明　「畿内における土釜の製作と流通」（『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集　1982年）

菅原正明　「畿内における中世土器の生産と流通」（『古文化論叢』藤沢一夫先生古稀記念論集）1983年

4　横田賢次郎、森田　勉　「大宰府出土の輸入陶磁器について－型式分類と編年を中心として」（『九州歴史資料館研究論集4』）1978年

5　赤羽一郎　「常滑」－知多半島古窯址群－（『世界陶磁全集』3　日本中世　小学館　1977年）

6　森井貞雄　「河内地方の畿内Ⅲ・Ⅳ様式編年の一視点」（『大阪文化誌15号』（財）大阪文化財センター　1982年）

# Ⅳ．西ノ辻遺跡第７次調査出土鉄鏃の金属学的調査

大澤正巳
（新日本製鐵株式会社）

**概要**

西ノ辻遺跡から出土した弥生時代中期後半に属する大型三角形有茎鏃を調査して次の事が明らかになった。

〈1〉　鉄鏃は鉱石系素材の鍛造品である。

〈2〉　製鉄原料の鉱石は、チタン（Ti)及び燐（P）を微量に含有するところから磁鉄鉱の可能性をもつ。

〈3〉　炭素含有層は0.2%以下の軟鋼クラスが想定できる。ただし、金属鉄は酸化を受けていて、熱処理に関する詳細情報を得ることはできなかった。

〈4〉　鉄素材は清浄な鋼で、非金属介在物（鉄の製造過程で金属鉄と分離しきれなかったスラグや炉材粘土の混じり物）は少なく、鉄生産の製錬技術は高度であったと考えられる。

〈5〉　鉄鏃の素材産地は大陸側であり、そちらからの搬入品と考えられる。しかし、鍛冶加工まで大陸側でなされたものか、国内鍛造品かは、錆化損傷が激しく充分な検討を加える事ができなかった。

## 1　いきさつ

西ノ辻遺跡は大阪府東大阪市東山町に所在する弥生時代中期から後期の集落後である。この遺跡の第７次発掘調査において２号方形周溝墓北溝内第１層（No. 1—N、１層）より大型三角形有茎鏃が出土した。

この出土鉄鏃の金属学的所見を東大阪市文化財協会より求められたので、原形を大きく損なわない部分から試料を採取し、調査を行った。なお、東大阪市出土の弥生時代の鉄器の調査は、鬼虎川遺跡出土のノミ状鉄器、鉄鏃[1]、水走遺跡出土のノミ状鉄器[2]に続いて、今回の大型三角形有茎鏃は４例目に当たる。

又、鬼虎川遺跡や水走遺跡は標高３～４ｍの平野に位置するのに対して西ノ辻遺跡は、10～20mの扇状地上に立地する。更に、水走遺跡や鬼虎川遺跡は、弥生時代中期末に衰退して西ノ辻へ集落が移動したと考えられている[3]。

## 2　調査方法

### 2－1　供試材（第49図、図版六五を参照のこと）

大型三角形有茎鏃で先端より約2/5は欠損し、かえり及び茎の基部が完存する。全体は錆に覆われ、破面は板状の剝離が認められる。現存長さ3.9㎝、幅3.6㎝、厚さ錆ぶくれを含めて0.8㎝、重量はは11.4ｇである。

出土位置は第７次発掘調査ⅩⅨＦ15ｅ地区、２号方形周溝墓北溝内第１層。共伴遺物は畿内第Ⅲ～第Ⅳ様式土器。

| POS. NO. | HOLDER NO. [O : END] | X (MM) | Y (MM) | Z (MM) | COMMENT (8 CHARACTER) [C, R, : SAME] | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 37 | : 2 | 40,000 | 40,000 | 11,000 | R881－1 | READY (PAGE) ? |

POS. NO. 37

COMMENT : R－881－1
ACCEL. VOLT. (KV) : 15
PROBE CURRENT : 5.000E－08 (A)
STAGE POS. : X 40000 Y 40000 Z 11000

06－JUL－BB

CH (1) TAP

| EL | WL | COUNT | INTENSITY (LOG) |
|---|---|---|---|
| Y－1 | 6.45 | 216 | ********** |
| SR－1 | 6.86 | 166 | ********** |
| W －m | 6.98 | 167 | ********** |
| ○SI－k | 7.13 | 308 | **********++ |
| RB－1 | 7.32 | 125 | ********** |
| AL－k | 8.34 | 83 | **********+ |
| BR－1 | 8.37 | 69 | ********** |
| ○AS－1 | 9.67 | 224 | **********+++ |
| MG－k | 9.89 | 31 | ******** |
| GE－1 | 10.44 | 23 | ******* |
| GA－1 | 11.29 | 19 | ******* |
| NA－k | 11.91 | 14 | ****** |
| F－k | 18.32 | 11 | ****** |

CH (2) PET

| EL | WL | COUNT | INTENSITY (LOG) |
|---|---|---|---|
| TI－k | 2.75 | 125 | ********** |
| BA－1 | 2.78 | 121 | ********** |
| CA－k | 3.36 | 85 | ********** |
| SB－1 | 3.44 | 74 | ********** |
| SN－1 | 3.60 | 65 | ********** |
| K－k | 3.74 | 54 | **********+ |
| CD－1 | 3.96 | 47 | ********* |
| CL－k | 4.73 | 26 | *******+ |
| S－k | 5.37 | 18 | ******* |
| MO－1 | 5.41 | 16 | *****++ |
| NB－1 | 5.72 | 11 | ****** |
| ZR－1 | 6.07 | 11 | *****+ |
| P－k | 6.16 | 11 | *****+ |

CH (3) LIF

| EL | WL | COUNT | INTENSITY (LOG) |
|---|---|---|---|
| ○PB－1 | 1.18 | 131 | **********① |
| PT－1 | 1.31 | 74 | ********** |
| IR－1 | 1.30 | 71 | ********** |
| ZN－k | 1.44 | 63 | ********** |
| CU－k | 1.54 | 50 | ********* |
| ○NI－k | 1.66 | 64 | *********+ |
| CO－K | 1.79 | 48 | ********* |
| ○FE－k | 1.94 | 7982 | **********+++++++++ |
| MN－k | 2.10 | 20 | ******* |
| CR－k | 2.29 | 16 | ******+ |
| V－k | 2.50 | 9 | ***** |
| CE－1 | 2.56 | 10 | ***** |
| LA－1 | 2.67 | 6 | **** |

RESULTS :

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
SI FE NI AS PB ←――― 検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
MO SB

＊ 図版――七のSE（2次電子像）に示す地鉄部個所の分析結果である。検出元素を強度順に並べると、鉄（Fe)Count 7982、珪素（Si）308、砒素（As）224、鉛（Pb）131、ニッケル（Ni）64となる。鉄中断面から砒素（As）や鉛（Pb）の検出は前例のない事で何に由来するか検討を要する。鉱石中の微量元素であれば、産地同定の有力な手がかりとなる。

第136図　西ノ辻遺跡出土鉄鏃（R―881①）のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

2－2　調査方法

(1)　顕微鏡組織

磁着する黒錆片をベークライト樹脂に埋込んだ後エメリー研摩紙の#150、#240、#320、#600、#1000、と順に追って研摩し、最後はダイヤモンドの3μと1μで仕上げている。顕微鏡組織の観察後、ＥＰＭＡ調査にまわしている。

(2)　ＥＰＡＭ調査（Electron Probe Micro Analyzer）

別名、Ｘ線マイクロアナライザーとも呼ぶ。分析の原理は、真空中で試料面に電子線を照射し、発生する特性Ｘ線を分光後にとらえて画像化し、定性的な測定結果を得る分析方法である。これが最近ではＣＭＡ（Computer aided X-ray Micro Analyzer　以下ＣＭＡと略記）という新しい総合状態分析装置が開発された。原理はＥＰＭＡと同じであるが標準試料とのＸ線強度の対比から元素定量値を得ることができるコンピューター内蔵の新鋭器機である。

(3)　化学組織

酸分解ＩＣＰ分析法（ＩＣＰ：Inductively Coupled Plasuma)高周波誘導結合プラズマ発光分析。

3　調査結果

(1)　顕微鏡組織

図版一一六に示す。金属組織は残留せず、①～⑥の組織はいずれもマグネタイト（Magnetite：$Fe_3O_4$）化した黒錆である。①②④の白色部は金属鉄の可能性ありと期待したが、やはり酸化組織であった。組織中に縞状の濃淡模様がみられるのは鍛造組織である。

鉄中には非金属介在物がほとんど含有されず清浄な鋼であった事が確認できた。又、鉄中に初析セメンタイト（Cementite：$Fe_3C$）の析出も認められず、鉄中の炭素（Ｃ）含有量も共析鋼（Ｃ：0.77%）まで昇ることは考えられず、軟鋼クラスと推定ささされた。

(2)　ＥＰＭＡ調査

第136、137図は、図版一一、一一八のＳＥ（２次電子像）に示す地鉄部のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果である。本来は鉄中の非金属介在物を対象に分析したかったのであるが、顕微鏡試料の断面に介在する非金属介在物を限無く捜したが未検出であったので、地鉄の分析に切替えた。検出元素は、鉄（Fe）は当然ベースになるのでCountも大きくなる。Countは5,693～7,982である。次に珪素（Si）は308～378と大きいのは、固溶は考えられず、土壌汚染によるものであろう。続いて鉛（Pb)、砒素（As）らの検出がみられるが、これの由来は定かでない。鉱石由来となると過去に前例がなく、今後の産地同定の指標となる。類例を求めて産地の検討に対して有力な手がかりになりうると考えられる。

図版一一七、一一八は、高速定性分析結果を視覚化した特性Ｘ線像である。白色輝点が集中する所に分析元素が存在する事を表わす。図版一一七のＳＥに示した酸化度の低い右下りの対角線状の個所には、鉛（Pb)、砒素（As)、ニッケル（Ni）らが存在し、その両側のはずれ部には珪素（Si）が検出される。これからも珪素（Si）は汚染物質とみるべきであろう。今後の

| POS. NO. | HOLDER NO. [O : END] | X (MM) | Y (MM) | Z (MM) | COMMENT (8 CHARACTER) [C, R, : SAME] | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 38 | : 2 | 40.000 | 40.000 | 11.000 | R881－2 | READY (PAGE) ? |

POS. NO. 38

COMMENT : R－881－1
ACCEL. VOLT. (KV) : 15
PROBE CURRENT : 5.000E－08 (A)
STAGE POS. : X 40000 Y 40000 Z 11000

06－JUL－BB

CH (1) TAP

| EL | WL | COUNT | INTENSITY (LOG) |
|---|---|---|---|
| Y－1 | 6.45 | 188 | ********** |
| S R－1 | 6.86 | 155 | ********** |
| W －m | 6.98 | 140 | ********** |
| ○S I －k | 7.13 | 378 | **********++ |
| R B－1 | 7.32 | 108 | ********** |
| A L－k | 8.34 | 69 | ********** |
| B R－1 | 8.37 | 58 | ********** |
| ○A S－1 | 9.67 | 265 | **********+++ |
| MG－k | 9.89 | 32 | ******** |
| G E－1 | 10.44 | 25 | ******** |
| G A－1 | 11.29 | 22 | ******* |
| N A－k | 11.91 | 17 | ******+ |
| F－k | 18.32 | 7 | ****+ |

CH (2) PET

| EL | WL | COUNT | INTENSITY (LOG) |
|---|---|---|---|
| T I －k | 2.75 | 109 | ********** |
| B A－1 | 2.78 | 100 | ********** |
| C A－k | 3.36 | 79 | ********** |
| S B－1 | 3.44 | 56 | ********** |
| S N－1 | 3.60 | 50 | ********* |
| K－k | 3.74 | 44 | ********* |
| C D－1 | 3.96 | 34 | ******** |
| C L－k | 4.73 | 20 | ******+ |
| S－k | 5.37 | 14 | *****+ |
| MO－1 | 5.41 | 12 | *****+ |
| N B－1 | 5.72 | 9 | ***** |
| Z R－1 | 6.07 | 8 | ***** |
| P－k | 6.16 | 8 | ***** |

CH (3) LIF

| EL | WL | COUNT | INTENSITY (LOG) |
|---|---|---|---|
| ○P B－1 | 1.18 | 115 | **********+ |
| P T－1 | 1.31 | 68 | *********+ |
| I R－1 | 1.30 | 59 | *********+ |
| Z N－k | 1.44 | 45 | ********* |
| C U－k | 1.54 | 47 | ********* |
| N I －k | 1.66 | 46 | *********+ |
| ○C O－K | 1.79 | 47 | *********+ |
| ○F E－k | 1.94 | 5693 | **********+++++++++ |
| MN－k | 2.10 | 19 | ******* |
| C R－k | 2.29 | 12 | *****+ |
| V－k | 2.50 | 10 | ****+ |
| C E－1 | 2.56 | 10 | ***** |
| L A－1 | 2.67 | 4 | **** |

RESULTS :

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
SI FE NI PB ←――― 検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
CA V

＊ 図版一一八のSE（2次電子像）に示す地鉄部の分析結果である。第136図に示したR－881①個所と大差ない検出元素である。鉄（Fe）、珪素（Si）、砒素（As）、鉛（Pb）らであり、これにニッケル（Ni）ではなく、コバルト（Co）が加わる。

第137図　西ノ辻遺跡出土鉄鏃（R－881②）のコンピューター・プログラムによる高速定性分析結果

鉄器分析において、随伴微量元素のうち、鉛（Pb）、砒素（As）、ニッケル（Ni）、コバルト（Co）らに注目して、類例を押えてゆけば、産地同定の新しい展望も開かれるものと考えられる。

(3) 化学組織

第22表に鉄鏃の化学組織を示す。全鉄分（Total Fe）48.9%に対して、銅（Cu）0.011%、燐（P）0.38%、チタン（Ti）0.17%、バナジウム（V）0.016%、マンガン（Mn）0.08%であり、磁鉄鉱（Magnetite）の成分系である。

赤鉄鉱（Hematite）系であれば硫黄（S）や燐（P）は一般に少なく、さらにはチタン（Ti）は低目となり、菱鉄鉱（Siderite）デアレバマンガン（Mn）が高目となる筈である。ましてや砂鉄となると、チタン（Ti）、バナジウム（V）が多く含有される。一方、褐鉄鉱（Limonite）は10～15%の水分を含んでおり、鉄の還元には不利と考えられる。（鉄の還元そのものは

第22表　鉄鏃の化学組成

| 符号 | 試料 | 遺跡名 | 推定年代 | 化学成分（%） | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 全鉄分 (Total Fe) | 銅 (Cu) | 燐 (P) | チタン (Ti) | バナジウム (V) | 珪素 (Si) | マンガン (Mn) |
| R－881 | 鉄鏃 | 西ノ辻遺跡 | 弥生時代中期中葉～後葉 | 48.9 | 0.011 | 0.38 | 0.17 | 0.016 | 7.02 (汚染) | 0.08 |
| ⑤ | 板状鉄斧 | 川合遺跡 (静岡県) | 弥生時代後期～古墳時代 | 44.9 | 0.01 | 0.82 | 0.008 | — | — | — |
| ⑥ | 鉄戈 | 宮の原遺跡 (長崎県) | 弥生時代中期後葉 | 59.9 | 0.005 | 0.422 | 0.038 | — | — | — |

⑤、⑥　佐々木稔「鉄剣の材質と古代の鍛造技術」『いま、なぜ鉄剣か』稲荷山古墳発掘20周年・平友銘剣発見10周年記念講演会資料
埼玉県教育委員会、日本考古学協会第54回総会実行委員会　1988年

低温デ可能であるが後処理で問題を起しやすい。）成分特質は燐（P）の多いものと少ないものの２種類があるが、これも候補からはずれる。

まとめ

弥生時代中期から後期に比定される西ノ辻遺跡出土の大型三角形有茎鉄鏃の金属学的調査を行った。

鏃の鉄素材は、磁鉄鉱系原料の鍛造品である。又、鉄素材は炭素（C）量は0.2%前後の軟鋼クラスで、鉄中の非金属介在物は、ほとんど認められず清浄であった。なお鉄中の化学組成はチタン（Ti）0.17%、燐（P）0.38%、銅（Cu）0.011%で磁鉄鉱系成分である。更に該材の特徴は、断面地鉄内に微量の砒素（As）、鉛（Pb）、ニッケル（Ni）、コバルト（Co）らを含有する。

一方、鉄鉱石の夾雑物（$SiO_2$）、石灰（CaO）、苦土（MgO）、バン土（$Al_2O_3$）、酸化マンガン（MnO）、銅（Cu）、硫黄（S）、無水燐酸（$P_2O_5$）、砒素（As）らがある。鉄鉱製錬は、これらの夾雑物を溶融し易い鉱滓とし、鉄と容易に分離させる技術を要する。しかし、鉱石中夾雑物は完全に排除される訳ではなく、一部は随伴微量元素として鉄中に残留する。非金属介在物と呼ぶ。これが産地固定の有力な手かがかりとなる。

## 第23表　弥生時代・古墳時代前期の鉄器中非金属介在物からみた製鉄原料

| No. | 遺跡名 | 出土地 | | 鉄器名 | 製鉄原料 | 非金属介在物からの検出元素 | 製鋼法 | 推定年代 | 出 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 県 | 所在地 | | | | | | |
| 1 | 水走 | 大阪 | 東大阪市中新開今米 | ノミ状鉄器 | 鉱石系 | Fe,Mn,Ca | | 弥生中期 | 1 |
| 2 | 鬼虎川 | 〃 | 〃　弥生町 | ノミ状鉄器 | 〃 | Fe,Ca,P,Mn,S | 鋳鉄脱炭鋼 | 〃 | 2 |
| 3 | 〃 | 〃 | 〃　〃 | 鉄鏃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 4 | 上沢ニュータウン | 兵庫 | 神戸市 | 袋状鉄斧 | 〃 | Na,Al,Si,K,Fe,Mn | | 弥生Ⅳ様式前半 | 3 |
| 5 | ピシャコ谷 | 岡山 | 津山市下高倉 | 無袋鉄斧 | 〃 | Na,Al,Si,K,Ca,Fe | | 弥生中期 | 4 |
| 6 | 月の輪古墳 | 〃 | 久米町櫛原町 | 小刀子 | 〃 | Fe,Ca,Mg,K,Al,P | | 5C前半 | 5 |
| 7 | 下稗田 | 福岡 | 行橋市大字下稗田 | 鍛造(板状)鉄斧 | 〃 | Al,Si,K,Fe | | 弥生前期末～中期中葉 | 6 |
| 8 | 〃 | 〃 | 〃 | 鋳造鉄斧 | 〃 | Si,Fe | | 〃 | 〃 |
| 9 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 磁鉄鉱 | Fe,Cu,Al,Si,S | | 〃 | 〃 |
| 10 | 〃 | 〃 | 〃 | 鍛造(板状)鉄斧 | 鉱石系 | Na,Al,Si,Fe,Cl | | 弥生後期中葉 | 〃 |
| 11 | 〃 | 〃 | 〃 | 鋳造鉄斧 | 磁鉄鉱 | Mg,Al,Si,K,Ca,Ti(微量),Fe | | 弥生後期終末 | 〃 |
| 12 | 三沢薬原 | 〃 | 小郡市三沢字薬原 | 無茎鉄鏃 | 鉱石系 | Si,Ca,Fe | | 弥生後期末 | 7 |
| 13 | 〃 | 〃 | 〃 | 袋状鉄斧(鍛造) | 〃 | Na,Al,Si,K,Fe | | 〃 | 〃 |
| 14 | 〃 | 〃 | 〃 | 手鎌(鍛造) | 〃 | Na,Al,Si,Fe | | 古墳時代初頭 | 〃 |
| 15 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | Al,Si,K,Fe | | 〃 | 〃 |
| 16 | 樋渡 | 〃 | 福岡市西区飯盛 | 鉄鏃(鍛造) | 〃 | Na,Al,Si,K,Ca,Fe(Fayalite) | 直接製鋼法 | 弥生中期後半 | 8 |
| 17 | 飯盛 | 〃 | 〃 | 剥環頭大刀 | 〃 | Na,Mg,Al,Si,Ca,Cr,Fe | | 〃 | 9 |
| 18 | 長行 | 〃 | 北九州市小倉南区 | 袋状鉄斧(鍛造・鋳造不明) | 〃 | Al,Si,FeMn | | 弥生前期～中期(縄文晩期?) | 10 |
| 19 | 黒ヶ塚 | 〃 | 北九州市八幡西区鳴水 | 袋状鉄斧(鍛造) | 〃 | Al,Si,K,Fe | | 弥生中期後半～末葉 | 11 |
| 20 | 高島 | 〃 | 北九州市小倉南区 | 〃(鋳造?) | 〃 | Na,Al,Si,K,Ca,Fe | | 弥生終末期 | 12 |
| 21 | 大板井 | 〃 | 小郡市大板井 | 鏃 | 〃 | | | 弥生中期中葉 | 13 |
| 22 | 門田 | 〃 | 春日市上白水門田辻田 | 鉄戈 | 〃 | Ca,K,Al,Mn,Ti,Si,Fe | | 弥生中期末 | 14 |
| 23 | 曲り田 | 〃 | 糸島郡二丈町石崎 | 鉄片 | 〃 | K,Cl,Si,Na,Al,Si | | 縄文晩期 | 15 |
| 24 | 安永田 | 佐賀 | 鳥栖市柚比町 | 袋状鉄斧(鍛造) | 〃 | 介在物ほとんど存在せず | | 弥生中期末 | 16 |
| 25 | 〃 | 〃 | 〃 | 鉇(鍛造) | 〃 | Si,P,S,Ca,Fe | | 〃 | 〃 |
| 26 | 〃 | 〃 | 〃 | 袋状鉄斧(鍛造) | 〃 | Si,Fe | | 〃 | 〃 |
| 27 | 〃 | 〃 | 〃 | 板状鉄片(鍛造) | 〃 | Na,Mg,Al,Si,K,Fe | | 〃 | 〃 |
| 28 | 下山西 | 熊本 | 阿蘇町乙姫 | 不明鉄片(鍛造) | 〃 | Si,Fe,Al,Ca | | 弥生後期中葉 | 17 |
| 29 | 宮の原 | 長崎 | 大村市宮の原常盤 | 鉄戈(鍛造) | 〃 | Fe,Mn,Ca,Mg,K,Al,Si | | 弥生時代中期～後期 | 18 |
| 30 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | Fe,Mn,Ca,Mg,K,Al,Si | | 〃 | 〃 |
| 31 | 今福 | 〃 | 南高来郡北有馬町 | 袋状鉄斧(鍛造) | 〃 | Al,Si,Ca,Fe | | 弥生後期 | 19 |
| 32 | 王子 | 鹿児島 | 鹿屋市王子町 | 鉇(鍛造) | 〃 | Si,Fe,Ti(微量) | | 弥生中期後半～後期初頭 | 20 |

1．大澤正己「水走遺跡出土のノミ状鉄器の金属学的調査」『水走遺跡』大阪府教育委員会　原稿提出中。
2．(イ)　李本隆裕・松田順一郎『鬼虎川の金属器関係遺物〈第7次発掘調査報告2〉』東大阪市文化財協会　1982。
(ロ)　大澤正己「鉄鏃と鑿状鉄器の冶金学的調査」同上所収。
(ハ)　大澤正己「鬼虎川遺跡出土の鋳鉄脱炭鋼鉄器・鉄鏃と鑿状鉄器の調査」『福岡考古懇話会々報』第11号　1982。
3．神戸市教育委員会〔小郡市教育委員会片岡宏二氏経由〕
4．(イ)　行田裕美他『ピシャコ谷遺跡』〔津山市埋蔵文化財調査報告書第16集〕
(ロ)　大澤正己「ピシャコ谷遺跡出土の鉄滓と鉄斧の調査」『ピシャコ谷遺跡』所収　津山市教育委員会　1984。
5．佐々木稔「月の輪古墳出土鉄器の化学組成再考」『考古学研究』126,考古学研究会　1985．9。
6．大澤正己「下稗田遺跡出土の弥生時代鉄器に対する金属学的調査」『下稗田遺跡』〔行橋市文化財調査報告書第17集〕行橋市教育委員会　1985。
7．大澤正己「三沢薬原遺跡出土鉄器の調査」『三沢薬原遺跡』Ⅲ〔小郡市文化財調査報告書第23集〕小郡市教育委員会　1985。
8．福岡市教育委員会飯盛3次調査　横穴古墳下カメ棺（5号）出土。未報告。
9．〃　飯盛4次調査　第1号幹線道路2区、K－67号　下層（西）出土。未報告。
10．宇野慎敏・山口譲治『長行遺跡』〔北九州市埋蔵文化財調査報告書第30集〕北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室1983。大澤正己「鉄斧」『長行遺跡』所収。
11．宇野慎敏他『黒ヶ塚遺跡』〔北九州市埋蔵文化財調査報告第18集〕北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室1982。鉄斧分析結果は未発表。
12．(イ)　小田富士雄他「高島遺跡」『古文化談叢』第3集　九州古文化研究会　1976。
(ロ)　大澤正己「考古遺物に対する金属学的調査手法について」『埋蔵文化財研究会第16回研究集会発表要旨』1984。
13．片岡宏二『大板井遺跡』Ⅰ〔小郡市文化財調査報告書第11集〕小郡市教育委員会　1981。佐々木稔市分析調査。
14．(イ)　井上裕弘・小森俊寛他『山陽新幹線関係調査報告書』第9集　福岡県教育委員会　1978。
(ロ)　大澤正己「門田遺跡出土鉄戈の分析調査」14－(イ)所収。
(ハ)　大澤正己「門田遺跡の鉄器について」『福岡考古懇話会々報』第9号　1978。
(ニ)　佐々木稔他「古代日本における製鉄の起源と発展」『季刊考古学』第8号　1984。
(ホ)　佐々木稔・村田朋美・伊藤薫「出土鉄片の金属学的調査」Ⅱ『石崎曲り田遺跡』Ⅲ　福岡県教育委員会　1985。
15．(イ)　橋口達也他『石崎曲り田遺跡』Ⅱ〔今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第9集〕福岡県教育委員会　1984。
(ロ)　佐々木稔・村田朋美・伊藤薫「出土鉄片の金属学的調査」同上所収。
(ハ)　佐々木稔・村田朋美・伊藤薫「出土鉄片の金属学的調査（Ⅱ）」『石崎曲り田遺跡』Ⅲ〔今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第11集〕福岡県教育委員会1985。
鉄片中の介在物からはざくろ石の類の鉱物しか検出されなかった。再調査の予定。
16．(イ)　藤瀬禎博他『安永田遺跡』〔島栖市文化財調査報告書第25集〕島栖市教育委員会　1985。
(ロ)　大澤正己「安永田遺跡出土の鉄器と鉄滓の金属学的調査」同上所収。
17．高谷和生「下山西遺跡概報」1983．9．2遺構S1－24出土層位55。大澤正己「下山西遺跡出土の弥生時代鉄器と明神山鉱石の金属学的調査」『下山西遺跡』〔熊本県埋蔵文化財調査報告第88集〕熊本県教育委員会　1987。
18．佐々木稔・村田朋美・伊藤薫「富の原弥生遺跡出土鉄戈鉄片の金属学的解析結果」『富の原遺跡群研究調査概報』Ⅳ　大村市教育委員会　1985。
19．(イ)正林護・宮崎貴夫・町田利幸『今福遺跡』Ⅰ〔長崎県文化財調査報告書第65集〕長崎県教育委員会　1984。C10区竪穴住居跡出土。宮崎貴夫氏より試料の提供を受ける。
(ロ)大澤正己「今福遺跡における製鉄関連遺物の金属学的調査」『今福遺跡』Ⅲ（長野県文化財調査報告書　第84集）長野県教育委員会　1986。
20．(イ)　渡辺昭千代他『王子遺跡』〔鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書第36集〕鹿児島県教育委員会　1985。
(ロ)　大澤正己「王子遺跡出土弥生中期後半～後期初頭の鉄滓と鉛の調査」『王子遺跡』所収。

第23表は、弥生時代から古墳時代前期の鉄器中の非金属介在物を調査した結果である。西ノ辻遺跡出土鉄鏃に非金属介在物が存在すれば、これを調査する予定であったが、今回のサンプルでは未検出におわった。そのため地鉄中の分析で、砒素（As）、鉛（Pb）、ニッケル（Ni）、コバルト（Co）、のチェックができた。砒素（As）の検出は鉄鉱名の裏付けとなるのが鉛（Pb）の存在の理由ずけは未解決である。後日に期したい。

第23表の東大阪市内遺跡出土鉄器は、水走遺跡出土のノミ状鉄器、鬼虎川遺跡出土のノミ状鉄器、鉄鏃らである。又、他の試料は、主に西日本出土の鉄器である。これら鉄器は全て鉄鉱石系であり、砂鉄を原料とする素材は認められない。今回調査の西ノ辻遺跡出土も鉄鉱石系素材に分類できる。

列島内での鉄生産（製錬）の開始時期は現在のところ定説がない。大まかに分けると弥生後期説、古墳時代中期説（5世紀代）、古墳時代後期説（6世紀後半から末）の3説が唱えられている。筆者は、古墳出土鉄滓[4]や祭祀遺構[5]・住居跡出土鉄滓の鉱物組成・化学組成、木炭窯の検出状況などを総合的に判断して製錬開始時期を古墳時代中期説に考えており、弥生時代の鉄製錬は否定的である。

弥生時代及び古墳時代前期までは、鉄素材を大陸側に依存したものと考えており、今回調査の西ノ辻遺跡出土鉄鏃の素材も、金属学的調査結果から、大陸産を想定するものである。

なお、東大阪市出土の弥生時代の鉄器は更に2点分析調査計画があるので、後日論を展開してゆきたいと考えている。

注

① 大澤正巳「鉄鏃と鑿状鉄器の冶金学的調査」『鬼虎川の金属器関係遺物—第7次発掘調査報告2—』（財）東大阪市文化財協会、1982年。

② 大澤正巳「水走遺跡出土のノミ状鉄器の金属学的調査」『水走遺跡』大阪府教育委員会、提出原稿

③ 東大阪市教育委員会　芋本隆裕氏御教示。

④ 大澤正巳「古墳出土鉄滓からみた古代製鉄」『日本製鉄史論集』たたら研究会、1983年。

⑤ 大澤正巳「潤崎遺跡祭祀土壙出土鉄滓の金属学的調査」『潤崎遺跡』（北九州市埋蔵文化財調査報告書　第49集）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室、1986年。

# Ⅴ．まとめ

今回、本書において西ノ辻遺跡第６次、第７次、第８次、鬼虎川第18次調査と２遺跡４次にわたる調査の成果の概要について記してきたところである。

「調査に至る経過」で記したように、国道308号線、及び府道築港枚岡線の付替道路建設部分を調査対象としたため、昭和57年度に実施した西ノ辻遺跡第７次と鬼虎川遺跡第18次調査、及びその追加分として昭和58年度に実施した西ノ辻遺跡第８次調査は、調査位置において幅約15m、長さ220mにわたる一続きの長大なトレンチを設定したものと考えていい。そこで以下西ノ辻遺跡第７次、第８次、鬼虎川遺跡第18次調査に関する調査結果を中心にそれから敷衍するいくつかの問題点を列挙することで、まとめに代えておきたい。ただまずその前段として簡単に西ノ辻遺跡第６次調査の成果について触れておくこととする。

## １）西ノ辻遺跡第６次調査の遺構と遺物

第６次調査では、後世の削平作業により本来の遺構面や遺物包含層が欠失しており、遺構では深い掘削を伴う井戸を１基検出したほかは、土坑状の遺構を３ヶ所、ピットを11個確認したにとどまった。

出土遺物では、井戸（ＳＥ１）以外の遺構や第１層からの遺物が僅少で、しかも図化に耐えない細片であるので、遺構の形成時期を考える資料としては、ＳＥ１出土遺物に依存せざるをえない。

その場合、廃絶後の埋土である１層と、機能時の堆積土である４層で上げ底の底部をもつ土師器皿いわゆる「ヘソ皿」が出土していることが注目される（第９図４・７）。これらは、口縁部は外反し、端部が肥厚する。若江遺跡出土土師器皿の型式分類[1]ではＢ₁タイプに属するものと思われる。一方、４層でこの土師器皿と共伴する瓦器（同図９～11）のうち和泉型は高台を伴わない丸底状の浅い椀形を呈することから、尾上氏の和泉型瓦器椀の分類編年[2]では、Ⅳ－５期に相当する。また大和型は川越氏の編年[3]によりⅣ－Ｄ期に位置づけられる。以上の３点により、井戸開削期は15世紀を溯り得ないものと考えることができる。従って第２層上面で検出した遺構もほぼ同時期によるものと推察される。

## ２）方形周溝墓をめぐる二、三の問題について

### （１）墓域の問題

第７次調査で検出した方形周溝墓７基は、東はXXF４ｅ～ｆ区からXIXF12ｅ～ｆ区にかけて約65mの範囲に拡がっている。昭和57年に第７次調査および鬼虎川遺跡第18次調査を実施した段階では、用地買収の関係で（Ⅰ．調査に至る経過を参照のこと）、両調査区の中間部約200㎡が未調査となったので、方形周溝墓の墓域を確定できなかった。翌58年にその未調査区を西

ノ辻遺跡第8次調査として実施したところ、弥生時代中期の溝3条を検出した。（149～150ページ、第101図参照）。しかしながらこの溝は、中世期の削平工事が大規模に行われたと見え、その性格は不詳であり、直接方形周溝墓に関連付けることは妥当ではないと思われる。とすれば、例えば、4号周溝墓の周溝はほぼXIXF11ライン付近でおさまると考えられる。従って、墓域は東西方向については約65mの範囲とした第7次調査の結果がそのまま踏襲されることになるわけである。因みに昭和59年の西ノ辻遺跡第9次調査において、6号周溝墓の2つの周溝（No.4－E、No.2－N、）の延長部分を確認しているが、9次調査区の北辺部では、自然河川を検出しているため、方形周溝墓は河川の南岸に拡がることが判明している。詳細については近日刊行予定の同報告書に譲りたい。

（2）方形周溝墓の祭祀について

第7次調査の方形周溝墓の説明に触れてあるように、今回検出した方形周溝墓周溝内の遺物出土状況の様相は、極めて特異なあり方を示していると言える。例えば、7号周溝墓では、周溝の上層から、細かく破砕された土器が間隙なく一面に敷き詰まれた状況で一括出土している。これは、方形周溝墓における何らかの祭祀が行われた後、周溝内に一括投棄された可能性を示すものと思われる。

ところで、近年上記の遺物出土状況に強い示唆を与える論文が田代克巳氏により発表されている。[7] それによれば、近畿地方における方形周溝墓の遺物出土状況の諸例の検討から、田代氏は、『魏志倭人伝』に見られる「（喪葬時の）歌舞飲酒」祭祀との関連を想定され、破砕ののち、周溝内に埋めつくされている土器は、いわゆる「供献」するための土器ではなく、「祭祀ののち廃棄」されたものであると明解に論じられている。

そこで、本項においては、西ノ辻遺跡第7次調査方形周溝墓の遺物出土状況が田代氏の論旨に合致するものかどうか、「歌舞飲酒」祭祀の基本的な問題を再考することで検証していきたい。ただし、穿孔土器など、土器の形態からみた分析、考察は、すでに103ページ以下にみる如く、曽我恭子が論じているところなので、ここでは省略しておく。また本概報の性格上、「歌舞飲酒」祭祀の実態を考える上での概略的な見通しをつけることを主眼にしている。

まずその導入として他遺跡の検出例を紹介することから始めたい。西日本における方形周溝墓の検出例の集成はすでに1982年に埋蔵文化財研究会（略称、九阪研究会）によって行われている。[8] そこでは大阪府だけでも33遺跡例が集成されている。しかし当時は、埋葬施設や築造時期、周溝の規模等の形態上からの検討が主で、遺物出土状況の議論が充分になされたとは言い難い憾みがあった。

一方、近年まで出土状況の検討に耐えうるような資料の蓄積が小さかったため、先の田代論文においてすら、

土器を多数出土した方形周溝墓でも、溝全体から土器が出土しているのではなく、ある一～二辺にかたよるものが、普通に見られるものであり、残りの溝からは、後に溝が埋まっていく過程で、周辺から落ち込んだ土器片はあっても、方形周溝墓に本来伴う土器はほとんど

認められないのが通例である。（同論文93ページ）

とする認識にとどまっており、これが定説的な位置を占めてきたといえるだろう。またこの定説的見解の故に、これまで、方形周溝墓の遺物出土状況の検討はやや等閑視されてきたきらいがなくはない。そのような学的状況下で、愛知県清州町朝日遺跡の調査[6]は注目すべき成果をあげている。調査は、昭和47年度から昭和54年度にかけて８年間にわたり実施され、弥生時代方形周溝墓の検出は198例にのぼる。そしてその報告書中にきわめて興味深い記述が見られる。即ち、方形周溝墓群の小結の項で、

（前略）ＳＸ194は、西Ⅲ群に属する山中期（筆者注、弥生時代後期中葉）の方形周溝墓で単独に造られている。東溝下部からは円窓付土器２個体を含む完器が多数出土し、その上を覆うように多量の土器片が分布し、それが東溝から北溝にまで続いていた。甕の破片は極めて少なく、高坏の破片のうち特に脚部が目立った。方形周溝墓に供献されている土器が、当初から破片の状態であったのかは検討を要する課題であるが、埋葬のあり方や墓制を考える上で、注意しなければならない事項であろう。（『朝日遺跡Ⅱ』98ページ、傍点筆者）

とあり、慎重な表現ながらも、方形周溝墓での土器破砕祭祀について言及されている。この朝日遺跡ＳＸ194例のような記述は見当たらないものの、同様な遺物出土状況の例として、田代論文にも引用された茨木市東奈良遺跡Ｆ４Ｎ地区第１号方形周溝墓例[7]、大阪市城山遺跡（その１）第17、19、23号方形周溝墓例[8]を挙げることができ、土器破砕祭祀が例外的に認められるのではないことがわかる。

それでは、田代論文での「歌舞飲酒」祭祀はどうであったか。その場合、第一に考えねばならないのは『魏志倭人伝』風俗記事の史料批判の問題であろう。以下、『魏志倭人伝』の当該記事[9]を揚げておく。

（前略）食飲には籩豆（へんとう）（筆者注、高杯のこと）を用い手食す。その死には棺あるも槨なく、土を封じて冢を作る。始め死するや停喪十余日、時に当りて肉を食わず、喪主哭泣し、他人就いて歌舞飲酒す。已に葬れば、挙家水中に詣りて澡浴し、以て練沐（れんもく）の如くす。（後略）

この風俗記事全体については、夙に上田正昭氏[10]が、「興味ある葬送記事や歌舞の記述や持衰の内容にも、たんに作為とはみなしえない側面をもっている。」とされ、魏からの使節が20年近くも倭にとどまっていた可能性が高いことから、「『魏志』倭人風俗（ママ）記事の独自の要素には、倭人の言のみならず、魏使みずからの報告もふくまれている」と結論付けられている。即ち、全体としては風俗記事の信憑性について肯定的な見解を採られている。考古学者では、斎藤忠氏が『魏志倭人伝』の葬送儀礼について論及されている[11]。ただ斎藤氏は、「歌舞飲酒」祭祀の実態を掘り下げるのではなく、中国史書外国伝に現われた周辺諸民族の「歌舞飲酒」記事の類例－例えば、『後漢書』の濊北の中に“其死停喪十余日。家人哭泣不進酒食。而等類就歌舞為楽。”とある記事の如き－を博捜されているのにすぎないのである。従ってそこでは厳密な本文利用は認められず、『魏志倭人伝』風俗記事を無批判のまま援用しておられる。この点に関しては、田代氏も同様である。ただ上田正昭氏の論旨からすれば、当該記事の無批判援用は避

けなければならないことは言うまでもないことではあるが、魏使自らの見聞をもとにしたとする想定は重要であると考えられる。「歌舞飲酒」祭祀の実態の究明には、斎藤忠氏が集成された中国正史外国伝での類例との比較検討の作業を中心とするも、なお他の喪葬儀礼習俗記事の収集を通じて、トータルな視点でこの問題にあたるべきであろう。

その意味において、周辺諸民族の喪葬儀礼に関する民族例は大きな参考資料となり得ると思われる。例えば、松本信廣氏の「印度支那の民族」チャム人の節[18]で、

> チャム人はインドネシア系種族で、安南の中央部及び南部に居住し、西暦紀元二世紀頃恐らくはそれ以前からインド植民者の移住に依り印度文化を受け入れ、一時は林邑という強盛な国家を建設した。（中略）また葬式に際しては喪屋を作り、その天蓋には、魂を冥界に導くと考へられる鳥や他の動物の紙型を垂らし、そして連日連夜宴会歌舞が行はれて死者を慰め、屍體が腐爛した時火葬に移す。（後略、傍点筆者）

とあり、チャム人にも「歌舞飲酒」祭祀を行っていることが知られる。ただ、先に記したように、単に「歌舞飲酒」に類した記事を蒐集し比較するだけでは不十分であり、他の喪葬儀礼記事の文脈の中で「歌舞飲酒」祭祀を考えることが肝要である。

以上、他の遺跡の検出例と、若干の文献を徴した結果からすれば、西ノ辻遺跡第７次調査方形周溝墓の遺物出土状況のあり方は、土器破砕祭祀≒「歌舞飲酒」祭祀のシェーマの可能性をより強く表象しているように考えられる。「歌舞飲酒」祭祀の実態把握に関する問題点の指摘のみに終始した感があるが、この点の掘り下げ[19]については、筆者の今後の課題としたい。

### ３）西ノ辻遺跡と鬼虎川遺跡

今回、西ノ辻遺跡と鬼虎川遺跡が接触する地域に東西に長いトレンチを設定した調査となったため、弥生時代の西ノ辻遺跡と鬼虎川遺跡の境界をほぼ確定できたのは大きな成果であった。因みに、中世期の遺構面については、東はXXF12ラインより西はXIXF20ラインまで東西約160mの長きにわたり連綿と続いている。ただ弥生時代の遺構面については、前述しているように、XIXF７ラインを境界として東に西ノ辻遺跡を明確に設定できる。７ライン以西部では中世期の削平工事により、弥生時代遺構面が失われている可能性も否定できないものの、縄文時代の海食崖の西側で大溝を検出していることからすれば、この海食崖以西を鬼虎川遺跡とすることができる。これは弥生時代の集落の移動を考える上での重要な知見といえるだろう。

注


(1) 勝田邦夫他『若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ遺物編』、（財）東大阪市文化財協会、1983年。
(2) 尾上実「南河内の瓦器椀」（『古文化論叢』所収、1983年。）
(3) 川越俊一「大和地方の瓦器をめぐる二、三の問題」（『文化財論叢』所収、1983年。）
(4) 田代克巳「いわゆる方形周溝墓の供献土器について」（『村構造と他界観』所収、1985年。）
(5) 第11回埋蔵文化財研究会資料『西日本における方形周溝墓をめぐる諸問題』、1982年。
(6) 都築暢也・七原恵史他『朝日遺跡Ⅰ～Ⅳ』、愛知県教育委員会、1982年。

(7) 田代克巳・奥井哲秀『東奈良遺跡発掘調査概報Ⅰ』、東奈良遺跡調査会、1979年。

(8) 杉本二郎他『城山（その1）』、（財）大阪文化財センター、1986年。

(9) 石原道博編訳『新訂魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』（岩波文庫）に拠る。ただし、参考の便を考え、読み下し文を用いた。

(10) 上田正昭「中国史籍における倭人風俗」（『日本古代国家論究』所収、1968年。）

(11) 斎藤忠「古代アジアにおける葬送儀礼ー「魏志」倭人伝の記事を中心としてー」（『東アジア葬・墓制の研究』所収、1987年。）

(12) 松本信廣『印度支那の民族と文化』、1942年。

(13) 例えば、竹居明男氏は「日本上代の喪葬と歌舞・再考」（『日本書紀研究』第13冊、1985年）なる論文で、『日本書紀』における喪葬と歌舞の問題を検討されていることなど。